

昭和三十四年三月二十日印刷
昭和三十四年四月一日発行

(第十三卷 四月号
通巻第百二十一号)

(毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

1959年 4月号



4
月号

懸賞入選作品

モラエス邸の夜会

江口康彦

懸賞入選作品

『悪徳教師考』

幹本完治

限定版

◎縛られた女体ばかりの写真集・第一弾!!

〔定価 五百円〕

お待たせ致しました!
数多くのマニヤの方々からの要望がありながら、実現しなかつた写真集! 厳選に厳選を重ね、意外に手間どりましたが遂に完成し皆様のお手元に届く運びとなりました。どうぞ、じっくりと御觀賞御審美下さい

緊縛フォト・アラベスク

限定版『特集号』の本年度御一回刊行として『女体緊縛フォト・アラベスク』を完成いたしました。これは最近撮影による新しいモデルの緊縛写真から選集して特アートに対する写真版印刷という方式で、出来るだけ印刷紙焼付の感じに近いものを作るという狙いでやってみました。第一集「緊縛フォト・アラベスク」に引続き第二集「緊縛写真と緊縛画集」第三集「傑作画集と写真集」第四集「緊縛女体の表情とアップ」第五集「四馬孝傑作画集と写真」を刊行する予定であります。

限定版『特集号』は刊行部数が極めて少部数ですので急速に売切れるのではないかと思います。購読御希望の方は至急発行所へお申込願います。送料当方負担にて厳重荷造の上御送り申し上げます。近き将来に於て必ずや稀少価値を生じることと思います。只今申込者殺到中、売切にならないうちにお早く御申込下さい。

△本限定版特集号は一切書店売りはいたしませんから
直接発行所宛お申込願います▽

○○○○ (掲載内容紹介) ○○○○

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 一、鏡……………愛川悦子 | 四、諦観……………大塚啓子 |
| 二、銘花二輪……………花坂道子 | 五、庭園にて……………絹川文代 |
| 三、鉄鎖……………大塚啓子 | 六、謎の微笑……………田中芳代 |

『悦虐小説と緊縛写真』

特集号・内容紹介

グラビヤ写真百十四葉

- | | |
|----------|--------|
| ○妖精(ニンフ) | ○競花 |
| ○三ツ葵の | ○首縄 |
| プロフィール | ○シユミーズ |
| ○誘拐 | ○放心 |
| ○羅致 | ○間諜成敗 |
| ○プレイ | ○三処責め |
| ○木洩れ陽 | ○黒タイツ |
| ○夢路 | ○観念 |

(口絵・四馬孝画集)

- 白魚の悶え(「燐光」より)
- 苦悶の前奏(「女奴隷の手記」より)
- 鉄鎖のきしみ(「続・囚衣」より)
- 籠の白鳥(「縛られた妻以前」より)

号集写真縛

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします故、何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持ちで御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。（この際は誌上で連絡いたします。）

◎賞金

優作 壹万円 若干篇
秀作 五千元 若干篇
佳作 三千元 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等

枚数 三十枚乃至五十枚程度（四百字詰）

但し多少の増減は差支えありません。

締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次選衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以って報告します。誌上では入選作の掲載を以って発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便（百瓦につき八円）にて御送付願います。

読者原稿募集

【創作】異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

【体験告白手記】読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

【映画、雑誌】通信 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

【私のイメージ】熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌二月分贈呈します。

【アイデア】将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

【レポート】新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二月分贈呈します。

【読者通信】編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思ひ出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

◎本誌月極購読料◎

一月分 一冊（送料共）二百円
三月分 三冊（送料共）六百円
半年分 六冊（送料共）千二百円
一年分 十二冊（送料共）二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十三巻第五号
毎月一回一日発行
定価二百円

四月号

昭和三十四年三月二十日印刷
昭和三十四年四月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号
発行所 天 星 社

電話 天下茶屋 三六〇七番
振替口座 大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用（八円切手にて一割増）等どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではっきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。

昭和三十四年三月二十日印刷 四月号(第十三卷第五号)
昭和三十四年四月一日発行 (毎月一回一日発行)
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

Osaka Japan



定価二百円

IBM. 2805

七、田代悠子表情集(その一)
凝視、流し目、軽い驚き、無視
八、誇る脚線美……………田代悠子
九、この脚どうかしら

……………田代悠子
十、裏と、表と……………愛川悦子
十一、落陽の丘……………絹川文代

「危惧」「困惑」「空耳」
「退屈」「蜘蛛」
「やんちゃ」

十二、ボリウムの花園

……………大塚啓子
豊かな双丘、豊かなヒップ

十三、緊縛感の綾……………大塚啓子

後手の厳しさ、二の腕の縄目

十四、奔放な肢体……………大塚啓子

逞ましき脚線、美しき重量感

十五、鏡台と腰巻……………花坂道子

十六、腰巻と鏡台……………花坂道子

十七、奇妙な休憩……………絹川文代

美しき偶然、華やかな機会
十八、田代悠子表情集

(その二)

猿ぐつわと表情美のいろいろ

「松葉チラシ」「タオル」

「豆しぼり」「カギ模様」

「渦巻」「水玉模様」

「明眸皓齒」

十九、脱がされた高手小手

……………愛川悦子

コルセット、ブラジャー、

後手首、縦しぼり

二〇、亀甲縛り……………愛川悦子

二一、吊責折檻……………村井知可子

二二、立木縛り……………村井知可子

二三、豊 醇……………愛川悦子

二四、乱れ髪三景……………大塚啓子

「観念」「均整」「屈伸」

二五、椅子と絨緞……………愛川悦子

二六、組上の美鯉……………絹川文代

○宙に踊る(「妻は縛らず」より)
○アクロバット(「色狼」より)
○濡れる朱唇(「長期刑」より)
○土蔵の花(「夕の朝顔」より)

(悦虐小説傑作集)

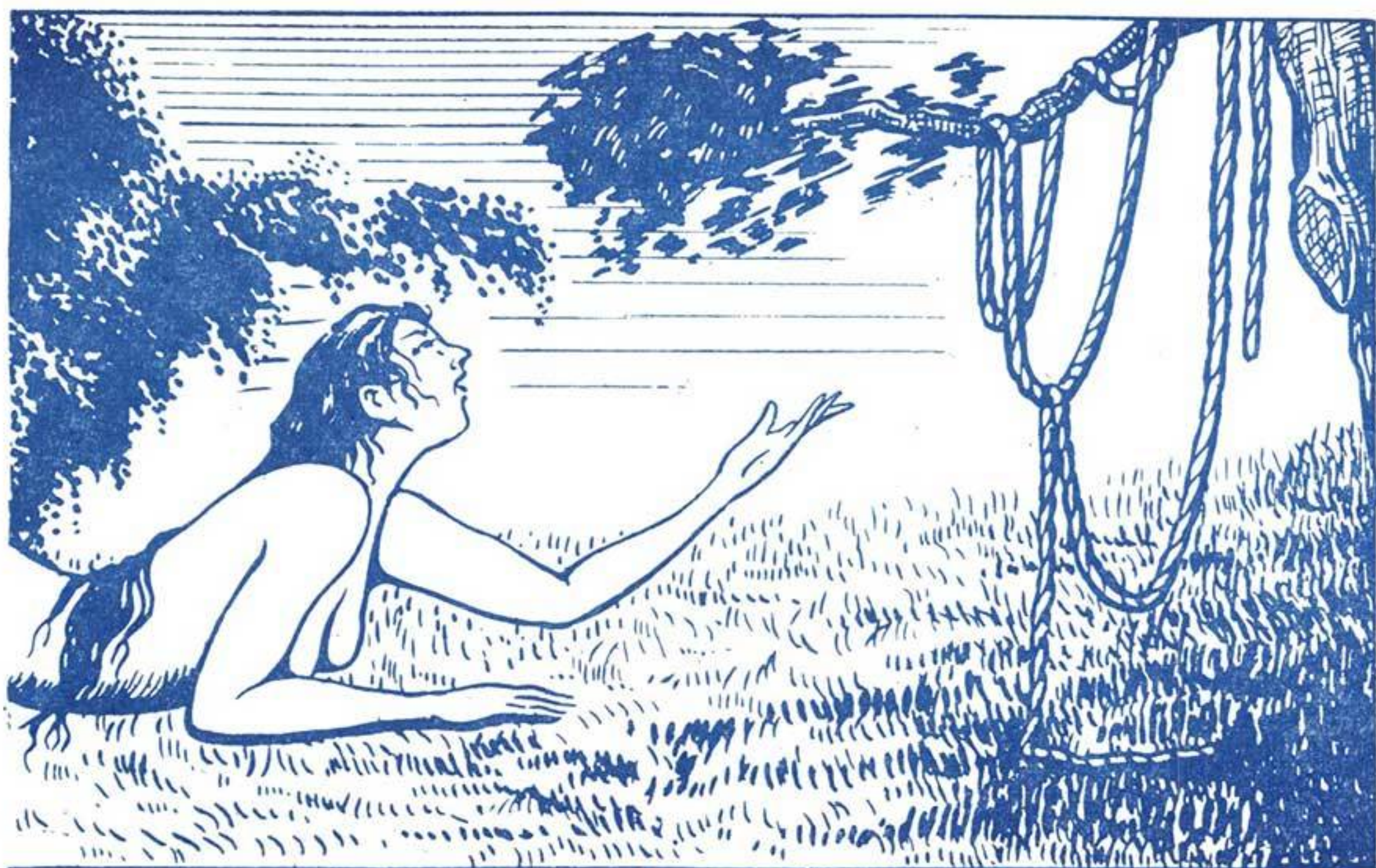
○雌獣の手記……………近見 啓
○妻は縛らず……………岡田 圭介
○夕の朝顔……………那須不二雄
○続・囚衣……………古川 裕子
○私の主題……………岡田 咲子
○色狼……………児 島光
○女奴隷の手記……………北山カオル
○受難記……………岡田 咲子
○怪奇曼陀羅教……………緑 猛比古
○呪縛……………辻村 隆
○悦虐の旅役者……………青山三枝吉
○長期刑……………古川 裕子
○私の想い出……………岡田 咲子
○片耳伝奇……………窪村 弘
○縛られた妻以前……………早川新二郎
○燐光……………久留木 栄
○地獄絵行脚……………長岡愛一郎
○鉄格子の中に……………小坂多美枝

本特集号は、昭和二十八年度中の本誌より優秀作品を選出の上、四馬孝氏の麗筆を以て、口絵及び挿絵を全部新たに描き直して戴き、再編したものです。近撮影の緊縛写真百数十葉を一挙に併載致しまして、確信をもってマニヤ諸士に薦め出来るものであります。お早くとお求め下さい。

緊と悦虐小説

略号(悦・特)

定 価
三 百 円 (送共)



奇譚クラブ

復刊第四十一号
四月 号 目次

責め絵 逆吊りの女 滝れい子・画

特写真 「緊縛プレイの或る断面」 春日ルミ女史
愛川 悦子嬢

映画に於ける緊縛シーン 増田義彦提供

東映映画「さけぶ雷鳥（第一部）」若水美子

俊平戯画傑作集 南村俊平・画

「擦り責め」「アクアリウム」

四馬孝 傑作集 『新入荷家畜Y第31号』 四馬孝・画

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

文学にあらわれた女の腹裂き 多山 皓 18

オダリスク（女奴隷） 近藤 一 28

スクリーンの男性美 原 俊幸 32

異常心理小説 禪殺人事件 榎村 奏 34

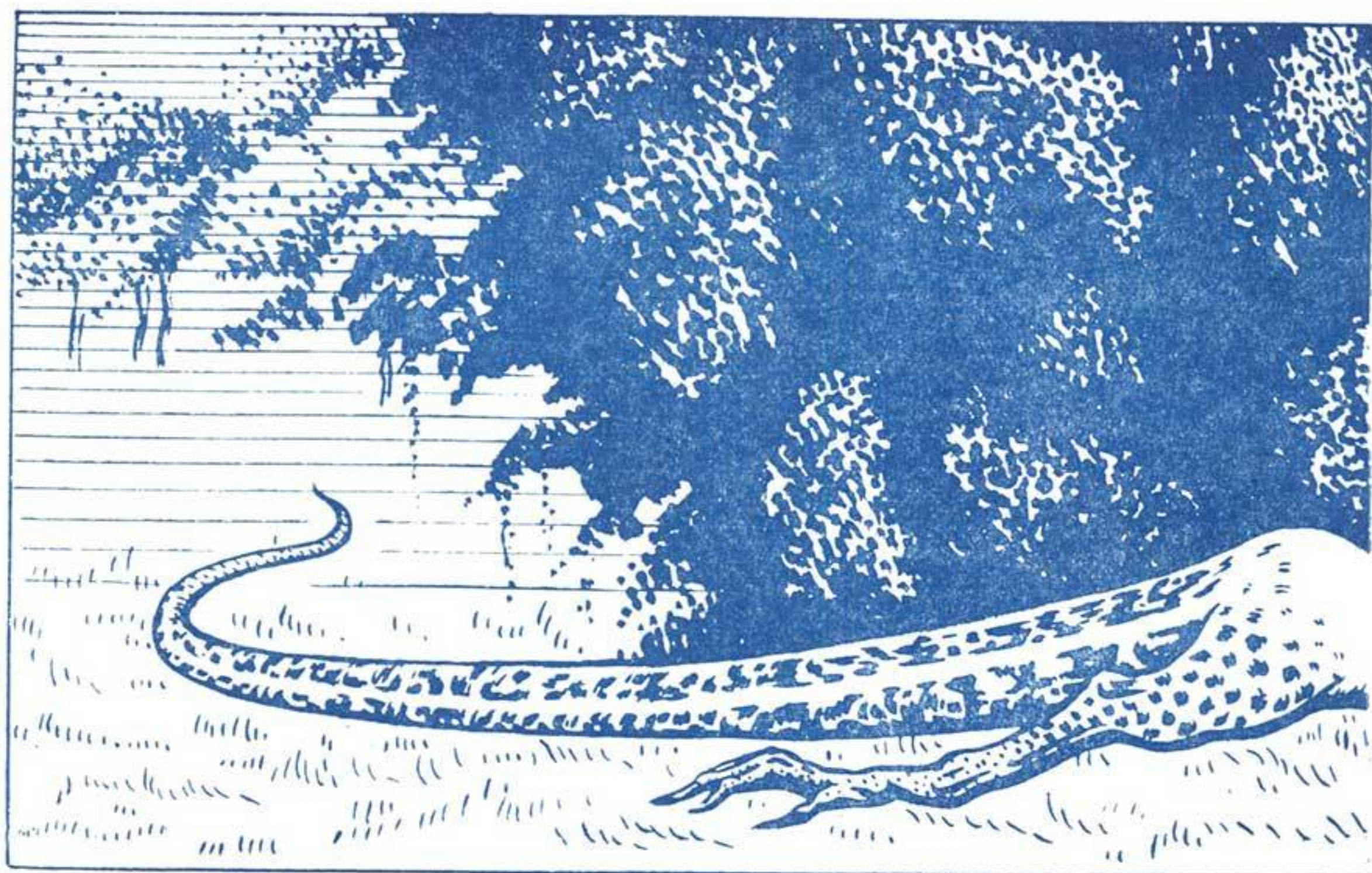
女奴隷の悲しみ 筒井 英生 42

乗馬スボンシリーズ落穂集（その二） 藤山 秀緒 44

緊縛映画スナツプシリーズ Ⅱ大映作品Ⅱ紹介

八重桜の巻「血文字船」 牧 高志 50

マゾヒズム百景 馬場 好男 57



未来幻想マゾ小説「家畜人ヤプー」	沼	正三	60
正月映画から Ⅱ 女優初縛りⅡ	大河原珠樹		72
正月の時代映画縛りシーンから	嵯峨美也子		74
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品			
告白―忘れ得ぬ人々	須藤 律夫		76
現代マゾヒズム芸術時評	原 忠正		84
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品			
モラエス邸の夜会(罨にかかった牝鹿)	江口 康彦		88
愛好者の記録(Mの花園に遊ぶ記)	とやま・かづひこ		102
「体験記」バー「ナナ」の人々(第七回)	南 時夫		104
レポート 乗馬は女性にも向くスポーツ	東 一郎		110
映画及びテレビに於ける緊縛場面の鑑賞	織田 登		111
本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品			
悪徳教師考	幹本 完治		114
「映画通信」今月の縛られた女優達	大河内珠樹		126
魔教圈 No. 8 (その十三)	土路 草一		128
新稿 ある夢想家の手帖から	沼 正三		144
手帖雑報欄	沼 正三		155
柳幸子の告白『飼育』	久留木 栄		156
読者通信			167

〔新版女体緊縛フोट分譲〕

〔新版〕女体緊縛フोट オンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13浬)

各組一組 (全部送料共)

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四〇〇〇円

R1	柔肌に強烈な荒縄 (須川令子)
R2	海浜に於ける緊縛 (萩千恵子)
R3	床間の飾り物 (佐賀美智子)
R4	高手小手猿ぐつわ (花坂道子)
R5	海老責しぼり (萩千恵子)
R6	後手猿ぐつわ (須川令子)
R7	後手足しぼり (村田那美子)
R8	鏡に映った後手 (伊吹真佐子)
R9	股間しぼり (須川令子)
R10	鎖しぼり晒責 (萩千恵子)

R11	股間しぼり正面 (伊吹真佐子)
R12	女学生制服しぼり (須川令子)
R13	尻立後手しぼり (萩千恵子)
R14	開股しぼり (川辺砂登子)
R15	猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子)
R16	トイレでの縛り (須川令子)
R17	立木野外しぼり (村田那美子)
R18	緊縛横臥 (厚狭春江)
R19	足場梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R20	いたぶり (春日ルミと伊吹)
R21	帆立しぼり (萩千恵子)
R22	強烈な梯子ゼメ (伊吹真佐子)
R23	梯子責め (佐賀美智子)
R24	逆さ本吊りゼメ (伊吹真佐子)
R25	後手吊りゼメ (同右)
R26	股間しぼり後手 (中塚文子)
R27	逆エビ責め (伊吹真佐子)
R28	高手小手しぼり (加賀利江子)
R29	変型足手しぼり (萩千恵子)
R30	松樹後手しぼり (村田那美子)
R31	くさりゼメ (伊吹真佐子)
R32	薄羅の後手緊縛 (加賀利江子)

R33	股間タテしぼり (中富綾子)
R34	首縄股間しぼり (坂口利子)
R35	手足逆吊り (伊吹真佐子)
R36	和服の後手しぼり (藤田節子)
R37	仰向全裸悦虐責 (川端多奈子)
R38	後手首縄シメ (加賀利江子)
R39	乳房下しぼり (村田那美子)
R40	肉体美への折檻 (伊吹真佐子)
R41	お灸ゼメ (春日、伊吹二嬢)
R42	後手猿ぐつわ (萩千恵子)
R43	松樹縛り晒責 (村田那美子)
R44	コルセット縛り (中塚文子)
R45	股間しぼり (同右)
R46	手と足と緊縛 (萩千恵子)
R47	後手しぼり (加賀利江子)
R48	御開帳 (萩千恵子)
R49	くさりゼメ (川端多奈子)
R50	折檻の魅力 (須川令子)
R61	全裸の股間しぼり (愛川悦子)
R62	逆立の折檻 (大塚啓子)
R63	開股椅子ゼメ正面 (同右)
R64	振袖の緊縛 (花坂道子)
R65	腰元の吊り責 (村井知可子)
R66	ヌードしぼり (愛川悦子)
R67	本縄しぼり (同右)
R68	股間しぼり (田中芳代)
R69	落花狼藉の緊縛 (同右)
R70	樹間のハリツケ (川辺砂登子)
R71	帆立舟のゼメ (益田房子)

R72	逆エビ責め (愛川悦子)
R73	変形全裸股間縛 (同右)
R74	ヌード縛り (花坂道子)
R75	全裸横臥緊縛 (同右)
R76	ピクニック (村田那美子)
R77	ハイヒール (萩千恵子)
R78	湖畔の宿にて (須川令子)
R79	尻立逆しぼり (同右)
R80	下着の色模様 (同右)
R81	目隠し開股縛り (大塚啓子)
R82	後手高手小手 (田中芳代)
R83	乳房しぼり (愛川悦子)
R84	開股ベッド縛り (花坂道子)
R85	全裸床柱縛り (愛川悦子)
R86	亀ノ甲縛り (萩千恵子)
R87	ヌード股間縛り (愛川悦子)
R88	全裸乱れ髪 (大塚啓子)
R89	ガソジガラメ (川辺砂登子)
R90	臀責め (愛川悦子)
R91	後手股間しぼり (中塚文子)
R92	腹部丸出し猿轡 (伊吹真佐子)
R93	破れたシユミース (坂口利子)
R94	女学生のしぼり (須川令子)
R95	仰向開股しぼり (萩千恵子)
R96	乳房くさりゼメ (川辺砂登子)
R97	野外バンド責め (村田那美子)
R98	トイレ正面排泄縛 (中塚文子)
R99	開股正面いじめ (伊吹真佐子)
R100	乳房搾りゼメ (佐賀美智子)

逆吊りの女

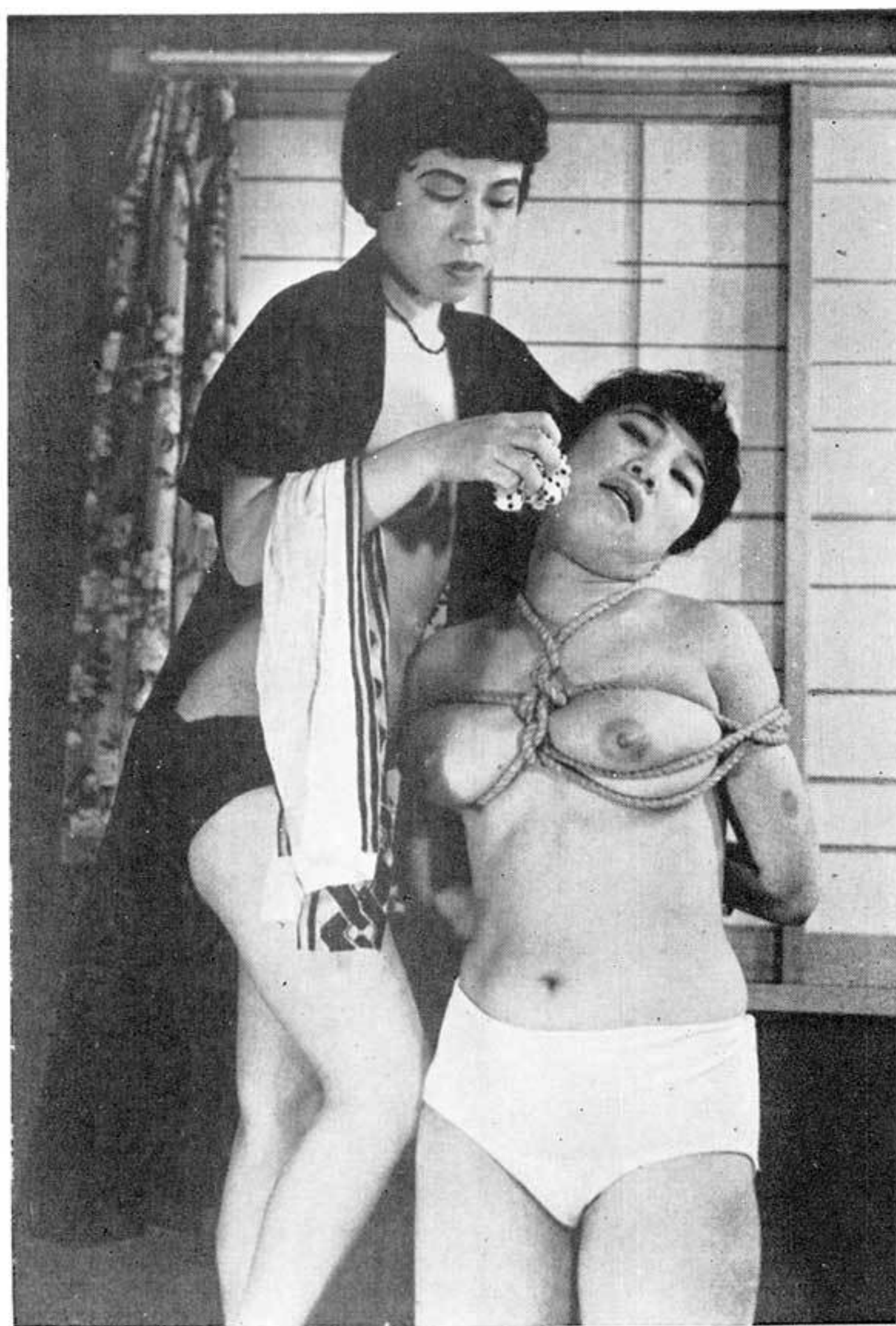
森の中で木の枝に逆さ吊りにされた女の下には、野猪の群が牙をむいて集っている。



滝
れ
い
子
・
画

緊縛プレイの或る断面

△特写真▽



春日ルミ女史
愛川悦子嬢





特写真



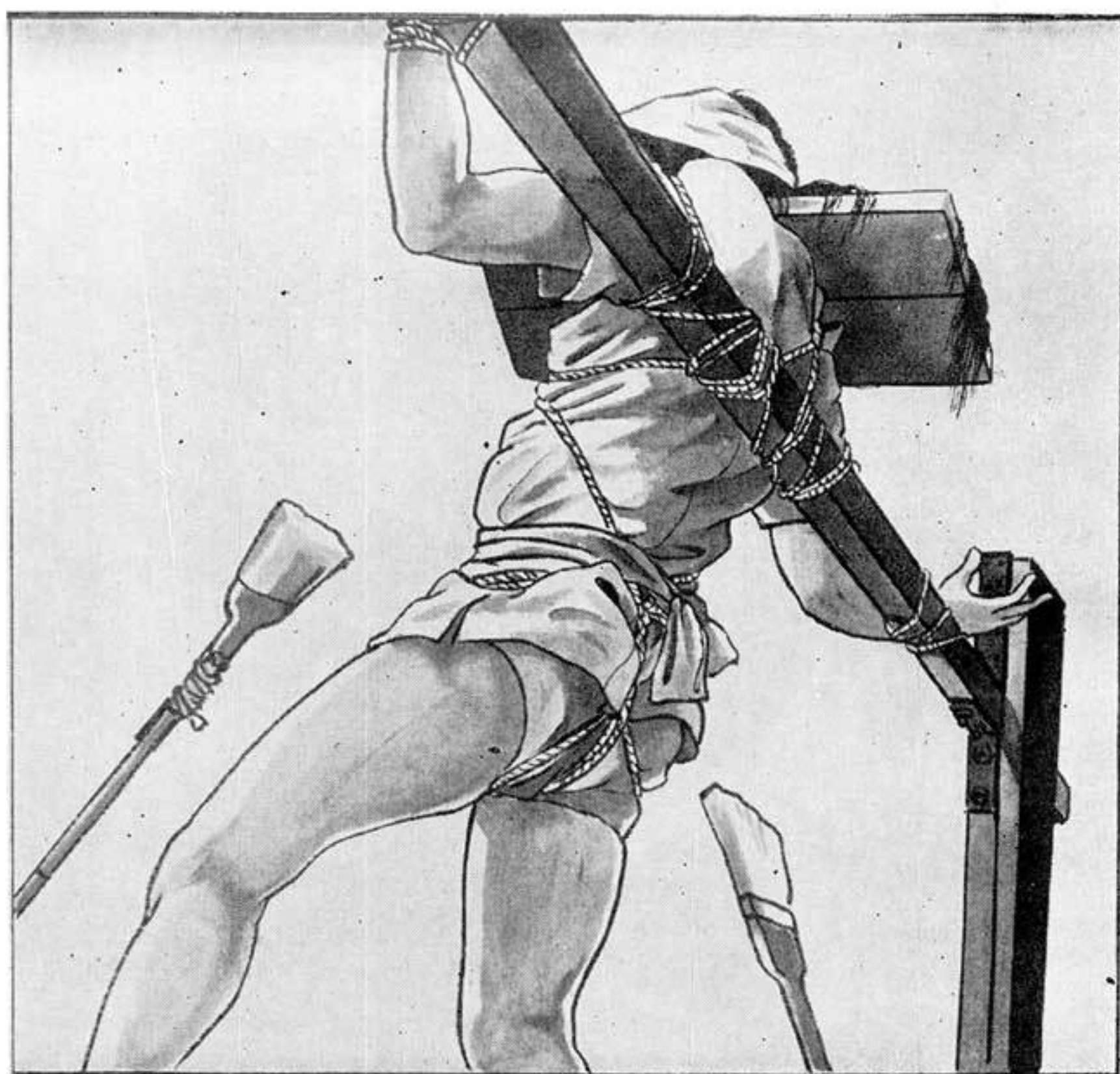
映画に於ける緊縛シーン

東映映画 「さけぶ雷鳥」 (第一部)

若水美子



△増田義彦・提供△



擦り責 「擦つたいゾ擦つたいゾ」

前後からソロソロと迫ってくる刷毛が肌に触らないうちから身体中がモゾモゾとしてきます。



アクアリウム

(南村俊平・画)

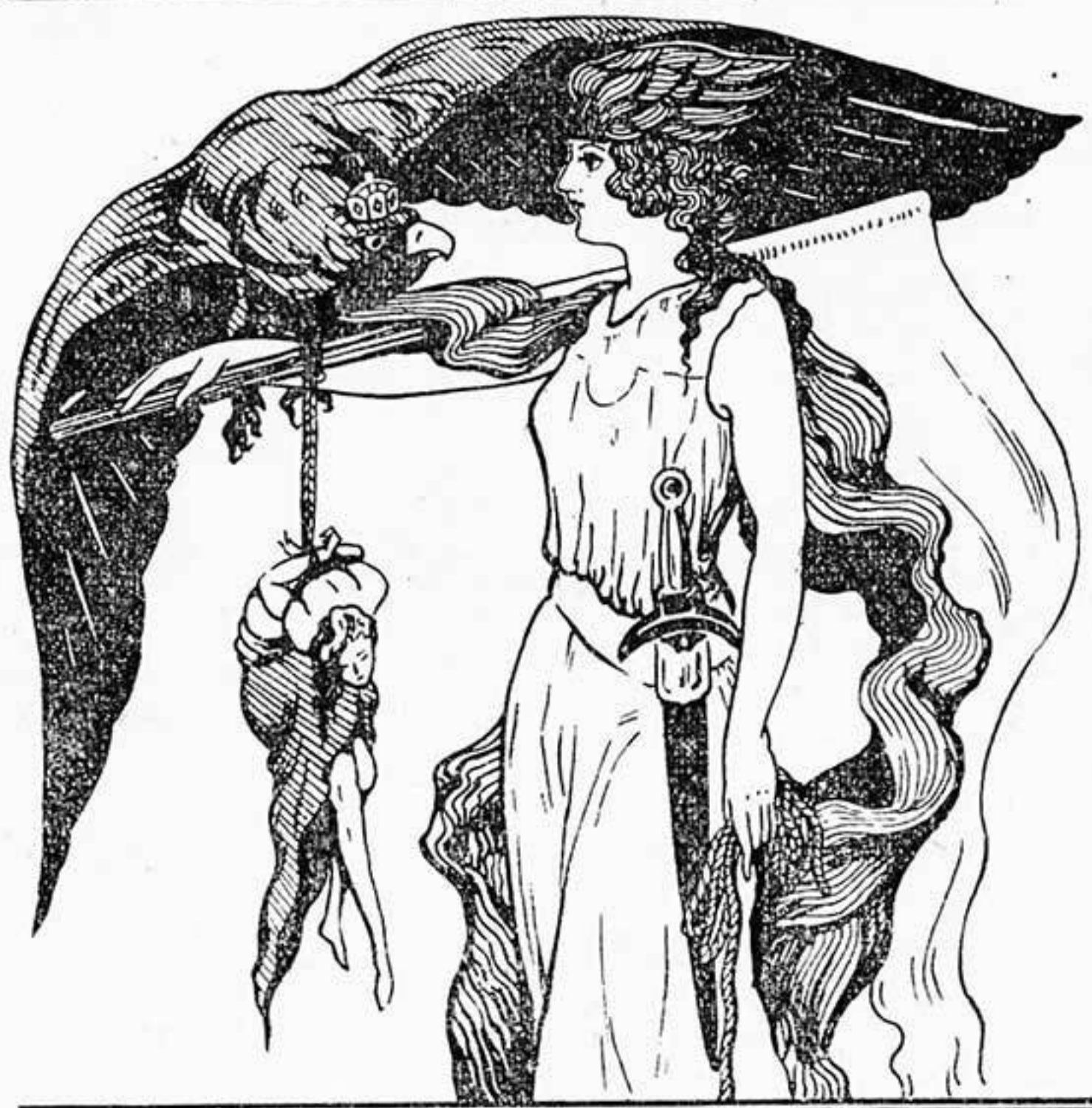
熱帯魚の水槽にズブズブと沈んできた大きな生物。

新入荷家畜 Y第31号

四馬 孝・画

新入荷品の受渡が終ると早速、訓練についての打合せが行われる。
未訓練畜は野性のままなので杭につながれている。





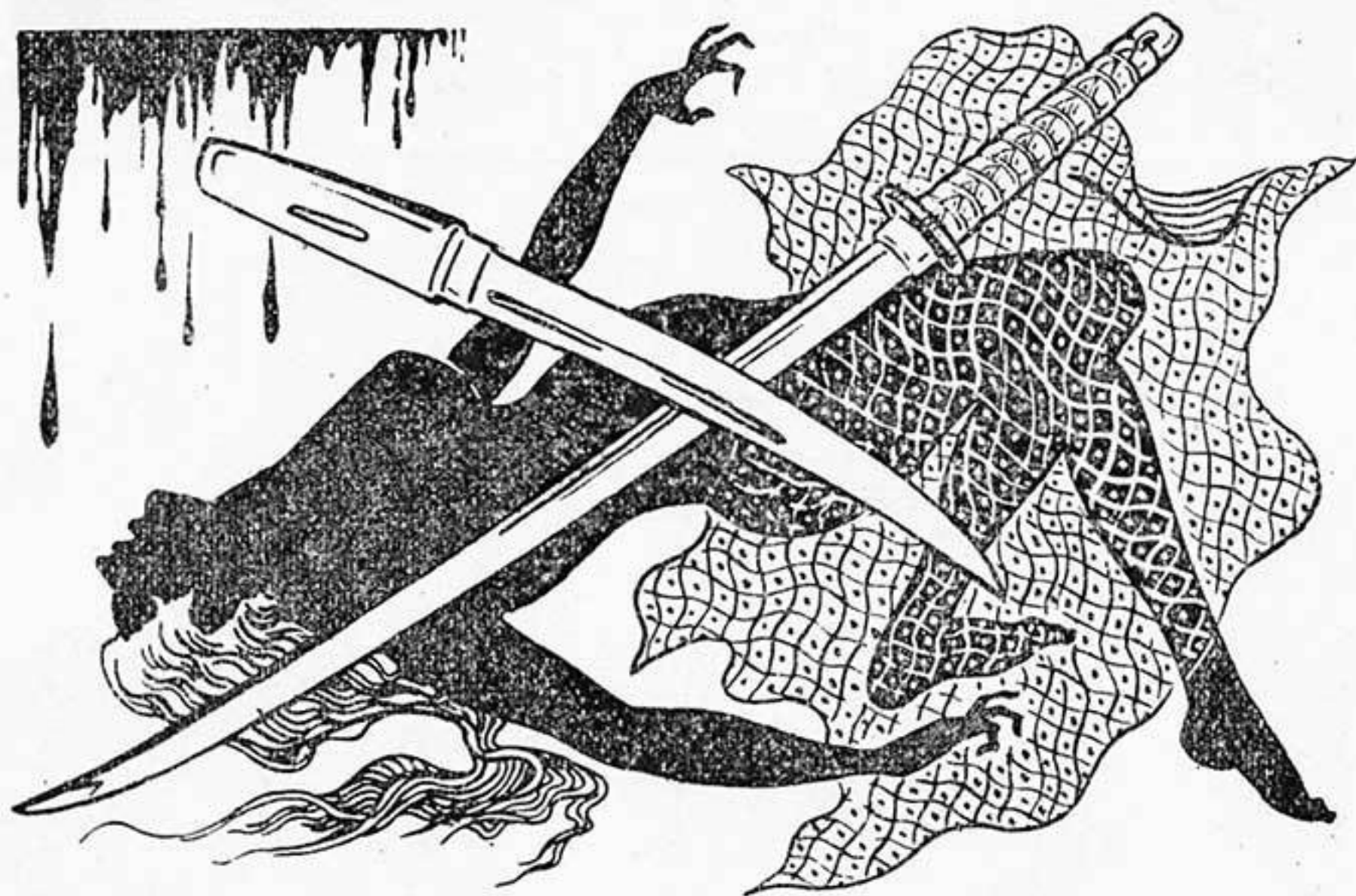
新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1959年4月号

(第十三卷 第五号 通刊第百二十一号)

◎本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品◎



文学にあらわれた

女の腹裂き

多山

皓

『大陸の寒い風にまき上げられる一面の砂煙がうす暗い空を更に黄色く陰らせていた。宏大な宮殿がその渦巻く砂のなかに高く聳えていた。……（中略）……
「叱し」

人を叱るような声が何処からともなく厳肅にきこえて、錦の帳は左右に開いて、するすると巻きあげられた。正面の高い処には、錦の冠を頂いて黄色い袍を着た男が酒に酔ったような顔をして、珠を鑲めた榻に腰をかけていた。これが唐人の王様であろうと千枝松は推量した。王のそばには紅の錦の裳を長く曳いて竜宮の乙姫様かと思われる美しい女が、女王のような驕慢な態度でおなじく珠の雨に倚りかかっていた。千枝松は伸上って又おどろいた、その美し



い女はやはり彼の藻をそのままであつた……(中略)……

そのうちに藻に似た女が何か囁くと、王は他愛なく笑つてうなずいた。家来の唐人はすぐ王の前に召出された。何か命令された家来は、畏こまって退いたかと思うと、やがて大きい油壺を重そうに荷つて来た。千枝松は今まで気がつかなかったが、この時初めて階段の下の方に太い銅の柱が立っているのを見つけた。大勢の家来が寄つて、その柱にどろどろした油をしたたかに塗り始めると、ほかの家来共は、たくさんの柴を運んで来て、柱の下の大きい穴の底へ山のように積み込んだ。三人が松明のようなものを持って来て、又その中へ投げ込んだ。ある者は油をそそぎ込んだ。『寒いので焚火をするのか知らぬ』と千枝松は思った。しかし彼の想像はすぐに外れた。

柴はやがて燃え上つたらしい。地獄の底から紅蓮の火焰を噴くように、真赤な火の塊りが穴一ぱいになつて炎々高く上ると、その凄じい火の光が銅の柱に映つて、あたりの人々の眉や髭を鬼のように赤く染めた。遠くから覗いている千枝松の頬までが焦げるように熱くなつて来た。火が十分燃えあがるのを見とどけて、藻に似た女は持っている唐団扇をたかく挙げると、それを合図に、耳も聳すような銅羅の音が響いた。千枝松はまたびっくりして振向くと、髭の長い男と白い女とが階段の下へ引き出されて来た。彼等は赤裸で両手を鉄の鎖につながれていた。

千枝松は慄然とした。銅羅の音はまた烈しく鳴りひびいて二人の犠牲は銅の柱のそばへ押遣られた。千枝松は初めて覚った。油を塗った柱に寄りかかった二人は、忽ちに身体を滑べらせて地獄の火坑に転げ落ちるのであろう。彼はも

う堪らなくなつて眼を瞑じようとする、……」これは、岡本綺堂作の『玉藻前』の一節である。藻というのが後の玉藻前であるが、彼女は実は、九千年の齢を重ねた金毛九尾の狐である。

この狐は最初、印度にあつて斑足太子の皇后、華陽夫人として悪政を施し、次には、殷の紂王の後宮に入り「姫妃」という妖女になつて、悪虐の限りを尽して、雷震に追われて日本に飛来し、玉藻前となつたが、安倍晴明に祈り伏せられて今も尚、上州那須野ヶ原の殺生石となつてゐるのである。

古来、暴君は数限りない。

紂王は、前記『玉藻前』の記事のような、炮烙の刑の発明者であり、夏の桀王や、隨の揚帝をしのぎ、中国第一の暴帝と称せられる。しかし、日本にも決してこれに勝るとも劣らぬ暴君が多勢いる。その中でも武烈天皇と、豊臣秀次は、古今の双璧であろう。

武烈天皇は、一説には僅か十八才で崩御したと言われるがその暴虐ぶりは目に余るものがある。

人を高い木によじ上らせて、その木を切り倒して殺したり爪を剥いだ手でいもをほらせたり、川の上流に人を投げ込んで、流れて来るのをほこで刺し殺したりなどした。

秀次は殺生関白といわれる通り、高野山で僧を殺したり、ご飯に砂が入っていたのを理由にして、料理番の口に砂を押し込み、手足を切つて殺したり、天守閣の上から、道行く人を鉄砲で狙ううちにした。

これは、淀君のさしがねで、遣わされたお万という女にたぶらかされたためとも云い、秀頼に家を譲るため自分から阿呆ばらいをうけるための作り馬鹿であつたとも云われるが、



殺された者こそ、いい迷惑である。

彼に対する秀吉の処罰も惨虐をきわめ、秀次は高野山で切腹、彼に従って、不破万作等、美小姓たちも後を追った。

秀吉の怒りは、それでもやまず、秀次が勢力にまかせて各地から集めた美女や、その間に出来た公達三十余人も殺害し畜生塚を築いた。その女性達の中には、親娘で愛妾となっていた者もあり、また、わざわざ奥州から呼び寄せられて、やっと京都へ着いた時には秀次が失脚した後で、仕えもせぬうちに十束一からげに河原に引き出され、足、首所を異にした十六才の少女もいた。

これ等三人は、みな代表的な暴君といわれる人達であるがその虐殺ぶりは、それぞれ特徴があつて、紂王はいかにも大陸的であり、武烈天皇は原始的であり、秀次は野性的である。

しかし彼等が共通して行なつたことが、一つある。それは妊婦の腹を截ち割つた、ということである。

ここ四、五年、本誌では女性の切腹の話が盛んに掲載されている。

確かに、花もはじらう美しい乙女が、白い腹部をあらわにして、氷の刃を突き立て自害をして行くのは、悲壮の極みであるが、これが他意的に行われる妊婦の腹裂きは、一層あわれである。しかも、切腹をした女性たちは、あれは何の某と、人々からうわさされたことであるが、腹を裂かれた女達の名前は、一人として残っていないのも一層あわれである。彼女たちは「路傍の石」が足蹴にされるように、偶然に「タイラント」の目に止まって、何等の抵抗を示す余裕も与えられずに、そのなぐさみものにされてしまったのである。その点、三十三年八月号で、壬生三郎氏が、「切腹風土記」の中で尚書や資治通鑑、奥羽永慶軍記、甲越軍記等から例を引いて書

いておられるのには敬服した。私はそんなむずかしい本は分らないから、歌舞伎や浄瑠璃や、小説からいくつかの作を引いてみようと思う。

河竹黙阿弥作「月梅薫臘夜」というのは、有名な花井お梅の芝居であるが、この中に、紂王の腹裂きの場がある。

紂王の家臣、杜元銑は、紂王の悪政に対していろいろと諫言したため手討ちとなる。その妻、柳条は前婦の子、柳眉、自分の実子、王瑞、翠子の三女と、懐妊中の胎児がいる。

紂王の妻、姫妃は、病と称してうかぬ顔をしている。紂王がなぐさめると、自分の病氣は、私の人型を作つて呪っている者がいるためで、それは杜元銑の妻、柳条であるという。紂王が怒って、すぐに柳条と、その三女を召し捕らせる。柳条らは手ひどい拷問をうけ、ついに無実の咎を白状する。

紂王 過言せし故、杜元銑を、手討ちにせしを遺恨に思ひ呪咀調伏致すとは、思えばにつくき其の女、いかなる刑に行いくれん。

家来一 先ず第一が炮烙死刑、又は毒虫を入れ置きし穴へ落して喰ひ殺させるか。

家来二 かれは懐妊いたし居れば、腹さき刑に行うのが適當と存じまする。

紂王 これ姫妃、いかなる刑に行なうな。

姫妃 わらわを呪いし憎き柳条、腹裂きがようござりましたよう。

家来一 又子供等は穴へ打ち込み、

家来二 蛇や蜥蜴に喰わしてくりよう。

柳条 ええ、すりや私が腹を裂き、子供は穴へ打ちこんで蛇や蜥蜴に喰わすとか。



柳眉 ええ、情ないことで……
三人 ござりまする。

というわけで、柳条は、大まないたに縛りつけられる。もっとも最後には雷震があらわれて、助けてしまうので、腹を裂かれる場面は表現されていない。

武烈天皇や、秀次に関しては、こういう文献は余りなく、ただ日本書紀や太閤記に、はらみ女の腹をさいたということが書いてあるだけである。

日本野史には、

『嘗て出でて孕婦を望見して曰く、聞く古、胎を剖く者有り
と、其の楽み想うべし矣と。因りて左右に命じて曰く、速
に引き来れと。一人驅せて之に及び、婦の耳に附して曰く
只ひそかに行けと。乃ち路傍の啼麦はしむぎを握り、反命して曰く
是れ麦囊を懐く者にして孕める有るに非ず矣と。故に臣謹
んで一掬を取り、以て之を証すと、婦危くして而して脱
る。』

とあり、女が助かったことしか書いていない。

野史にはこれと殆ど同じ記事で、忠直卿の事が書かれてい
る。だから、どの程度、信用がおけるかわからない。

しかし小説として書かれたものの中には必ず腹裂きの場面
が出て来る。

古いものでは、昭和五年、日本評論社から出版された松崎
実著「殺生関白行状記」（バテレン見聞録）には次のように
書かれている。

「爾来は秀次、人を斬る手並ばかりを見せたが、今こそは
生殺自在の神技を見せうずる、伴天連の申す天主の大神に

も勝る妙力ぢや。」と或日にわかち仰せ出された。（中略）
関白様、顧みて

「かの淫乱者を庭前に引き出せい。」との仰せぢや。
引立てられて罷り出まらしたは、大奥に数も知れぬ女房衆
の一人に……（中略）……月満てるほどに見えた腹を抱え
て庭先に引据えらるれば、……（中略）……

「さらば秀次、その腹をあらためうず。」やがて下人を呼
んで「おゆるし、おゆるし」と身悶へおめく女を無理強ひ
に裸形にさせ、仰向けに押し倒し、喉元を片足に踏まへら
れて、先づ一突き鳩尾のあたりに突き立てれば、忽ち魂消
え果てたが、その刃を抜きもやらひで、切尖もて下腹の果
てまで裂き下し、胎児を掴み出して、

「女どもは居らぬか？ 夙う此の児に産湯つかはせて、秀次
に似たるか否かあらためい。」
と呼ばはる。

この本を下敷にして書かれているのが、柴田錬三郎の「若
武者最期」（角川書店）の中に出てくる「殺生関白」である。

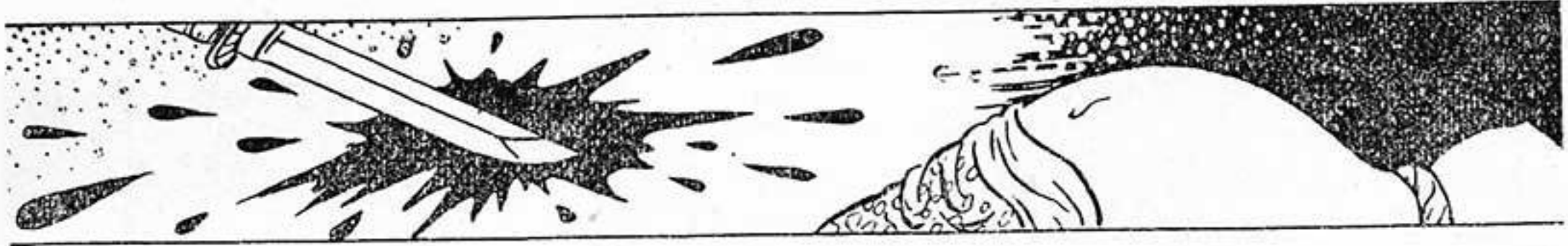
「おゆるしを！ おゆるしを！」

身もだえて、のたうつ女房から、むりやり、その衣裳を、
一枚一枚はぎとって、裸形にし、仰向けに押し倒すのを待
って、関白さまは、佩刀をお把りになり、

「不義者め！ この秀次のまなこが、めくらと思うておった
か！」

と叱咤と同時に、その喉もとを、ぐいと片足で、ふまえ
られて、まず、ひと突きに、鳩尾のところを、ぷつり刺
し通されたのでございました。

たちまち、女房は、魂消え果てましたが、関白さまには



「その刃を抜きもやらずに、切尖もて、下腹のはてまで、びりびりと裂き下して、片手を突き入れて、血まみれの胎児をつかみ出されて、

「見よ！ 女ども！ このややに産湯をつかわせて、わしに似たかどうか、あらためい！ もし似て居ったならば、秀次、申しわけに、わが腹をも十字にかっさばいてみせるわ！」

と喚きあげられたことでございます。

また岩堀光作「関白秀次」の中には、直接腹裂きの場面は出てこないが「おいとの方の巻」の一節に、おいとの方の姉が腹を裂かれた時の事を、おいとが想像する場面が出てくる。ふいに彼女は邸第から現われた数人の男共に手足をとられると、城中にかつぎこまれた。そして、たちまち有無をいわず身にとったものをはぎとられると、仰向きに、戸板にしばりつけられた。おいとには、姉の泣きわめく声がきこえる。懇願し、いくたびか失心しながら、多くの男たちの面白げな眼にさらされる姉の太字なりの裸形が、眼に浮ぶ。

涙に汚れた顔、乱れた髪の毛——姉は自分に似て肌理のこまかな、白いもち肌をしていた。秀次は、刀の冷めたい切尖を、女のふくれた腹にあてていった。ゆっくりと、起伏にそって、うす皮を弄ぶように撫斬って行く。

永い苦しみと、激しい屈辱。そして数刻の後、姉は、神仏までも呪って、恋しい良人や、なつかしい自分や、父の名を呼びつつ、死んでいったことだろう。

秀次は、その時、刀の切尖に、とりだした胎児を突刺して、ぶらぶらふりながら、

「なんだ、これが、生命か？」

と、けらけら、声のない冷笑を洩らしたとか——。

岩堀氏のこの文は、うまく逃げたということができよう。生きながら女が腹を切り開かれるということは、恐らく誰も見たことのないことで、どんな状態になるか簡単には想像のつかないところである。

松崎氏や、柴田氏は、いずれも鳩尾に刀を突き刺さされるとすぐに魂消え果ててしまうが、或はショックでそうなるかも知れないし、そう簡単には死ねぬかも知れない。

この間臨時純潔化協会員になって、「母と娘」という映画を見て来たが、その中に帝王切開の場面があった。以前、毎日写真グラフか何かで、帝王切開の連続写真を見たこともあったが、映画という動きがあるので、また異ったスリルがあった。

腹の部分だけ開けられた布をかけた妊婦が、ベッドの上に横たわっている。画面一ぱいに女の腹部が映る。お腹という感じはしない。メスが動く。スーと皮が切れる。

脂肪が開いて子宮壁が見える。殆んど血が出ない。そうして開かれると子供の顔がのぞく。機械が開かれた腹壁にひっかけられ、腹の穴が大きく開かれる。そうして胎児が引き出される。臍の緒が長くつづいてる。全くきれいなものである。麻酔で女がねむっているのだからビクともしない。

しかし秀次の場合はこうはいかなかったろう。女は生きてピクピクしているのだし、外科手術のように血を流さずにというわけにはいかないであろう。

恐らく腹から流れ、吹き出る血汐。真赤になった女の体。返り血を浴びた秀次。物凄いうなり声——。ちよっと文章で



表現するのはむずかしいのかも知れない。

この秀次と共にこの時代を代表する暴君は越前宰相忠直卿である。

忠直は、菊地寛の初期の作品「忠直卿行状記」によって大変有名であるが、彼も孕婦の腹を裂いたことで有名である。

特集・人物往来三十三年四月号の「着物をぬいだ歴史」の中で青園謙三郎氏は、

『小山田多門は忠直の命を受けては、毎日のように人間狩りに出かけた。百姓町人を問わず、老若男女、誰でも手当たり次第につかまえては、猿ぐつわをはめ、城中に引きずってきた。一家全部が珠数つなぎになって連れて行かれた悲劇も数えられないほどあった。……（中略）……

人殺しも度重なると、普通の方法では面白くなくなるものらしい。忠直と一国はいろんな「殺しの型」を発明した。

まず一国が最も好んだといわれるのは、妊娠した婦人の腹を切り開く型である。このため城下町や近郷近在の村々からは、妊婦がひんぴんとさらわれはじめた。福井地方にはいまでも「袖無し」と呼ぶ袖のない綿入れ羽織が婦人の保温用に愛用されている。が、これは妊婦が腹の大きく見えるのを隠すために流行しはじめたのだという伝説が伝えられている。妊婦の腹を裂くために、石の大きな板がマナイタ代りに使われたともいう。このマナイタ石と称するものが、福井県内各地にいまも残っている。』

とある。一国というのは美濃国関ヶ原の問屋の娘で、すばらしい美女だったそうで、まさに傾国の美女というべきであろう。

菊地寛の代表作、忠直卿行状記の最後には次のように書い

てある。

『忠直卿の乱行が、その後益々進んだ事は、歴史にある通りである。最後には、家臣をほしきままに手刃するばかりでなく、無辜の良民を捕えて、之に兇刃を加えるに至った。殊に口碑に残る「石の俎」の言い伝は百世の後尚、人に面を背けさせるものである。』

この「石の俎」というのが、孕み女の腹を裂いた石のまないたである。

福島正則は、賤ヶ岳の七本槍の一人として有名な武将であるが、晩年は不幸であった。信州に配流されて無聊をかこっていたが、何もする事がないと生来の惨虐さが頭を持ち上げて来た。或る日偶然見つけた妊婦を捕えて、その腹を截ち割って見た。彼はその面白さに酔って、孕み女を見つけてはその腹を割って打ち興じた。このうわさを聞いて恐れをなした女達は、みなはんてんを着て、大きな腹をかくして歩いた。これがはんてんのはじまりである。

これは信州の友人から聞いた話である。はんてんと袖無しの違いはあるが、どうも忠直の話がそちらへ伝って来たもののように思われる。

私は先に、腹を裂かれた女の名前が伝っていないと言った然し、裂かれそうになった有名な人はいる。それは静御前である。

義経には六人の女房、五人の白拍子がそばに召し使われていたが、その中で最も寵愛の深かったのが静御前であった。他の女達と別れて後も、静だけは、吉野の山奥まで連れて行ったのであるが、落人の身として、これ以上の供はかなわぬと、唯一人おいてきばりにされた静の気持は、どのようなであ



ったろう。彼女は忽ち衆徒に捕えられ、妊娠の身を拷問にかけられ、義経の行方を問われたが、彼女とてその行き先を知っているわけはなかった。彼女は一旦は京都の母磯の禪師の許に身を寄せていたが、義経の子を妊んでいることが六波羅に聞え、召し取られて鎌倉に送られることになった。

鎌倉には有名な敵役、梶原景時がいた。義経記によると、彼は、「敵の子を妊んだ女は、頭を砕き、骨を拉ぎ、髓を抜かるべき大罪である。あと一月待って、生んだ子を殺そうと思つて、なまじっか情をかけ、身替りでもつかまされては大変だ。」進言をしたので、頼朝は、「静の腹を引き裂いて、にくい九郎の胎児を引きずり出せ。」と命令した。幸若舞曲の本文に従うと、次のように書いてある。

『去る間梶原は思ふ様に仕了せ。内々打笑い、静があたりへ立ち寄つて、あらいたわしや、今夜御内より胎児を探ししつけないとの御説の候。覚召さるる事の候はば、何事も母御前に仰おかれ候へと空涙して語る。静御前の母禪師娘を抱きつつ、抑人の親の習いにて、あしき子数多あるだにも別れと言へばものうきに。ましてや申さむ自らが、唯一人の静御前、見目形心様、上下に並ぶ人なしと、世にも隠れめ一人子を先立て何と成るべきぞ、如何なる朝敵逆臣も女を殺すことはなし、たとい厳格荒氣無き、夷の住家なれど盛りの花を風無うて、切り枯らしたとやある。憂たてかりける鎌倉の政と、かきどき泣くより外の事はなし。』
静はその夜冥府へ向う輿に乗せられ、涙ながらに由比の浜辺へ連れ出された。

折柄、文治二年七月十五夜の月が青白く静のうなじを照らしている。みぎわに打ちすえられた台の上に、静はあきらめたように上つて行く。着ている水干が荒夷どもの手で一枚ず

つはがれて行く。衣の下から、美しい肌につつまれた大きな腹があらわれる。その美しさに、さすがの梶原もため息をつくばかり。静は台の上に横わる。青白い月が静の全身を照らしている。じつとつむった目。まつげに露が宿っている。ぐっと張りつめた乳房の黒くなつた先端は、かすかにふるえている。小山のようなおなかの頂に、道化者の臍だけが、苦勞も知らぬげに微笑をしている。しかしその臍も、今に血に染まるであらう。

その時遠くから馬のひづめの音が近づいて来た。鎌倉内見廻りの武士、土肥実平の党の者であった。

ここでまた幸若の本文を引くと、

『土肥の二郎直平は、鎌倉の警護にて、暮るれば十騎二十騎にて、鎌倉内を廻りしが、何とは知らず浜端に、怪しき人の見えければ、駒打ち寄せて「誰そ」と問ふ。「梶原これにあり」という。「何事ぞや」と問ひければ、「静が胎内を只今探すなり」と申す。』

すると直平は、「ここは若宮に近い所、ここで血なまぐさい胎内探りはどうであらう。」と言つたので、梶原も、尤だとうなずいて、他所へ行くことになった。

静は、もうこれまでと覚悟していたものの、一時でも助かるというのは、どんなにうれしかったであらうか。或は逆にこれ以上の責め苦はないとも言える。

とどのつまり、頼朝の妻政子の取りなしで命を助けられ、出産の後、男子ならば殺されるということになった。

もっともこれは、幸若のフィクションらしく、実際は山本富士子顔負けの美人静御前が、月の光の下に美しいお腹を晒すところまでは行かなかったらしい。

東京新聞に連載された、富田常雄氏の「弁慶」によれば、



「頼朝の顔色はいよいよ不快なものになって行った。……
……（中略）……」

「憎き女性かな。九郎の子をなんとて誇ろうとはする。梶原、そうそうかの女の腹を裂いて子を取り棄てよ。わがためには仇の末たるものを」……（中略）……
「恐れながら」

老練な景時はひと膝すすみ出た。

「前伊予守殿、今は仇とは申しながら、そのお言葉はあまり酷き仰せかと存ぜられます。分娩の後とはとも角として今の静どのに手を加えるの儀はお差控えを」

「と申して鎌倉より戻して後に分娩し、これを隠さば、この頼朝の仇を世に送るに等しかるべし」

「されば、分娩いたすまではこの鎌倉にとどめられ、もし生れ出るものが、女性ならばなんの差支えもなきままに帰され、男児たりし折りにこそ、兎も角もなし給うが正当と覚え候」

景時の言葉が先ず常識であった。

「左様か」

頼朝は不承ぶしように短かく答えた。

それにしても頼朝が「静の腹を裂いて、胎児を引きずり出せ」と言ったのは、単に仇義経の種を宿していたからだけであらうか。胤を断つだけならば、まだ他にも方法はいくらかもある。たとえば、どうせ母子共に殺すなら、静の首を討つなり、毒殺するなりしてもよい筈で、殊更に生体解剖をして恥しめを与える必要はない筈である。それをあえて「腹を截ち割れ」といったのは、何しろ妊娠している日本一の美女。頼朝ならずとも……というのは浅はかな邪推であらうか？

近松門左衛門の「^{さんたん}産静胎内掃」はこれを脚色したものであるが、これは生まれた男子は、畠山重忠の情で、助けられることになっている。静の子供が助けられたという説は、吉川英治氏も「新平家物語」の中で採用しておられるので、あながち判官びいきからの俗説ではないのかも知れない。

浄瑠璃といえは、最近かたばみ座が上演したり、五、六年前に伊藤晴雨氏が百万ドル劇場で上演させたりした奥州安達原四段目、「道行千里の岩田帯」は、いわゆる安達ヶ原の黒塚の伝説を劇化したもので、生駒之助に連れられた恋絹が、安達ヶ原に来て急に腹痛を覚える。

やっこのことで一つ家にたどりつき、生駒之助は老婆と共に薬を求めに町へ下りてゆく。

あとに一人残された恋絹は、障子を開けるなといわれたため、かえって覗いてみたくなり、こっそり開いてみると、そこに髑髏がある。びっくりしている処へ、老婆が一人帰ってくるのである。

婆 其夫の戻らぬ先に、こなたにばばが無心がある。

恋 サア其無心といはしやんすは、路銀をかせといふのである。わしが肌にはないによって、ちよつと夫を呼んで来て

婆 イヤ銀ばかりぢやない。路銀よりまだ外に、こなたの腹の子がほしい。

恋 エイ、あの胎内にある子を、どうしておまえ

婆 イヤ心安うとられる。つい其腹を裁割って、ホホホホあの子とした事が、何のそう震ふ事ぞ、ばばがいたうないやうに、つい一思いに殺してやる。よい子ぢや、ここへちやつとござれ。南無阿弥陀仏。南無阿弥陀仏。

と、となふる口は耳までさけ、安達ヶ原の黒塚に、こも



れる鬼といひつべし。恋絹あるにもあらぬ思ひ、

恋 私を殺すとおっしゃるも、銀からおこった事なれば、路銀も残らず上げましょう。まだ其上に此衣類、はいでなりとも助けてたべ。つらい命をならえて、陸奥までさまよふも、何とぞ安う産みたいばかり、よくよく深い縁なればこそ、わたしがおなかをかり初めも、十月に及ぶやどり子に、せめて此世のあかりを見せ一日なりとも親よ子と、互に呼びつ呼ばるるまで、命が惜しい、死にともない。慈悲じや、情ぢや、コレまうし……。

へと取り付き歎けど聞かぬ顔

というわけで、老婆は懐剣逆手に恋絹に襲いかかってゆくのである。

へ息の根をとめよと突っかくる、刃先をよけてもよけさせず、付けまはしつ追ひ廻り、なんなく肩先切りこまれ、立つ足さえもたぢたちち、又突かくる白刃の切先、その切先を恋絹は手でうけとめるのである。

へ懐剣しごけば紅の血汐に染る手を合せ

恋 どうぞお慈悲に、連合の帰られるまで。せめて名残にたった一目、逢うて死にたい顔見たい。生駒さまいのう。我つまさまいのう。

へと泣きさけぶ、声さえいとど遠近の、空吹く風の音ばかり

婆 コリヤ世話やくないやい。その連合はな、方角知れぬ山中へ、突放して戻ったれば、今時分は、猪や狼に喰殺されておるであらう。夫に逢いたか、早う冥土さへやってやろ

へとたぶさ擱んで肝のたばね、刺通されて七顛八倒、苦しむ体はくるくるくる、輪乗りのごとく打ちまたがり、乳

の下より十文字に、はらちちやぶ腹裁破る有様は、目も当てられずむごらしき。

こうしてその後で、この老婆が、実は恋絹の実の母であることがわかるのである。

こういう惨虐な場面の描写を得意とした劇作家の鶴屋南北であるから、南北の作品にこういう場面の出てこないわけがない。

彼は七十三才の時に書いた「ひさりたき独道中五十三駅」の中で、非人江戸兵衛実は藤川水右衛門が、八ッ橋村のお松の腹を裂くという場面を描いている。この劇は岡崎の猫騷動に亀山の仇討、重の井姫からお半長右衛門、権八長兵衛に弥次喜多と、いろいろの役が雑多に出てくる、いかにも南北らしい劇であるのだが、中でも非人、江戸兵衛は殊に南北物らしい線の太い人物である。

『舞台は非人の家と凄き合ひ方。時の鐘。虫の声。爰に皮干し板にお松をかすがひどめにして、荒縄で縛り、よき所へ立てかけ、囲炉裏の中に焚き物をくべ、蚊遣りを仕掛け件の小袖の裏に書き認めするを、古行灯にて江戸兵衛読んでいる体にて、道具沈まる。』

というわけで、妊婦を板にかすがい、でうちつけなどというのも、いかにも南北らしい好みである。しかも江戸兵衛は、お松の親を殺した仇であることさえもわかるのである。

つまり型のかわった返り討ちなのである。

まつ そんなら父さんを殺したのも、おのれの仕業であつたよなア。その仇たるおのれがために、命を落すが口惜しい。手が叶はずば、喰いついてなとおのれを、エエ、誰ぞ来てくれぬかいなう。



(といろいろ身を揉み)

エエ、何の因果で此のように、憂き目にあふか。口惜しいわい。口惜しいわいなう。

江戸 道理だ道理だ。成る程、われは因果者。それに引きかへ此方は仕合せ。仇を討つべきわれまでも、縛りからげて腹を裂き、その生血が薬となる。仇のおのを助ける良薬。みすみす爰で返り討。イヤ、返り討も多く見たが、皮干板で此ざまは、ハテ珍らしい。

まつ 聞けば聞く程、その恨み。喰いついてもこの縄が、エエ、死にともない死にともない。誰もいぬかいなう。アレイ、アレイ。

江戸 高吠えするな。その跳くのがこの世の別れ。今が皮切り、辛抱しろ。

(と「アレイアレイ」と跳くお松の胸元を出刃を以て突込む。これにて苦しみ身悶えするを、江戸兵衛よろしくこなし。この時、腹の中より赤子出て泣く。江戸兵衛、憐れとして)

なんだ。赤子か。エエ、不便な餓鬼だ。

(と引出して門口へ捨てる。この時、薄ドロドロにて、

お松、眼を見開き、江戸兵衛をキッと見る。)

なんだ。まだ死なねえのか。エエ、執念ぶかい。

(と死骸の板を蹴飛ばし、隅より素焼の壺を出し、捨てりふにて、生胆を出し、壺の中に入れ、片口を出し、懐の薬を半分引明けて、血を浸し、一つにして)

こいつは余っぽど飲み憎かろう。

(と顔をしかめながら、グッと飲む。)

腹を割いて胎児を取り出し、生血をのむという、まことに南北らしい場面である。ただ惜しいことに、お松は薬で顔を

かえられた醜女なので、同情が半減する。

最後に現代物から、香山滋氏の「鮫鰈」の一節

『ああ、可哀そうなお母さん！お母さんはこぼれるやうなお腹を抱えて、伊勢源の厄介になったの。お店の女中をして知った男に孕まされて、捨てられて。』

それは冬の、雲の降る冷たい夜だった。宴会がたてこんで、あの人は転手古舞いだった。朝から晩まで、鮫鰈の林の中で剣の舞をやったの。その部屋直ぐ裏が風呂場になって、お母さんはひとりで冷えたからだを暖めていたの——。人間の運命なんて。ほんの一寸先も見えないもんね。

酔いどれ客のひとり、厠へ立った帰りに、ふっといたづら心で風呂場を覗いて、お母さんひとり、しかも懐妊している女と見てとって、いきなり飛び込んで変なことをしようとしたの。お母さんは吃驚して、でも気丈に声も音も立てず、勝手知った隣の調理場へ逃げ込で、鮫鰈の林の間に忍んだの。痴漢は執念深くつけて来る気配だったし、お客に恥をかかしては世話になってるお内儀に済まないとも考えて、お母さんは息を殺して吊された鮫鰈と鮫鰈の間にさまれてじっと眼をつぶったの。それが不可なかった。臨時の宴会で気が急いでいたし、電灯もひとつしか点けず、第一、連日の疲れで頭もぼっとしたあの人は、大きな奴一匹で事済まそうと、碌に見もせず、いきなり真白い膨らみのある腹に出刃を突刺して一気に割き下ろした！うひいいて悲鳴につづいて、どさっと床のタタキにその鮫鰈が仰向けにのけぞって、その割けた腹から血が泡立ち、ああその中に奇蹟の児がうごめいていた！

あんた、妾って此んなすさまじい生れ方をした児なのよ。』

(完)

オダリスク

(女奴隷)

近藤



Odalique [oudalisk]

トルコ皇帝後宮の妃、妾

||英和辞典||

ヒロインのモデル、泉かよ子さんについては次の各号を参考に致しました

32年4月号、32年7月号、32年11月号、33年4月号、33年5月号、33年8月号。



カオリは噴水をじっと視ていた。真珠のように美しい水玉の煌めき。底の敷石までが透いて見える泉水に静かな小波の波紋。赤や、黄や、白や、そして大好きな紫までが、繚乱と咲き誇る宮殿の庭に向って、カオリの類稀

な美体は、細い銀の鎖で柱の根本に繋がれている。しっとり潤い、輝くように白い柔肌は、胸と腰を僅かに覆ったばかりでも、華麗な雰囲気をも四圍に醸し出していた。

身長一メートル六五センチ、すんなりと伸びた四肢、清潔そのものの女体であった。

直接膚に着けているのは、ぽっくりと弾力の強い胸の隆起を包んでいるレース飾りのついたナイロンブラジャーと、美しいブリーフそして、そのそれぞれを彩る紫と緑のシルクの布、金色の輪と銀色の鎖である。紫の絹は背から腋を通り胸を覆って綾をなしている。そして首筋に掛けて結ばれていた。胸の紫の交叉した所には、眼にルビーを嵌めた銀製の

蛇のブローチが飾られていた。緑の絹は巾広くヒップを包み込んで前で結ばれ大きく垂れている。

贅肉の全くない、造化の極致ともいうべき鍛え抜かれた肢体であった。バストの盛り上がりかウエストへ来て括れる程にきゆうっと細まっている。それがヒップに至ってぐっと張り切っている。正に絢爛たるヒップであった。逞しく、強く張りながら、すべらかに嫋やかな脚線。臍のくっきりと締った細い足首。美しい指の並んだ素足。

両の手首、足首、胴、そしてほっそりした頸にまで、金色の輪が嵌められていた。金属性の輪には、鎖を繋ぐための留金がついてお

り、両手首は背後で留め合わせられ、両足首は十五糎程の銀鎖で繋ぎ合わされていた。長い銀鎖が後手首を一巻きして、ウエストを締める輪を通り、頸の輪を通して、その端が柱の金具に絡みついているのである。

美しい体を、まるで、家畜の雌でもある



かのように鎖で繋がれながら、カオリの表情は屈辱に歪みもせず、穏やかに澄んでいた。嵌められた金の輪には、カオリの今の地位のオダリスクを特徴する図柄が彫り込まれているのである。

池の噴水の絶え間ない動きを見つめながら

カオリは静かな回想に耽っていた。

カオリが、縛られる欲びを教えられたのは今は亡き恋人からであった。只管、愛情を捧げつくすことに欲びを感じていた純情そのもののカオリを、恋人は優しく拘束した。信じきって、少しの疑いも見せないカオリの手首に、彼は冷たい金属の輪をプレゼントした。驚きの余り、動悸も一瞬忘れ、涙さえ浮かべて許しを乞うカオリ。

目隠し。後手錠。

今は思うだに胸の顫えを抑え得ないが、その時は、カオリはびっくりして、只夢中だった。

それから、手錠、銀鎖、紐、目隠し、猿轡の、身をよじる痛苦を教え込まれたカオリである。彼の純情可憐好み、残酷な苛責や女腹切や浣腸等の嫌悪は、そのまま、カオリの胸の中に深く浸み込んで行った。

カオリは美しく縛られる女になった。

痺れるように幸せな恋の月日——然し、不幸は二人の幸せを妬んでいた。かりそめの病いに夫はカオリを遺して逝いた。

恋しい人の遺した鎖や手錠、猿轡等を、深夜秘かに吾身に纏い、一時間ぐらいじっとしている、彼のさまざまな仕草が想い出されて、カオリは胸が熱くなるのであった。

独り寝の床の中であれこれ考えると、今更

に亡き人が恋しく、楽しく縛られた数々の思い出が甦え、カオリは昂ぶる気持ちをどうしようもなかった。女の身の哀しさ、辛さにしみじみ涙をこぼした。

眠れぬままに起き出して、ナイロンパンティとブラジャを身につける。髪は気に入ったウェーブを打ち、白粉も濃く、口紅をたっぷり塗る。美しく化粧ができると、冷たい懐しい銀鎖を手取る。静かに手首に巻きつけ、自分で後手に縛ってみる。只緊く絡むだけでも、少し手を動かせば鎖が手首に喰い入って、何ともいぬ感触が疼く。

鏡台の前に立つと、――

鏡の中に、白のブラジャ、ピンクのパンティをつけた一人の女が、銀鎖で後手に縛られている。そして、それは紛れもないカオリ自身の姿なのだ。

カオリは縛めの身を美しく装ってもみた。大好きな水晶のネックレスをつけてみた。華やかな水晶のイヤリングを下げてみた。ナイロンストッキングを、腰に巻いたベルトからのガーターに吊り、美しいハイヒールまで穿いて、自らを鎖で縛ってみては悶えた。

が、遂にカオリは自分で自分を縛ることに不満を感じるようになってしまった。

幾夜も幾夜も、続けて懊悩した。そして遂に決心した。自分を生かすために、亡き人への慕情に生きるために、カオリは自らを進ん

でオダリスクとして売った。

国王は後宮に日本女性を求めていた。然し日本を代表する美女が、オダリスクになろう筈はない。自分から望むような女性には日本女性の代表にふさわしくなかった。といって法治国の、近代国家の日本から、強制的にオダリスクを作り出すことはできない。

カオリは、然し、東京の大使館でテストにパスした。体の美しさ、強靱さ、健康、忍耐、従順等々、オダリスクに必要な適格を、心身両面共精密に調べられ、すべてに欠陥はなかった。大使は初めて眼を細めた。

カオリは、空路、現地に送られた。公使館で元田公使から、更にテストを受け、調教された。智能、知性、気品に於いて欠ける処はなかった。

跪いて頭を垂れ、ムチを受ける姿も身についた。言葉はもともと通じなかったが、「ハイ」という一言の外はすべて忘れ去ったようだった。ムチの言葉を理解する力も、思い遣り深く奉仕に尽す真心も、公使には驚嘆の外ない絶品であった。

太い手錠、足錠に鎖をつけられ、元田公使に伴われて、カオリは後宮へ送り込まれた。濃い紫のナイロンブラウスに、焦茶のスラックスを穿き、巾広のベルトをウエストにきっちり締めていた。

跪いて国王の足の甲に、カオリは交る交る唇を当てた。国王は眼の下に動く、細く白い項に見惚れながら、柔らかに豊かな漆黒の髪の毛のカールしたのを、満足気に眺め降していた。

生粋の金髪というべきブロンドの髪を持った少女だった。十六、七なのかも知れない。匂うような艶膚を露わに剥かれ、屈強の兵士達に両腕を捻じ上げられ、国王の前に引据えられた。激しく抵抗したものか、それとも余程酷い取扱いを受けたらしい。金髪の生毛が光る膚は処々、擦りむけて血が滲み、頬や額にまで血や泥がこすりつけられていた。少女は哀願を籠めて国王を仰ぎ見た。その途端、王妃が何か烈しく叫んだ。

少女は鎖で後手に括り上げられ、跪いていた。その背に王妃の激しい鞭の雨が降る。パシッ、パシッ、パシッ、パシッ。項垂れて唇を受けている少女の唇から、泳えきれない悲鳴が洩れる。逃げようとせず、鞭が当たる度に身を屈めてヒクヒクと顫え、喰い縛った齒の間から、ヒューッ！と呻くばかりの姿に、悲惨なまでの美しさがあった。

無意識の裡に、カオリは少女の軀の上に吾身を覆いかぶせて鞭の雨から庇っていた。骨の髄まで貫き通る鞭の痛みが斬るように浸み透った。少女の肌から湧き出した鮮血がブラウスを染めた。カオリは少女の背で鞭に耐

えた。

国王が徐りと首を横に振って、王妃にもう許してやれというような眼顔を見せた。

少女は、カオリの介抱を受けて恢復した。自分を指して「イヴオンヌ」といった。少女の名がイヴオンヌなのだと、カオリは識った。カオリも自分を指してにっこりと「カオリ」といった。少女もにっこりして二、三度口の中で呟いた。

金色の輪、銀色の鎖の拘束、鞭による苦悶の中で、カオリは国王に奉仕する日々に充実した生き甲斐を感じていた。立居振舞はつましく淑やかで、心から従順なカオリは、美しいオダリスクとして国王への奉仕を欲びとしていた。国王の身の廻りの細かい処にまで心を遣い、誠心を捧げて尊敬しきっていた。

国王もカオリを愛しく想った。予想以上に美しい日本女性に魅了されていた。

国王の寵愛が深くなるにつれ、それに比例して王妃の嫉妬とカオリへの憎悪は昂まった。カオリはそれをピンピンと感じていた。



今日の昼、国王の食事に侍って自分の部屋へ帰る途中だった。いきなり鞭の痛みが鋭く背を走り、王妃の瘡高い叫びが耳をうった。カオリはオダリスクであった。直ぐに両手を後に組み項を垂れて、王妃への従順を表わしていた。王妃付きの黒人がカオリの両手首を背後で留め、両足首を短かく鎖で繋ぐのを、カオリは何の反抗もなく却って欲びをすら見せて甘受した。両腕の振りを拘束された歩行は均衡を失って困難なものであるが、カオリは美しく曳かれて歩いた。そして庭先の柱へ、まるで雌犬のように首にまで鎖をつけられて、結び止められたのである。それから夕暮を迎えても、繋がれたままのカオリだった。物愛いような静けさの澁んだハレムの庭先であった。

「カ、オ、リ。」

柔らかく甘い囁きが、そっと耳許を撫でた。イヴオンヌだった。夕風にひんやりとして来たカオリの肩から腕の辺りを、綺麗な指先が撫でくれた。ポトリ、暖い滴りを肌に受けてカオリが振り仰ぐと、イヴオンヌの眼は、一杯の涙を溜めていた。

——泣いてくれる？イヴオンスが。私の哀れな姿に同情して……。

——いいのよ、イヴオンス。私はこういう目に遭わされるのが好きな、変った女なんだから……。——そういうようにカオリは、にっこり笑いかけてゆっくり顔を横に振った。それに頷いたイヴオンスは、王座の方を見やって、にっこりした。国王のお召しを意味する

様子だった。涙の玉が眼の縁からキラキラと走り落ちた。美しい顔だった。

繋ぎ止めた鎖を柱から解き、イヴオンスが首輪から鎖を外そうとすると、カオリは頸を捻って振り向いた。

——いいの。その儘にしといて。ね、イヴオンス。私、貴女に曳かれて、王様の前へ出たいのよ。——眼顔でいって、鎖の端をイヴオ

ンスの指に預けたまま、カオリは自ら先に立って歩いて行った。

国王は眼を睜った。

——王さま、お叱りにならないで。イヴオンスが悪いのではございません。カオリは縛られるのが好きな女なのですから……。

カオリは微笑みながら国王を仰いだ。国王はイヴオンスを咎めたものではなかった。カオリの美しさに息を呑んだのである。只でさえ類稀な美体のオダリスクであった。そのカオリの縛められた肢体の、華麗で哀愁を湛えた美しさ。鎖に繋がれた人間を見なれた国王にも、かつてない烈しい経験だった。国王の胸に、この跪いている生き物を、もっとももっと酷く責め虐んでやりたいという激しい愛情が沸いていた。国王のかんりの愛情を得ていたカオリは、遂にオダリスクに対する国王の愛の総てを受けるようになった。

特別の装いが必要とされた。金色のブラジャー。金色のブリーフ。首、二の腕、手首、ウエスト、腰、足首には銀色の鎖を繋ぐことのできる、美しい彫刺のある金の環。ブラジャーとブリーフの色は水色、緑、紫と変っても、金属は必ず金と銀だった。

鎖は面白い程キリキリ喰い入った。ブリープと弾みを見せながらも柔かいカオリの肢体は、国王の意のままに清純な姿態を演じ続け

スクリーンの男性美

原 俊 行

映画は一本で普通百分間上映が平均映写時である。終戦後検閲弛緩により、所謂ヌード物がドッと製作され、新東宝の如きは専門、短篇はもとより長物にもグラマー物が続出した。之に反し男性美は如何であるかと云うに、宝クジの当選率か現代の就職%の様に僅かであり、且つ作品百分間の中で一分あれば多い方、殆んど二十秒で幻夢の様に消えて儚ない。即ち1%の率なのである。この1%の挽歌を少ない体験より記録してみた。

大昔の戦記物は残念にもコードモ時代で記憶はシャボン玉、ヌードの汜らん期に御存

知三船の登場により「銀嶺の果て」「宮本武蔵」が現われグラマーに對抗した。佐野周二の「みどりの島」は羞かし相に駆けて行った尻が思い出され、少年後代の久保明「潮騒」は余りにも有名であったが、同じく若い石浜朗「禁男の砂」の長いタレにはヘキエキした。

今年に入ると「女狐風呂」の侍ヌードが珍らしく「共犯者」の根上淳が主役二枚目であり乍らオールヌードを露出したのは偉とするに足る。大介や桂樹のサラリーマン物や山下清は三枚目扱いの相撲姿であり、壮丁検査シーンだから美よりも醜と云わねば

ならぬが「弥次喜多続篇」トップにワッと現われる五〇人の川人足の赤禪は巨大なシネスコ画面一杯の壮観である。同じ壮観でも「隠し砦の三悪人」のマスシーンは色彩なく雪崩る如く走り回る群集なので目はチラチラするし、焦点を定められずアッと云う間にカット変りという次第。「果しなき慾望」の加藤武は容貌と芸の力で、裸体のヤクザを胸のスクほど好演した。新劇人で彼ほど思い切った肢体をサラケ出し、而も美事なのは稀であらう。

「御免遊ばせ花婿先生」の菅原は例によって下半身絶対隠ぺいしている代り、若々しいハンサム野口啓二が締込みで幾度も取っ組み合う方に寧ろ注視出来る。「続禁男の砂」でも漁村の若い衆に扮した新人三上が数回白い六尺でマシラのように暴れ回るのが可愛い、頼母しい。其の他新旧混合で挙げると「二等兵」「チツプス先生」「愛の道標（短篇）」「日本の虎」「風雲講道館」「人魚昇天」ETC。案外あるものだが数年間のをマトメたからである。（一度旧誌に載せたものは割愛）中でも人魚の三橋の凛々しさは根上と同様、人気スターであるのに鶴田、菅原、東映色男等とは異り、サッパリと飾り気なく、男らしさを発揚しているので快哉である。もう一つ、講道館で

端役の若い男優二名が、月夜に井戸端で水ゴリをとり取組み合う有様はスッキリと惜し気なく色気を脱脂した色気とも云うべき裸身が一般観客に愛嬌までふりまいた。

これら日本独自の美と力の風俗と肩を並べられる洋画というのは至って貧しい。アチラのボディは二枚目でさえヒゲだらけで雪男を聯想し、肝腎の筋肉を誇れるはJ・マレエぐらいのもの。残りは肉食ズバリの怪物姿である。T・カーティス、J・フィリップの好漢でさえ首から下は落第だ。従って一部着衣のスタイルの方が返って魅力を増えるのである。例えば「王様と私」で裸身に鞭持ち、奴隷を打つプリンナー、「バレエの招宴」中、悪魔になる四名のソ聯舞踊家、「トロイのヘレン」で肉体のプリンスと云いたいJ・ヘルナスの塑像等。

以上が公外の公開映画より印象に焼増されたアドニスとボディビューティフル拾遺の内、記憶に止っておるものである。刻明に記録でもしておけば未だ未だあったらうと残念で、今年からは能率と記念を考え、フィルムに残す事とした。タレ長き下帯とズボン着用の裸は意気汚ない感じで挙げるのも厭だ。今春封切の「アダムとイヴ」も期待を裏切られ相だが稀少価値なので一応センサーションを招来し相である。

緊縛の苛責に因る苦悶と歓喜の呻きを洩らし、国王を熱中させ、娛ませた。

介抱はイヴォンヌの役だった。柔らかな鳥毛の詰まった寝具。ベッドに横になって味う痺れるような四肢四体の苦痛。緊縛を解かれて感じる快よさに酔っていると、イヴォンヌはいつも泣いてくれた。清浄な乙女のイヴォンヌは、ハレムに馴染まず、遂に鎖に繋がれる生き方には惹かれなかったのである。

国王が暗殺された。カオリは哭き伏した。叛徒は直ちに討たれ、嫉妬に狂って叛乱を企てた王妃も極刑に処されて死んだ。日本への帰国を奨める元田公使の言葉を辞して、代りにイヴォンヌの帰国を叶えてやろうとしているカオリだった。充実した生き方を手放して日本へ帰る気持は毛頭ない。イヴォンヌの帰国の費用を自ら作り出すために、カオリは自分自身を再び競り売りの台に立たせようとするのだ。ハレム随一の美女が、自分の最も美しい姿態を、金の環と銀の鎖と濃緑の絹のみを纏った雪白の膚に創り出して、新しい奉仕の運命を待っているのだ。

望みが叶って、帰国に心躍る筈のイヴォンヌの眼に、新しい澄んだ涙が湧き上って、美しい日本女性カオリの、晴れ晴れとした装いをぼうっと滲ませてしまった。

異常心理者小説

禪 殺 人 事 件

青 檣 村 奏
木 審・画

今年中学へ入学した水野芳雄は、父親が亡く母親がビルの掃除婦をして働いているので、自分も、学資の足しにする為に、新聞配達をしていた。

ある朝、いつもの通り、まだ薄暗い住宅地を、自転車に新聞の束をつけて回っていた芳雄は、近道をしようとして、草の生えた空地へ踏み込んだが、自転車がうまく動かず、舌打ちをして下りた拍子に、何か変なものが眼に入った。オヤと思って瞳を凝らすと、それはどうやら人間の足で、草の中から、ニユウ

ッときき出ているのだった。恐る恐る近寄っていくと、裸の足には脛に毛がいっぱい生えているので、男の足であることは芳雄にも判った。

（酔っぱらいかな——？）と考えながら、尚も近寄ると、草に隠れた部分が見えたが、途端に芳雄は、「キャッ」というような声をあげて飛び退くと、自転車のところまで逃げ戻り、それから気がついて、交番のあるほうへ一生懸命に走りだした。

交番の机にもたれて、だんだん明るくなっていく街路を、ボンヤリ眺めながら、あくび

を噛みころしていた風間巡査は、さっきからどうも、禪の具合が気になってしようがなかった。さっき、交替時間で起こされたとき、何だか緩んでいるようだったのを、そのままに急いで制服を着てしまったので、そのせいで、彼は、六尺禪を常用していたが、いつも食い込むくらい、固く締っていたないと、気持が落ちつかなかった。

風間巡査は奥へいき、装具を外して禪を締め直した。

入口の戸がガタガタ鳴って、人の来た気配に、周章で帯革を着けながら、風間が出ていくと、真蒼な顔をした芳雄が、何かいおう

として、口をパクパクさせている。

「どうした。何かあったのか？ まあ、落着きなさい——え？ どうしたんだ？——」

巡査の大きな手で、軽く肩を叩かれると、芳雄は、やっと声が出た。

「人が、殺されています！」

「何ッ！ 本当か？ どこだ、それは？」

風間は、思わず噛みつくように呟鳴った。

被害者は、推定年令、二十四、五歳。六尺禪一本の姿で、腹部を、右から左へ割かれ、腸の一部が露出していた。そのわりに出血が少ないのは、兇行現場は他にあり、死体を空地まで運搬し遺棄したものと推われる。

被害者の衣類や兇器は、勿論、付近からは発見されなかった。

当局の捜査方針は、まず、被害者の身元を洗うことに向けられ、まもなく判明したところによると、住所不定、竹之内勇というやぐざで、どうやら、やぐざ同士の怨恨による殺人という見込みが強くなってきた。

かなり惨酷な殺人事件で、最初は色めきたった警察も、何となく氣勢を削がれた形だったが、しかし、じきに割れるかと見られた犯人が、予想に反して仲々に浮かびあがらずへたをすると迷宮入りになりそうな気配がでてくると、当局もようやく周章でだした。

そうして、遂に、第二の事件が起こってし

まったのである。

場所は、橋の下のゴミの山の中で、発見したのは、警邏中の巡査だった。殺されているのは三十前後の男で、やはり、六尺禪一つにされ、腹部を大きく抉られている。手口から見て、やぐざ殺しの犯人と同一人に違いないことは、その特異性からも明らかだし、何よりも左利きであることが決定的だった。しかし、まだ、当局は、腹部損傷という一致点を考えているだけで、裸はともかく、禪だけは偶然の一致として、誰も気にとめる者すらなかった。

この、恐るべき連続殺人事件に、六尺禪が何等かの意味を持っているらしいと気づいたのは、第三の被害者がでてからである。

今度は、ところもあるうに、公衆便所の中に遺棄されていた。やはり禪だけの姿で、腹をやられ、唯、今までの被害者と違ってこのは、殆ど全身にかけて見事な刺青のあることだった。

橋の下の男はトラックの運転手。刺青の男は土建会社の人夫と、各々に身元は判明し、第一の竹之内を含めて、三人とも六尺禪の常用品であることも判った。そして、三人の被害者は、禪を除く以外は全く何の関連性も認められない。してみると、犯人は何かの目的で、禪を絡めている男だけを狙うものと判断しても差支えないだろう。

捜査本部の一致した意見として、犯人を鋭意厳探すると共に、これ以上の犠牲者をださぬよう、全市民に警告を発する事になった。

現在は、下着に六尺禪を使用するのは、珍しいといっている。勿論、正確な統計があるわけではないが、成人男子の割にも充たないのではあるまいか。然し、それらの人々が全部殺人の対象にされ、遂行されていったら、犯罪史上、稀有の大量殺人になるのだ。

市中は、よるとさわると、この話でもちきりだった。いかなる禪の愛用者でも命にかかわるとなるとは、パンツに変えざるをえない。洗湯でも禪姿は全て見かけなくなった。

放課後。職員用更衣室の前を何気なく通りかかった芳雄は、体育担任の三浦先生が、トレーニング・パンツを脱いで汗を拭いているのをフト眼にとめた。というのは、パンツの下に先生がはいっているのが、サポーターではなく、白い六尺禪だと思ったからである。いったんは通り過ぎたが、気になるもので、もう一度、室の前までいってみると、陽灼けした遅い三浦先生の腰に締め込まれているものは、やっぱり真白な六尺禪だった。

芳雄は、急に胸がドキドキしてきたが、「どうした、水野。何か用か？」

といわれると、何もいえなくなつて、逃げるように駆け戻ってしまった。

その晩の宿直が、三浦先生であることは知らなかったが、芳雄は家へ帰っても気になつてならなかった。禪をしていると殺されると世間ではこんなに騒いでいるのに、なぜ、三浦先生は、平気でそれをしているのか不思議でならなかったが、それよりも芳雄は、現にその眼で惨たらしい現場を見ているので、もう三浦先生が惨殺されるに決っているように子供らしく心配しているのだった。

そして、不幸にも、芳雄の予感的中してしまったのである。

小使の急報で、係官が到着してみると、宿直室は一面の血の海で、三浦の死体はその中に転っていた。夥しい血の量からみても、今度だけは兇行現場に死体を残していったものらしい。剝がされた衣類も室内に散乱していたが、当然のことながら、兇器の刃物は見つからなかった。

警察の必死の捜索にもかかわらず、まるで当局を愚弄するかのよう、悠々と殺人を続行していく犯人に係官達は、いよいよの不快を覚えた。

管内の事件なので、現場に立合った風間巡查は、六尺禪を固く締めている腰の辺りが、ムズムズするように思えて、ひそかに苦笑した。

警察署では朝の点検のとき、特に署長から

次のような意味のことが、全署員に告げられた。

「一変質者の為に、かかる事態が発生したことは、実に遺憾である。善良なる市民の、不安、恐怖を、一日も早くとり除く為にも、全署員は一致協力して、犯人捜査に努力して貰いたい。尚、諸君のうちに、もし、六尺禪の常用者があったならば、この際、使用をやめるように、私から希望する」

隣に並んでいる尾崎巡查が、風間をつついたが、風間は知らん顔をしていた。

配置につくと尾崎巡查は、さっきの続きのように、

「オイ、風間。お前は全く強情な奴だナ。俺は知ってるぞ。お前は署長から、ああいわれども、絶対に禪はやめないつもりなんだ」

「そうさ。あれは命令じやあない。自分の意志に反してまで、やめる必要はないんだ」

「それは、そうかもしれんが、お前は、命が惜しくないのかヨ。相手は間違いだ。警官だろうが何だろうがみさかいはないんだぜ」

「忠告は、ありがたく聞いとくよ。だが、俺は、誰が何ンたって禪だけはやめないね」

「サムライだよ。お前は。しかし、充分に気をつけるよ。お前は、柔道も逮捕術も強いから、心配はないと思うが——」

風間は、白い歯を見せてニヤリと笑うと、

「サ、警邏だ。いって来るぜ」と元気よく自転車に飛び乗った。

二

風間健太郎は、巡查を拝命してから六年になるが、まだ、二十八だから血氣に、はやつたとしても無理はない。彼があくまでも、禪をやめようとしなないのには、一つの成算があったのである。

尾崎のいう通り、犯人は異常性格者なのだから禪の男と見たら、みさかいはないに違いない。風間は、禪で犯人をおびきよせ、いわば囷となつて、犯人に対決しよう決心していた。危険は勿論、予想しなければならぬが、いかに兇悪犯人でも、一対一なら自信はあった。

風間巡查は、いきつけの銭湯だけでなく、市中の風呂屋を、次々に回った。自転車で、かなり遠方までもでかけた。どこの風呂屋でも禪をしているのは、風間一人だけだった。それだけに、彼の禪姿は人目をひく。中には不遠慮に注意する者もあった。

「あんた。この市の人じやあないんですか？」

「この市の者ですが——」

「じゃあ、知らないわけはないでしょう？」

よしたほうがいいですよ。殺されたりしたん

じやつまらない」

「ええ……」

風間は、曖昧に笑って、ゆっくりと禪を締め込むと、のぼせた脉をさましでもするよう、そのままの恰好で暫く脱衣場をブラブラしていた。

山手の住宅地の入口に「析の湯」という、一寸変った名前の、小さいが小綺麗な風呂屋があった。

風間巡査が、流しへ出て洗い始めると、その後から浴槽をでた男が、隣りへ並んで場所をとりながら、話しかけてきた。

「失礼ですが、貴方は、確か、六尺禪をしていられたでしたね？」

「ええ」

「実は、私もですよ。変な事件が起った為にみんな禪をやめてしまい、この市じゃあ私だけかと思っていきましたら、貴方のような同志に逢えて、本当に心強いです」

「僕も、禪でいるのは、自分だけかと思ってました。そうですか。貴方もですか」

風間は、如才無く相手になりながら、男の様子を観察した。

年は三十五、六だろうか、色は黒いほうで眼が鋭く、頬骨の高いのが特徴だった。肩巾は広く、いかって細く締った軀つきは、筋肉が固そうに見えた。胸毛はない。職業が何であるか、そこまでは判断がつかかねた。

二人は、前後して湯からあがると、好奇に光るいくつかの視線を意識しながら、各々に禪を締め始めた。

男は、褐色の皮膚に、白い禪がクッキリときわだち、粗野な魅力があり、風間のほうは、若々しい肉体に、しっくりと禪が合い、凛々しくも逞しい感じは、美しさの点で、数倍勝っていた。

男は、思わず見惚れるように、風間巡査の禪姿を眺めて「ご立派ですな。貴方は、軀がいいから、禪が実によく似合う！本当に惚々しますよ……」

「ご冗談を——」

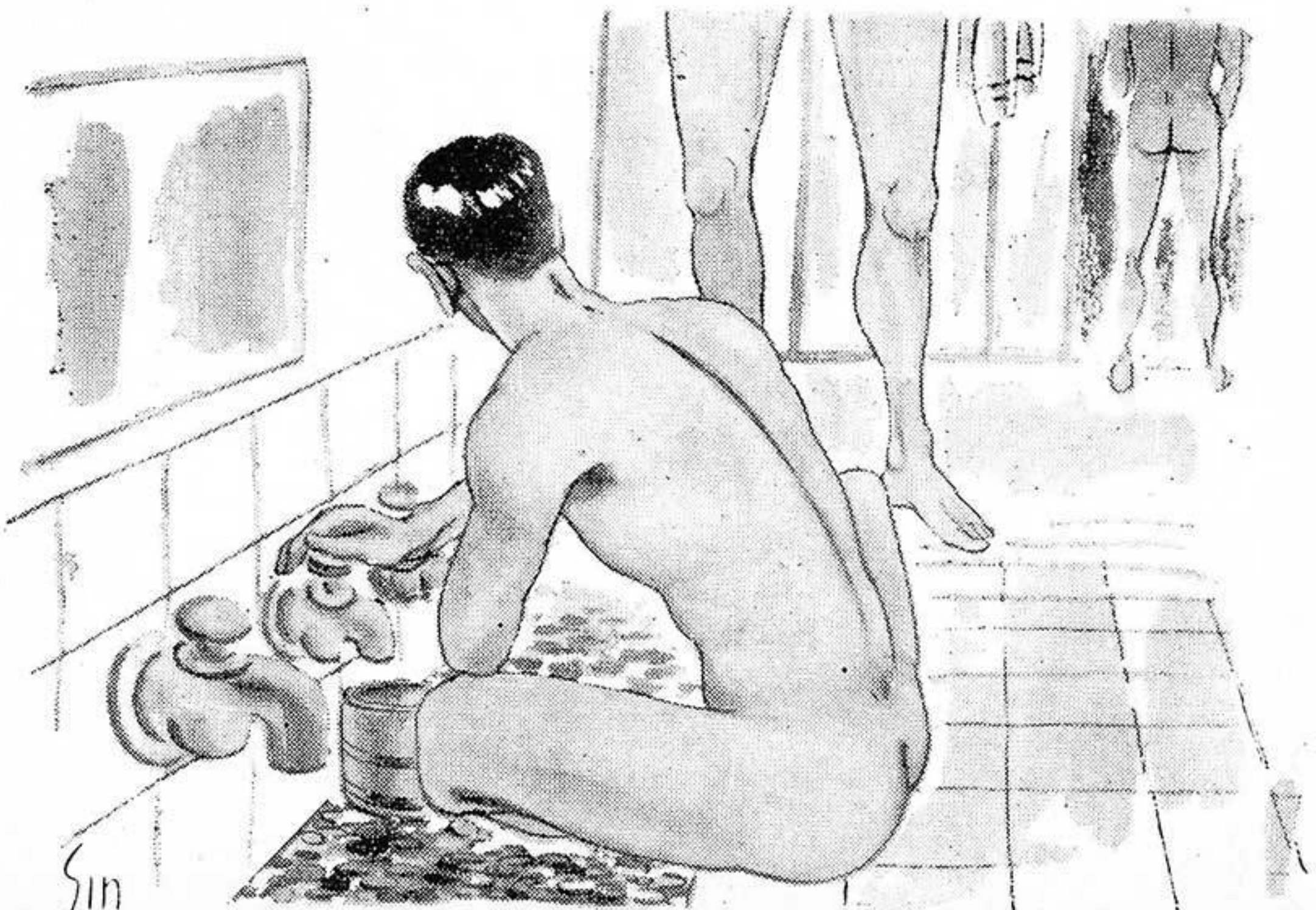
風間は、とりあわずに、サッサと服を着てしまい。

「お先に——」

といきかけると、男も急いで後を追って来た。

「一寸、貴重品を——」

といって、番台に預けた警察手帳を受けとると、男には見えないようにかくしへしまいがら、風間は内心、いさ



さか迷惑に感じていた。

禪男が二人になっては、犯人の奴も迷うだろうと思うと、おかしくもなる。

男は、風間と並んで歩きながら、

「いかがでしょう。もう少し、お話がしたいんだが、この辺には喫茶店もないし、いつそのこと、私の家へ来ませんか？」

「ええ、でも——」

「かまいませんよ。私は、一人住いですから歓待もできませんが、そのかわり、気楽ですよ。お願いです。私ア今夜、何だか、むしように淋しいんです」

「そうですねえ……少しぐらいなら——」

風間巡査は、男の熱心に負けて、ツイいてみる気になった。

同じような小住宅が建ち並んだ間の細い道を、右へ曲り、左へ折れして、かなりいったところに、一軒だけ、ポツンと離れて建っている家が男の住居だった。

「まあ、どうぞ——」

といて、座敷に招じ入れると、男はすぐに台所へ立ち、

「今、コーヒーを入れますから——」

と、何かガタガタやり始めた。

風間巡査が、煙草に火を点けていると、男は座敷へコーヒー・サイフォンを持ち込んできた。

「私は、自慢するわけじゃないが、これでも

コーヒー通でしてね。一寸うるさいほうなんですよ。貴方は、コーヒーは、お嫌いじゃありませんでしょう？」

「嫌いじゃありません。でも、たまに外で飲むくらいです」

「街の喫茶店なんかじゃ、本当にうまいコーヒーは飲めません。やっぱり、こうして、自分で入れなくっちゃね」

「そうですねえ」

風間は、そんなものかと思ひながら、今夜で風呂屋回りを始めてから、ちようど一カ月か、と考へた。

「サア、入りました。私は、濃いめに入れるほうだから、馴れない方には、少し苦いかもしれません。砂糖はたくさんありますから好きなだけ入れてください」

男は、左手で、砂糖壺を風間のほうに押しやると、自分はブラックで、カップを口へ持っていた。

風間が、一口飲むと、なるほど、香りも高いが、味も相当にくくがある。しかし、どうも苦みが強くて、口あたりはあまりよくなかった。半分ぐらい飲み残して、風間は二本めの煙草に火を点けたが、吸い込むか吸い込まぬうちに、俄かに、脳がガンと痺れ、意識の混濁を感じた。

(しまった！砂糖に、何か入っていたな)

と思ったが、それきり昏睡してしまった。

飲んだ量が少なかったからか、體質的にあまり利かなかったのか、風間は、すぐ又、意識をとりもどしたが、そのときは、もう、彼の躰は禪のみを残してすっかり衣服を剥かれそのうえ手足まで縛られていた。

男はと見ると、これも禪一本になっていて手には磨ぎすまされた短刀が握られている。しかも、それは左手だった。

「うヌ。貴様！左利き！貴様が犯人だったのか——！畜生……」

風間巡査は、ギリギリと齒軋りしたが、悲しいことに、縛られている躰では、どうすることもできない。

「そうだ。その通り、俺が今度の事件の犯人さ。お前は一体、強情なのか、バカなのか、それとも俺に挑戦するつもりだったのか知らないが、こうして、まんまと罠にかかったからは男らしく覚悟するがいい」

そういうと、男は、血走った眼を、ギリギリさせて、風間に迫って来た。

「畜生。俺の不覚だった！だが、殺される前に一言だけ、訊きたいことがある」

「チッ、往生際の悪い奴だ。よし、いってみろ。冥土の土産に何でもいってやる」

「貴様は、一体何の為に禪を締めている男ばかり狙って、しかも、腹も割くという惨酷な殺し方をするんだ？」

「フフ、それは、俺にもわからない。」

「……………」

「只、俺はな、輝をした男を見ると、むしよ切腹させてみたくてたまらなくなるんだ。しかし、誰だって大人しく切腹などする筈はない。そこで仕方なく、こっちで割いてやるのさ」

「やっぱり、貴様は、変質者だったんだな」
「一種の病気かもしれない。しかも、不治のな——」

そのとき、男の牀に隙を見いだした風間は、はずみをつけて、突然、両足を跳ね上げた。不意を食らって男はよろけたが、ニタリと唇を歪めると、短刀の切先をピタリと風間の腹に当てた。

「待て！俺は、警察官だ」

そういえば助かると思ったわけではない。思わず知らず、風間巡査の唇について出たのである。

「ナニ、警察!!」

そういうと、男はさっと風間から飛び退き慌ただしく風間の衣類を探ぐった。そして、警察手帳を発見すると、低く呻くような声をあげ、まじまじと風間の貌を覗めた。

仰向けになったまま、風間巡査も、射るような視線で、男を睨み返す。

次の瞬間、風間も全く予想しなかった事態が、アッと思うまに突発したのだった。

三

男は何を思ったのか、風間巡査から、二米程離れたところにピタリと坐り、持っていた短刀を、今度はいきなり自分の腹に押し当てた。

「待て！オイ、何をする気だ？」

風間は驚いて叫んだが、制しようにも牀の自由が利かない。

男は意外に落着いた声で、

「あんたが、警察官とは気がつかなかった。なるほど、みんな輝をしなくなっても、している筈だ。そうか、俺をおびきよせる為にワザとしていたんだな。それに気のつかなかった俺は、確かに迂闊だった。しかし、俺も、最初から覚悟はしていたんだ。今まで捕まらずにいられたのが不思議なくらいだ。俺も、遂に最期がきたようだ。でももう思い残すことはない。それに、あんたの前で死ぬるのは嬉しいよ。俺は、あんたがすっかり好きになっちゃった。さあ、よく見ていてくれ。俺は、自分の手で腹を割き、立派に切腹して果てるのだ。悲しくはない。それどころか、ゾクゾクする程嬉しいんだ。俺は、いつかは、自分で切腹することを夢みていた。それが、とうとう、実現するんだ。嬉しくなくてどうしよう!……………」

風間は、自分の耳を疑いたかった。

だが、現実には男は、自分の眼の前で切腹しようとしている。

「おい！やめろッ！やめんかア——！」

風間巡査は牀をもがかせながら、大声で呶鳴った。

それにはかまわず、男は端然と坐り直すと膝頭を開き、輝をグッと下げるようにしてから、短刀を静かに、右の脇腹近くへ疑した。

風間は、思わず息をのむ。

冥目した男の唇が、固く喰いしばられたと思うと、上体が前にかがみ、左手に力が入って切先は一気に奥深く刺し込まれた。

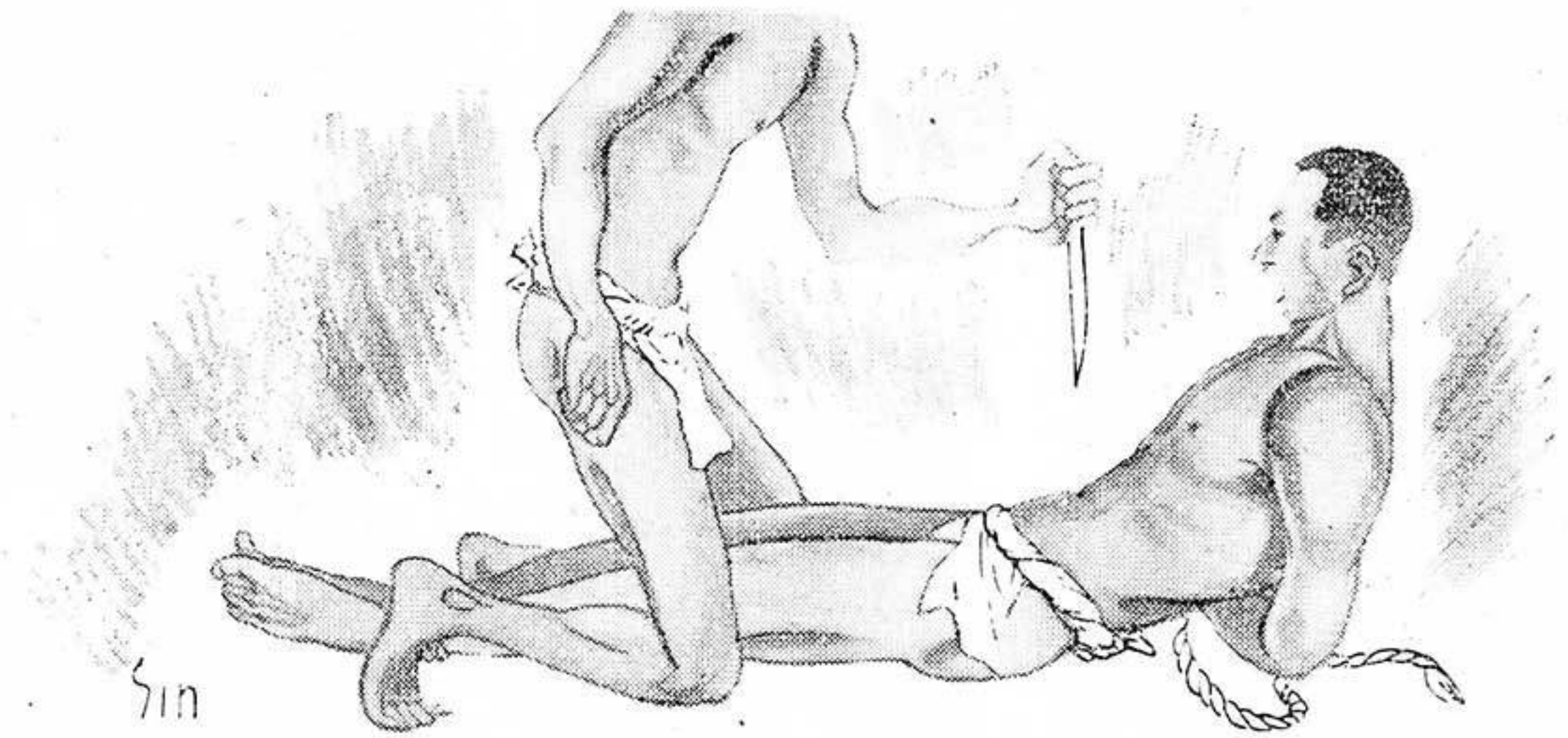
「む！」という呻きをあげたが、短刀はそのまま、ギリ、ギリと横にひかれ、腹筋を割いていく。見ている間に白い脂肪層が現れ、鮮血がピュッピュッと遡り出た。

「う、う、うッ。うわ、うッ、うッ……」

一声呻く毎に傷口が蠕動し、今にも轟きながら腸管が押し出されてくるかと思われる。既に流れ出る血の為に、六尺輝は真赤に染まっていた。

「うううッ！」

男は、一際高く呻くと、両眼をカッと見開き、腹を横にたちわった短刀を抜くかと思えるや、みずおちに当て、最後の死力をふりしぼって下腹部まで切り下げた。忽ち、胸から下がパツクリと開き、血糊を跳ね返しながら内臓があふれ出る。それらは、一つ一つが各々



に生命をもっているように、勝手にくねったり、のたうったりしながら、後から後から出てきた。

それは、何ともいえず、いやらしい、そのくせ、眼の眩むように華麗な眺めだった。

気がつくと、風間の手首の縄は、いつのまにか緩んでいる。急いでそれを抜き、足の縄を解くと、彼は血だらけになるのもかまわず男を抱き起した。

「おいッ、しっかりしろ！」

その声が聞えたのか、男の瞳孔が僅かに動いたが、それきり息が絶えた。

立ち上った風間巡査は、果然自失したように暫く男の死体を眺めていたが又、思いだしたようにモクモク動く腸管を見ると、急に吐気を催すような悪感に襲われ、台所へいって鉢を拭くのもそうそうに服を着け、本署へ急報すべく、最寄りの電話へ走った。

全市を、異常な恐怖に落し込んだ殺人事件は、最後に犯人自身が、同じ方法で死ぬという、意外な結末を告げて幕となった。

身の危険を犯して禪を締め、単身囀となつて捜査に挺身した風間巡査の功績は、部内、部外から賞讃の的になったが、彼は褒められれば褒められる程、愈々恐縮するばかりだった。

それに、彼は、そのことをいわれるのが、

必ずしも愉快ではなかった。

まかり間違えば、自分も被害者になっていたかもしれないと思うと冷汗が出た。

犯人が、風間を警察官と知ってなぜ急に殺意を醸したかは疑問だが、おそらくは、既に警察の手が回ったものと、早合点したものだろう。

それにしても風間巡査は、妙に寝覚めの悪い思いだった。

非番の午後。風間は銭湯にいくと、開くのを待って入った。

他には誰もいない明るい脱衣場の大鏡の前の禪姿をしげしげと見入った。そんなことはついぞないことである。ひやかし半分に、よく他人から褒められたりするが、それは自分でも、男らしく、好ましい姿に思われた。彼はわけもなく溜息をついた。

客の入って来た気配に、風間は鏡の前を離れ、禪の結び目を解いた。

湯からあがると、風間は馴れた手つきで禪を締め、ゆっくりと服を着た。

外へ出ると、ゴミ箱の蓋を開け、ズボンのポケットに押し込んでおいた紙包みを思いきりよくポンと投げ捨てた。包みの中には買ったばかりのブリーフが入っていたのである。

彼は、今日から禪をやめて、ブリーフに変えようとしていたことが、むしりようにおかしくなった。

風間巡査は、久しぶりに晴々とした気分になり、口笛を吹いた。

その晩、彼は急に思いたって、友人の峰村を訪ねた。峰村の高校の先輩で、風間よりは二つ年上だった。

「ヤア、来たか」

峰村は、いつもの親しみのこもった笑顔で迎えた。

「ごぶさたしました」

「全くだよ。もう、おみかぎりかと思った」

「いやア………」

「それはそうと、今度は大変だったナ」

「ええ」

「忙しかったんだから、仕方がないが、みずくさいぞ。一度くらい、相談に来てくれてもよかったじゃアないか。俺も、実は今度の事件には大いに興味を持ってたんだ。俺としての意見もあったよ」

「そうでしたか、それは、どうも——」

「もっとも、俺は部外者だからナ」

「イヤ、そういうわけじゃア………」

「いいよ、いいよ。別に怒ってるんじゃないんだ。そうだ。早速ビールにしよう。今夜はゆっくりしていいんだろ？」

「ええ、でも、明日は当直ですから」

「あいかわらずかたいんだナ。まあいいさ。」

八時になったら釈放してやるよ」

峰村司は、鉄筋三階建の近代的な服装学院

を経営していたが、実際には母の峰村燦子女史が殆ど一人でとりしきり、彼は月曜日だけ美学の講義を担当しているだけで、後は、絵を描いたり、著作をしたりで、ブラブラと遊んでいるといってもいい生活だった。まだ独身だが女性関係は全くない。各方面の人物と広い交際をもっている友人といえるのは風間だけだった。時々、同性愛的な言辭を弄したりして風間を面喰わせるが、別に何を要求するでもない。風間は安心して峰村の愛情に甘えていればよかった。

「俺にいわせれば、恋愛も友情も、本質的には変りない。少くとも俺の場合は、友人を選択するのでも、肉体的条件を度外視はできないね」

峰村のそういう言葉は、彼が風間の精悍な貌だちや、筋肉質の逞しい体軀を、こよなく愛していることを意味していた。

風間も又、峰村の知性や、芸術家タイプの強い個性に憧れを抱き、尊敬の念をはらっている。

峰村の書齋には、数多くの書籍がギッシリ

読者座談会

開催につき
出席希望者を募る

主題 『女体緊縛美について』語る

出席予定者 箕田京二、辻村隆、四馬孝、杉原虹児

絹川文代 外モデル嬢 二名乃至三名

日時 三月上旬 場所 大阪市内

右読者座談会に出席御希望の方々は略歴記載の上、編集部宛御申込下さい。詳細につき御返事いたします

編集部読者座談会係

とつまっている、その中には「三島由紀夫選集」があるかと思えば、「小林多喜二全集」があり、「心理学講座」の隣には「世界美術全集」が並んでいた。警察関係の専門書も相当あって、特に、「刑罰史」は異彩を放っている。又、戦争に関したのも戦中発行のものから、戦後のものまで数々揃っていた。

風間は、全く、それらの本の背表紙を見ていくだけでも飽きなかった。

「でも、僕には判らないんです。そりやア、変質者だといってしまえばそれまでですが、彼が、なぜ、禪を締めた男を見ると殺意を感じるのか——」

風間巡査は、特徴のある大きな眼の縁を、ホンノリと赤くしながら問いかけた。二人共酒はあまり強いほうではなく、一本のビールがまだ残っている。

「うん。いわゆる、アブノーマル心理の中にフエティシズムというのがある。彼は、明らかに、禪、それも、白の六尺禪に対して、熱烈な狂崇を持っていた。それと、特異な例で切腹マニヤというがあるが、そいつが合併していたんだな。だから、禪を見ると、切腹を連想する。そこまではいいが、殺人の連鎖反応を起したんでは、全く以て穏かでない。そこまでいっては、もうアブニストではなくて精神分裂者サ。おそらく、殺人淫楽症的な素質もあつたんだらうよ。それに男だけを対象

にしているから、ソドミアの気もあつたに違いない。とにかく、不気味な人物であると同時に、不幸な男さ………」

「全くですねえ」

峰村は、何を思ったのか、不意にニヤニヤと笑いだした。

「どうしたんですか？ 急にヘンな笑いかたをしたりして——」

「イヤ、ナニネ。君のことさ」

「僕のこと——？」

「君もネ、禪のフエティシズムを持っているかもしれないよ」

「イヤだなア。気味の悪いこと、いわないでくださいよ」

「アッハッハ——そんな顔をしなさんな。ゴメン、ゴメン。悪気があって、いったんじ

女奴隷の悲しみ

筒井英生

私は女奴隷で、白人と白半人との混血児 (Quadroonクワドルーン) です。

名前を『ヒラ』といい、本年十六才になります。私は父にあたる白人の家で十五才までは何不自由のない楽しい生活をし、白人としての教育を受けましたが、父の急死後、半白人 (ハーフカス) の母や他の召使の黒人と共に売却され、私はアメリカ南部のゴールドズワージー家の白人娘の小間使となったのでした。

「ヒラー、着換えの服を持っておいで」「ヒラー、私の赤いハイヒールを穿せて」等々と白人娘メリー様 (十八才) は、

私をまるで牛馬の様にこき使いますので、私は日常、涙が絶えませんでした。私が女奴隷の哀しみを痛感したのも、その頃でした。

或る日、メリー様は安楽椅子に腰掛けて私に足の爪にマニキュアを命じました。私はメリー様のすらりと伸びた真白い足を自分の膝におのせして、熱心にマニキュアをしておりましたが、ブラシユが柔かい皮膚にさわったのでしようか、お嬢様は急に、「痛いッ」と申されました。

私は「メリー様、すみませんでした。これから十分注意いたしますから、どうぞ、御ゆるし下さい」と私は平身低頭して謝り

やアないんだ」

「でも——本当にそうなんですか？」

「いいんだよ。気にしなくたって——かりに、そうだとしたって、いいじゃないか。それで、君の人格に瑕がつくってもんじやない。それにさ。俺が君を好きなのは、君が、六尺禪の愛用者だってことも、要素の一つになつてんだぜ」

風間巡査は、判ったような、判らないような顔で、仕方なく頷いた。

警察官、特に外勤巡査は、習性のように腕時計を覗く癖がある。風間もその例にもれなかったが、何度目かに左腕を上げて、八時になったのを見ると、

「じやア、僕、帰ります」

「そうかい。ひきとめないよ。アッ、そうだ明日、外出するから交番へ寄るかもしれないよ。君の制服姿も、久しぶりだし——」

「どうぞ。お待ちしてます」

外へ出ると、火照った頬に、夜風が快かった。

「——でも、峰村さんて、いい人だな。時々ヘンなことって、困らせるけど………禪をやめないでよかった。やめたら、あの人に嫌われちゃうかもしれないものナ」

そんなことを思いながら、風間巡査は、舗装された坂道を、下町の灯のほうへ、快適なスピードで下っていった。

(完)

ましたが、メリー様は御自分の足を私の頭の上に乗せて踏みこむのでした。私が鼻が床に押しつぶされて顔をそむけながら、只「すみません、すみません」とお詫びするばかりでした。

「この黒奴め！ 私の足を傷つけるのか」黒人の血が混っていながら、白人と少しも違わぬ目鼻立ちの私のことを、平常から憎く思っていたお嬢さんは、さんざん足で私の頭を踏みつけたあとで、壁に掛けである牛皮鞭を取ると、片足で腹這いになった私の首筋を踏みつけ、私のお尻をピシッピシッと打ちつけました。

「私の足を痛めた罰だ。」

お嬢さまはカウントをとりながら、尚もピシッピシッと打ち続けるのでした。私は顔を床に押しつぶされたまま、土足で首筋を踏みつけられ、気ままな白人娘の残酷な鞭を甘受しなければならなかったのです。私の眼からは大粒の涙がポロポロとこぼれ床の上に大きくシミを作りました。

それからの三年間。私はこの冷酷で刑罰好きのお嬢さんから苛め抜かれました。二十一才になったメリー・ゴールズワージーは隣村の牧場主の所へ嫁に行き、小間使としての私は不要になりました。お嬢さま

の結婚式のあった翌日。私はニューヨークの市営奴隷市場へ売却されました。

売却される奴隷は、先ず裸にされて係の白人から身体中を調べられて値ぶみされます。首輪に値段をつけられ奴隷市に出されるのです。私はクオドルンで肌の色も白人と同じように白く、目鼻立もいいので沢山の見物人から鼻がくちやくちやになる位いじられました。

結局、私は二千五百ドルで南部の農場主に買いとられました。

そこで私を待っていたものは、苛酷な労働と虐待でした。鞭を持った白人男に追い立てられた私達女奴隷は、買われたその日から農場へ出されて仕事を強要されるのでした。逃亡を防ぐため、首には革製の輪をはめられ、それに僅か前を掩う布を与えられただけの殆んど裸体に近い姿でした。

夜は足に鉄の塊をくさりでつけられ、奴隷檻という鉄格子の箱の中へとじ込められるのです。その上、仕事をなまけたとか遅れたとかいって、毎日のように鞭を振うのでした。白人の男ばかりでなく女も、いろんな口実を設けては、女奴隷に虐待とリンチを加えることを日課のようにしていました。どうか、救いのないあわれな女奴隷の生活を画にして下さい。お願いします。

—乗馬ズボンシリーズ—

落穂集

(其の二)

藤山秀緒



私のシリーズをつづける前に、読者通信でお願いして置いた私の乞いをいれて「機上切腹」をお書き下さった法谷四郎様に厚く御礼申上げたいのです。——飛行機の狭いシートの中で、部厚い飛行服に身を固めた光子が、申訳なさ、口惜しさに歯をくいしばりながら雪の肌を紅に染めて、しかもその様子を自分の口からこまごまと報告しながら散って行く物語りは、哀しく、美しく、法谷様の一句一句に活写されております。

深傷に悩みながら、しかも何かの目的をなしとげようと苦悶する女性の姿は「切腹」と云う壮烈な自決方法によって、その健気な美しさを一層輝かしいものにすると思います。「こ、これより、ひ引廻して。うーっ」というような、苦痛に悩み乍ら、報告をつづける光子、そして、「まだ足らぬ！」と、自分に云いきかせるように苦痛に挑む光子。遂には「ぞ、臓腑が邪魔、はらはわたを、はらわたを切って……ええっ、ううむ、ウーッ！」と呻く自虐の極致。

しかも、「ごわごわした飛行服」とか、がばがばと血を吹く傷口、などの私好みの描写がつづくのですもの。……

日毎に健康を恢復して来た私にとって、此の「機上切腹」は、久しぶりに、本当に久しぶりに味わった「すばらしい感激」でした。

私は、久しぶりに飛行服を引張り出して本

当に想像もつかないほどの烈しいプレイにふけつけてしまいました。私は意識さえ失うばかりにのたうち、悶えたことを告白して、法谷様の御厚意を御礼申上げたいのです。

男装のバスガイド

昭和十年頃のバスの車掌は、カーキ色の乗馬服に乗馬ズボン、革の脚絆、編上のブーツを穿き、えんじのネクタイをしていた。

林元枝は、或るバス会社の車掌だった。彼女は、美貌の上に気立ても素直で、誰にも好かれるタイプの女性だったが、なぜか恋愛などの噂もなく、不思議に思う者が多かった。その彼女に突如、一人の恋人が現れ、そして風のように消えて行った。

路傍の草花のように、手折られ棄てられた彼女は、死のうと思った。傷心の彼女がとった最後の手段——それはこうであった。

超満員の乗客をのせて、バスはN駅へ走って行く。戦前のバスは出入口に扉がなく、車掌は、デッキに溢れた乗客を体で支えながらしっかりとバスにしがみついて走るのだ。

元枝も凛々しい乗馬服姿に身を固め、デッキにつまさき立って乗客を守って走った。

N駅へ急ぐバスは、殆どぶら下るばかり。元枝に、情容赦もなく土埃をかぶせ、そして揺った。

元枝は、手がちぎれそうに感じた。歯をくいしばってデッキにすがりついて居るのだ。すると、バスは、前に走って居るオート三輪を物凄い勢いで追抜いた。

……その振動は元枝の最後の力を奪った。

元枝は、うつぶせに道路に倒れた。

追抜かれたオート三輪の急ブレーキ……。

ああ、すでに元枝の体は、オート三輪の前輪にのまれていたのである。

「ウーッ！」

元枝の絶叫。

見れば前輪に踏みにじられた元枝は、えびのように体をくねらせて、道路にのたうっている。車輪の下敷きとなった腹部からは、臓腑が溢れ、

「あうっ、ううーッ……」

激しい身悶えと共に血汐が吐き出される。

そして、見る見るうちに乗馬服は破裂した腹部の血汐で内側から朱に染まって行く。

元枝は、乗馬ズボンの両脚をふんばり体を屈伸させて断末魔の苦しみに凄惨な呻きをおげている。

元枝は救急車の中で、手当をうけるひまもなく死んだ。カーキ色の乗馬服、乗馬ズボンにいかめしい革ゲートル、ブーツをつけた男装の車掌姿がかわれであった。

元枝の、此の風変わりな「自決」の秘密は誰ひとり知る由もないのだった。

女火ダルマ

瀬崎大尉は、部下にさきがけて敵艦に自爆を敢行した。そのため敵艦は火災をおこし、沈没したのである。

今日はその英霊が、ここS町の留守宅に帰って来たのだった。

妻の美佐子は取乱した様子もなく、笑顔さえうかべて遺愛の品々を飾り、英霊を迎えた。町の人々も、深い哀しみの中にお通夜に加わった。

お通夜の人々が席につき、大尉の父母が、挨拶に廻って居る頃、美佐子の姿はいつのまにか消えていた。

彼女は、自室に戻ると、はじめて堰を切ったようにむせび泣いた。

「あなた、さぞ苦しかったでしょう。熱かったですでしょう。私、一人のこって何をしようとも思いません。今夜、あなたと同じ苦しみを味わいながら、お供いたしますわ……。きつと……。」

彼女は、遺品として届けられた愛用の飛行服、飛行帽、半長靴など、一式の品々、それに軍刀やこまごました品々も風呂敷に包んでこっそりと瀬崎家を抜け出すのだった。

瀬崎家の裏は静かな松林がつづき、そして海岸がひろがっている。

美佐子は松林の中程まで来ると足をとめ、一本の松の根元に荷物を置く。

彼女は黒の喪服をぬぎ、シャツブラウスとスラックスに着換え、その上から、ごわごわとした遺愛の飛行服を着け、ベルトで、きゅっとウエストをしぼった。半長靴もはいた。飛行帽もかぶった。りりしい女飛行士の姿で彼女は暗い海の彼方をじっと見つめている。

……何分か沈黙。風と波の音。

彼女は、やがて軍刀を抜いて松の木に刃を上にしかりとくくりつけた。その下に枯葉をしきつめ、彼女は枯葉に用意のガソリンをかけた。ガソリンは、彼女の飛行服姿にも、惜しげもなくふりかけられて行く。

ごわごわした飛行服にガソリンがにじんでつめたく彼女の肌へまつわりついて行くのである。

ガソリンでずぶぬれになった飛行服姿の美佐子は、少し離れた松の根方に遺書を置き、飛行帽のアゴのベルトをしめ直して、いよいよ最期の身じまいにかかった。

「奥さん！」

「美佐子さん……」

燈火管制の、ほの暗い灯が家の方向に見え隠れして、美佐子の身を気遣って呼ぶ家族や親類の声が迫って来る。

「すこしも、早く！」

彼女は声をかぎりに叫んだ。

「皆さん！さようなら……」
シュッ！

マッチをする音。

ああ運命の時が来た。——彼女は、火のついたマッチを枯葉の上へ投げた。ガソリンをふくんだマッチは、めらめらと枯葉をなめて燃えひろがった。

「ええいッ！」

気合と共に、飛行服姿の彼女は枯葉の上を走った。

「アアッ！ ウーッ！」

こらえかねた絶叫。松にくくりつけた軍刀が彼女の左の脇腹を貫いていた。

「ウウム、ウーム……」

彼女が突込んだ軍刀に諸手をかけてしごく間もなく、ガソリンを含んだ飛行服は枯葉の焰を引火してめらめらめらと彼女の体を包んでいた。

女飛行士姿の彼女は、夫と同じ苦しみに堪えるために、凄絶な火だるま自決を選んだのだった。

美佐子は軍刀に腰を貫かれたまま、何事か絶叫しつづけた。ゴッッと言う焰は、遂に飛行服を呑みつくした。

ジャンヌ・ダークを思はせるような勇ましい最期であった。人々が火を見つけて駆け寄った時、彼女はすでに齒をくいしばったまま焼けただれて居た。

女立腹

満州の或る守備隊の隊長をしていた川上中尉は、本隊と連絡のために二、三人の部下を率いて出かけて行きました。

いつもならば、とうに帰って来る筈の日になっても、一行は戻って来ません。

なぜか電話も故障しています。

——もしや。

守備隊の人々は、川上中尉一行が、途中で敵のために殺されたのではなからうか、と心配なのです。

果して敵は、これまでにない程の大軍で、守備隊の駐屯している町の城壁へ押しよせて来ました。

しかも敵は川上中尉一行を人質にして、守備隊を降伏させようとしています。押しよせた敵軍の先頭に、後手にいましめられた一行の姿が見えているのです。

守備隊長代理の片桐少尉は、これを見て当惑します。

城壁の上から見下す片桐少尉の目が、川上中尉の目と、ぴったりと合いました。

中尉は猿ぐつわをはめられているのか、声を立てることが出来ず、悲しげに首をふるだけです。

片桐少尉は、窮地に立たされたのです。

——その時、慌しく城壁へかけ上って来る靴

音。見れば川上中尉の妻芳子が上って来るのでした。

芳子は軍服に似た乗馬服に乗馬ズボン、革の乗馬靴をはき、巾広のベルトでウエストをしめ、拳銃と軍刀を吊った完全武装の男装をしています。

「片桐さん！」

「奥さん……弱ったことになりました。何とかして中尉殿を取りかえす方法を考えて下さい。」

「この大軍では……片桐さん、この始末は私にまかせていただけませんか。きっと、我軍を降伏なんかさせないようにします。必ず、どんなことが起ってもお驚きにならないで。」

「奥さん、あなたはもしや……」

「……ええ。もうおわかりになりますね。あなたに御迷惑はかけません。あなたは、全員を指揮して、油断している敵に斬り込んで下さい。それ以外に方法はございません。」

「奥さん！」

「はやく！」

片桐少尉は、涙をのんで全員を城門に待期させます。彼女の銃声を合図に門を開いて奇襲するのです。

城壁の上に残った芳子は、機関銃をとりあげます。この銃弾が、いとしい夫、その部下たち、罪もない味方の人々の命を断つのだ。

祖国の人柱——そんな古風な言葉さえ、なま

ましい実感をもって迫って来るのです。

男装の彼女は、膝について身がまえます。

ダダダッ！

火を吹く機関銃。弾丸は、無条件降伏と、たかをくくっていた敵軍の中へ霧のようにとび散ります。

川上中尉も、一行の部下たちも、彼女の機関銃をうけて次々に倒れ、敵軍は大混乱に陥ち入ります。

この時を逃がさず、片桐少尉の率いる守備隊は、城門を開いて突撃しました。そして奮戦の甲斐あって守備隊は敵の大軍を撃退することが出来たのです。

山のように折り重なった死体の中から、川上中尉と、その部下たちの遺体を選び分けられ、守備隊の中庭に安置されました。

芳子をはじめ守備隊の人々は、整列して慰霊祭を行いました。

一分間の黙禱……

ああ、その黙禱が、どんなに哀しい黙禱であつたことか。

そして、全員が目をとじている時に、芳子が、乗馬服のベルトを外し、前をくつろげて隠し持った懐剣の鞘を払い、刀身に白布を手早く巻きしめたのを気がついた人はなかったのです。

「うっ……」

黙禱も終ろうとしている時、突然、芳子の苦

しげな喘ぎが！

人々は、はっとして芳子を見ました。ああ芳子は立ったまま、両足をふんばり、懐剣を左の脇腹ふかく突立てているのでした。

「奥さん！ 奥さん！」

走り寄る隊員たち。

「奥さん！ 短気を起してはいけません。

傷は浅いです。しっかりして下さい！」

苦しむ芳子の脇腹から、懐剣が取り上げられようとしています。必死に拒む芳子。

「待てッ！ 皆、待つのだ。」

片桐少尉が人垣をわけて芳子のそばへ来ました。

「皆。奥さんは我々を降伏させないために自ら御主人を狙撃されたのだ。お国の為とは云い乍ら、さぞ辛かったことだろうと思う。最愛の御主人を失われた奥さんとしては、いま死なれることが、一番幸せなんじゃないだろうか。俺は、奥さんを、心静かに死なせてあげたいと思う。奥さんに、大和撫子として、心ゆくまで腹かき切って死んで下さいと申し上げたいと思う。皆の意見をきかせてくれ！」

皆は一瞬しんとしずまり返ります。その時芳子は片膝立てた古武士を思わせる勇ましい姿勢のまま、静かに上体をおこし、

「み、皆様。もう何もおっしゃらないで。夫ばかりか、大事な従卒の方々の命まで、お国のためとはいえ手にかけて私……。り立派に

申訳けをさせて下さるのが……。死、なせて下さるのが……。い、いまの私には……。本当の御親切なのですわ。ああ、痛いわ。も、もうおわかれね……。皆様、芳子は、芳子は、日、日本人として、は、恥しくないように、り、立派に死んで見せますわ。か、片桐さん……。た立たせて！ 立ちながら死にたいの……。」

片桐少尉は、うなずいて彼女の後へ廻り、腋の下へ手を入れてぐっと持上げます。

「ああ……。」

両足をふんばって立上った彼女。——片桐少尉は背後から彼女を抱くようにして支えています。頑丈な少尉の手に、切なく悩ましくつたわって来る芳子の喘ぎ……。

「おい、皆。奥さんの最期を、後の手本に、よく見るのだ！ さあ奥さん！ 思う存分やって下さい。後は片桐が引受けます。苦しければ介錯せよと云って下さい。」

「ああ、あ有難う……。片桐さん。忘れませんわ……。い、いま、女乍らも、男装して死ぬからは、戦場の立腹……。み、皆様……。さようなら。」

「奥さん！」

「ううううっ！ ……アアッ！」

「皆！ 見るんだ！ 奥さんの赤い血を！」

「ううむ、ううむ、ウーッ！」

「奥さん！ 頑張るんだ！」

「ああ、ああむ、くくくくくくっ……」

いまは思いのこすこともない芳子。のけぞるように懐剣を右へ引廻して行きます。

ごぼッ、ごぼッと傷口から生臭い血汐がほとばしり、乗馬ズボンを染め、乗馬靴へ滴り落ちるのです。

「うむーっ、ううっ、お、お、女乍らも、かくごの自決……。こ、こ、この通り……。この通り……。むむむッ、ウッ、ウーッ！」

自分に云いきかせるように、芳子は絶叫しながら、キリキリと懐剣を右脇へ引廻します。

「むむっ……」

ざらりと懐剣が無気味に光って、芳子の右手に引抜かれました。

芳子は、弱る心をはげまして、刃先を鳩尾に押しあてます。

乗馬服の胸許が妖しく息づいています。

「奥さん！ 介錯は！」

いう間もあらせず

「ウーッ！ ……」

ああ、何という壮烈さ。刃は鳩尾へ突立ち堪えかねてか、腹から絞り出すような呻き。……そして、絞り出す呻きと共に、一文字に開いた傷口から、ぬめぬめと溢れる血みどろの臓腑……。

「ハア、ハア、ハア……。な、なんの！ これしきに……。い、いざ、いざッ！」

烈しい興奮に声もうわずり、堪えかねたうめきの間々に洩れる男のような気合。

ウーッ……と一きわはげしい呻きにつれて芳子は、じりじりと刃を下腹へと切り下げて行きます。乗馬ズボンを朱に染めて、だらりとほみ出した腸塊。

「ああ、うむ、ウムーッ！」

彼女は力のかぎり刃を切り下げて、乗馬ズボンのベルトに達します。

「む、むうっ……か、介錯を！ ううッ。」

十文字にかき切った芳子は、苦痛に顔をひきつらせ、最後の一括りを

「ウムッ！」

激しい気合と共に、ものの見事に仕完せて気がゆるんだか、ふんばっていた両足の力をぬいて、ぐったりと片桐少尉にもたれてしま

いました。

片桐少尉は、

「奥さん、見事でした。この御最期の様子は片桐きつと祖国の人々に知らせます！ 皆！

奥さんが死んで行かれる！ 君が代だ。」

しずかに君が代が流れはじめました。

芳子は、健気にもふるえる手に乗馬服の前をかき合わせ、巾広のベルトで締めあげます。

「ううーっ……。」

しみ入るような慄え慄えた呻きです。

片桐は芳子をたすけて乗馬服の前を正し芳子を地上に坐させます。乗馬ズボンに長靴をはいた姿の上、この深傷では、もう正坐させることはできないので、不完全なあぐらをか

かせたのです。

ふるえる手を胸に組んで、くずれかかる上体を必死に支える健気な芳子。

「く、く、く……。」

歯をくいしばる深傷の悩み……。

彼女が、苦痛にたえかねて、のび上ろうとした瞬間、片桐少尉の軍刀は彼女のうなじに落ちました。

芳子の胴体は、ばね仕掛のように、がばとはね起き、そして棒のように前へ倒れて行きました。

立腹を切った或る勇敢な将校夫人の物語りです。

臨時増刊号 『青い廃院』

定価 二百円（送共）

青い廃院

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦唐の妖気が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかない弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサド文学の金字塔を打ち建てた。

与那国奇談

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習、漁船が難破して、この孤島に漂着した一日日本人漁師の経験した世にも不可思議な体験記。巻頭から結末に至るまで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の国女護ヶ島パラダイスへ案内して暫しの粹夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。

四馬孝画 「青い廃院」 画廊

- 美貌の人
- 苦悶する美貌
- 踊り責め
- モデル責め
- 美女誘拐
- 屈辱の責め
- 廃院の中
- 救出

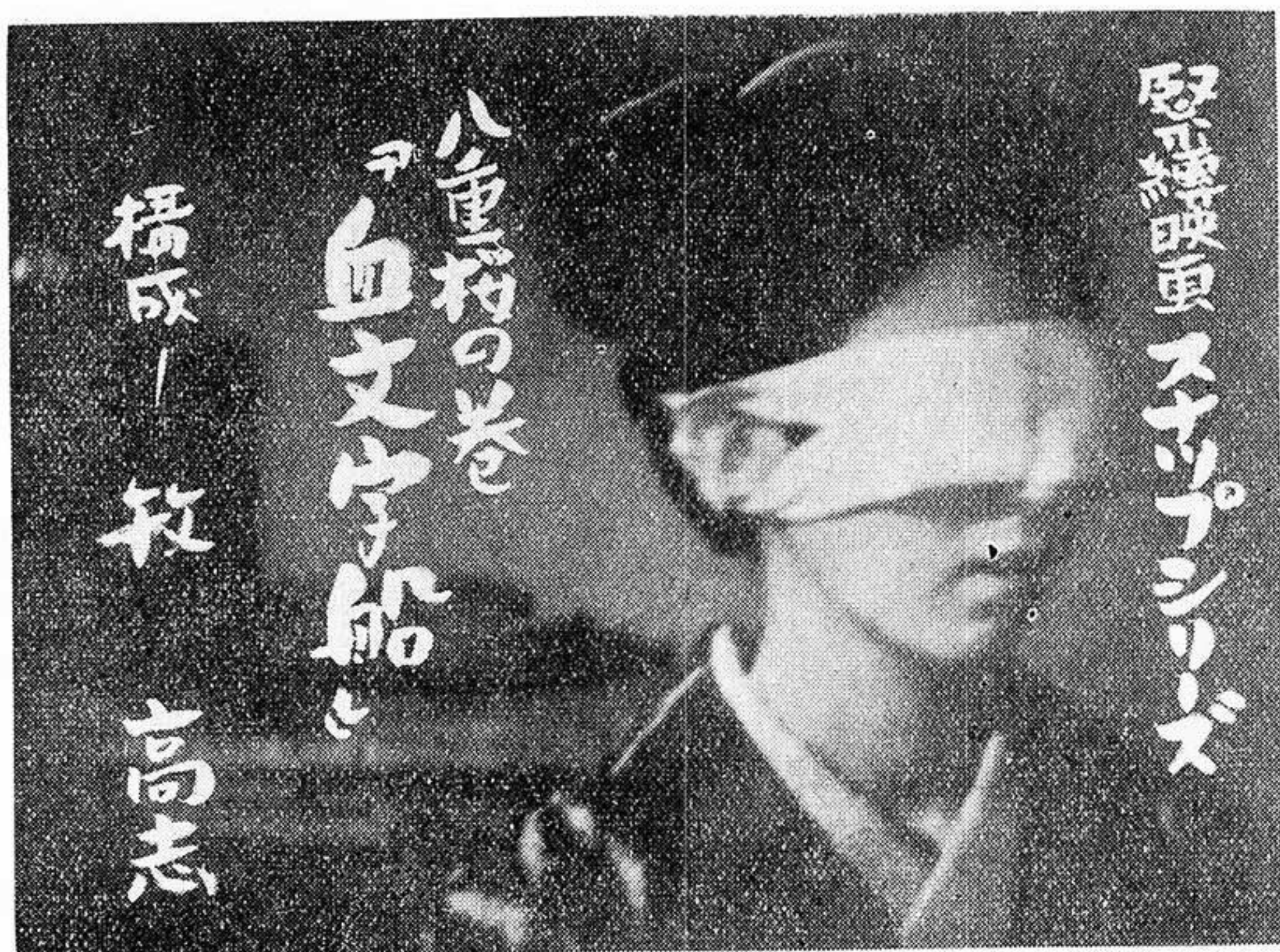
△変ったレッスン
△受 本文内容主な項目 (表紙裏)
(目次裏)

青い廃院 (弓沢俊二郎)

- 一、三人の男
- 二、地の底にあるもの
- 三、美貌の人
- 四、劇場に居た二人の男
- 五、忠告
- 六、美女誘拐
- 七、苦悶する美貌
- 八、屈辱の責め
- 九、踊り責め
- 十、探索行
- 十一、廃院の中
- 十二、モデル責め
- 十三、手練りの網
- 十四、救出
- 十五、勝者の心

与那国奇談 (永山久美雄)

- 女護ヶ島与那国
- 女百人に男一人
- 股裂きになる女
- 孤島の殺人
- 股裂きと火祭り
- 人肉の炙り焼
- 筏流しの刑罰

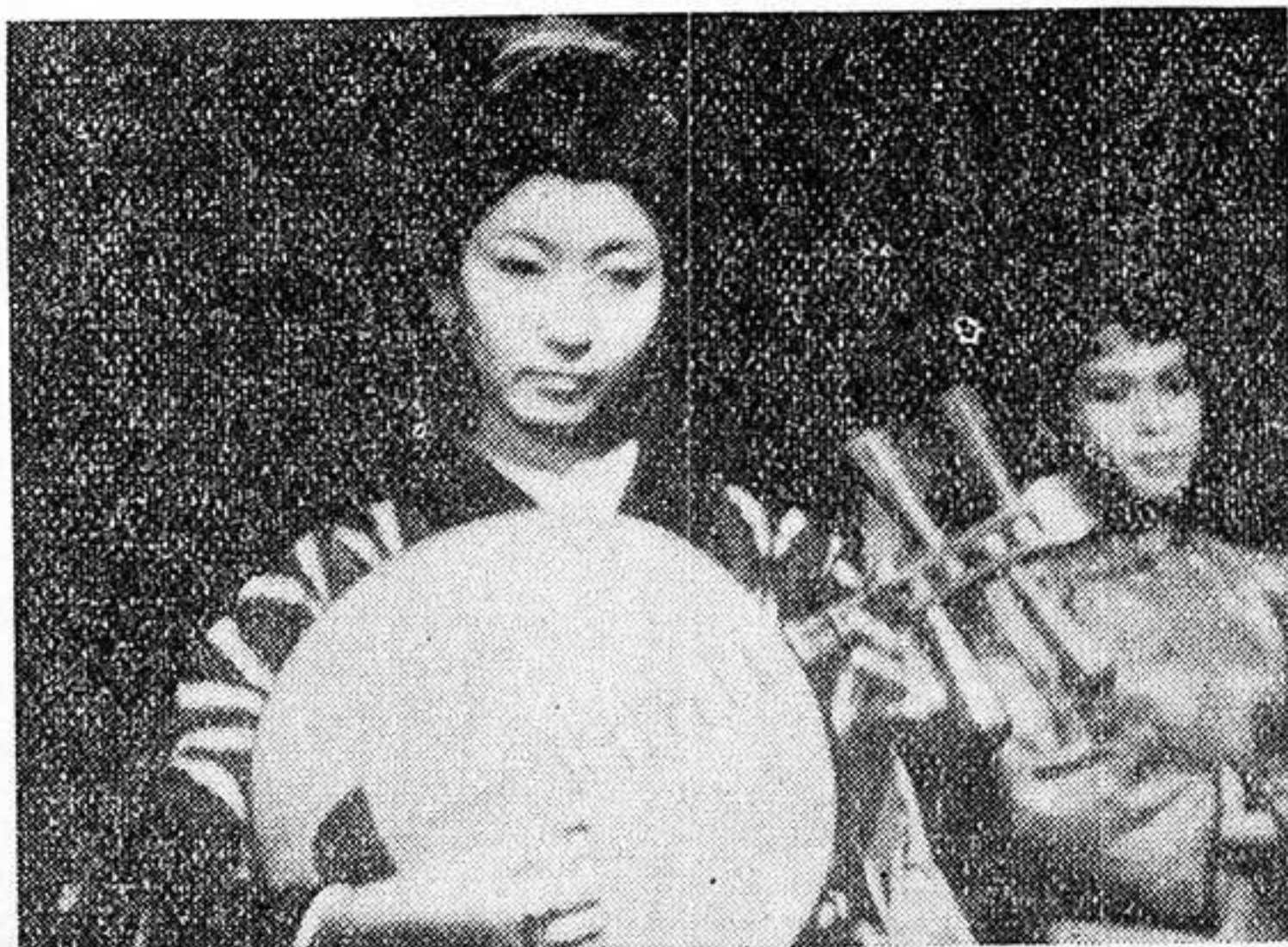


水島道一郎 この映画を観て最初に感ずくことは、ドラマとしての盛上りが、何処か空気が洩れて膨らまない風船みたいに、上る途中で落っこって頼りない、つまりグリーンと突上げるものが無いんだナ。テーマの古くさいのは我慢するが惜しいかな我慢出来ないのは仕上げが乱暴だ、技術的に見て大幅に手を抜いている。

牧 高志 要するに狙ったテーマそのものは何回映画化しても文句はないんだが、総じてチグハグな処が目立つと云う意味だろう。女優群は大映の一応第一線級スターだし、結局押しが足りなかったのは惜しい。

佐藤妙子 そうですね……、こうしたエキゾチックな背景に、兎も角チヨン鬻姿の日本人が登場するんですから、カット

にせよ、音楽にせよ相当しつつ、こってりと——特に当時の港支那街でしょうから、画面から、それこそ脂がにじみ出る位でいいんじゃないでしょうか。



水島 僕も同感だ、その点ワイドは買うが黒白は物足りない。さっきは仕上げの悪口を云ったが、最初のうち、船付場で白い眼帯をかけた盲らの旅芸人姉妹と逢う夕焼のシーン

はカラーだったら印象的だったろうと思うね。日本人の女が出るんだから何も空ばかりじゃない大いに色気も出さなくっちゃ……。

牧 カラーなら三田登喜子の由香が商館の二階で帯を解く処だって赤いしどきが目に沁みたかも知れない。製作企画にお急ぎの処があったにせよ、色彩で封切させたかったね……。

佐藤 暗い画面に脂をこってりとナンゾ申し上げましたけど、色が入ればもっと楽しかったかも知れませんが、酒場の酌婦でラシャメントタイプのお京（小野道子）が赤目の寅（勝新太郎）の本心を試めすために倉庫の中に監禁されている。そして射たれる処を助かるあのシーンでもきつと扮装を明るくするものが出たかも知れませんが、本当に惜しいと思いますわ。



水島 しかし黒白で情緒が活きてホロリとする場面もあるんだよ、僕はどう云うものか旅芸人、しかも薄幸のめくら女が——今回は港の酒場で妹が踊って姉のお道（浦路洋子）なんだが見えぬ瞳に哀愁をこめて鳴らす丸い三味線に緊縛以上の愛着を感じた。三十年前に見た松竹の春琴抄に較らべて遜色ないね、めくら女の役得だろう。最後の破船の監禁場で、体あたりでダイナマイトを消すあたりの浦路の眼元はズバリ本物、よく勉強したと敢闘賞でも出したい処……。地味な大島もよく似合うし後手の場面もいいし、お京とならんでこの両女優に対しては空高く上る風船と見ていい。

牧 どうもロマンチックな水島君にかかっちゃ上げたり下げたりで折角拐して来た日本女を積み出す満月が戸迷った形になりそうだが、「もう一人、一人増えました十三人です……」と首領の王貞竜（石黒達也）に名指しで女奴隷にされる十三人目の女——三田の由香だけが三人の内で縛られずに手嵌めの鎖は一寸弱い感じがする。これは後の祭だが荒縄かなんかで縛り上げて貰いたかった。

佐藤 けど鎖もまたよろしいじ



やありませんか。例の奉行所の御用提灯が飛ぶ頃、破船の中で鎖で足を取られた女が、逃れようとして倒れるあたりも迫力があって……。

水島 ただね、支那服の子供は別として、お道、お京、由香の三人を除くとあと九人ばかりの柱に繋がれていた女達は、まるで無関心なんだ、これが新東宝の演出にかかると忽ち湯文字一つの姿にされちゃう。

牧 してみると事件は夏か秋口になるかな入道雲が見える夕景が映る処では盆過ぎでの満月なんだろう。それなら誘拐女はシンボルの腰巻一枚でもいいことになるが……。

水島 最前も云ったようにこの映画は封切

を見て物になるかと思った、一回のテストじや不安だから別の上映館へ行ってスナップする、それでも不安だからあの手この手と辛抱して四五本カメラを向けたんだが、結局上りが冴えないから全然コントラストがつかない、徹頭徹尾暗い映画に終わった、悪い



そうだから明るみに出せないって訳さ。

佐藤 私がこんなことを申したらお笑いになるかも知れませんが、遊び人実には幕府の目付役である勝新太郎が、うまく化け

前例でも松竹の七人若衆誕生の方がまだましだと思うが、批評眼を持っておられる佐藤さん、いかがですか？

佐藤 矢張り短銃で人殺しをやったり、内容が日本娘の誘拐、従って拐した女を監禁すると云った事柄を強調するとすれば、スナップなんかなさる方にはお気の毒でも暗らくならざるを得ないんじゃないでしょうか。御興が出れば明るいし、縛られた女が現われると引廻しは別として、大抵暗いのが相場のようなのですわ……。

牧 まあその意味で我慢するんだナ。何枚かのフィルムターを通しての国際誘拐団なんだ



やがったナ……と王一派にぐるぐる巻にされる処で、可哀いそうに、と云った娘さんの声を聴きました。この人の荒けずりで飾りっ気の





ない仕業は惚れてもいい位に感んじたんですけど……。

水島 見た所兄弟の若山富三郎より気取らないね、だからこの新さんを胴上げするのはこの人を取り囲く女優群が血文字船なら、無残に緊縛されなけや嘘なんだ。その責任は田坂と云う若い監督に在るかも知れない。

佐藤 結局この映画は誘拐されて海外に売飛ばされる日本姫を主体とするか、それはほんの添え物として王一派の悪と幕府の勝負——つまり男の世界を主流として演出するのかいずれかで決まるんじゃないでしょうか。上映時間の関係で両方を満足させられないとしたら、物の哀れを女達に向けて、当時の不安時代の情景をスクリーンに映せば一応目的が達せられるようにも思うんですけど……。

水島 要するに描写が足りないんだナ、ここまで来たら遠慮は無用だよ、あっさりマニア向きに城を明け渡した方がいい。拐わかさ



れた女の緊縛場面でも今回の作品はチョッピリその匂いはあるんだが突込みが逃げていく。もうちよいと云う処を挙げると、最初にお京が倉庫みたいな処で縛られている。で：



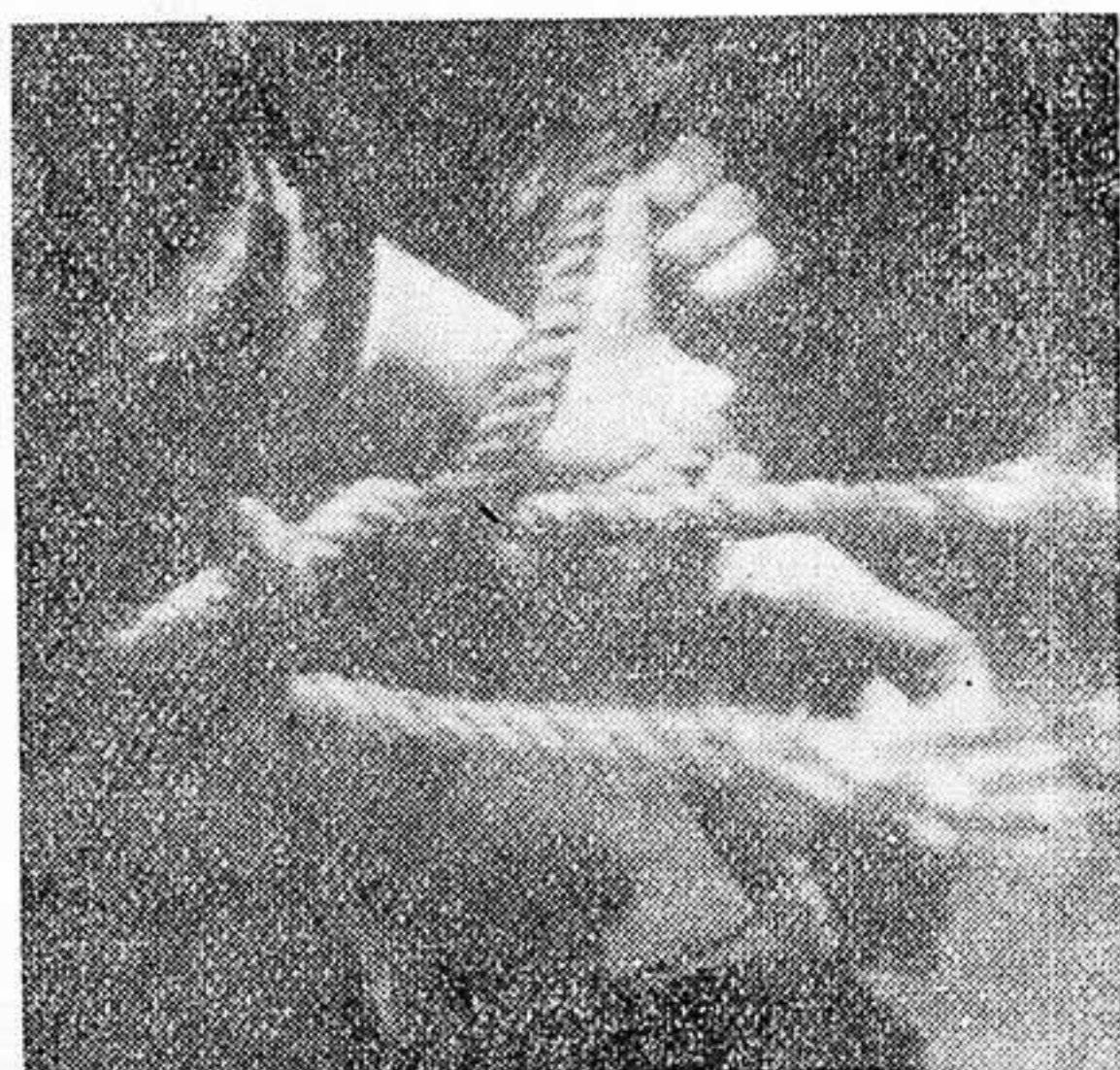
…赤目の寅が射殺すると見せかけて手下の者共に発砲してお京を縛られたまま、逃がそうと身体を抱えるあたりと移動撮影の末端で寅がお京の縄を本当に解く——と云っちゃおかしいが、仲々解けそうもない結び目を念入りに解いて行くこの二つのシーンは、最近余んまりお目にかからない高価なものじゃないかと思うし、最後にお道が立ち上がって縄尻に曳っぱられて倒れる。またお京はお京で座ったままもがくカットは演出は満点なんだが、もうちよいで全く惜しい。

牧 だからさ、緊縛を主眼とするなら新東宝式に江戸の町と云う町から女が拐されて行くシーンを入れて2で割ると所謂「血



文字船」らしい劇が構成されるんだよ。暗らくて困るんだったら夜は一色でもいい、是非カラーで再映画化だね。

佐藤 でも情緒的な支那音楽が聴けて上海に居りました頃を懐しく思いましたわ、爆竹に開けて日本女が拐されるなんて一寸刺激的ではありませんか。ただ何かと云うと御用提灯の飛ぶのは困りますけど……。





水島 役人が右往左往する頃はカメラをケースにしまいかけてますよ、あとはどうでもなれって……事実緊縛映画のラストは下らない。そのまま、中坐しても結末は判ってますからね。

牧 どうも話を元へ返す様だが、一体この国際誘拐団長たる王先生は、誘拐シーンが省略してあるから一切判らぬが、どう云う日本

婦女子を目あてに蒐めたのか、どうも行き当りバツタリにめくらであるうと、小輩であろうと、兄の行方を尋ねて来た娘であろうと——と云った無差別バタヤ式誘拐法を採っている。これがこの映画のウィークポイントじゃないかと思うんだが佐藤さん、あなたが仮りに団長だったらどうします？ うまく上手に当時の幕末頃の日本娘を拐致出来ますか……。

致出来ますか……。

佐藤 さあ……どうでしょう。矢張りお金か女の喜びだまびのような物を暗示して甘言で騙すより外に手がないんじゃないでしょうか。さっき水島さんの指摘された九人の娘さん達もそう仰言ると美目麗るわしき人達じゃなくなって、一見お粗末のようでした。別に天保の飢饉で娘を売飛ばした訳でもないんでしようけど……。

水島 一つ重大なる忘れ物をしていたよ、或る意味でこれは大いに活目されてもいいじゃないかと思うシンは、同じ監禁牢屋内で由香が不自由な鎖の右手を差伸してお道の縄を解く場面だ。大寫しは高く頂ける



ね。僕は今後の時代劇は、寧ろこんなカットをふんだんに盛ってこそ、万人等しく渴望する緊縛映画じゃないかと思うんだ。

牧 あれは文句なしによかったね。ただ惜しむらくは普段着のお道じゃなく、せめて由香程度のきものであったかった、情景が活きるためにはね……。

佐藤 お好きな緋縮緬の長襦袢でなくてもよろしいんでしょう……？

牧 どうせ解く縄なら野良着より訪問着と云う意味ですよ。

水島 まあこんな批評は新聞には恐らく出

んだろうなア、それなりに文句をつける必要がある。文句をつける序でにここで企画を改案したらどう云うもんだらうか。牧さんの出幕だぜ。

牧 今更改まって「王、満月、船」と宣告した血文字船の舵を取り直す必要もなさそうだが、今流行の推理方式を採入れて、構成したら面白いものになるんじゃないか、例えばほ



んの一ヶ月ばかりの間頻々として妙齡の娘達が姿を消す。特に祭礼のあった町内では十数人も一緒にさらわれて行方が全く判らない。

問題はその手口なのだがそれが奇々怪々複雑で到底奉行所様の頭では解決出来そうにもない。聞く処によると支那の親善使が入国したと云う、進歩的な港の娘達は競って鍛子の

支那服をまとって江戸の町まで歩き始めた。

文明開化のあふりを喰らって、どの店舗にも支那料理がお膳に並ぶと云う世を拳げての隣国風景に変転しつつあるなかに在って、謎は更らに謎を生んで場面が変わると大仕掛けな婦女誘拐団の組織網がその姿を現わした——とする。それは俗に云う巧妙に仕組まれた蓄妾

制度であって、法外に拐された娘達の肉体はおろか精神つまり頭の判断力さえ奪ってう麻薬の明け暮れ。

美しい日本の着物をまもっていても魂を抜かれたロボットに過ぎない女の群れ——これが消息を絶った娘達の末路であったのだ。あまつさえ情容赦なく打ち下ろされる折檻の鞭は姿は日本ムスメであっても心は易々諾々玩弄される「支那女」として転身を強いられる行事なのである……漸くにしてその根拠を突き止め、勇躍飛び込んで来た勝新太郎君も一大魔境の地下牢を展望しては、手の下しようがなかったのも無理がない。

……と映画は映倫すれすれで女の転身

変化の地獄絵巻を描写——とまあ、こう云った風に綴って行くと下らぬ奉行所だの御用提灯が大幅に省略されて、佐藤さんの云う哀れな女達ばかりに焦点が絞られる事になるが。

水島 じゃ、出直おして「続血文字船」を豪華キヤストでクランク・インして奇ク劇場

でロードショウにするか……、こいつはへ春から縁起がいいなあ

牧 手放し序でに今一つ……花も恥じろう生娘から新婚世帯の若奥さん、さては芸妓に舞妓お女郎達、いずれが菖蒲か、かきつばた——と日本女の綺麗どこの代表を拐した小僧い国際誘拐団が港の一角に君臨して思う存分



活躍すると云う全編を……ぜび、スクリーンに映写して貰いたいものだ、アハッハッハ………そしたら当分武士業を放棄してもいい。

佐藤 じゃ、ホホホ……あたしも一役買っ

て拐わかされて見ようか知ら、御免遊ばせ。

(緊縛映画スナップシリーズ第7回作品・完)

第十七景

田舎娘に乱暴されるの記



マゾヒズム百景

馬場好男

と老人だけみたいになっていた。だから私の存在は何となく非常に目立ち、青白い顔をして散歩などをすると、ヒソヒソといい事か悪い事か知らないが陰口をきかれたり、それかと思うと親しそくに挨拶をされたりして戸惑った事も、しばしばあったものである。

私が部屋を借りた家は割と豪農で、私に対しては食事は勿論、すべてに気をつかってくれて私も何時か段々元気になり、又此の部落にも馴れて来た昭和十九年の秋。

私が間借りした家には、私と同じ年の娘がいて名前をユキと云った。健康そうな身体を持主で、肌の黒い割におとしく、街に出て磨けば美女の部類に入るだろうと私はよく考え

ていたが、一緒に暮せばいつか私とユキは互いに好意を持ち合う様になった。

ユキは、私が病身と云う事が一番気にいらならしく、丈夫になるには外に出た方がいいとか、日に焼けた方がいいとか云っていたものだが、とにかく私はその好意が嬉しく、一億総突撃なんて云われている世の中だったから、何とか早く元気になりたいと頑張ったものであった。

そして此の小さな部落に、私とユキの噂がそれとなくひろがり、事実私も、よくユキと一緒に夕暮の散歩に出たり、昼にはユキや彼女の父達が野良に出ている処へ弁当やお茶を届けてユキの傍にいつも居る事さえあった。

戦争中、私は学徒動員で徴用されS島の或る構築作業に狩り出されたが、元来身体が余り丈夫でなかったので病気になる、当時、軍方面に幅をきかせた父の工作で簡単に解除になっちゃった。然し、家に帰っても街は空襲は勿論、防空演習の事やらでうるさいので、しばらく静養の意味で、そのS島の対岸になる小さな部落に間借りして暮す事になった。大体、此の部落の殆んどは百姓で、街の喧騒さとは違って変った静けさで、殊に苦い者は全部と云っていい程、軍隊にとられ、女子供

処が男の少い此の部落で、若い娘達から私は都会から来ていると云うのが羨望の的だったらしく、それがユキ一人の手に委ねられ始めた云う事から、ねたみ、シット、そして私への憎悪に変わっている事に気がつかなかったのである。

その日、私がいつもの様に弁当とお茶を届け、暫らく手伝つての帰り道、独りで蟬が鳴き、鳥の羽ばたく山道を抜け出てくると、小さな樹の繁みのかげから、意地の悪いと云うので評判のキクと云う娘と和子と云う二人の娘が、手拭いを頭に巻きモンペ姿の恰好で待ち伏せていたらしく、ぬっと出て来たのである。

「ああ、今日は」

私は咄嗟に驚いたが挨拶をする

「毎日ブラブラしていい身分だのう。若いくせに戦争も行かんで」

「……」

私は一番痛い処をチクリと云われて、逃げるが勝とそのまま行こうとすると、二人は私を通すまいとするのだ。

「何をするんだ。君達は、退き給え」

「へえ、のき給えか、おいあんさん、今日はな、お前達が此の戦争をやっている大切な時に、イチヤイチヤくつつきおうとるから折かんに来たんやぞ」

私は嫌な相手に掴ったと思ったが、ぶらぶ

らしていると云う事がいつも劣等感になっていたので始めに一本釘をさされてみると、どうも強気になれず、それに女と云っても私より二ツ三ツ年上だし、部落の青年団の幹部をやっていると云う話を聞いていたので「すみません、失礼します」

と再び彼女らをよけて行き過ぎようとする

「逃げるな此の非国民！」

と身体の大きいキクが、私の手を掴んだのである。

「なに！」

私はみるみる蒼白になって、全身に怒りをこめて、その手を強引に振りきった。

「生意気に此奴めが」

キクと和子はパツと私の両肩に掴みかかり振り離そうとする私と三人が、もつれあって大乱闘になってしまった。

私も男だし、相手に気力だけでも勝っていたら負ける事はなかったかも知れないが、それに当時でも私はマゾヒズムを人に云わないだけで自分では意識して、只、罪悪感の様に感じていたのが今と違うだけで、若く美しい女性のドレイになりたい、と思つてはいたが、此の場合にはそんな事を考える余裕もなく只、早く逃げてしまおうと焦つてしまった。和子が私に倒されるや私の足にからみつき、振り離そうとしても離さないまま、今度はキクの

体あたりに私はドスンと草むらの中に転んでしまった。

「早く押さえつけるんだ」

グツと年子は倒れた私の上に、どっとおおいかぶさつて、仰向けになった私の胸と腹の上にキクを前にして二人は馬のりになってしまった。女でも大柄な身体二人に抑えつけられると、動くに動けず私は腕いた両手もキクの膝小僧に踏みしかれて、身動きも出来なくなつてしまった。

「戦争に行けん男は弱いなア。女にかかっても此の通りよ」

二人はゲラゲラ笑っていたが、キクが私の頭の傍にあった栗のイガの枯れたのを手にとつて、私の顔の上に投げつける真似をした。

「痛いッ」

私が、ぶつつけられない前に悲鳴をあげると、キクは残忍そうな日焼けした顔をゆがめて、私の両手をぐいとふみしいたまま私の顔を見下して、そのイガの先でつつき始めたのである。

額、鼻、頬、首と処かまわす刺すので、さすがに私が暴れ跳くと、今度は和子が私の腹をつねったり腿をつねったりするのだ。

「痛いッ何をするッ。僕は何もしてないッ。離して下さいッ」

栗のイガ刺しを二人の女はゲラゲラ笑い乍らやっていたが、今度は私がハアハアと口を

あけて腕くと、口の中に土を入れるのだ。

「アッ、プップッ」

と吐き出すと、口を手で押さえつける。

「今度はこれじゃ」

とキク子私の目の前に見せたのは、小さなバツタである。

「ホラ、口をあけてあけて」

栗のイガは処嫌わず、チクチク刺しかかり

「許して下さい、許して下さい」

と私は、悲鳴をあげてしまった。そして、バツタを口の中に入れられたらと云う恐怖心が目に見えない力となって、ガバツと二人をはね返したが、すぐ俯伏せに再び組みしかれてしまった。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

★復刊号の分

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽
 復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽
 復刊第3号 (昭和31年4月号) △売切▽
 復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円
 復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円
 復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽
 復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽
 復刊第8号 (昭和31年9月号) 定価二百円
 復刊第9号 (昭和31年10月号) 定価二百円
 復刊第10号 (昭和31年12月号) 定価二百円
 復刊第11号 (昭和32年1月号) 定価二百円

「和チャン、手拭お貸しよ。縛って行こう」

キクは、そう云って私の両手を後手にねじり、固く手拭で縛りつけると、やっと私から離れた。

「許して下さい。何でも云いつけは守ります。僕は病気で」

私は半ベソで謝ったが二人は許さず、私を引き立てて後手に縛ったまま家の方へ向った。

「ユキに見せてやるんだ。此の恰好を」

「地蔵さんの前に晒者にする方がいい」

二人のこんな会話に、私は彼女らの前に正座し頭を地につけて許しを乞うた。

「泣いたって許さねえよ。今度はこうしてや

る」

立てない私を撲る蹴るで、ここで私は彼女らに再び乱暴されるハメとなってしまった。

「今度は和ちゃん、前に乗れ」

二人の女は代る代る私の顔と腹の上に乗って暴れたが、最後に

「いいか、来いと云うたら、おとなしく来るんだぞ。わかったな」

私は二人の女に脅かされて這々の態で逃げ帰ったが、もう殺されそうな気がして早々と街の家に逃げ帰ったのである。

「又、すぐ来るからね」

とユキに嘘をついて、十年以上が何時のまにか経ってしまった。早いものである。

復刊第12号 (昭和32年2月号) 二百円
 復刊第13号 (昭和32年3月号) 二百円
 復刊第14号 (昭和32年4月号) 二百円
 復刊第15号 (昭和32年6月号) 二百円
 復刊第16号 (昭和32年7月号) 二百円
 復刊第17号 (昭和32年8月号) 二百円
 復刊第18号 (昭和32年9月号) 二百円
 復刊第19号 (昭和32年10月号) 二百円
 復刊第20号 (昭和32年11月号) 二百円
 復刊第21号 (昭和32年12月号) 二百円
 復刊第22号 (昭和33年1月号) 二百円
 復刊第23号 (臨時増刊号) 定価二百円
 復刊第24号 (昭和33年2月号) 二百円
 復刊第25号 (昭和33年3月号) 二百円

復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円
 復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円
 復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円
 復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円
 復刊第30号 (サド特集号) △売切▽
 復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円
 復刊第32号 (昭和33年9月号) 定価二百円
 復刊第33号 (昭和33年10月号) 定価二百円
 復刊第34号 (昭和33年11月号) 定価二百円
 復刊第35号 (増刊号青い魔院) 定価二百円
 復刊第36号 (昭和33年12月号) 定価二百円
 復刊第37号 (昭和34年1月号) 定価二百円
 復刊第38号 (悦唐小説と緊縛写真) 三百円
 復刊第39号 (昭和34年2月号) 定価二百円
 復刊第40号 (昭和34年3月号) 定価二百円

△未来幻想マゾ小説▽

家畜人ヤプー

沼 正 三

第二章 高天原諸景

一 飛行島着陸

竜の顎にあたりとところに設えられた逆鱗展望室では、未来史の夢の本を見終って退屈し、早目に下車の仕度をしたクララが、ドレイパア青年と外を眺めている。山また山が一望の下に連なる。世界の屋根パミル高原を飛び過ぎてゆくところなのだ。

「あれが地球第二の高峰、カラコルム山脈のK2です。標高八千六百十……何米だったかな」

青年は、空中列車の右手前方に展開する雄大な白亜の壁と見える大山脈中、際立って聳える三角の峰を指さした。

「我々の目的地である飛行島はあの山のそばに碇泊中です」

彼の説明によると、昔沙漠地帯だったこのタリム盆地は、今は地球都督府エデンの所在する文明の中心地に変化している。そして、

古代地球の航時探険家としてアンナ・テラス（地球のアンナ）の異名を得た前地球都督オヒルマン公爵の所領である飛行島——

これは一遊星に一島だけ築造が許される——タカラマハンは、盆地の南端ホータン市の郊外の上空を定位置にしているのだ。自分は沙漠の名をタクラマカン Taklamakan と習ったが、という彼女の間に對し、彼は、飛行島の名 Takleamakhana の方が正しいのだと答え土着畜人達は Takamankala（高天原）と訛っている様だと付け加えた。

竜巻号は旋回を始めた。

「もう着いたんです。まだ見えないが」

青年は謎の様なことをいった。

「管制塔と今連絡中です。島の重力圏に入ると……ほら！」

「あッ」

昨日から、不意打ちには余り動じない様になっているクララだがこの時の一瞬の変転には、またまた驚きの声を隠し切れなかった。見よ、一万米の高度から地面を俯瞰する視界の中程に突然新世界が現出して来たのだ。中央には雪を戴いたその頂上がK2の峰よりも高い円錐状の高峰、それを円周状に囲んで七つの峰を持つ山脈、その周辺の平野、その外側を完全な円周となつて取り巻く湖水、……人工とは思えぬほど大規模な一大自然が、すぐ眼の下に浮び出て来たのである。

これが、飛行島^{フライングアイランド}タカラマハンだった。

直径六十軒の大円盤を想像されたい。その面積は琵琶湖の四倍にもなる。厚さは一番薄い部分で一軒、中央は盛り上って、最高部では厚さ五軒に達する。周辺部から望んで高さ四千米の高山なのだが島の底面自体が地表からずっと離れて海拔五千米以上の高度にあるのだから、その山頂はK2を遙かに越えた一万米の高峰になるわけだった。

土壌と岩盤から成る地殻部は数百米の厚さに達するが、その下に百米の厚さの引力盤の層があり、更にその下、飛行島の底面には、二百米の厚さの浮力盤の層がある。どちらも特殊合金である。金属製の丸いお盆に土を盛って箱庭を作った様な趣なのだ。浮力盤は地球の重力を遮断し、斥力を利用して島を浮揚推進させる基盤部で、されば島上の諸物を代って安定させる為の引力盤が必要である。

浮力盤の機構は、二十世紀科学の用語では説明し難いが、島の中心部（中央山の岩盤内）の振動素子結晶体から送られる高速四次元微振動が、地球重力遮断に重要な役割を演じていることは言っておこう。島全体が、その上のあらゆる物を含めて、微妙な振動を付与

せられている。そしてその振動の故に飛行島は人間の眼に見えない存在に化しているのだった。島の上空に来て、その重力圏に入り、その振動を自分も付与せられない限り、つまり、島の外や島の下（地上）からでは、見えないのである。扇風機の羽根が廻っている時に向う側が透けて見える、あの理屈である。四次元振動によって三次元世界から視覚的に離脱するのだと表現しても良いだろう。

クララ達の竜巻号がこの重力圏に入ると同時に、振動を受けて、島を見ることができるようになったのだ。振動といっても、島全体が一緒なので、丁度地球の自転運動が地上では感知できない様に、五官には何も感じはしない。

空中列車は旋回しつつ下降してゆく。中央山の中腹にある氷瀑、氷湖、外輪山脈との間の環状台地にある密林、碧潭、外輪の七峯がそれぞれ一大城門に削り成されている豪快な斧鉞^{きんぎょ}の跡、その外側の環状平原の、あるいは広潤な田野になり、あるいは繁華な都邑を作る有様、処々に湖を湛えつつ周辺部の一番外側を取り巻く幅一軒の環状湖へ流れ入る七筋の川は、森の樹種でも、芝生の上の建物の色彩でも、尖塔の様式でも、花壇の配置でも、流域毎に異なる七様の景観を提供している。極地の氷河、沙漠のオアシス、一体どこまでが人工、どこまでが天然なのか？……

「着いたわね。下りましょう」

二人は打ち連れ立って、竜の上顎と下顎の間にある出入口へ向う。ポーリオンも侍医を従えてやって来た。デミル博士は何だか落着きかぬ様子。

実は彼は彼女に隠していることがあるのだ。

——一応若夫人の前は取り繕って置いたが、もし発覚したら！
そう思っただけでビクビクしているのである。

四人はゾロゾロと竜の口から下りて行った。竜巻号の船室^{キャビン}はからっぽになった。唯クララの私室、つい先刻まで彼女の腰掛けていた

あの安楽長椅子の中では、麟一郎がクララへの祈りに精神を集中している：

クララの方は、麟一郎どころではなかった。期待に満ちて、タラップを下り立つ……

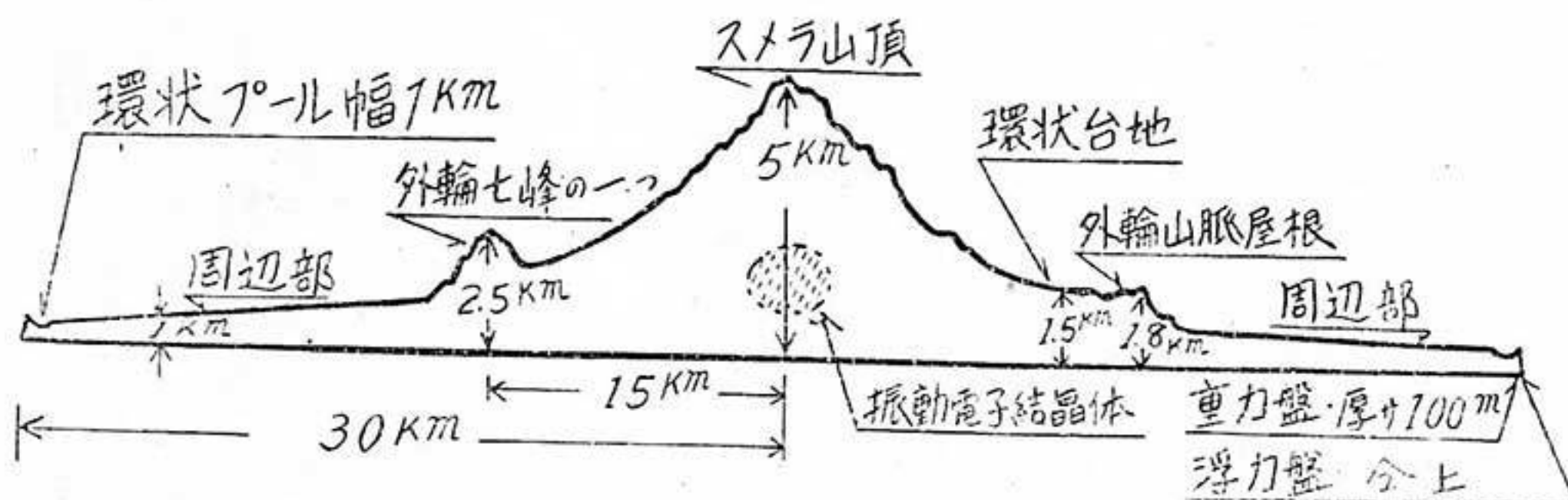
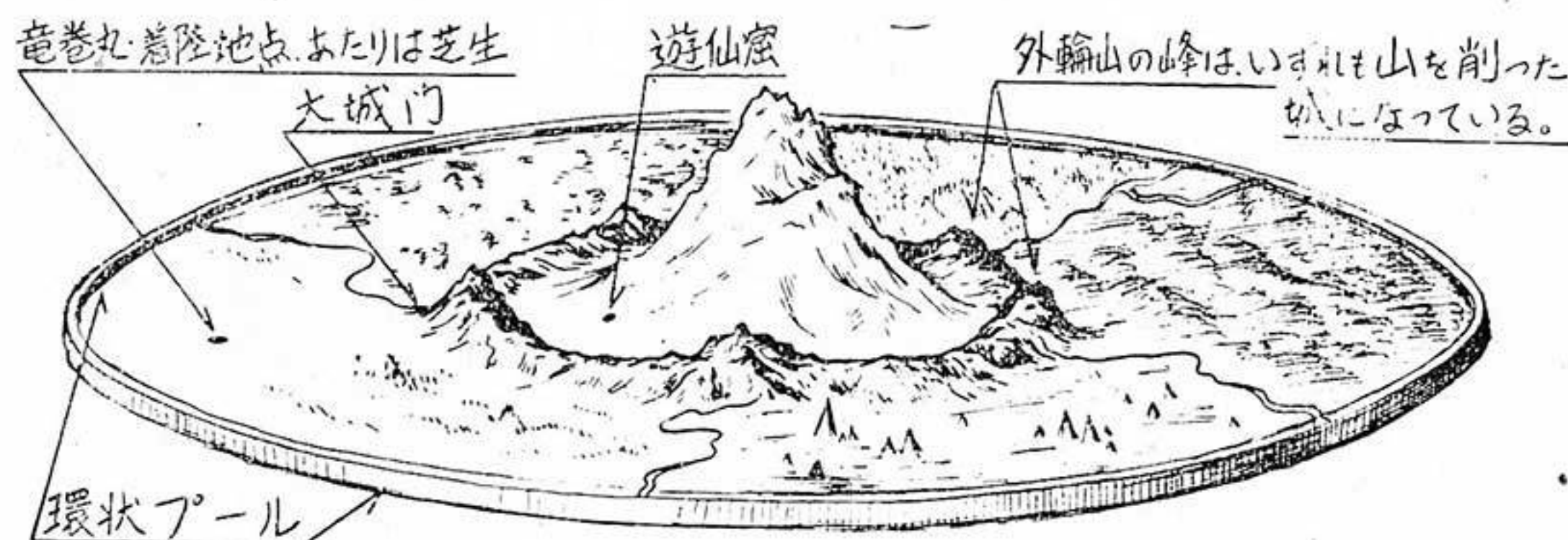
——まア！空一面のヴァイオリン！
独逸語の成句に「天空一面にヴァイオリンが懸^{ぶらさ}っている」という表現がある。飛びきり嬉しい恍惚状態^{エクスタシー}を指すいい方だ。今彼女は下り立った瞬間、天から聞える音楽にふと眉をあげて、この成句通りの光景を見たのである。肩に小さな羽根をはやし、頭上に光輪を戴いた、裸の童形^{こがた}の天使達が、小さなヴァイオリンを連ねて歓迎の合奏をしている。子供の頃から教会で馴染みの天国の模様さながらなのだ。

「いつ聴いても良いものねエ。クララ、これは畜童^{パンセル}(Pangel.yap-angelの略)とってね、この名物、アンナお得意の奏楽隊よ。ヤプーでもこんなに可愛い顔が揃うものなのねエ」

ポーリーンが、見上げ乍ら解説した。

——これがヤプー！ペンゼル？

天使の絵は何故裸の幼児で表現されるのか。クララは今それを悟った。ヤプーだから裸なのだ。縮小されてるか



ら幼児に見える、雑欲がないから性別不明と思える（読者は、森永製菓のエンゼル・クイズを想起されたい）。然し、何故縮小されてるのか。何故ヤプーの癖に光輪を冠っているのか。それは、クララには分らなかった。

——実は、どちらも畜童に空中を飛ばせる為である。この飛行島の人工重力圏内では、重さ十五瓩以内の物体には簡単に飛揚装置が取り付けられる。

それが羽根と光輪である。羽根は正式には双小翼^{ダブルウィング}(Julae)といい、揚力は皆無だが、重力盤の作用を消去する振動を合成する。そうすると軽くなつて、光輪のヘリコプターの牽引力だけで浮揚できる。この光輪は、白人用の光傘^{ヘイム}(二三章二節)と外見は似ているが作用は全く異なる物で、名称も輪状翼^{アンニェット}(annulet)という。この装置を使用する為にはヤプーの体重を幼児並みの十五瓩以下に減少させねばならぬ。そこで縮小機に掛けて作り出されるのがペンゼル即ち飛揚畜なのである。

あたりは一面の軟かな芝生で、ふと身を倒して、両手で葉末を撫で廻して見たい様な衝動にかられる。飛行場らしい建物もないが、遠く前方には例の中央山が傲然とそそり立って白く輝き

その手前には山嶽を削りなした城が見える。高さは千五百米にも及ぼうか。上空から眺めた時とは事変って、のしかかって来る絶壁の威圧感。しかも、単なる自然の壮観でなく、膨大な人力の加工を暗示して、ブルーゲルの描いたバベルの塔の絵の持つ迫力を見せている。——この飛行島全体の基盤に潜み、これらの山々自体を造成した人工こそ真に驚異に値するものだったが、ここではそれは自然と同一化して山々を削った僅かの機械力だけが人為と見えていた。それですらピラミッドや巨大ダムを児戯視せしめる規模を示しているのである。

歩み出て来た出迎えの白人の頭上の ヘイロ・パラソル 光傘に、ふと気付けば、今下車したばかりなのに、自分達白人四人の頭上にも、いつか来ている。振り仰いだ視線に再び映ずる エンゼルズ 天使達否、畜童隊の奏樂は益々佳境に入った。器楽隊の後方上空には合唱隊がいて讚美歌を歌っている。更にその背後の空には奇妙な細雲の文様、WELCOME (歓迎) と読み取れる様な気がするの、気の迷いだろうか。

「(女) ダウチス 公爵オヒルマンにお目に掛りたいの。きのう、御連絡はしてあるけど。……妾は フニアリーケイフ ポーリー・ジャンセン」
「殿下にはスメラ山麓の別荘遊仙窟で皆様をお待ちでございます。御案内致します」

接待係の男は町重な言方でジャンセン侯爵家への敬意を示した。

「スメラって、あの中央の大雪山ね？」 (※)

「さようございます」

「そういえば、きのう、一緒に兎狩になんて行ってたっけ、久し振りのプキーも悪くないわね」

ポーリーンは独り言の様に呟きながら、クララとウィリアムの方を振り返って、賛成を求める様にいった。

「さあ、行って見ましょう」

(※註。梵語でスメル Sumeru といえば、須弥山 (蘇迷盧) のことである。世界の中央にある高山で、七金山がこれを圍繞し、更に海洋が取り巻く、とされる。飛行島の構造やその中央山スメラの名が、航時旅行によって古代印度に伝えられた結果、この特色ある世界説を生んだのである。——又、ヤプー文化史上は、高天原 タカマカハ や天照大神の名と結びついたスメラの語は、至高者の御座所の意から、首長の接頭辞化して、皇の字があてられるに至った。

二 プクーター

「乗物は何になさいますか。 ハイピング・ロード 地下動路か、軽車輛でしたら黄金虫 ビートル かプクーター……」

レイノオ——接待係はそう名乗った——が訊ねた。ポーリーンは言下に答えて、

「プクーターだわ。時間はかかるけど、途中の景色が楽しめるもの……」

「畏りました」
間もなく、一行の前に、五台の奇妙な乗物が——あるいは、五匹の奇怪な動物が——やって来た。これが軽畜車とでも訳すべきプクーター (Peoter. yap-scooter の略) である。

読者への説明には、命名の由来となったスクーターを利用するのが、近道であろう。スクーターの車輪を小型にし、前輪も座席の下に持つて来る。足踏板やボディの下縁は地面すれすれまで下げられる。前部は フロント ハンドル以外不要になってしまいが、停車中は フロント ハンドルの支軸 (前パイプ、フォーク) が縮んでハンドルは左右の支持脚となつて車体を安定させる用をし、前部は全然なくなっている。乗手がサドルに腰を下し、始動スイッチを入れると、支軸は伸びてハンドルが昇り、停車すると同時に、又縮んで脚に変わる。——そんな構

造の車を想像されたい。走行中はちよつと普通のスクーターに似ているが、停車した時、乗手の前面を遮るものがないし、安定も充分だから、そのまま一種の椅子として使用できるわけである。

さて、そこで今度は、その新型スクーターのボディを、身体を縮めて蹲った生ヤプーの体と置き換えて想像されたい。台板の上に正座し上体を前に倒し、腕は肘まで板につけると、台が低い上に丁度畜体の下方に隠れるから、まるで地上に土下座した様に見える。その背中が座席になり、スフィンクスの様に肘から先を揃えて前に出した両腕の、手首と手の甲が踏板代用で乗手の両足を受け、一方がアクセル、一方がブレーキになっている。そして十本の指はエンジン——マッチ箱大の強力な原子動力機関が後輪の車軸に仕込まれている——へ電流で指示を送る生きたスイッチになっているから、乗手の命令に応じての運転を遂行すると同時に、必要とあれば、自動操縦もできる。つまり、この軽畜車のヤプーは、自分の体を車体そのものに提供しつつ、自ら運転手も兼ねているのだ。

運転の為には前方注視が確保されなければならない。それには次の様な仕掛けになっている。伸縮するハンドル支軸の中段に対物魚眼レンズが仕込まれていて、停車中は台板の下に沈み、発進の際に座席の上縁と同じ高さまで昇るのだが、ヤプーの顔とこの魚眼レンズとは鏡胴で連結されているのである。肘と膝をついて背中を座席に提供するヤプーの頭部は乗手の両脚の間に位置することになるが、その顔は鏡胴の手前の端を顔の大きさに拡張、接眼レンズを附けた覆面にスッポリと収まっている。鏡胴の他端が上下する毎に、覆面に強制されて、顔も前向いたり俯向いたりするわけである。

もっとも、以上の説明は、女子用の車の場合で、男子用はもう少し複雑になる。というのは、男子は、女子の様に必ずズボンを穿いているわけではない。スカートの時には跨る姿勢はとりにくいから鏡胴が座席と同じ高さで、腰掛けた両脚の間を前方へ抜けるのでは

都合が悪い。そこで、男子用の車では、鏡胴はプリズムを使って凹状に屈折し、スカートの裾に触れずに、女子用の車と同じ視界を得ているのである。(読者は、現在の自転車では、女子用の車のパイプの構造が、男子用の様に横に通らず、V状になっていることを連想されたであろう。事情はそれと同じだが、性別が反対になっているのである。)

魚眼レンズはハンドルの支軸に固定されて上下する。そこで、ヤプーは、進行中、広く前方を見ることが出来る。ただし、他処見は全然できないのだし、停車中は視界自体が存在していないのだから、これは乗手の必要な時に必要なものだけを見させ、それ以外は全然盲目の状態に置くに等しい。つまり、ヤプーの視力が、丁度自動車の尾灯の点滅と同様、発進停止の機構に連動従属しているのである。そして、乗手がハンドルを動かすと、ヤプーはその方向を見ることを強制される。然しまた、自動操縦させる場合には、乗手はハンドルを緩解して置けば良く、ヤプーは、覆面に固定された頭部を左右に振ることで、鏡胴を逆に動かし、ハンドルを廻して、相当な角度まで方向転換を自主的に行うこともできるのである。

これが軽畜車スクーターである。軽便さでは昔の自転車に相当するが、操縦したい時だけして飽きれば車自身に任しておける気楽さは、昔のどんな乗物にもなかったものだ。そして、水中における力ッパがそうである様に、自力随行性能もあるので(※)、サイクリングに行つて、歩きたい時は、車を忘れて歩き廻ることもできる。

車は黙って随いて来るだろう。その代り、一日一度は畜体への充填——給餌をせねばならぬ(エンジンの方は原子機関だから半永久的である。七章二節)。……機械には違いないが家畜としての性質も持つ、生きた乗物スクーター。田園の散策などに好適と、よく別荘に備えられるのだが、この飛行島では、広いといっても限られた面積の島とて、乗手が目的地さえいえばあとは完全に車の自動操

縦に任しておけるので、利用価値が高く、多数が設備——あるいは飼育——されているのであった。

※註。プクーターは、一二章四節で紹介した、自動椅子に似てお

綱絛策を講じようと考えている博士にとっては、単独行動できるのは勿怪の僥倖なのである。



り、被覆を取った自動椅子といっても良い位共通点も多いが、この自力随行性の点で、自動椅子よりも家畜的なのである。

五台のプクーターには、それぞれ異なる色の畜肌焼彩（一九章四節）が施してある。クララの前に来たのはグリーン。勿論女子用だ（彼女自身はその区別も知らなかったが）。ポーリーンを見様見真似で、椅子に腰を下す様にして、蹲ったヤプーの背中に乗った。ハンドルが上昇して来る。両膝の間に俯向いていた頭部が段々顔をあげて来る——お面を被ってるわ。あら、長い鼻……かしら？ カメラの望遠レンズの筒みたいに太いけど……水平になった……

両脚の間にせり上って来る鏡胴の観察に気を取られていたクララの耳にポーリーンの声が聞える

「デミル医師、あなたはどうする？」

「は、私は、できますれば別行動を取らせて戴きたいのでして。此処の矮人倉庫の方へ参りたいと存じます」

「研究？ 熱心なもんね。良いわ。この島がヤプン諸島へ着いて妾達が富士山飼畜所に降りる時に妾の伴をするのを忘れない様にね」

「畏りました。では……いつてらっしゃいませ」

まだ彼女に知られてない自分の失敗に、何とか

空中を飛び交わす畜童達の奏楽と合唱に送られながら、案内役レイノオの車を先頭に、ポリーリン、クララ、ウィリアムの順で、プクーターは出発した。各人の頭上には光傘が遅れずに随いて来る。金色、栗色、亜麻色の髪が次々に美しく後方に靡いて、一行思わず鼻歌の出る様な快適なサイクリング気分。芝生の園を過ぎ、大吊橋を渡り、一直線に正面城門の山腹を穿ったトンネルに突込んでゆく。

道の両側に展開する人為的自然の諸風景の美学、橋梁やトンネルの工学、これらについても、作者は二十世紀のそれと異なるイメージを持っており、ここで一言したい誘惑を感じる。然し単なる未来世界の見聞記でなく、先ずマゾヒストの為の読物でなければならぬこの小説で、ヤプーと関係のない事物の記述に余り道草を食うのは本意でないから、途中の説明は一切省略し、すべて読者の想像にお任せする。

平地走行十五分、山地登高十五分で、一行は大雪山スメラの山麓に達した。雪を被った山腹を割った大洞窟の中へ四台のプクーターは次々に滑り込んでゆく。遊仙窟に着いたのだ。プクーターは別の個々室に入った。

待っていました、といわんばかりに、畜童の数匹がクララの方に飛んできた。

「お召替をどうぞ」

というより早く、皆でテキパキと作業を始め出した。更衣室らしい。

——畜童は、音楽隊ばかりでなく、黒奴従者の代りに、身の廻りの世話もするんだわ。

大鏡の前に立って、脱がされるに任せつつ、日常にこの空行く小人奴隷を召し使うことの便利さを思いやった。

下着を換える（一三章一節参照）時に、畜童達は手分けして彼女の体にクリームを塗りつける。その作業中彼女は口笛でst st（標準型生便器）を呼び出し、超立号令を掛けた。そして、ふと鏡の中のプクーターの今し方乗り捨てた座席の形に首を傾けた。明らかに先刻出発前に見た時より膨らみ、お尻の形の凹みさえついた肉椅子に変わっているのは何故だろう？

読者には例により私から説明しよう。これは、肉クッションの製造に使用される海綿状皮膚癌を利用した速成肉鞍である。各プクーターは乗用就役に車庫（畜舎）を出る直前に背中に癌促進物質原液を塗布される。これが乗手の臀部体熱で作用し始めて皮膚癌を作り出す。尻の形状に密着して外側からスッポリ包みながら盛り上がるが、筋肉組織の中に海綿状の細胞空隙を生じるスポンジ化は臀部下圧力に応じるので、尻に接する背面部の弾性は強化され、車の運行から生じる振動は完全に消去される。クララ自身は気付かなかったが、腰を下して五分程で畜体の変化現象が完成して、ここまでの道程を快適なものにして来ていたのである。あとで車庫に入る前にこの肉鞍は——クラムの臀部に合せて作られてる為に、他の女性の腰ではピッタリ合わないから、残しておいても仕方がないので——切除されてしまうのだ。乗用就役の度毎に、背中の肉を膨ませたり削られたりするのがプクーターの宿命なのだった。

身仕度が進み、頭巾はないが派手な縞地のアノラック（防風上衣）風の上衣と膝下の締った寛濶なジョパーズ（乗馬ズボン）風のズボンを着せられた。どうやらスキー服らしい。脱ぎ捨てた上衣の胸の昆虫ブローチが眼につき、アノラックに付け直す時に朝の会話を思い出し、連想が——心を掠めるといった程度だが——旧愛人に及んだ。——今どうしてるのかしら、リンは？

彼女のその思念が通じたわけではないが、丁度その頃、彼自身の必死の祈りのお蔭で、遙かかなた竜巻号客室内の長椅子の中では、麟一郎の視聴覚が奇妙な復調を示し始めたのだった。クララのブローチに仕込まれた超小型自動放送局から送られる混成脳波が、祈念集中によって著しく精神交感度の高まった彼の脳神経に受信され、直接には外界からの刺戟を遮断された目と耳とに、クララの見るところを見、聞く所を聞かしめるに至ったのである（二五章三節参照）。完全な脳波同調はまだまだであるが、視聴覚に関する限りは、今後麟一郎は、長椅子に吊られたまま、クララと同じ経験を持つことになるのだ。

隣室に導かれた。レイノオが待っていた。応接間らしい。簡素な調度ながら、窓からスメラ山頂が望めて、遊仙の名に恥じぬ神韻を感じさせる野趣のある部屋だ。続いて他の二人も似た服装でやって来た。

パイプ組込生椅子（土路草一氏考案のものと殆ど同じ故説明を略する。三二年三月号一六〇頁参照）に倚って、窓から外を望むと、上から凄い斜面を直滑降して来る人影がある。足許から雪が散る。颯爽たるスキーヤー振りだ。

「あッ、あれ、アンナ・テラスじゃない？」

ポーリオンが——正式の称号で呼ぶのも忘れて——叫んだ。レイノオは恭しく肯いて、

「はい、オヒルマン殿下です」

窓枠が上下左右に拡がる。増した視野の真唯中にアンナの姿がぐんぐん大きくなる。向うもこちらのこと気付いているらしく、

「ヤッホー」

曲げていた腰を伸し、両手をあげ、良く徹る声で叫んだ。手にはスキー杖ストックならぬ半弓ボウが握られている様だ……

「クララ、素敵に綺麗な女性かこに紹介するわ」とポーリオンがいい、ウイリアムも「イース第一の美人と謳われた人ですよ」と合槌を打つ。

その美女は益々近付いて来る。

——この広大な飛行島ラビニタの女主人・前地球都督・女性探険家の第一人者・そして世界一の美女……公爵オヒルマンとはどんな女性？記者会見に出て来る大物を待つ新米の女記者の様な心境で、クララは思わず胸をたが昂らせた。

三 天照大神

視界が開け、人声が耳に入る。夢を見てる筈はないのだ、意識は継続してるのだから。

——頭が変になって幻覚が起ったのか？

麟一郎は頭の隅でそう思った。縦横に童形の天使達エンゼルが飛び交う光景は、幻覚としか説明できない。

クララの声はするが姿は見えない。見えるのは奇妙な椅子に掛けられているポーリオン、ウイリアムと立っている見知らぬ男。椅子は両腕を上捻られて蹲った人体で、麟一郎は昨日円盤艇内でポーリオンに腰掛け代りにされたこと（四章四節）を想起した。ここにも仲間がいる！ヤプーたる同類意識が湧いた。

掛けた二人はスキー服装であるが、ただその仕立方が何かおかしい……そうだ！日本の上代の男の服に似てるのだ。留学中も祖国を忘れまいと記紀の註釈書を愛読していた彼は、上代人の服装の挿絵に親んでいた。膝下で締め上げたこのズボンの仕立は埴輪土偶そっくりではないか。そう思っただけ見れば、袖口で締め、ウエストを絞った上衣の仕立も、そのズボンにふさわしい。服地に色や縞があるから、スキー服装と思うから、アノラックに見えるのだが……。



窓の外に、遠くからこちらへやって来る人影が見える。雪の斜面を滑降するスキーヤーと思えたが、近ずいたのを見ると獵師の様に弓矢を携えている。彼は、先程の觀察の連想から、天照大神が乱暴者の弟神を迎える為に男装した場面の挿絵を想起した。日本書紀神

代記のリズミカルな名文がマザマザと記憶に甦って来た。

……乃ち髪を結げて髻に爲し、装を縛いて袴に爲し、便ち八坂瓊の五百箇の御統を以て、其の髻、髻及び腕に纏い、又背に千箭の鞆と五百箇の鞆とを負い、

振起て、劍柄を急握り、堅庭を踏みて股に陥し、沫雪の若く蹴散かし、稜威の雄詰を奮わし……近づく姿は、見れば見るほど、この文章と同じだ。黒髪は左右に縮ね

られて髻(上古の男子の髪型)になっている。ポリーリンやウイリアムのと同じ仕立の、股上はゆったりして膝下を絞ったズボン、成程、裳を縛って袴にしたという感じだ。ヘアバンドもネックレスも大きな宝右で輝いているが、これが五百箇御統の玉ではあるまいか。背中には短矢を沢山差した鞆(矢袋)を背負い、左臂には革製の鞆(弓射用具)を著け、手には半弓、腰には短刀、堅庭(大地)を踏む代りにスキーを穿いているが、文字通り雪を蹴散らし、ヤッホーと雄叫びしながら、降りて来るのだ。そして、男の扮装でありながら、実は女性と直感される点でも、女神の男装を敍するこの文章にかなっている。……

と、そこへ、ポーリーンの弾んだ声が

「あれ、アマテラスじゃない？」

と響き、続いて男の落着いた返事――

「はい、オオヒルメさまです。」

麟一郎がオオヒルマンをオオヒルメと聞いたのは、書紀に、天照大神の本名を「大日靈貴と号す」と書いてあるからだ。後に述べる様に、アンナ・オヒルマンが前史地球世界の征服者となった頃は古代ヤプー族は、彼女をオヒルマン貴女(※)と呼んでいたが、その後アンナ・テラスの諱名がイース国内に一般化すると、ヤプー族も彼らの宇宙の支配者なる女神を(少し訛って)天照大神と尊称する様になり、今迄の呼び方は廃れた。そして語部達の口承の中に次第にオオヒルメむちと転訛した末、書紀の編纂者には、本来アイルランド系の姓である O'Hillman がアンナ・テラスの個人名であるかの様に誤解されるに至ったのである。

麟一郎の聞き違えは、文化史的由来から無理もなかったし、又、偶然正しい識別を得ていたわけだったのだが、彼自身には馬鹿げた虚妄としか思えなかった。

――幻覚だ。夢なんだ、これは、

(※註。大日靈貴の貴の訓に書紀は武智の字をあてている(巻第一)。本居宣長は、師説を合せて、「貴とは女であり、女は美である」と説いたが(古事記伝六之巻)、真義の半ばしかいい得ていない。古代ヤプー族は美しいイース女の武勇と才智を崇めて、彼女らを武智と呼んだ。そして、白人であるというだけでヤプー族は彼らを貴族としたから、むちの語は貴婦人の意義を得た。つまり、オヒルマンむちとはオヒルマン貴女(Lady O'Hillman)の意なのである。――イース人の直接支配が止むとこの意義は廃れたが、代って革鞭を意味する様になった。棒や竹の笞しか知らな

かったヤプー族にとって、革製の鞭はイース女性の象徴だったから持主に代ってむちと呼ばれる様になったのだ。

窓から飛び入って来るかと思う勢で一気に滑り降りて来たアンナは、降り切った所でクリスチアニアの妙技を見せ、颯々と視界の左に去った。その瞬間、彼女の足の下にある裸形の人体？――唯のスキーではなかった――が見えた。然し、それが何物であるかと思いつく巡らす間もなく、クララの関心は、帰着したアンナが服も更えずにこの部屋へ駆け込んで来る方に向けられねばならなかった。

「お待ちになった？ いえね、黒獣狩猟に御案内しようと思って、下見に行ったら、ひどく手間どっちゃって……」

あけすけで気さくな声が話し手の姿に先行した。続いて現れたアンナ・テラス……

輝く様な美貌という形容は、屢々乱用せられるけれども、現実には、光輝という印象を人に与える顔は滅多にあるものではない。然し、今クララの眼に映じたこの有名な美人の顔は――化粧した様にも見えないから、皮膚の生得の性質なのだろうが――正にその形容に値した。桃色の肌が内側から光っている感じなのである。ポーリーンの様な純粹の金髪でなくて、茶色で長くうねって肩まで届く豊かな頭髮。体格はグラマーでない。豊満というより引き締った肉附である。身長はクララ位だが、目鼻立ちは大柄で、長い眉の下に圓な緑色の眼、立体幾何学の標本の様な線を示す希臘鼻、横一文字の紅唇……一つ一つを取り上げれば難もあるが、配置の妙に見事な調和を得て一目見たら忘れることのできぬ妖艶な美貌を形造っている。若い顔ではない。小皺一つないが人生経験の数々がどこかに痕跡を残していることは争われない――然、何歳位かは見当もつかない。肌の状態だけからいえば三十歳で通る顔である。いや、肌の光輝が年齢のことなど考えるのを忘れさせてしまう様な年増女の顔なので

ある。

先刻足の下に踏んでいた物と弓射具（弓、靱、鞆）を置いて来ただけで、服装は変わっていないが、アノラックの後襟から黒い頭巾が背にぶら下っている。よく見ると、黒髪の髪に目鼻附きの覆面をつけたものだ。左右に結った髻が耳を掩う様になっているらしい。ヤプーの頭皮顔皮を剥いで作った畜人皮（一六章一節）の覆面帽とまでは分らなかったが、先刻滑降中黒い頭髪をしている様に見えたのはこの新型頭巾を被っていたのだ、ということは察しがつく。――部屋中に良い匂が立ちこめて来たのは、イース人の例として独特の個^{パーソナル・バルヒューム}人^人香を身に着けているからであろう。

ポーリーンの母アデライン卿とは親友の間柄で、彼女を幼い時から知っているアンナは、懐しそうに抱擁接吻して、

「御機嫌よう、ポーリー。お母様もお元気で何よりね」

「ええ、お蔭様で。それに今日はまた無駄なお願いをしちゃって……」

「良いのよ。暇を持ておましてるんだから。……富士山へは暫らく降りてないの。今日は久し振りの降臨で楽しみにしてる……」

「お願いしますわ。ところで、こちらの二人を御紹介します……」

金色のマニキュアをした暖い手がクララの手を握り、緑色の瞳が微笑を堪えて彼女の視線を受けとめた。慈愛が肌の光輝と共に肉体の内側から溢れでて、周りの人間を包んでしまう様な、暖い平和な雰囲気の主だと感じられる。先刻山上から弓矢を携えて滑り降りて来た時の雄姿から発散していた激しい気魄の主と同一人とは、ちよつと考えられない様な気がする。アンナ・テラスの和御魂、荒御魂（神霊の両作用に対する神道用語）の使い分けは、高い天賦と長い体験に基く人生智に支えられていて、クララ程度の人生経験で

は近ずき難い程の円熟境に達しているのだ。ともあれ、クララは彼女から、単なる社交技術の産物ではない優しい愛情を感じ取り、肉体ではまだ三十才の若さを示している女性に対し、まるで昔祖母の膝に抱かれていた時の様な懐しさを覚えたのだった。

ウィリアムも同じ様な親しみと気易さをアンナに感じたらしい。男に似合わぬおてんばな性質（一四章二節）も手伝ってのことだが、初対面の挨拶もそこそこに、いきなり、彼女に著作の進捗状況を訊ねたものだ（同節）

「回想録の第二巻はもうお書きになったんですか？ 出版はいつ頃で？」

回想録というのは、一昨年第一巻を出してソン・フィクション部門のベスト・ブックになった『妾達姉妹は神話となった』のことだ。

「まだ執筆中よ。本になるのはいつのことやら……」

アンナは笑って答える。

「スサノオは結局どうなるんです？」

「そんなに先が待ち遠しいの？」

「ええ、子供見たいですけど……」

「じゃア後で少し話してあげるわ。狩場まで登る時にしましょう。」

アンナは気軽に約束をして、傍に控えたレイノオを手招き何事か申し渡した後、客人一同にいった。

「さア、皆さんを狩場に御案内しますけど、その前に、一杯ソーマを飲みましょうよ」

長椅子の中では麟一郎がこれらの一部始終を見ていた。場景の移り行きが常に一定の視点からなされていることから、彼は、この幻覚がクララの胸の辺にカメラを置いて写したテレビ画面に似ていることを感じていた。場面の推移は、夢の様に唐突でもなく、映画の様な転換技法も持たない。単純で合理的だ。ただ、内容が従いてゆ

けない……

女の足の下にはスキーの代りに俯伏せた裸形の人体があった。その女の頭上の髪の色や形から男装した古代日本の女性を想像していたら、何と女は、無造作に、頭の皮もろとも、顔の皮を脱ぎ捨てた。そして、その下から現れ出て来たのは黒髪の日本人どころか輝く様な美貌の白人女性の顔だった。等々々……

——やっぱり幻覚だ。悪い夢を見てるのに違いない。

自分にそういう聞かせ、そう信じることで理性を保つのに精一杯の麟一郎である。

それに、余り気を奪われていると、クララへの祈念がおろそかなり、^{てきじん}靦面に肉体的苦痛が襲って来る（二五章一、三節）。麟一郎としては、クララのこと以外にはなるべく思考を節約したいのだ。だから、裸形の人体を見て「あれもヤプーだろうか」と考えたり、頭や顔を皮剥いたのを「結局あれは変り型のアノラックの頭巾^{フールド}だったんだな」と納得したり、白人女性の光輝ある美貌に驚いて、例の「大日^{おおひるひ}雲貴^{のむち}と号す^{まお}」という文章の続きに「此^この子^{みこ}光華^{ひかり}明彩^{めいさい}にして^{あつち}あつち^{あいたてり}あいたてり^{あお}あお」とあるのを連想したりする程度の反射的な感想は持つが、それを分析する余裕がない。それに場景も刻々に変わる。我々が、映画の一場面で立ち止れず、次々の場面毎の印象の受け入れに追われてしまうのに似た受動的な体験なのだ。

然し、彼が発狂してしまわない限り、こうした見聞でも、積み重ねられてゆく中に、麟一郎に真相を悟らせるだろう。何故なら、彼には日本神話の知識があるから、深く考えなくても、該当する事物への理解と認識は得られる筈なのだ。例えば、ウィリアムがアンナに対して訊ねた中の「スサノオ」の一語は、クララにはまだ無意味であるが、彼の脳髓を再び激しく刺戟したのである。……

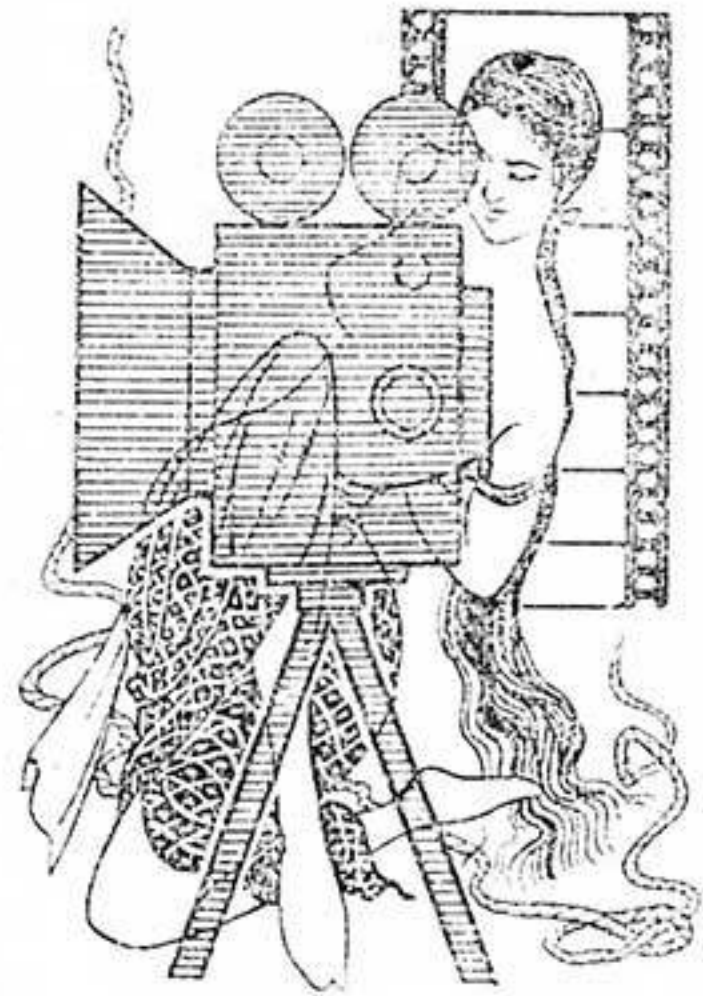
然し、思えば、幻覚だ、夢だと信じている方が、彼には幸福かも知れない。彼は自分の身に降り掛った様な家畜化の運命が未来世界において日本民族全体を襲ったらしいということを、円盤艇内でのポーリーンのヤプー論議（五章）以来、臆けながら察知しているのだが、それを不当な抑圧と観ぜしめる民族的自尊心の根柢には、万世一系の皇統を生んだ、美しい伝承の神々への愛着があった。さればこそ留学に際して記紀万葉を携えることを忘れなかった彼なのである。日本神話の真相を知ることが、彼の人格を支える最後の民族的プライドをも破壊してしまうことにならねない。例えば、今彼がアンナを一見して連想した「光華明彩^{ひかりめいさい}」の文字にしても、彼は美貌の形容として借用した位のつもりだが、実は古代日本人が彼の見たその同じ白人女性の美貌に彼同様魅せられて「日の女神^{ひのめがみ}」と崇め、その光輝に讃嘆して使用した表現で、借用どころか、正に当のアンナに捧げられた、現実^{じつじ}に彼女に所属^{しよく}する形容なのだという真相を知ったら、彼の連想はもっとも苦いものであっただろう。

だが、真相がいかに苦くとも、遠からず麟一郎はそこへ到達せねばならぬ。彼の知識と知性は、真実の見聞をいつまでも幻覚として自己欺瞞^{みごも}することに堪えないだろう。そして更に思えば、今後クララに飼育されるヤプーとして生きねばならぬ彼の本当の幸福の為に、真実の苦い杯^{にが}を少しでも早く飲み干すことがむしろ必要なのだ。白神崇拝^{しらかみこうはい}の信仰に悟入^{あまてらす}する上には「天照大神は実は白人女性アンナ・テラスである」という史実の認識はプラスである。将来麟一郎がヤプーになり切って、白人種の家畜たるヤプーの生に安心立命する心境に達した時に問えば、彼は、その史実の知識あればこそ天照大神^{アマテラス}への崇愛の念を失わずに来られたのだと、それを知ったことを感謝して語るに違いないのだ。

—正月映画から—

—女優初縛り—

大河原珠樹



▽旗本退屈男・謎の南蛮太鼓 (東映)

女優名不詳

老中が怪死を遂げた。犯人はキリシタンとの憶測のもとにキリシタン信徒が次々と逮捕される。高札の中央に「I・I (アイリス・イン)」して、若い町娘風の女が細紐で帯のあたりを二巻、後手に縛られて目明しにこずかれながら連行される姿が小さく写った。

▽旗本退屈男・謎の南蛮太鼓

(東映) 山東昭子

由井正雪の遣児道雪が老中酒井忠勝らと図って將軍暗殺のため清国曲戯団へ綱吉を招くこれを知る早乙女主水之介の妨害を阻止するために曲戯団は主水之介の妹菊路を拐わかし將軍の面前で箱詰めにし、剣刺しの曲芸になぞらえて刺し殺そうとする。中国服に緑の布で猿ぐつわされて連行、箱詰の前に男達は頭に彼女を捧げて箱に納める。刺し込まれた剣が鼻さきをかすめる。僅かに身じろぎする菊路。ここらは縄目は見えないが、何かの形で縛られていることを暗示する。

▽殿さま彌次喜多・捕物道中

(東映) 桜町弘子

互に城を抜け出した二人の若殿、弥次さんと尾張宗長、喜多さんこと紀伊義直、その宗長の見合相手で義直の妹の鶴姫が、とんだ文学趣味から海賊退治をする二人の活躍が見たいと二人のいる野中の一軒家へお忍びでや

って来る。二人はジャマになる鶴姫を物置の台の上に縛りつける。バタついていやがる姫に豆絞りの手ぬぐいで猿ぐつわ、太い縄で胸をグルグルと五巻、脚の膝下あたりを二巻して仰向けにころがして出て行く。胸の縄がゆるいので身もだえすると体だけ動いて縄がそのままなのが気がかり、救いが来た時には中ばとけかかっている有様なのがどうも不満でならなかった。

▽大盗小盗 (松竹) 泉京子、富士真奈美

海賊丸末屋平六の女房のおきく(泉)とその家の小間使いで、実は親を捜している奉行の娘のお里(富士)の二人が磔にされる。腹黒い同心横川が海賊と内通していた自分の罪の消滅に、奉行の留守を幸いと独断ではかったもの。人の好い昔の悪党仲間の平六、吉、平六の女房おきくの三人を「ところ払いですます」とだまして牢に入れ、「街はずれで解き放つてやる」と本縄をかけて街中を引廻す。泉京子のおきくも鼠色の囚衣、束髪姿で静かに手を後に廻して縛られ、牢から奉行所の表まで徒歩で、そこに待っている裸馬に、横座りに乗せられて引廻しにあう。一重縄だが本縄縛りで悪びれず胸をそらして馬に乗っている泉京子の肢体が素晴らしい。

一行は矢来囲いの刑場へ送り込まれると、そこにはすでに前夜父親の奉行の元へ行ったはずのお里が途中で横川同心につかまりこれ

も囚衣のあわれな姿で磔柱に縛りつけられて悶えている。小柄な体に嚴重な縄目が胸へ菱型、続き縄で胴を巻き、次いで腰から太股のあたりへX型、最後に足首を二重にそれぞれ縦柱に縛って身動き出来ぬ姿。ただ手首の縄だけは二重だがゆるく、折角の本格的なハリツケ縛りに大きな汚点となっていたが、ともかくこの悲惨な姿に、おきくもやがて同じ運命とされる。ただ小柄な富士は横木の位置が肩より高いので腕がたるみ勝ちだったが、上背のある泉の方はピッタリ体にあっていた感じ。やがて手下の海賊達が助けに来て槍突き寸前におきくは柱からすぐおろされるが刑場は乱斗騒ぎ、事情を知った奉行がそこにかけて騒ぎ落着。そしてお里は磔柱の上から親娘の対面に喜ぶ。この間、引廻しから刑場のシーンはかなり長時間だし、ことに最初からハリツケにされて最後まで縛られ放しの富士真奈美は大変な御難？ だった。

一部雑誌に紹介されていた、おきくは刑死するというストーリーは変更されていることも書き加えておこう。

▽大暴れ東海道 (松竹作品) 瑛峨三智子

岡崎十五万石のお家騒動に巻き込まれた江戸っ子金さん事遠山金四郎とその情婦お直が悪家老一味に捕わり、城中の牢に縛ったまま押し込められる。細引で胸をゆるく二巻の化粧縄、ただ面白く思ったのは腕ぐめに胸全体

を巻いた縄の余りで、またこの腕あたりを二巻づつ巻いていたが、これが右腕は外巻、左腕は内巻と双方巻き方に違いがあった。

▽弁天小僧 (大映作品) 青山京子

病気の父の薬代かせぎに武家屋敷へ腰元奉公した孝行娘のお半が、好色の主人に云い寄られるが、これをこぼんだために土蔵の中につながれる。麻縄の中位いのでグルグルと二巻の後手姿、暗い土蔵の中で縄尻は柱の金環につながれ、痛々しい姿で座っている。ほんの1カットだったが、これを側面から写したカメラ・アングルがよく、印象的な場面である。

▽弁天小僧 (大映作品)

近藤美恵子

青山京子

悪旗本、鯉沼伊織の策にかかった浜松屋が密輸の罪をきせられ、それをつぐなうために娘お鈴を所望される。さきに弁天小僧に救われたお半は、この家につとめお鈴の世話をしている。二人を救けるため、弁天小僧らが偽の興入れをやらす間、二人は隠れ家へ行くが、そこをまた悪侍達に見つかって、二人とも縛られ手ぐめにあいそうになる。この二人の縛られ方が、また珍らしく、細縄でグルグルと三、四巻胸を巻いた後手姿、その二人の縄尻が継ぎ合わされているので、悪侍達が近づき、二人が互に左右へ逃げようとする時に、中の縄が両方に張り、二人ともギツシリ

縛られた後手がみえる。侍の一人が張った縄の中央を斬り、二人がよろめくところなど芸も細やか。ただ青山京子の方は最後まで後手の縄が解けないが、近藤美恵子の方は身もたえする中に後手首の縄が解けて自由になる。そうそう二人とも青山は白地に青の絞り模様近藤は赤地に白模様の布で猿轡されていた。

▽決斗街 (松竹作品) 青江奈美

めったに見ない現代劇で、珍らしく縛りシーンに出会ったので紹介。しかも椅子に後手縛りで縄目もこく明にみられた。街の二つの暴力団の勢力争いに巻き込まれて兄を失った桃子が暴力団、坊原一家に街の明朗化を図ろうとする正義漢、雄二(大木実)をおびき出す人質として捕われる。そしてヤクザ同志が決斗する間、椅子に縛りつけられる。白いカイデイガンの胸へグルグルと細縄で数巻、椅子を後抱えの形で後手に手首も雁字搦目に縛ってあった。

▽続底抜け忍術合戦・俺は消えるぜ

(東宝) 環三千世

前編で徳川の秘密から大阪城の絵図面を奪い返した中浜白雲齋の娘の忍が、再び絵図面を奪われる。それを持っているのは秘密の軍用道路をつくっている徳川の家臣、そこには忍とは忍術の弟子で間抜けの平助が捕えられており、忍がこれを助けに駆けつけるが敵の手に忍術破りの鏡があって忍術がつかえず

正月の時代劇映画の

縛りシーンから

嵯峨美也子

今年の正月の邦画陣は、テレビ攻勢に対抗のためか、各社作品の時代劇には必ずといってよい程、迫力のある「縛りシーン」を採入れてあり、愛好者の目を楽しませてくれた。

だが、何と云っても圧巻は、黒沢監督の「隠し砦の三悪人」で、馬上での三船敏郎上原美佐、兩人の縛られ姿は立派なものであった。

とくにズブの素人から抜擢された上原美佐が、亡国の主人の姫、雪姫という大役で敵に捕えられ、牢の中でもギッチリと太縄で縛られ、最後は馬上の縛られ姿で引廻しという大役。この一作のみで彼女は銀幕を去るという。この縛りがコタエタと解するのはウガチ過ぎた見方か。だが馬上でも氣

の毒な程の緊縛ぶりであった。これも新人樋口年子が秋月領の百姓娘に扮し、人買いから買戻されたのはいいが、三船らと共に捕われ、縛られて路上をコヅカレながら引かれてゆくのも痛々しかった。

松竹は高田浩吉の遠山金四郎もの「大暴れ東海道」。強い筈の金四郎が、多勢に無勢で、嵯峨三智子の女スリお直と共に捕えられ、縛られ牢屋へ……。ここで嵯峨が、縛られた不自由な身で、恋しい浩吉の方へにじり寄るシーンはさすがに色気満点、スタイルも良く目を楽しませた。うまいものである。

大映は長谷川の「銭形平次捕物控・雪女の足跡」。今回の女目明しお品は香川京子で、最後に田舎から出てきた中村玉緒のお

捕えられる。太い縄でグルグルと三巻されてひき据えられる。無論、前編と同様に前髪だちの若衆姿である。

▽次郎長意外伝・灰神楽木曾の火祭

(東宝) 横山道代

これは予告編でみたものだからくわしくは書けぬが、ともかく町娘が悪親方に梁から吊し責めにされる。胸と胴をそれぞれ一重だが太縄でグルグルと巻いて、その縄尻で後手縛り。そして別の縄をこの太縄につないで二尺ばかり本当に吊り下げていた。体がユラユラゆれながら回転するのでトリックでないことは間違いない。

▽銭形平次捕物控・雪女の足跡

(大映) 香川京子・中村玉緒

盗賊花蝙蝠一味に拐かされようとするお光(中村)を、女目明し石原のお品(香川)が助けようとするが多勢に自らも捕えられる。花蝙蝠達は夜暗にまぎれて旅芸人をよそおい江戸から逃がれようと図るがその荷車の一つに手ぬぐいで猿ぐつわされ、太縄でギッシリ縛られて氣を失っている二人の娘が乗せてある。香川京子は久々の縛られ役である。

▽いろは若衆・ふり袖ざくら

(東映) 美空ひばり

男を装った鐘鬼の金兵衛の娘お菊が、旅すがら知り合った女道中師お六の妹の小鈴を助けに悪親分一味の中へ単身乗り込んで捕えら

光と花蝙蝠の一味に捕えられ、大八車の上に縛りつけられて運ばれて行くとする。そこへ駆けつけた平次に救われるのは定石通りだが、このところお品が、山本富士子のお品と共によく縛られる。かつては恋女房のお静が、いつもよく拐かされたのだが同じ手法は使えぬらしい。これで阿井美千子のお静は平穏というところ。

東映は時代劇専門だけに、縛りシーンは多いが、最近、迫力のある場面がないのは監督の意欲不振のためか。惜しい！

錦之助、賀津雄兄弟の「若殿さま弥次喜多捕物道中」で、才女気取りの鶴姫、桜町弘子が、グルグル巻きに猿ぐつわで台上に横たえられるが、お姫様姿の上に荒縄だから、かけにくいとはわかるが、はじめからグサグサの縄の掛けようは情けないきわみだ。どうせ縛りシーンを見せるなら、もっと忠実にギッチリと縛るべきだ。

大友の「丹下左膳」では、おきまりの長谷川裕見子の櫛巻お藤が、悪人共に拐わかれて、磯にされて硫酸をかけて殺されかけようとする。長谷川には何ともいえぬ色気があり、一寸ハッとさせられる。

右太衛門の「旗本退屈男・謎の南蛮太鼓」では、山東昭子の菊路がかどわかされ、箱の中に閉じこめられ、殺されかけるが、猿

ぐつわ程度でこれも頼りなかった。もっと迫力を盛り上げるための危機感を感じさせねば面白くない。

最近では、里見浩太郎の「金獅子紋ゆくところ・魔境の秘密」の、花園ひろみ扮するアイヌ娘のマザザキの刑などは工夫されていた。近く封切りのもので期待されるのは、松竹の「伝七捕物帳・女肌地獄」で拐われた花嫁が、ロウ人形にされ、地獄極楽の見世物にされたりする。酒井監督は「大いにエロ・グロのショッキングなシーンにする」とハリキッている。彼の第一作「大盗小盗」では、泉京子、富士真奈美の、美しいハリツケ姿を見せてくれたから期待出来るだろう。一日中ハリツケられた彼女らには気の毒だったが……。

娯楽作品「高丸菊丸」にも、磯姿、拷問など色々盛込まれている。丸根監督の演出が楽しみ。

また、東映の千恵蔵「たつまき奉行」で佐渡の金山へ混り込んだ与力の娘、美鈴が敵の海賊に捕り、仲間の名を云えと拷問される。縛られて鞭打ち、その他の責めを受けることになっている。女優は、初の時代劇作品「旗本退屈男・謎の南蛮太鼓」で清新な味を見せた、佐久間栄子。相手役は東千代之介、監督がマキノ雅弘だけにコッテリ撮ると思われるが、楽しみである。

れる。中縄でグルグル四巻ばかりされて後手縛り。続いて物置に閉じ込められるが、足を投げ出した姿で縛られたまま座っている。その縛り方が、またしごくザッパでグルグルと胸を巻いてそれを胸元で縛り、そのまま縄尻を前にたらしめて両足首を揃えて縛っている。まったく観衆を小馬鹿にしている。

▽続月光仮面・魔人の爪

(東映) 月丘千秋

これも予告編でみたものだが、その姫とおぼしい松島トモ子と二人が中縄でグルグル巻の後手にされ、怪人達から責められるところがあった。

このほかに正月映画で縛りのなかったものを念のために紹介。

▽赤胴鈴之助・どくろ団退治(大映)▽遊太郎巷談(大映)▽大暴れ女俠客陣(新東宝)▽花吹雪・喧嘩笠(東映)
なお▽弥次喜多道中双六(東宝)は見落している。

(お断り)

三月号にその第一回を掲載しました藤木仙治氏の「乳房に火をつけるな」は今月号に第二回が間に合いませんでしたので次号五月号に掲載いたします。題名、乳房に火をつけるな第二回「地獄の誘惑」藤木仙治。

◎本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品◎

||告白|| 忘れ得ぬ人々

須藤 律夫

はじめに――。

数年前の夏、「我が告白の断章」と題して愚かしい告白の手記を寄せたことがあった。何時だったか中康弘通氏も指摘された通り、それは文字通り纏りのない断片的なものだったが、今回とて勿論その範ちゆうを出でない。只、私はどうしても書いてみたい――と言った。言わば訴えるような気持で書き始めてみた。現在、青壮年の方々には、或は一寸時代的な間隔のズレが感じられるかも知れないが、又考え方によってはその時代を知るよすがともなるうか。そんな訳で総て実名を使った。私は登場の方々が今日尚お健在で居られ広い日本の何処かで読んで下さることを念じている。

私の生れたのは東京の神田、表猿楽町と、子供の頃よく母親から聞かされていたが、もうとうの昔にそんな町名は無い。生れて間もなく浅草寺（観音様）の近くに移り住むようになった。父はその頃

仁天門の近くで、一寸した呉服屋を営んでいたのだが、母は或る事情のため別居、神田で下宿屋をやっていた。勿論みんな人づてに聞かされた話である。普通に行けば呉服屋の若旦那になるべき身も、父が経営に失敗してからは、転々として住居も変り環境も変りしたのだが、そんなことが私の偏重した習癖に深い関連があるのかも知れない。浅草の馬道から、田町、そして吉野町と僅かの間に度々住所を変えたのだが、私の記憶に残るのは恰度その頃からのこと、つまり私の五、六才頃からのことだ。今、年代を追って想い出すままの事実を拾い上げてみたが、その何れもが私の幻想に対する、愚かしい心の遍歴である。

× × × × ×

吉野町の家は電車通りから細い路地を入った奥の方で、建物も古い平屋だった。母は商家の娘だった故か大変な芝居好きで、私も度

々宮戸座（その頃——大正十年——浅草公園の近くにあった）などへ連れて行かれたが、どうしたことかその頃から、切腹に異常の興味を持たされたことは事実である。忠臣蔵の内匠頭の切腹や、勘平の腹切りなど殊更らに印象に残り、又或る芝居で、大事な密書を追手から護るために切腹し、その密書を腹中に匿すなど、私の最も興味を惹いたものだった。下題は確か「血達磨」とか記憶しているがそんな感激をまざまざと思い出した或る日、私はふと、自分も切腹の苦痛を味ってみたいような衝動に駆られたのである。家人の一人も居ない真夏の或る昼下りであった。鏡台に向ってシャツをまくり上げ、抽出しから紅い木箱に入った日本剃刀（その頃西洋剃刀など私は見たこともなかった）を取り出すと、私は自分の小さなお腹を撫で廻した。真白なお腹の真ん中に、円いお臍が一寸凹んで、覗き込むと、ひだの裂け目に垢が溜っている。そのお臍の少し下を私は余り深く切らないよう、恐る恐る左脇腹から右へと剃刀で撫で廻した。子供の頃の表皮は薄いのか、紅い絹糸を布くように、一筋の血の線が浮かび出る。続いて更らにその下をもう一筋、途切れ途切れに滲み出るその血汐を見ていると、私はホッとしたような或る陶酔感を味うのだった。それは芝居などで見る切腹とは違った或る種の興奮であつたかも知れない。余り深く切ってはいけなと、或る時はお腹の皮をつまみ上げたりして、そんな秘かな愚かしい欣びが何回か続くのだった。

家の前の塀を越えた向う側は米屋の裏口で、米屋には私と同じ年頃、つまり七、八才の女の子がいた。その頃の子供の遊びは、石蹴り、綾とり、お手玉など、男の子なら独楽や、輪廻し、メンコなどだったが、或る日、塀の節穴から覗くと五、六人の子供たちが変わった遊びをやっている。

「さあ、みんな並べよ。若し出来なかったらどうしよう」

「出来なかったら一回抜けるよ」
「そんなの駄目だよ。出来ないもんは、これでお臍ツツ突くのがいや」

一人の子が米屋の使う鉤の手で、自分の臍を指しながら言うが皆賛成して笑い合った。ゲームの輪投げはありきたりだが、その罰則が変っていたのだ。その結果、米屋の娘がその罰を受ける破目となり、いやいや襦袢の前を展げ、お臍をずり下げると恥かしそうに腹部を露出した。

「お前の、随分深いお臍だな」

傍らの男の子が、鉤の先をその中に突っ込みながら言う。周りの子供たちは、はやし立てて笑った。それは私に切腹を連想させた。そして私が「お臍」にも執拗な興味を持ち始めたのは実にその時からだったかも知れない。

銭湯は電車を越えた向う横町に入り、山谷堀の流れに沿った橋のたもとにあった。文字通りの銭湯で、銭湯は確か大人五銭、子供二銭だったろうか。勿論タイルなど無く、板敷きの流し場である。カランなども未だ無い頃で浴槽の外に上り湯の槽が一つ、男女両側から汲み出せるようになっていた。或る日、私が母に連れられて行った時のことである。私たちがもう上ろうとした時、一足先きに上る隣りの家の小母さんが湯桶に一杯の湯を汲んで母に差し出した。「お先きに」と声をかけながら、それは同浴した知人に対するその頃の礼儀でもあったのだが、むしろ今日で言うエチケットであろう。否、そんなことよりも、私はそのとき目の前に見た小母さんの青白いお腹に、まん丸に深く凹んだお臍が、どうしても目にこびりついて長く離れなかった。殊に深さのためか或はゴマのためか兎に角お臍の黒さは今も強く印象に残っている。

山谷堀の学校に上り一年生の頃、銭湯などで学友に逢うと私は必ず彼の臍を見た。そして自分の好みに合ったと言うか、つまり真っ黒な奥深く引っ込んだお臍など見ると自然と親しさが湧いて来るのだった。そうした学友の中に三浦と神谷とが居たが、私はどんなに彼等のお臍を美しいと思ひ又慕情を感じたことだろう。三浦は仕立屋の息子神谷は文房具屋の倅だったが、余り親しさも増さない中に、大自然の脅威、あの関東の大地震がみんな離ればなれにしまった。その少し前の事である。私たちの住む露地の中に橋本という姉弟が居た。母は既に亡く、人の噂では父は博徒とか言われていたが勿論、読者には何んの関係もない。或る日、弟の方が私に一匹の小鮎を呉れたのが縁となり上り込んで遊ぶようになった。その日も私たちは何をして遊んでいたのか判然とした記憶はない。ふと弟の方が何処からか錆びついた短刀を持ち出して来ると死んだ鮎の腹を割き始めた。否鮎ばかりではなかった。その事が彼に切腹を連想させたのだろう。短刀の刃先を手拭で、くるくるツと巻くと

「おい、見ろよ、俺の切腹」

そう言って彼は立ったまま切腹の真似をし出したのだが、そのとき姉の方がその短刀をもぎ取ると

「違っわよ、鉄ちゃん。切腹はこうするのよ」

そう言って前を寛ろげ、中腰になると腹切りの真似をし出した。獲物が白布を巻いた短刀だった



故か。それは全く真に迫っていた。そしてその時以来、私は女性の切腹に、より多くの興味を持つようになったことは否み難い。

震災の劫火を逃れて、私たち家族の移り住んだのは牛込の富久町であった。その頃、罹災者と言う名の下に温かい世間の同情も受け余丁町の小学校に無事通い出した私。然し切腹と臍窩に対する、暗いかたくなな偏執は絶えず付き纏っていたらしい。今想い出すままに二、三その断片を拾ってみても、私には剪り立ての花のように鮮烈な印象が残されているのだから……。

× × × × ×

学校から帰ると「ベ―独楽」に時を過ごすのが私たちの日課のようになっていたが、床を囲んで向い合った荒木という男の子が、何時も前をはだけて瘦せたお腹に菊花型に凹んだお臍を出していた。彼が腰をかめる度に、そのお臍が伸びたり、縮んだり、さながらお腹の表情が怒ったり笑ったりしているようで、私にはそれを見るのが結構、楽しいものだった。ベ―独楽に飽きが来ると近くの東京医專に出かけ、ピンポン等によく興じたものである。其処の賄婦の息子（確か男女という姓だった、珍らしい名前である）も時々、私たちと一戦を交えたのだが、卓球が熱して来ると、彼も同じようにシヤツがはだけて、大きな真っ黒なお臍が飛び出す、これも私には強い印象となって残っている。又私たちの遊び仲間山田という姉妹が居た。既に母を亡くして父に育てられていたのだが、姉はその頃十三才位だったろうか。妹は十才位で姉よりもずっと痩せていた。或る夏の夕暮れ時、何かの事で二人は互いにお臍を見せ合っていた。姉のお臍は大きく深く、妹のは小さく浅い。恐らくはそれが不満だったのだろうか。彼女は指でお臍を押し展げようとした。すると、「あら、君ちゃん。お臍の垢を取ると風邪をひくわよ」

姉は慌てて妹を制止したが、私には微笑ましい想い出である。

× × × × ×

学友には柳沢とか茅森などが居た。柳沢は当時、級長を続けていたが、多分五年生の初め頃だと思う。身体検査で猿又一つになった時、私は彼のポックリと凹んだ深いお臍を見てしまった。（と言っても別に悪い事をした訳ではないのだが、私は只羨望に似た感じを味わっただけである）茅森は私と机を並べていたのだが或る日の放課後、私が何時ものように帰り仕度をしていると、

「おい、須藤。見ろよ、俺の臍！」

そう言うとは彼は逆手に握った鉛筆のゴムの方で、頻りに臍の穴を搔き廻し始めた。私は期せずして切腹を連想し、しばし心を楽しませたことである。

或る寒い冬の夜、板弁天の近くの銭湯に行くと紅顔の美少年、浅井が入浴していた。私は彼よりも卓球などの関係で彼の姉をよく知っていたのだが、兎に角、姉弟とも揃って珍らしい美しさだった。私が流し場に入って行くのを認めると、浅井は笑いながらお臍を指さし、

「今、ゴマを取っているんだよ。僕お臍きれにするんだ」

そう言うて穴の中を搔き廻し出した。私は別に制止しなかった。制止するどころか強い衝動にかられて見ていると、浅井は丹念にゴマをほじくり、膝の上にのせる。私は、それがやがて洗い流されて行くかどうかを想像し、何とも言いようのない勿体なさを感じるのだった。

× × × × ×

小学校を卒えると、再び家庭の事情で南千住に移転を余儀なくされた。大正十五年の秋である。通り新町の或る畳屋の二階借で、私は昼間会社に勤め、傍ら近くの夜学校に通っていた。階下の畳屋には「芳どん」という職人がいて、間もなく私達は仲良しになったのだが、彼の蛤で浅刺を押し込んだような淋しいお臍には、正直好感



の時、叔父の話では昔は迎も躰が厳しく毎朝、膳部の前で切腹の作法を学ばされ、若しそれが上手く出来ないと食事も与えられなかったと言う。そんな訳で叔父の父は隅田川の向う（向島）に大きな邸を持ち、庭の池はその儘隅田川に連って、庭先から舟に乗ったまま花見に出かけたなどと私はよく聞かされたものである。然し叔父の代になってからは諸事万端上手く行かなかった。彼は米相場などに手

を出した結果、日本橋の繁華街にあった土地や家屋等を手放す破目となり、それから実には数奇な人生を踏みしめたのであるが、茲では余り関係がないので省略し度いと思う。

× × × × ×

その頃（昭和三年頃）南千住の裏長屋では、現在一寸想像も出来ない様な風景がよく見られたものだ。例えば——或る朝、私が何気

なく戸を開けると、前の家のおかみさんが半裸で軒下に洗濯物を干していたのだが、ふしだらにずり下った腰巻の為め、ゆったりとした腹部が現われ、その中央には恰度巾着の口を締めた様な大きなお臍が覗いていて私は、しばし呆然と眺めたものだ。又、或る夏の宵、私は裏通りの雑貨屋にゴム紐を買いに行った事があった。その時出て来たおかみさんは恰度行水を終ったばかりらしく、僅かに腰にタオルをまとった丈である。その為め両の乳も露わなばかりか、ポツカリと水の涸れた井戸の様に、円いお臍がびっくりする程深く凹んでいる。私は思わず凝視したのだが、猶よく穴の中迄覗いて見度いと思い、

『小母さん、これどの位の長さがありますか？』

大して要もないのにそんな馬鹿げた質問などした。

『そうですね、妾の腰の二周り位かしら』

そう言っておかみさんはゴム紐を、恰度お臍の辺りに巻きつける。それはほんの僅かの間だったが何んなに私の欲求を満して呉れた事だろう。尤もズロース等が一般に使われ出したのは昭和の初め、例の白木屋の火災で、女店員の多くが屋上からロープで逃げのびたので愈々その必要が痛感されたからである。従ってこんな事は日常の茶飯事の様なものだったかも知れない。

会社からの帰り道、電車を降りて家の近く迄来ると、佐々木と言う仕舞屋しむいがあった。其処には年の頃十五、六才の女の子と、二つ位年下の男の子とがいたが、その少女は仲々顔立が整っていて、今考えると女優山本富士子のような美しさだった。私は毎日顔を合わせるのが楽しみになったが、然し仲々言葉を交すきっかけもなく、又私はそんな勇氣も持ち合せてはいなかった。只顔を合せる度に彼女が微笑を送って呉れたのが慰めだったが或る日、偶然、私は彼女のお臍を見て仕舞った。それがどんな動機だったか私は今でもはっきり思い出せない。(恐らくは私が通りかかった時、彼女が恰度着物を着替えていたのではないかと思う)兎に角、私のイメージにあるような真黒な、そして深々とした彼女のお臍が、それ以来、長く私の脳裡に刻まれていた事は確かである。

私が〇高商夜間部二年の頃(十八才)母の他界が直接の動機となつて、又々渋谷の方に移転する事となった。場所は代々木の原の一角で、或る未亡人の家に姉と二人の間借生活である。未亡人には二人の娘があったが、人の噂では二人共他家からの貰い子で、その故か小母さん(私は未亡人をこう呼んでいた)は時々常軌を逸したいじめ方をする事もあった。姉は喬子、妹は美代子と言ったが、どち

らかと言えは妹の方が器量もよく、又体つきも成熟していた。姉は十八才で某薬学校に通学していた。

代々木の桜も散った初夏の或る夜、小母さんは何が原因でか、ひどく喬子を叱り、果ては彼女の髪を毛をつかんで八畳の座敷を引きづり廻した。その頃は連夜、小母さんはそうしたサジステックな虐待を続けていたので、私は直ぐ自分の部屋から飛び出すと、二人の仲に割って入った。

『まあ、小母さん待ちなさい! 喬子さん、一体どうしたんだ?』

小母さんは猶も娘の手をねじ上げようとするので、私は力強く跳ね除け、喬子を抱きかかえて自分の部屋に連れて来た。彼女は座つて只泣きじやくってばかりいる。乱れた後れ毛をかき上げてやり乍ら肩の辺から見るともなしに下を覗き込むと、はだけたブラジャーから両の乳房が半ば顔を出し、その下に腹部がゆるやかにくびれてお臍が幽かに見え隠れする。この時も私は言いようのない衝動に駆られ、その儘そつと手を離すのだった。

小母さんの娘達に対する激しい虐待は、それから暫く続いたがその度に私は何時も止めに入つた。そんな或る日、ふと茶の間を覗くと小母さんはまるで狂つたものの様に夢中で美代子を膝の下に押えつけている。美代子はうずくまった儘全く声も出せない。私は勿論、直ぐ躍り込んで小母さんを払い除けたのだが、理由を訊くと『だってお兄さん(私の事をこう呼んでいた)あたしにはどうしても飲めないんですもの』

そう言い乍ら美代子は、傍のコップを私に示した。当時、美代子は胸を患い、結核には石油を飲むとよい、そんな迷信が流布されていたので、小母さんは無理にも飲ませようとした、それが原因だったのだ。私は根気よくその非を説いたのだが、小母さんの頑迷さは救う可くもなかった。結局、美代子は総てを諦めたものの様に眼をつむってコップを口に運ぶと一口に飲み込んだのだが、泣き乍ら

全部を吐き出して仕舞った。それから二、三日経った或る日曜日の午後、美代子が私の部屋に宿題をききに來た事がある。

『そうさ、鯨は哺乳類なんだよ』

美代子の質問は夏休みの宿題“海の動物”に就いてであった。

『そうかしら。あたし海にいるからお魚かと思っていたわ』

『お魚は卵子から孵えるからお臍がない。蛙のお腹にもお臍がないの知ってるかい？』

『知ってるわよ、それ位』

『時に美代ちゃんにはお臍があったかナ』

正直に言つて之は私の誘導的な質問である。

『あるわよ、無かったら片端でしよ』

彼女は口惜しいのかワンピースを捲り上げると余り恥しがりもせず、柄にもなく大きく凹んだお臍を出して見せた。

『やあ、美代ちゃんのお臍、随分大きいね。それに中が汚れているよ』

『でも、お姉さんのお臍だって矢つ張り真黒よ。それに小さくて迎も深い。まるで漏斗じょうごみたいね』

彼女の言つた喬子のお臍、一度は見度いと期待していたそれにも私は間もなく見る機会に巡り合った。

庭に面して風呂場があったのだが或る日、私が水を汲もうとして裏の井戸迄行った処、風呂場の窓が開いて喬子が顔を出した。

『お兄さん、済みませんけど、その水、少しうめて下さらない？迎も熱くて入れないのよ』

『汲んでやるけど、持って入ってもいいの？』

『ええ、一寸待ってね……さあ、もういいわ』

私が風呂場の戸を開けて入ると、彼女はズロースを穿いていたけど乳房もお臍も丸出しである。すんなりと肉の締った、そして純白の腹部の中央に成程、何時か美代子が言つたような漏斗状のお臍が

びっくりする程深く凹んでいる。私は、ほんとうに美しいお臍だと思つたと同時に指を中深く突き入れて見度いような強い衝動に駆られるのだった。凡そ凹んだ穴には何か突込み度くなるのが人間の本能的な欲求だと、何時だったか何かの本で読んだ事があるが、その時辛うじて思い止まつたのも、私のフェミニストとしての弱さだったかも知れない。

以上の外にも、切腹や臍窩に對しての病的な迄に偏重した私の言動は無数にあるのだが、みんな大同小異である。そうした愚かしい自分の日常を、時々私は情なく悲しく思つた事もある。然し私には背徳であつたとしても罪惡とは考えられなかつた。例えば或る年の秋である。東京駒場にMデパートの運動会に招かれた事があつた。余興として私の見たのは女店員の劍舞、白虎隊である。

——十有六人屠腹して僵る。可憐な女劍士の切腹、周りの女性も熱心に見入つて、それは勇壯でもあり、又悲壯でもあつた。然しそんな時、私はその感慨の外に、自虐に連がる或る種の快感と欣びとを否めなかつたのである。

又、或る年の初夏、私は南房総に旅をした事があつた。海岸線の或る駅であんぱんを求めると同行の人達に分配したのだが私は、しばし喰べる事をためらつた。

『あら、須藤さんは召上らないの？』

同行の女性が訊く——然しふつくらとしたあんぱんの中央は形のよいお臍そっくりに凹み、然も黒胡麻さえあしらつてある。私は喰べる事も忘れて秘かに愛し、そしてかたくなる自分の眼を楽しませるのだった。私の求むる対象は倒錯と言うより、むしろ変質していったのであろうか。こうした痴呆不善の明け暮れの裡に、空しく心の旅路を重ね、何時か私は二十一才の春を迎えていた。然しその年の二月偶然にも或る女性との交渉が始まる。それからの道は又大きく變つて行くのだった。

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第九十四項

「ハーゲンベック猛獣シヨウ」

(於東京後樂園球場十二月二十八日ヨリ)

日本全国を珍らしい動物二百数十種をもつて巡回している世界動物博覧会という団体がある。一種の移動動物園といったものであるが、この博覧会が常打ちしているのが各国の猛獣によるシヨウである。ここに挙げたものがそれであるが、筆者は本欄で「マーブル・スターク夫人」という題でこのシヨウを紹介した事がある。其の後、スターク夫人は帰米したらしいが、在日中に可成りの数の調教師を養成して行つたらしい。彼女は最早や老令で実際の調教は出来ないらしく、只其の会得した貴重な体験による調教法を弟子達に伝え

て行つたことは、充分注目されてよいことである。戦前ハーゲンベック・サーカスが大学して来朝し、芝浦の仮設リングで上場した大規模な公演は未だに記憶に新しいが、画家の小野佐世男氏(故人)が自筆の回想録に記している通り(美神の絵本)女性調教の妖麗な姿は強い印象を観客に与えたのであった。其の時から曲馬はヨーロッパ風の雰囲気を持ち始め、曲芸に主点を置いた旧態依然たる日本の曲馬団も大きくその様相を変え始めた。「ヨーロッパ風の曲馬」とここにいる処のものは映画ローラ・モンテス(邦題「歴史は女で作られる」)の後半に示されるものが其の典型を描いている様に思われる。淫蕩と頹唐と華美とが奇妙に配列された別世界それが古典的な形の「ヨーロッパ風の曲馬」である。其処には人々の好奇心に訴える為の倭人、不具者の陳列がありサド・マゾヒスティックな趣好

に十分に合致する動物の調教の場面がある。宮廷文化のグロテスクの象徴である道化が、ここでは庶民の観衆の為に現われる。そして此の特異な雰囲気と華美な演出の要素は、屢々秘密上演による劇的な構成を持つ艶笑劇に取入れられた。現在でも、米国南部やアラブ諸国の中の或る部分では、曲馬スタイルによる実演が、往々にして秘かに上演されているという事である。こうした傾向は、未だ我国に於いての曲馬団の上演には、全く見出せないものであるが、上演に際しての流動的な演出が、旧来の寄席的な区分を設けた演出にとって代り、シヨウ的な要素、特に眼を楽しませる要素が増加していることが、その証左である。さて、世界動物博覧会であるが、本欄で特に説明を要するのはそのスターク夫人の弟子達についてである。特に、本欄で採り上げるのは其の中に二名以上の女性が存在する

ことについてである。其の中の一人に就いては、曾って本欄に挙げた事があると思う。彼女は以前N・D・C（日本デザイナー・クラブ）所属のファッション・モデルであった。N・D・Cの初期に、未だ原田良子、伊東絹子、森見光子、等の少数しかいない当時のモデルは可成り収入のよい安定した職業であった。筆者は、その第一回のファッション・ショウに参画したが、それは決して、現在の其の様なものでなく、一部の好事家と有閑夫人の一部との興味の対象でしかなく、ショウというよりはむしろ、サロンのようなものであった。此の当時モデルを志望した人々の多くは、可成りの勇敢さを持って此の世界に入って来たものであった。従って、彼女達の内の一人が、漸く生存競争の熾烈になって来たモデル界と訣別して、女性調教師としての生活に入ってしまったことは、強ち不自然であるとは思えない。が、全ゆる女性が羨望と嫉妬の眼を以って嘆息する服飾の世界の最も誇らしい地位から、一挙に土臭い動物との共同生活、それも一時として一箇所に留まることのない巡業の旅の連続、一時の精神的な惰性も非常な危険を伴う緊張の世界に身を投ずることは、余程の決意と嗜好なくしては出来得ないことといわねばならぬ。勿論、以前本欄に挙げたソ連モスクワ国立サーカスの虎使いマルガリタ・ナザローヴァ女史は以前ダンサーであったと

いう前例もあるが、この転身は注目すべきことに違いない。（ナザローヴァ女史については、ソ連映画「サーカスの芸人たち」に拠られたい。其処には、美しい色調と大画面とによって、現在世界第一の称を恣にするこのサーカスに所属する驚嘆すべき芸人——彼等はすでに芸術家と呼ばれている。——の華やかで完璧な演技と、その裏に秘められた生活の戦慄的な魅惑が述べられている。）筆者は残念な事にこの女性の名前を覚えていないが、彼女は、スターク夫人直伝の調教法によって此の猛獣ショウに出演している。彼女が演技するのは、アメリカン・タイガー・ショウという虎の演技であるが、かつて、イリイナ・ブルジーモヴァ女史について讃嘆の言葉を連ねた筆者は、再び、多くの可能性を暗示するこの事実によって、多くの空想をかき立てられるのである。もう一人は、熊の演技によって登場する女性であるが、彼女については全くその前歴が判らない。併し、男性にとってさえ、最も危険とされている此の職業に女性の加入が増加して来たことは、本欄の読者諸氏にとって、まことに喜ばしい傾向といわねばならない。

猶、このショウに冠されたハーゲンベックの名は、「ハーゲンベック動物会社」から買入れた猛獣のショウという意味で、有名な「ハーゲンベック・サーカス」の全部或は一部

の出演ではない。演技上、出演者などの面から、彼の有名な、小野佐世男氏が東京から岐阜までついて行って追い帰された、美しい女猛獣使いが所属していたハーゲンベック・サーカスとは無縁のものである事を附記しておく。大新聞社が後援しているこのショウに此の様なゴマカシが行われていることはまことに遺憾である。

復刊第九十五項

米映画「怪獣ドラゴドン現わる」

（日本語発声天然色）

メキシコを舞台に前世紀の怪獣の出現を中心にして繰り展げる三流活劇映画。何の為に貴重な輸入枠を用いてこんな映画を買ったのか、観客の側からも、興行者の側からも判断に苦しむほどひどいものである。物語も全くひどいもので、大体ドラゴドンなどという代物が現れる必要は更にない。メキシコの天地も全く利用されていず、役者は特に非道い出来である。其の上致命的な欠点は翻訳と台詞の拙劣なところへ、ヤッツケ仕事の日本語の吹き替えが、そうでなくてもつまらない作品を徹底的に滅茶苦茶にしている。特にバトリシア・メデイナを出演させているが、同系列の容姿をもっている大根女優イヴォンヌ・デ・カルロよりまだひどい出来である。とにかくそのメデイナの台詞からしても、「これで

私達はお友達になれるわ」などというバングリッシュの通訳みたいなものでは、演技が多少よくつたって何にもなりはしない。天然色シネマスコープを使って、どうしてこういう映画を作るのが大体一番判らないことである。

例によって、本欄は、この作品を作品としての価値から採り上げたのでは無論ない。妙に印象的なカットが点在しているからに他ならない。そのカットを説明する前に、筆者は読者の理解をたすける為に、同時に今後西部劇映画によって、興味あるカットやシーンを求められる時の参考に供する為に、得て其の道の経験のない人々が誤って伝えている点を指摘しようと思う。

女性の乗馬とサド・マゾヒズムとの密接な関連については、本欄や沼氏の手帖のみならず多くの寄稿家、投書によって述べられており、女性の乗馬という行為そのものと共に、其の行為に前後する予備的な心理と、行為とが相手となる対象者が、馬でなく人であると仮定したら、という間接的ではあっても比較的に容易くイマアジュたり得る連想によってマゾヒストにとって好個の事象であることは理解され得ることであると思われる。従ってその行為の中で、女性が跨り、打ち、蹴ること、そして鞭を以って支配、制御するということが、最も関心を持たれている事も容易に

理解されよう。但し、前掲の四つの原則的な行為の中で特に跨るということについては、現在の乗馬法が婦人用横騎鞍を余り用いない状況となった為に、サド・マゾヒステイクというよりは、むしろ観る者にも、騎る者にもエロテイクなものではない様になってしまった様である。

乗杉貴代子氏も、特に内股をしめつけることの愉悦を詳しく述べているし、乗馬の経験のある女性が特に裸馬に乗ることを何か恥ずべきことであるかの様に思っている事によっても実証出来よう。次に打つということ、実際に女性でも男性でも、乗馬の経験のある人特に、正式の騎乗法を習得された人には、簡単に判る事であるが、鞭は原則として騎乗者によっては使用されないのが普通である。鞭打を特に必要とするのは極端な高速を要求する時、調教不十分の馬である時、それから障礙物飛越の時の三つしか考えられないのである。通常、馬場馬術等では鞭の使用は禁じられる場合が多いのである。併し一方、初心者或は脚による扶助（馬に対して、方向、速度を指示する方法を総称して扶助という。）の不十分な者が、気紛れに徒らに鞭を使用する場合がある。特に生半可に経験のある外人女性にはその傾向がある。併し之等は当然変則的なものであって、鞭によって打つという行為は仲々実見する機会の少ないものである。従

って、女性乗馬に特にマゾヒストを喜ばせる要素を持つ光景を求める時、蹴るという行為こそ其の要素を一番持っているといえよう。蹴ることは、正式の習練に於いても常に要求される事であり、発動、加速、後退、回転の如何によらず、運動の変化に対して、必らず附帯するものであるから、その頻度は甚だしく多いのである。乗杉氏は、この蹴る事を特に重視して、蹴りつけるという表現を用いているが、この馬腹を蹴るという行為に適切な表現の見出せないことは残念である。

この蹴る行為は、拍車の使用によって更に正確な苦痛の伝達が行われる。拍車の使用は騎乗者の労力を十分の一に減じ、尚且その効果を倍にする事が出来ると考えられてよい。即ち、その包蔵する残忍度に於いて鞭と変らないものを持っているのである。従って、マゾ・フェティシステイクな見方からすれば高いヒールに付けられた拍車は、女性と残忍さを同時に表わしている最も印象深い存在であるといわねばならぬ。ところで、一九〇〇年初頭から、女性は拍車を使用しないという傾向が見られた。昭和五年に発行された平凡社の百科事典を翻いて乗馬服の部を見ると、女性はジョーバス用の靴をつけている事が明らかである。ジョーバス用の靴には拍車をつけないものである。更に一九二二年の米國百貨店（ボストン市内）の写真入り型録にも、

女体緊縛フォトE組

9×13cm印画紙焼付

- | | | | |
|-----|-----------|------|-----------|
| ES1 | ヌード緊縛集 | ES6 | あわや寸前 |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| | 三枚一組 二五〇円 | | 二枚一組 二〇〇円 |
| ES2 | 全裸悦集 | ES7 | 剥れたズロース |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| | 四枚一組 三〇〇円 | | 五枚一組 三五〇円 |
| ES3 | 臀 羞 | ES8 | 乙女のすべて |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 花坂 道子嬢 |
| | 三枚一組 二五〇円 | | 七枚一組 四五〇円 |
| ES4 | 酒宴の弄者 | ES9 | 女学生の縛り |
| モデル | 佐賀美智子嬢 | モデル | 須川 令子嬢 |
| | 二枚一組 二〇〇円 | | 二枚一組 二〇〇円 |
| ES5 | 脱がされる娘 | ES10 | 緊縛のベッドシーン |
| モデル | 須川 令子嬢 | モデル | 佐賀美智子嬢 |
| | 五枚一組 三五〇円 | | 六枚一組 四〇〇円 |

新人モデル嬢新作緊縛姿態集

大手札型(9×13センチ)印画紙焼付

- | | | | |
|---------------|--------------|------------|---------------|
| 愛川悦子嬢の巻 | ☆全裸強烈縛り | ☆全裸縛り | 田中芳代嬢の巻 |
| 四枚一組 三〇〇円 | 四枚一組 三〇〇円 | 五枚一組 三五〇円 | 五枚一組 三五〇円 |
| ☆ベッド変型縛り(略号1) | ☆全裸強烈縛り(略号2) | ☆全裸縛り(略号4) | ☆セーラー服縛り(略号5) |
| (略号3) | (略号2) | (略号4) | (略号5) |
| 大塚啓子嬢の巻 | ☆股間縛り | ☆股間しばり | ☆股間しばり |
| (略号3) | (略号3) | (略号6) | (略号6) |
| 四枚一組 三〇〇円 | 四枚一組 三〇〇円 | 四枚一組 三〇〇円 | 四枚一組 三〇〇円 |

女性用乗馬靴には一切拍車止めがついていない。以降全ゆる型録中、女性用と特に断った乗馬靴に、拍車止めのついている事は実に少ない。一九五七年版ベックウイス社(馬具専門店「米国」)型録でさえそうである。この事は前記、女性乗馬に際し拍車を使用しない事が多いという事を確実に裏書きするものである。処で話を元の映画に戻そう。由来、米国画では特に女性が拍車付きの乗馬姿をする事は少ない。「剣豪ダルトニアン」のモーリン・オハラは慄然とした魅力的な長靴姿を見せ、騎乗場面が多いが、拍車なしであるし、「吹き荒ぶ風」のバーバラ・スタンウィックも、

遠景での疾走場面では明らかに拍車を使用している事が判るにも不拘、近写は一切拍車なしである。この様に多くの映画が、故意に拍車をつけた女性をかくしている事は何故かよく判らないが、例外的に「荒野の貴婦人」の中で、ドロシー・マローンが鋭い拍車をつけて登場した。「ジャイアンツ」では更に女性が拍車で馬腹を傷つけて血を出すクローズ・アップがあった。「ユタ高原」だったが忘れたが、オードリーのトッターが部分的に拍車をつけていた。併し飽くまで之は例外である。ところで、「ド

ラゴドン」ではバトリシア・メディナは、殆んど残虐といってよい程の鋭く長い刺輪をつけた拍車を使用しているのみならず其の烈しい使用が撮影されているのである。此の些細な事は、西班牙風、又はメキシコ風といわれる此の種の派手な拍車が殆んど裝飾的に用いられるものである事を考慮に入れて考えてみると、マゾヒステイックな立場から特筆に価すると思われる。猶、本作品は新東宝系邦画二、三本立ての併映としてのみ上映されている様である。(以上)

本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

モラエス邸の夜會

—— 罨にかかった牝鹿 ——

江 口 康 彦

水野久美はモラエス邸の夜会で、最初の罨に落ちた。けれども、彼女はそれまでに、自ら罨を求める女に教育されていたのだ。

それは、彼女が占領軍高級顧問のワトソンに引き取られて育てられたからだだった。

驚のような鋭い眼と鼻のジョセフ・C・ワトソンは、元來が教育学者だった。彼は高級顧問として東京に着任すると、本国では実現困難な教育実験を試みるために、敗戦国の戦災孤児を求めた。選ばれたのは、空襲で両親を失った十四歳の、脚の長い眼元の涼しい少女、水野久美だった。

ワトソンに引き取られた久美は、丹念に注意深く育てられた。敗戦で没落した元某侯爵邸を買い取った渋谷高台のワトソン邸は、高い石塀に囲まれ、固く鉄門を閉ざした、林のように木々の繁茂する

豪壮な邸宅だった。久美はその邸内に贅沢な一室を与えられ、思いもかけなかった豊かな生活のうちに、占領軍家族と同様にアメリカンスクールに通い、バレエやピアノのレッスンを受け、罪の許しと慈悲を祈る神への信仰を教えられて育った。

他人眼には、それは願ってもない幸せな生活とうつつたに違いない。けれども王侯の生活が無数の束縛に縛られたものであるのと同じように、久美の生活も、苦しみに伴う贅沢さだった。

彼女が、ワトソンの教育方針にしたがって、彼の愛人の麗華や黒人女中メリーに監視されて送る邸内での生活は、これは奇妙な青白い生活だった。

彼の教育は、非常に中世的な教育理念にもとづいたものだった。イヴはアダムに絶対に服従して仕えるべき運命を持っているということを、彼女は体と精神に厳しく教えこまれた。人間の原罪は禁断

の木の実を食ったことから生じた。この果実を、アダムに食べるようににそのかしたのは、女のイヴだ。イヴは蛇にそのかされたのだとはいえ、それ以来、人間は罪ある者に墮落して苦しみを知らうになつたのであれば、女は男の苦しみを少しでもやわらげ慰めるために、身を捧げて努めなければならぬし、これは神の聖旨になう絶対の真理だった。

久美が受けた教育内容は、いろんな分野にわたっていた。

例えば、水色の服装で受ける情操教育がある。それは中世のドイツの宗教家の書いた「マエルの書」をテキストにしたものだった。この書物にあるものは、どれも服従する女達の物語で、各章ごとに男に仕える女は如何にあらねばならないかを、日常の心構え、礼儀作法、父に対する娘、夫に対する妻、主人に仕える態度、客を迎える態度など、詳細に解説してある。そして、あの哀切な恋物語を生み、悲劇的な情感を漂わす芸術を生み出したものは、服従する女の精神にほかならないことを説いていた。

それから柔軟体操もあった。これは毎日、邸内のスタジオで行われ、マットや木馬や平行棒やリングなどのほかに、彼女を様々な姿態に拡張、鍛える奇妙な型の椅子やボックスやパイプが用いられ、もっとも肉体的な苦痛をともしものだった。勿論、これは彼女の体の美を磨くためのもので、更に苦しいポーズにたえる力を養って主人を喜ばせるためのものでもある。

また例えば赤いタイトの舞踏の稽古がある。基本技はバレエにのっとっていたが、情熱的なスパニッシュダンスもあれば、官能的なフラダンスもあり、スネーク・ダンスを稽古することもあった。教えるのは、香港のステージ・ダンサーだった麗華である。しかし、これも久美が劇場のステージに立つて踊るためのものではない。すべては、現在と将来の主人を楽しませるためのもので、夏冬を問わずに久美は、烈しく厳しい訓練に汗をしばった。

ワトソンは普段は優しくしたが、教育については本当に厳しかった。久美の、ちよっとした怠け心も見逃さなかったし、絹縄と鞭は彼の手の一部のようなだった。

教育は、すべてワトソンの定めた日課にしたがって行われたが、もしその日課を充分に果せなかったり、少しでも不満や反抗の色を見せたりすると、その報いは手ひどかった。

久美は、初めてその罰を受けた時のことを忘れなかった。ワトソンに引き取られて間もない頃のこととて、まだよくワトソンの教育をのみこめなかった彼女は、体操の日課をなんとなく嫌って、友達と遊び過ぎた。

夕方になって、やっと邸宅に帰った久美は、マリーや麗華の態度がいつもと変っているのに気づいた。彼女は、すぐにワトソンの居間に呼びこまれた。マリーが彼女を後手に押さえ、麗華が彼女のポタンをはずして手早く少女の服を剥いだ。わなわなと慄える久美は左手首と左足首を絹縄でつながれられた。ワトソンは、日課を怠った不心得な久美を革鞭で叩くように、麗華に命じていった。

「納得のいくまで、懲しめてやりなさい」

「いくつ叩きますの？」

「よいというまでだ」

麗華の鞭は、鋭く久美の背に跳ねあがった。久美は、怖しさと痛みに悲鳴をあげて室内を逃げまわったが、逆方向に動く手と足は、縄をひきあって、あっという間に倒れた。鞭は容赦なかった。叩かれ、逃げ、追い、倒れる動作が繰り返される。

「おじさま、許して！」

と絶叫したが、ワトソンは冷ややかな眼で射すように見つめたまま、更に懲しめるように無言で麗華に指図した。鞭は、ひゆうと空気を切って少女の柔肌を叩き、悲鳴が室内に満ち、逃げまわり転がりまわった。遂に逃げる力も失った久美は、苦痛に汗をしばり涙を

流して、赤く変色した躰をワトソンの足にすがりつかせて泣き声で許しを願ったのだった。

けれども、日課を守ることは非常に苦しかった。例えば真冬でも毎朝、目覚めると彼女はメリーに両手首を前で縛られ、足を銀鎖で括えられて、冷水シャワーに追い込まれた。

それは意識を明晰にし清潔を保つために、ワトソンが日課の中に加えたのだった。なるほど鞭のように、それは膚に傷をつけなかったが、柔らかいベッドで快よく暖まった身体へ強烈に叩きつけられる冷水は、凍えるような疼痛をさし通し、彼女は縛られた腕で固い乳房を抱いて震えながら、その苦しみに堪えたものだった。唇は青ざめ、知覚が失われて、やがて堪え切れず蹲るまで、それは続けたのだった。

それから日課の中には毎日、夜八時にワトソンの部屋に行くことがあった。

そのとき彼女は、素肌の上に薄いネグリジエを着けただけの服装でなければならなかった。ワトソンは、女の下着をつけた姿を余り好まなかった。だから、その薄い蟬の羽根のようなネグリジエも決して寝巻ではなく、邸内の定められた室内着だった。

部屋に這入ると、初老のワトソンが、ソファに深々と腰かけている。麗華が、その場に立ち合うことがある。久美はその前で、その日、学校であったことや、自由時間に見た映画の感想や一日の出来事を話し、その午後の教育時間に教わった踊りを繰り返したり、テキストにあった詩を暗誦したりした。

ワトソンは注意深く、その誤りを指摘したり、批評の言葉を述べた。そして決ったように、骨太な大きな固い掌で、お尻を打擲されることもあったし、足を括られ床に転がされて、ゴム鞭で巧みに傷つかぬように鞭打たれたりする。どうしてわたしは、こんなに気がきかない女なのかと、彼女は自分の頼りなさを思い知らされ乍ら、

苦しい罰に悶えた。

そして罰を受けた彼女は、両足をそろえて床に膝まずき、繊細な長い睫毛を伏せて、許しのあるまで、じっと反省の時間を過すのだった。

「……主人の要求には、どのようなことでも従いなさい。彼の言葉には敏感な応答をしなさい。洗練されたユーモアを失ってはなりません。けれども逆ってはいけません。彼の怒りには身を投げて許しを乞いなさい。彼の気まぐれは彼の愛と受け取りなさい。彼の好むものを好み、彼の嫌うものを嫌いなさい。これは生活全般にわたって心得ねばならないことです。そして彼の喜びと楽しみのためにお前があることを感謝しなさい。お前の声も髪も、腕も胸も、脚も、体のすべての美はそのためにのみあるのです。お前の知性はそのことをよく理解し、一層彼に適切に仕えるためにあたえられたのです。……」

これが日課の最後だった。

苦しい罰と反省の時間が終わると彼女は、ようやく自室に戻ること許されて、清潔な柔らかいベッドに横臥して、マリイの美容クリームによる全身マッサージを受けた。夜は深く更けている。彼女も間もなく、深い眠りの天国にさ迷い込んでいくのだった。

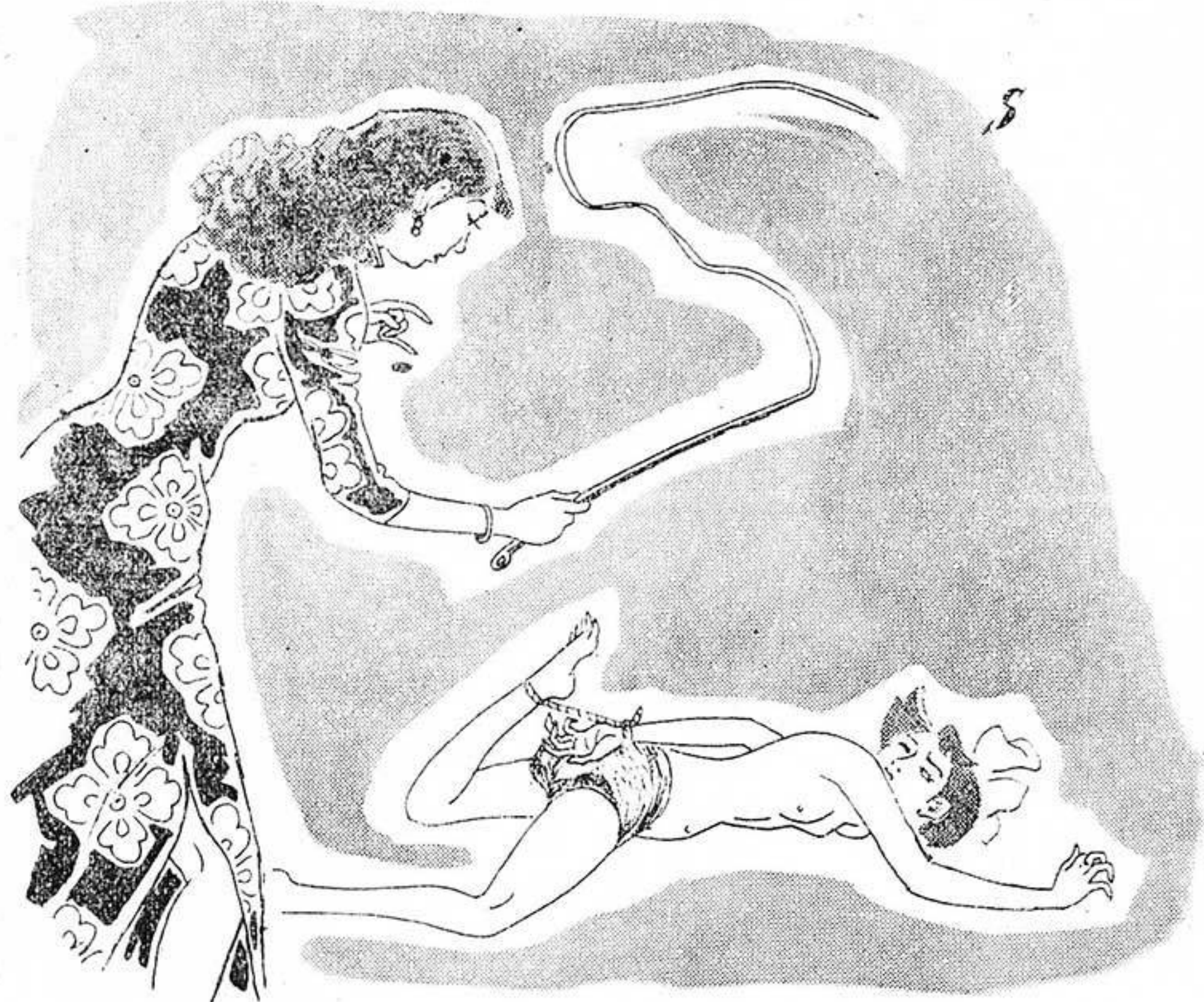
こうしてやがて水野久美は十九歳になった。

痩せた脚の長い戦災孤児は、五年の教育期間を通じて、美を磨かれ、服従の精神を教えられ、端麗な知性的な容貌と、水々しい均整のとれた肢体の魅惑的な女に成熟した。

彼女は厳格で清らかな教育で知られる、ある宗教系女子大学に学ぶ女子学生となっている。

けれども、その円らな瞳に宿る秋の雰囲気を思わせる愁いの翳はなんだったのだろう。……もう彼女は、ワトソンの意志には決

して逆えないし、逆らわない女になっている。
例えば、午後の茶の時間するとき、



「このミルクを飲みなさい。お前のお腹がぷっくりと、鳩の胸のようにならぬのをみないのだ」

といわれると、彼女は大瓶牛乳を二本も赤い唇から咽喉に注ぎこみ、胸を掻き掻いて喘ぎながら、乳房とお腹の上をあらわにした。

「まだ、足りないようだな」

「苦しいわ」

「気にいらないね」

「はい………マリー、牛乳をもっと頂戴！」

彼女の胃も腹も、白いミルクで一杯になったような気がする。

「ああ、それでいい。しばらく、そのまま立っていなさい」

ワトソンは、彼女の脹らんだ胃のあたりを指先で押し弾じいた。

しかし彼女は、そのように従順だったけれども、決して自ら苦しみを求めたことはなかった。朝、目覚めたとき、今日は何事もあり

ませんようにと、ひそかに祈ったこともある。ただ、女はそう

に運命づけられているのだと、悲しくも悟ったのであった。それが

主人の意志であり喜びであるならば、女は従わねばなかったし、そ

のために女は生きるものである………と。

もっとも、彼女は清純だった。

ワトソンは、彼女にその点だけは踏みこんでこなかった。女盛りの

麗華がいたせいもあったろうし、勿論、彼が望んだなら、彼女は

いつでも彼の意志に従っただろうが、しかし彼は教育という線をそ

こで守っているようだった。

この彼女が、最初の罠に落ちたのは、貿易商のモラエス邸で開か

れたパーティでのことだったのだ。

モラエスは占領軍要人に巧みに取り入って巨富を積んだ豪商であ

った。彼の邸は都内だけでも数カ所あるという噂だったが、その秋

の日、青白く熱ばんだ奇怪なパーティが開かれたのは、都心に近い

邸宅であった。

彼女は、白地に紫をあしらった裾の長いイヴニングドレスを着け、ケープをはおって、眩みである長手袋をはめていた。なだらかな胸元には幾重にもまわった豪華な真珠のネックレスが甘い光をちりばめ、ひすいの耳飾りが、ふつくらした耳にとまっていた。

旧時代風の玄関には二枚の扉が堅く噛み合って、内部の物音を少しも外に感じさせなかった。折れ曲った廊下を行くと、奥に、広い客間があって、壁一杯の鏡を背にした洋酒のホームバーと、テーブルで囲んだフロアがある、ちよっとナイトクラブ風の雰囲気のスロンドだった。

人の姿が輪郭だけが黒く見える薄闇の中である。卓ごとに置いてあるランプの光は、卓を隔て向いあう相手の顔を、ほのかに浮かばせる程度の明るさであった。

客は外人ばかりで男女、合わせて二十人ほどだった。香水の芳香や宝石のきらめきが、豪華な印象を慄わせている。

その日のショーのプログラムは、カウボーイ姿の黒人男の投げ縄に捕われ、ずるずると引き寄せられて鞭打たれる少女達のショーから始まった。青い照明を浴び、白い薄物を纏って逃げ廻る少女達は、まるで星空を跳ねる妖精のような幻想美をかもしだした。

「不思議ね」

と久美は呟やくようにワトソンにいった。

「すごく綺麗な感じよ」

けれどもそういった彼女も、ボーリングでは、黒い瞳を伏せがちだった。

このゲームのときは、フロアにビール瓶様の回転棒を何本も嵌めこんだ長いハシゴのような台が、いくつか組み合わせられて四列に据えられた。その上に小さな板が置かれ、美しい女達を板に縛りつけ、それを押し転がして台の向う端に並べた少女達を倒す競技だった。ゲームに使われる、うら若い女達は十人くらいだった。哀れな光

景に、はかなく抗う女もいたが、諦めてわなわなと慄えている女もいた。どうして連れられてきたのか分らなかったが、きつとあの人は、こんなことをされるとは知らずにいたのだろうと、久美は同情の心で、どうぞあまりひどく苛められないようにと願った。

けれども、このゲームの趣向は、なによりも客が、女を自分の思う儘に縛れる点にあった。女達是否応なしに苛められ、叩かれ、縛られた。ブリッジにそりかえって板に縛りつけられる女がいる。後手に縛られて不安定な板の上に直立する女がいる。膝も腰も折って屈曲させられる女がいる。無理な姿勢に呻き声を洩らす女もいた。凄いスピードで少女達に突きあたると、両方で悲鳴があがった。台から転落して、その不手際さに、ぴしぴしと鞭打たれる女がいる。

「どうだね」

とワトソンがきいた。

「皆さま、お楽しみですわね」

「久美は楽しくないのか？」

「だって、こわいみたい」

ショーの途中で、客の機嫌をそこねた、モラエス邸の二人の若い女召使が懲罰を受ける一場面があった。二人の女は、敗戦国民であるにもかかわらず、勝者である客のちよっとして悪戯にさからったのだ。

サロンのテラスに回転台が運ばれた。

「お許し下さい！」

と、うち震えて許しを願ったが、二人は忽ち黒人の召使に衣服を剥がれ、一本の鉄棒を中にして背中合わせに、しっかりと縛りつけられた。太いホースから噴出する水が、その女達に激しく叩きつけられた。

凄しい叫声が、二人の女の咽喉から搾りだされた。

強力な冷水は、犠牲者の身体を吹き飛ばさんばかりに、勢よく噴

きつける。女の体はのけぞり、肌はみるみる真赤になった。しかし息をつまらせながらも悲鳴をあげる二人の女は、途切れることのない水鞭の集中攻撃に、くるくると回転しながら悶絶するまで水を浴せられつづけた。

縛しめを解かれると、びしょ濡れの女は息も絶えだえに、その場に打ち伏してしまった。

それから、ロッキング・ポール遊びに女達が駆り出された。それは丁度、縛られた女の生花展覧会のようなだった。

しかし、その日の庄巻は、なんといっても黒衣の美女のアティチユードだった。

照明が強烈な赤紫色の光線に変わって、最初にアシスタントの二人の女が現われ、さまざまな器具が運ばれてきた。

間もなく、待ちわびる客の前に、黒人青年の鞭に追われて、真黒なドレスを纏った、中背の肉づきのよい美しい女が現われた。拍手と歓声が客の間から起った。

「アノ女ハ、ナニモノカ？」

と久美の横のテーブルで、男の客が尋ねた。

「アサオカ・ハルコ。敗戦国ノ映画女優。今日一日ダケ誘拐シテキタノ」

と綺麗な女の声が、それに答えた。

浅岡晴子といえば、美人コンテスト出身の有名な、今売り出しの人気女優だ。久美も、スクリーンで華麗な恋を語らっている彼女を見たことがある。

まさか彼女が、この奇怪なパーティに現われるとは思ってもよらなかったが、本当のことだった。どのような手段で誘拐されたのか、彼女は鞭に追われてフロアにゆるめき出た。しかし、暗がりの中に沢山の客がいるのに気づくと、彼女は狼狽したように身を竦めて、逃げ場を求める視線を慌しく走らせ、顔を覆った。

けれども黒人青年の鞭は、そんな女を非情に打ち倒した。女の両足は鎖につながれて、鞭を逃げることは容易ではなかった。ためらいの代償は、鞭打と叱声だけだった。鞭は、じやれつくように彼女のしなやかな四肢に吸いついては離れた。打撃はところを選ばず叩きつける。

「許して、許して！」

美しい映画スターは、表情を泣きだしそうに歪めて叫んだ。

彼女は、よろよろと立ち上ると、裾の方から黒色のドレスを、すっぽりと脱いだ。その恰好をみて、あっと久美は声を噛み殺した。

彼女はドレスの下に、黒っぽい薄く透き通る、衣裳ともいえぬ衣裳をつけているのだった。薄布を透かして見える体は陰影を、はつきりさせて美しく魅惑的だった。衣裳をとった体が、これほど見事なものとは！客席から、どっと嘆声が洩れた。

「どうぞ、ポーズを注文して下さい」

と黒人青年は、女の足の鎖をほどくと、客を見まわした。

「ポッチエリの『ヴィナス誕生』だ」

と、直ぐ客席から声が飛んだ。

黒人青年の鞭が床に鳴った。

おびえた眼を悲しげに伏せた彼女は、胸に髪を垂らし体を曲げて両腕を下げたポーズをとった。二人の女が、その横に立った。

客が望むポーズは、古典から現代にわたっている。画もあれば彫刻もある。鞭におびやかされ叩かれながら、彼女は次々と注文されたポーズに応じていった。

暗い客席から絶えまなしに、荒々しい注意や叱責の声がかかる。彼女が指定された画を知らない、たまりかねたように客が自分からフロアに出て、腕をとり椅子に括りつけたり、十字架にかけたりしてポーズをつけた。時折、執拗な客の悪どい手を、思わずも避くようすると、平手打ちの音が鋭く彼女の肌に鳴って、悲声を上

げた。

立ったり膝まずいたり、坐ったり横臥したり、厳肅な表情になるかと思えば、悲しげになる。哀れみのポーズをとったかと思えば、ひどく淫蕩的な姿態になる。弓なりに反り返えるかとみれば、跳ねるように飛びあがる……。

思いもかけぬ哀れな主演のポーズに、息がつまりそうになったり、あぁと、苦悶の呻きを鳴らした。しかし客達はそんな苦しみをかえって喜んで、魅力的なポーズには拍手を送り、吐息を洩らしていた。抗いながらも屈服させられ、無抵抗になる一線級のムービースターの姿は、客の嗜虐心をひどく掻きたてるようだった。久美も、その雰囲気感染させられたのか、胸が妖しくときめいてくるようだった。赤紫色のスポットを浴びて、苦しいポーズに汗を浮かべる生贄の肌は、輝くばかりに、ますます美しさを益していった。

長い時間のようでもあり、短かい時間のようでもあった。アティチュー



ドを済ませた女優はフロアを去ったが、アンコールの拍手にうながされて、足首の鎖をまた狭く結ばれ、両手首も同じように縛られた不自由な四つ這いの姿勢で、犬のように自分の脱いだ黒衣を口に咥え、フロアをぐるっと一廻りした。

久美は、最後の鞭を、その生物のののようにゆらめく臀部に受けて悲鳴をあげた女優が、フロアの裾に転がり込んで姿を消したとき、ほっと溜息をついた。久美は全身に汗を、びっしりかいていた。室内の暖房がきつかったせいだ。浅岡晴子の苦しみと喘ぎが、他人ごとと思えなかった為か、それとも、息づまるような妖夢に巻きこまれていたためだろうか。

……間もなく、あちこちでグラスの触れ合う音がして、久美は我にかえった。いや、ワトソンの掌がぼんやりしている彼女の脇腹を強くひねったので、「痛いわ」

と、小さく甘えた声をあげた。すると、その久美の耳元で若い男の声が、「面白かった？」

と囁いた。思わぬ声に久美は、うろたえて身を引い

た。

「あなたは、だれ？」

奇怪なショーに、我にもあらず、ひどく魅了されていたのだった。彼女は、その脇腹をひねった手が右側の男のものだったのに、ようやく気づいた。ワトソンは最初から左側の椅子にいたのだ。自分をひねったのは、この見も知らぬ青年だったのか！

「おや、ジョルジュじゃないか。いつ、リオから戻ってきた？」

ワトソンは、久美の声に横を見て、青年に声をかけた。

「一週間前にですよ」

「ビジネスは、うまくいったかね？」

「ええ、ですが、お話しする前に、まず貴方のペットを紹介して下さいよ。そして貴方達を別室へ招待して、くつろぎたいのですが、如何ですか？」

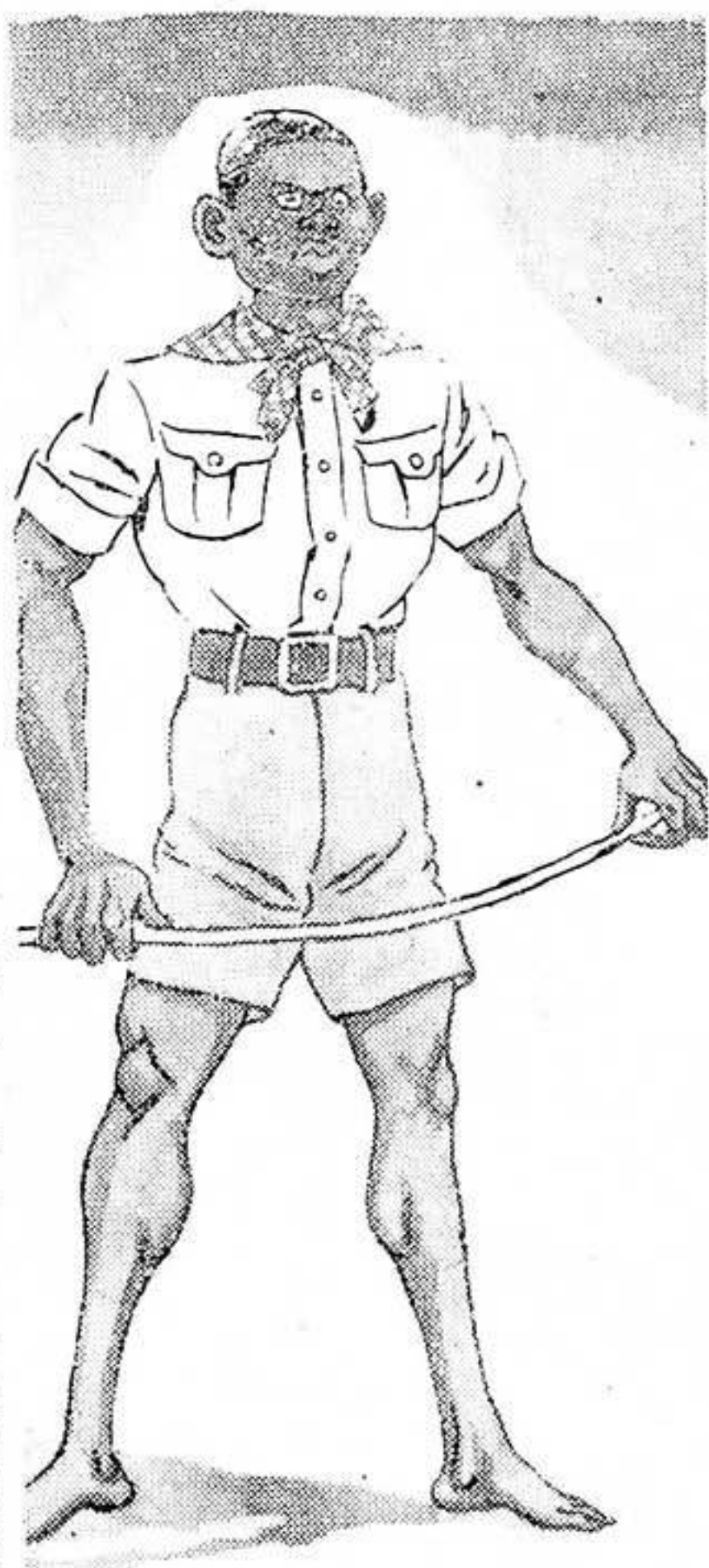
青年は、久美の気持には、おかまいなしに平気で、そういった。

久美は「嫌」と首を振った。ひすいの首飾りが揺れた。

しかし、ワトソンは直ぐに椅子を立て、二人を引き合わせた。

「ああ、行こうかね。私も、くつろぎたい。ミスター・モラエスの甥のジョルジュ。こちらは私の久美だ」

ジョルジュは握手を求めた。ワトソンの友人とあれば仕方なく、彼女は手を差し延べたが、直ぐおびえたようにひっこめた。長い睫毛の眼が伏さった。彼女は自分の靴の先を見つめていたのだが、その姿勢で顔が愁いのある美しいものに映った。



で縁どった燃えるような緋色の壁掩いがめぐらされ、室内のテーブルも椅子も脚に金色を塗った調度品で、どれもなにか渋い、古びた官能の暗さを感じさせるものばかりだ。

野獣の彫刻をほどこした燠炉には、赤々と炎が燃えあがり、匂やかな香料が焚きこめられてあった。

部屋の中の隅に置かれた、数奇を極めた灯台と天井の豪華な飾電灯が、明るく室内を照らしている。

床が妙に柔らかなのは、靴の踵が、めり込むような極上質の、厚く柔らかいペルシヤカーペットが敷きつめてあるからだだった。

三人が燠炉の傍のテーブルにつくと、黒人ボーイが這入ってきて次々と御馳走が運ばれ、シャンパンが勢いよく抜かれた。健康を祝して乾杯があった後、外国旅行のこと、日本の政治経済のことなどいろんな話題が、ワトソンとジョルジュの間で、とりかわされた。久美は、あまり口をきかなかったが、その印象や感想をいつ問われるかも分らないので、緊張して聞いていなければならなかった。

そのせいもあったし、ジョルジュの先刻のひどい仕打ちを忘れかねてもいたので、彼女は黒人ボーイが、広間の中央に例の回転台を

「じゃ、別室へまいりましょう。用意をしてありますよ。今晚は、美しい人に会える予感がありました」

とジョルジュは鄭重だが人の心を射抜くような眼を光らせていった。

モラエス邸の別室は、長い廊下で中庭を越えた、豪華な装飾をほどこした広間であつた。四隅には、金色

運んだのも、別の扉から小牛のような牡犬が連れこまれたのにも気づかなかった。

そして質問は、久美が注意して聞いていた話題とは、全然無関係なところから、不意にきた。

「おや？」

とジョルジュは、話しの途中で久美を見詰めていった。

「なんででしょう？」

久美は、首を傾けて尋ねた。

「そのネックレスは、ぼくがワトソンさんに差し上げたものです
ね」

「あら……」

「そうだったな」

と、ワトソンは笑った。

「たしか、ミュンヘンで求めた珍品でしたよ」

久美は、ジョルジュの言葉の思いがけなさに、はっと、うなだれた。動揺をみせまいとしたので、彼女の心の内部での驚きは倍加した強さであった。

久美の胸に、甘い光を放つ真珠の首飾りは特別な作りの首飾りだった。真珠が幾重にも輝いて、一見、普通のものの変りなかったがその一端は、ウエストを強く締めつける黒革の拘束バンドに繋がっていた。この黒バンドは、ネックレスの附属品で、緊迫感を絶えず与えると同時に、ストッキングの留金となる銀鎖がついていたし、更に背後の腰の上には、細い手錠となるリングが、銀鎖についているものだった。

これが、ジョルジュの贈り物とすれば、彼は久美が今どんな恰好でいるかを、よく知っているわけだ。

「拝見したいですね。ぼくはまだ、それを着けた処を見てないので
す」

「ふむ」

とワトソンは、ジョルジュの言葉を、もったもたというように、うなずいた。

「久美、お前を見たいとおっしゃるのだ」

「はい、でも……」

「服を脱いで見て頂きなさい」

彼女は思わず息をつめ、青ざめたかと思うと真赤になって、哀願の瞳をワトソンにすがりつかせた。装身具を贈り物に貰った場合、それを身につけた処を贈り主に見せるのは礼儀というものだろう。けれども、この場合は、そんな羞しいことをどうしてできるだろう！しかしワトソンは、ためらっている彼女にとどめをさすようにいった。

「服をおとり。私もみたいのだよ」

「はい……」

むごく聞こえた言葉を、彼女はこらえた。ワトソンが望むならば彼女はきかねばならない。それが例え、いままでになかったことであっても、主人が望むことであるのなら。

彼女は羞恥の打撃に震えながら椅子を立ち、胸脇のチャックをはずした。彼女の脳裏に、先刻フロアでみた映画スターの哀しいシヨウが思い浮かんだ。冷たい戦慄が背筋を走った。

「ボーイ、お手伝いをするのだ」

ジョルジュの冷たい声で、黒人の逞しい青年が近寄って、ドレスに手をかけた。

忽ち、はらりと白と紫のドレスは足許に滑り落ちた。

秋の空気が冷んやりと久美の剥きだしになった膚をなぶった。若い牝鹿のように肉づきのいい、引き緊ってはじけるような均整のとれた水々しい肢体が一瞬、乳房を抱いて卓のかけにうずくまった。
「立ちなさい。よく見ていただくのだ！」

「……………」

声もなく、濡れたような黒い瞳の、美しく成熟し、すんなりと伸びきった、輝くように滑らかな肌が羞恥に小刻みに慄えて、すくりと立った。いろんな女を見慣れたジョルジュの視線も、さすがに驚いたように彼女の華やかで清楚な肢体を見詰めた。彼女の体をまわる黒革は、更に魅力的にアクセントをつけている。

「これは、いい！」

とジョルジュは、賞讃していった。

「もっと傍にきなさい。ネックレスの具合を見てあげよう」

「はい……………」

「はきはき、しなさい」

ワトソンが、むずむずしている久美を、叱りつけた。

「S字型をとってごらん」

「え……………」

「身体をS字型にするのですよ」

久美は胸を前に突きだしS型の姿勢をとった。

「横になって……………次は後をみせてごらん」

ジョルジュの眼が嫉妬の光を浮かべて、きらっと閃いた。これはすばらしい得難い女だ。ワトソンだけの楽しみにしておくわけにはいかない。ジョルジュは不意に焦立ったように立ちあがって、背中を向けていた久美の肩を強く突き飛ばした。

「あっ」

と声をあげた久美は、脚を宙に悶えさせてふかふかしたカーペットに転った。ジョルジュは、慌てて起き上ろうとした彼女を膝で押えつけ、素早く彼女の手を、黒バンドの鎖に繋がれたリングに拘束した。

「いいでしょう。お借りしても？」

とジョルジュは、ワトソンに許可を求めた。

「しばらく自由にさせすぎていたからね。しかし毀してはいけな

よ」
後手の手錠をかけられた久美は、邪慳にジョルジュに引き起された。ワトソンと黒人青年も立って、彼女に近寄った。

「女は毀れやすいものかな」

といったジョルジュは、久美のなだらかな肩を突いた。あっと、のけぞる身を、間髪をいれずワトソンが弾き返した。黒人青年がものめいわず脇腹を突き、ジョルジュが又、ぐっと突き返した。

三人の男が形づくる、三角形の頂点から頂点へ、久美の肢体は、よろめき始めた。パンプスは特殊なジウウタンの上で、更に行動の自由を奪った。

「ああ……………許して！」

かつて久美は、これほど唐突に苛められる立場に転落したことはなかった。彼女は驚き謝り、それでも転倒して足をくじくまいと、突き飛ばされる身体を懸命に整え、すんなりした脚を踏んばって、堪えた。

「いたい……………ごめんなさい、おじさま！」

六本の仮借のない手が、叩き、突き、弾き上げた。

しばらくすると、酔った客が数人、どやどやと広間に這入ってきた。ジョルジュ達は客を迎えて、ようやく久美から手を引いた。

けれども、彼女は休む間もなかった。その光景を尾を振って見詰めていた小牛のような牡犬に、ジョルジュの掛声がかかったのだ。

「クルツ、お嬢さんの遊びのお相手になれ！」

クルツと呼ばれた牡犬は、待ち構えていたように、猛然と白い獲物に飛びかかった。

「止めて、止めて！」

絶叫が緋色の壁覆いに吸いこまれた。巨犬は久美に烈しく突き当たって、白い肢体は、もんどり打って跳ね返って落ちた。冷たい

犬の鼻づらが、久美の仰向けに、しどけなく倒れた肩に触れ、動物独特の荒い息が肌を襲った。彼女は悲鳴をあげて跳ね起き、慌てて逃げ始めた。敏捷な獵犬は前に廻り後から吠えたてて、よろめく女を追いつ追いつ。豊かな胸の隆起が弾む。衝突を避けようと上体を振る。黒髪が解けて、はためく……。

客達は思い思いに、椅子にもたれたり立ったりして、グラスを傾けながら、逃げ廻る久美に犬をけしかけた。

「いや。もう、嫌！」

けれども犬は、その悲鳴に更に勇気づけられたように猛りたつた。靴下も長手袋も鋭い牙に喰いちぎられる。彼女は、また倒れる。幾度でも、よろける。パンプスも、いつのまにか飛んでいる。しかし、巧みに調教された犬は、彼女の肌を傷つけぬように飛びかかる。

後手に括られた腕は躍り、自分のひきしまつて振じれる腰を叩いた。次第に膝頭の力が失われてくる。部屋の隅の、高い円柱のような灯に逃げ場を求めたが、クルツは素早く、その彼女を打ち倒した。汗に濡れた広い額や背に、黒髪が乱れて貼りついた。彼女は起きあがる気力も失いかけた。

遂に体力の限界がきた。彼女の胸も腹部も荒々しく波打ち、背筋が泣いているように、ひくひくと引きつった。苦しみの喘ぎが、真珠の歯をあげた。もう、恥も外見もなかった。汗にまみれ、息も絶えだえになった久美は、がくがくと身を屈して膝まずき、獵犬に許しを乞うていた。

「許して、クルツ。ああ、もう許して。だめ



！

「クルツ、こい」

ジョルジュの呼び声に、犬は飼い主の足許に走っていった。

そして、声を噎し汗をしぼった久美は、バス・タオルを投げ与えられ、後手の手錠を解かれて、首飾りもバンドもはずし、やっと広間の片隅の長椅子に横たわった。そこは客から一番離れた窓際で、黒人青年が客の視線をさえぎるように、白色の室内カーテンを下ろしてくれたのは、せめてもの心やりだったのだろうか。然し、もうあれだけ酷い姿をみられてしまったのだから、逃げようと、隠れようと、たいした違いはなかったかも知れない。

ボーイは、ワトソン様からといって、冷えた大瓶牛乳を持ってきてくれた。

冷たい牛乳は、渇い

た咽喉を快よくうるおした。彼女は大瓶牛乳の底まで、一滴もあまさずに飲みほした。甘くおいしい液体は、緊張のとけた身体に泌みわたり、ようやく人心地がついて救われたという感じだった。

黒人青年は、生気の蘇えった久美から空の牛乳瓶を受け取ると、

「ワトソン様のおいつけですから」

といって、ふたたび両手を前で鎖にとめ、足を揃えて括った。それは休息にふさわしく、ゆっくりした拘束だった。彼女はバス・タオルをかけてマラソンに疲れたランナーのように、ぐったりと椅子に身体を伸ばして休息した。

彼女は眼を閉じた。なにか切れに切れ感情が、たかぶって脳裏を横切るものがあつたけれども、それを見つめるには、彼女は疲れすぎていたようだ。少し眠気がしてきた。冷えた牛乳のせいかな、急に汗も引いて、皮膚がなんだか固く凝縮していくようだった。

眠ったのかどうか分らないが、しばらくたって彼女が眼をあけたとき、いつのまにか広間は、しーんと静かになっていた。客もボーイもサロンの方へ引き上げたらしかった。

彼女は長椅子から身体を起した。妙に、虫が肌を這っているような感覚があつたからだ。そして不思議なことに、彼女の肌は、ほんのりと赤く色づいている。

「痒い」

と彼女は呟いた。

彼女は気づかなかつたけれども、さっき飲んだ大瓶牛乳には、特殊なアルコール飲料が混合してあつたのだった。それは、ゆるやかに体内をめぐりはじめ、次第に激しく血を波立たせていった。



「ああっ」

と彼女は身悶えた。

一度、乾いて収縮した汗線が、アルコールの熱の刺激に火照って疼くように痒くなってきた。彼女は無意識の中に自由になる範囲で肌を掻き、脚をすりあわせた。

けれども、それはかえって痒みを誘うものだった。一度掻いた部分には、更に痒みが噴き出し、間もなくそれは全身を襲う猛烈な痒みとなって彼女を押しつめた。

この予期しない苦悶に彼女は必死の眼で、それを逃れる方法を探した。彼女は細っそりした指をしなわせ、掌で胸やお腹を叩き脚をすりあわせた。長椅子に抱きついた。カーチンで身体をこすった。身も世もない血の疼きに、もう泣きたかった。

ジョルジュが久美を次の遊戯に連れだそうと広間に入ってきたとき、彼女は夢中で椅子を転げ落ち、カーチンから広間に転がりでてカーペットの荒い織物の感触に、火照った肌を一心にこすりつけていた。

「おや、これはどうしたというの？」

「いらっしやらないで！いいえ。かゆいの、とてもひどいの。たすけて」

「それは困ったね。どうしたらいいのかな？」

彼はそういうと、しばらくモノメニアックな視線を光らせて、白蛇の踊りを眺めていた。

「ぼやっとしてしまふな」

と彼は、感嘆の呟きを洩した。

咽喉を震わす苦悶の呻きをあげ、器具のない責苦に、美しい白蛇が這いまわり、のたうちまわっている。ざらざらしたカーペットにすりつける肌は、血がにじみ出そうに赤らみ、全身が波をうって、シヤンデリアは皎々と、その奔放な久美の姿態に映えていた。

「どうにでもして、どうぞ、早く！」

苦しい喘ぎの言葉が、珊瑚色の唇から悲鳴となった。

「フロアへ行きますか？ 向うへ行けば楽にしてあげられる」

「どこへでも行きますわ」

「みんながいるよ？」

「ああ。だって、もうだめなの」

久美は、鎖を鳴らしてジョルジュの後に従った。小走りに歩く廊下がなんと長かったらう。サロンのフロアでは、先刻のショーの代りに、ボール投げ競技の真最中だった。

フロアの天井から下った太い鎖の先端のパイプ棒に、両腕をひろげて縛りつけられた女達が、小型のビーチボールのようなゴム製のボールを客から投げつけられていた。女達はボールに弾かれて、白くゆらゆらと揺れ動いた。悲鳴と喚声が室内に充満している。

久美は、その派手な饗宴に、ちよつと尻ごみしたが、ジョルジュは逞しい腕力で、フロアのライトの中に彼女を突き込んだ。ボールの的になる女の中に、久美は、先刻の映画スターも吊られているのを、ちらっとみかけた。久美はフロアの中央に他の女と同じように爪先だった不安定な姿勢で縛りつけられた。

「ニューフェイスだな」

「よし、君と得点争いをしよう。十弗の賭けだ」

「ぼくは、あの的のボディを狙うよ」

「私も参加しよう」

「十弗の賭けだぞ」

痒みの苦痛と羞恥と哀感に悶える久美は、そんな会話をかすかに耳に挟んだ。眼が、ちらちらして誰れがいつているのか分らない。ワトソンは、どこにいるのだろうか。こんなことになってしまったて帰郷したら叱られるかもしれないと、おびえが走ったが、最初の赤いボールが吊るされた久美をめがけて投げつけられた。彼女は、ひくっと息をのんで除けようとしたが、それは見事に胸に命中した。

「あっ」

的が声をあげると同時に、ぱんと明るい音をたてて、ボールは弾き返えって転った。ワツと喚声があがった。

青いボールが飛んだ。それは、むんとそりかえった豊かな乳房に白い命中の痕を残し、血が戻って忽ち赤らんだ。黒ボール、白ボール、紫のボール、黄のボールと、球はつぎつぎに投げつけられた。脇腹にそれが当たると、的はぐるっと半回転して、なだらかに輝く背面が現われた。桜色の円い双丘に、しなやかな腰に、すらっとした脚に、色さまざまなボールが入り乱れて命中する。そのたびに久美は「うっ」と呻いたが、しかしそれは身体の奥深くまで、ずしりと響く重い痛みではなかった。皮膚の表面に一瞬、水の輪が拡がるように痛みが泌みわたるのだった。

そのうちに、初めはボールを避けようとしていた久美が、妙な反応を示してきた。

彼女はボールにむかって命中度を増すように、右に左に身体をくねらせた。彼女は球がはじける度に、一瞬のことだが、堪え難い痒みが遠のいてゆくことを知ったのだった。

「おや、喜んでいらっしゃる」

と客の誰れかが、ふざけていった。

「もっと強くぶっつけて！」という声が、吊られた女の中から聞こえた。

久美はその言葉に、あっと心の眼をみひらいた。同じように痒みにさいなまれている女か、苛められて喜んでいるのか、それは分らなかったが、久美も心の底では、本当にもっと目茶目茶に叩きつけて欲しいと望んでいるのだった。この彼女の微妙な心の変化は夜会のどのシーンから生じたものだったろう。しかし、それがどんなに哀しかりうと、苦しかりうと、痛かりうと、望むことだった。

烈しい内心の欲求とアルコールの酔いが、彼女を大胆にしたようだ。いつの間にか久美は、我にもあらず、唱和するように叫んでいた。

「もっともっと、きつくぶっつけて！」

久美は、ぶるぶると慄えながら、次第に混濁した意識に落ちていった。額や腋の下に冷たい汗がにじみ出て、顔色は青ざめている。痒みは、いつか去っていた。けれども依然として、彼女はなにか決定的なものを求めていた。激しい痛感かも知れない。強烈な苦悶かも知れない。ボールは、もう痛みではなかった。いや、勿論、皮膚を弾く痛みはあったが、それは不思議な幻想に彼女を、誘いこむ刺戟のポイントだった。

ライトが眼眩めき、七色の虹の世界が手の届きそうな近くにみえ恍惚の幻想が脳裏にひらめいた。

ボトル競技は終わった。けれども、力なく吊り下った彼女は、絶えだえに哀歎の声を洩らしていた。

「ああ、素敵！　ほんとうに、素敵！」

このとき彼女は、最初の罨に落ちていたのだ。被虐の歓喜を自ら求める萌芽は、このとき芽ばえたのだった。

その夜、パーティが済んで、ワトソンと久美が渋谷高台の自邸に戻ったのは、明け方に近かった。

自室のベッドに疲れきって横たわった久美は、左の端が少し欠けた上弦の月が、暗い夜空に青くかかっているのをみた。冷たい北風

が庭園の木立の梢を鳴らしている。枯葉は波うつ北風に容赦なく挽ぎとられ、暗い窓に叩きつけられていた。犬の遠吠えが遠く聞こえ、夜はざわめいている。

久美はそのとき初めて、かつて「サマエルの書」で暗誦させられた次のような散文詩が、意味深い内容を含んでいることを知っていた。

……青白い月光の降りそぐ森の中で美しいアマリルは、彼女を捕えて締めあげる白銀の罨を求める。月光が連波に妖しく乱れる湖の岸辺に、青い花々の咲く優雅な水草に蔽われて、罨は冷たい光沢を輝やかせていた。

彼女は、しなやかに体を躍らせて、白銀の罨に倒れこむ。一瞬非情なきしみをひびかせた罨は、彼女の伸びやかな四肢をするどく叩いて締めあげた。悲痛の叫声は青白い森の木立を縫って消え白い肢体は青い花々を乱して悶えるが、長い睫毛の下の青い瞳はほとんど幸福ともいえる悲しみに濡れている。

夜鳥が悲鳴と匂やかな香りにひきよせられるように、何処からともなく、罨にかかった乙女をめがけて集ってくる。滑らかな肌に、鳥類の硬い爪が突きささり、その鋭い嘴は悶える身に接吻の雨を降らせて、柔らかな羽毛は烈しい操りの抱擁で、牝鹿をのけぞらせた。

やがて凄しい苦痛に疲れ切ったアマリルは、熱ばんだ美しい身を湖ににじり寄せて、青白い月光を浴びながら、冷たい湖に水浴し憩う。掌に汲みあげて渴きをいやそうとすると、指間を洩れる水滴は彼女の涙のように青白く光りながら滴り落ち、木々の梢に憩う夜鳥達は、あどけなく頭を傾けて、じっとその牝鹿の水浴を眺めている……。

愛^マ好^ニ家^ヤの記^ノ録^ト

— M の花園に遊ぶ記 —

とやま・かづひこ

『よく毎月つづくネ』

わが友、Hは、クリスマスイヴの宵、ある喫茶店で久しぶりに逢うと、すぐ、かづひこの労をなぐさめてくれた。

一年の余も、休まず紹介発表してくれているKKの編集長にも、感謝したい気持ちで一杯だ。

師事する作家のT先生も、このノートから色々のヒントを拾っていると言って下さる。

本誌から、Mの記事が減ってゆくのは淋しい限りだ。沼氏、芳野氏、その他、コプロをたたえる人々も、現れては姿をかくす。

SとMは車の両輪、かづひこはMの車を曳きながら、今年もはるけく花園の道を歩こう

と思う。

(81) 移動トイレ

観光日本はW・Cから「ハイセツを我慢するのは健康に悪い」という趣旨からか、「大津市制六十周年記念市民健康祭り」に、日本ではじめての「移動公衆便所」が登場した。幅三メートル、奥行一・三メートル、高さ二メートルの鋼鉄製車体の中に大便所と小便所が各二つ、手洗い、蛍光灯もついているというエレガントな造りながら、一台で四千〜五千人分のご用は軽くうけたまわるといふ、あなどりがたい実力をもっている。

観光バスのうしろに連結して引っぱってゆけば、乗るや否や次のW・Cの所在を思いわずらう「女性観光客」の悩みも解消、琵琶湖の美景も腰を落ちつけて観賞していただける。外人観光客にも好評だが、W・Cで外貨獲得とは、あまりキレイでないオハナシ。

右は『週刊明星』誌から。

このノートも、ここまで拡げない方がよいのではないかと、畏友のH氏は云うが、ことトイレの話題となると、捨てておけない。

よく、コプロ者が夢みる『奉仕』も一種の移動トイレだが、この方は、四千人〜五千人なんて大口でなく、文字通り専用のエレガントなものなのだ。

さるにても、このトイレ車、男性は兎も角、レディには喜ばれること受合いだ。

つい昨日も、明治座の芝居の幕間に、美女達が黒山のごとく、トイレの順番を待っているのを見たが、そこで泳ぎ、遂には力つきてその流れにおぼれるわが身を空想して、胸をあつくしたものだ。順番を待つ女性を横眼に、その一滴たりとも我がものにできぬもどかしさ。ああ、誰でもよい。思うさま、移動トイレとして、自由に、かづひこを使って頂けないものかと、今日も、つくづく思うのである。

(82) 屑 籠

皇太子妃は正田美智子さんと発表され、ジャーナリズムは、一せいに正田家に取材のピントを合わせた。

美しく、身分高く、良家の令嬢とあつてはあらゆる階層の人々が、この女性に目を向けるのは当然のこと。

ある新聞は、こう伝えた。

某新聞社は、発表前、取材の一策として、手を廻して正田家から捨て去られる紙屑籠を買収し、手紙やメモを漁ったという。

こうなれば、あるいは美智子さん自身が使っていたチリ紙が、何かの拍子に記者の手に入らないとは断言できない。

あのように美しい人の身辺の御用を足したあとの紙、それすら取材のヒントとなり得たかもしれない。当時の新聞は目の色を変え正田と名がつけば犬の食事のことまで問題にする勢이었다。

高い金で買収した屑籠を、鵜目、鷹目で漁る記者、その手に、彼女の香り高き、使用済みの紙が入っていたとしたら。

かづひこの興味は、一ぺんに津波のように湧いてくるのである。

(83) サーカス

十三月三日、東京駅八重洲口、観光文化ホテルにて、上映中の、ソ連天然色長篇記録映画『サーカスの芸人たち』の画中に、次のようなシーンがあった。

高い天井へ上って、演技をする若い女性がハシゴの代りに金ピカの軍人のような扮装をした助手の肩に上り、天井から下るロープに乗り移るその瞬間のポーズが何とも云えない床にひざまずいて、女性の前に頭を下げてかしこまる男を、ぎゅっと踏んまえて、軽く肩の上に立ち、ロープの真下まで歩いて行かせ、男を機械のように扱う半裸の女性。

場面がかわると、トンボ返りを打った女性が、サツと男の芸人の頭に乗った椅子にうまく飛び上って腰をかける。

頭上に肘かけ椅子を冠のように頂く男性、これに、ゆったりと腰を下し、艶然と微笑んで観客の拍手をニコヤカに受ける女性。この両者に、かづひこはほのぼのとした魅力を感じずのだ。

足下に、男性を踏んまえたり、頭に腰かけるこのような動作は、サーカスやアクロバットにはつきものだが、こうしてシネマスコープのワイドスクリーンで、ゆっくりと眺めると一しお興深いのである。ソ連のたくましい女性、顔も彫りが深くて、美しい、Mの方には一見をすすめたい、捨て難い映画の一コマ。

(84) 辻村隆氏へ

2月号(65―66頁)大変有り難く拝見しました。立場こそ異なれ、古くから貴下の文章に親しんだ者として、小文がお目にとまったことだけでも光榮です。

さて提説の『寄生虫』の件ですが、勿論命をかけてあこがれて止まざる物件に、種々の寄生虫卵、病菌、その他不浄といわれる混入物の存在を無視はしませんが、これが、美しい御主人様のもの、と明らかに判る場合なら一向苦にならないのです。

かづひこの永いアブ生活中、それらへの恐怖もありましたが、美しい女性の体内で醸成され、排出されたものなら、たとえ万一、そのために悪病やその他の病毒に冒されてもいけません。

あくまでも、美しい女性のもの(老若は問いません)それも、直接口中に恵すわることをもって最上の美味とします。

とにかく、コブロの世界に一度迷い込んだら、これはもう一生のもの、酒やタバコを止めることは出来ても、これを止めることはまづ出来ません。語りたいことは数々ありますが、お答えにならない、お答えを一応申上げてペンをおきます。

バー「ナナ」の人々



—— 南 時 夫 —— (第七回)

七 ミスズのこと(その三)

真夏の夜の湘南の海は無気味に静まり返り、それが恋人達の胸を合せ甘い口づけを誘う。しかし一方、ざあざあと呼びかける様な単調な波の音は奔る若者の心に狂気を宿すのだ。夜の獣がミスズ達を襲い、一人を殴り倒し一人を連去った後に残ったのも、変化のない波の音だった。

左右から腕を引張られ背中を押される様にして歩かされたが、素人の娘の様に口のきけない程恐しがったり、泣き叫んだり、しなかった。気丈なだけでなく、不良少女のレットルを貼られ水商売に足を突込んでいるミスズには、知らず知らずの中に身についた度胸の様なものがあつた。ときどき両手を振って、

「痛いわよ！ 放してよ！」

と叫ぶ声も波の音に消され、男達は無言で彼女を引立てて歩いた。やがてミスズを包み込むようにして歩いていた一団は、松並木のはずれにある一軒の別荘風の家に消えた。男達の中の一人の持家なのか、それとも流行の貸別荘なのかさだかには判らなかつたが、洋風のこじんまりした仲々洒落れた家だった。急に明るい部屋に突入れられたミスズは、不意を打たれてくらくらとしたが、すぐ氣を持直して部屋の中を見廻した。男達は全部で六



人だったが、ミスズを連れ込んだのは四人で二人の男は部屋に残っていたらしい。「すげえー助じゃねえか。どこでやってきたんだよー」

ミスズの姿を一眼見た途端に、残留組の一人が思わず叫んだ。部屋にはベッドが一つ置かれ、机の上にウイスキーやボールの瓶が出鱈目の方向に転っていた。衣類や食物が散乱

している様子はお定りの設定であった。

男の体臭がむんむんする。

皆殆んど裸であつたが身体

つきを見るとまだ十代の少

年が大半だつた。立振舞や

言葉だけが大人

人ぽく一角のやくざの様な

響を与えるけれども良く見

ると、それになり切れない

子供子供した顔つきであつ

た。中には確に良家の子息の様などこかお坊ちゃんお坊ちゃんした風ぼうをした者もいた。しかし一人一人個別に見れば温順な少年

であつても、真夏の夜に刺激を求め狂った青春を謳歌する彼等は、集団となつて夜の野獣と化す。それに彼等には共通の背伸びした歪んだ英雄観がある。なんかの機会を捉えて自分

がヒーローになろうとしていた。

「ソコでよー野郎と、いちやついていやがつたんだ。ヒモの方は簡単にのしちやつてナ」

「おい！ 今晩は俺達と付合えよナ、御馳走してやんからな。ヤバイことはすんなよナ。おとなしく付合えばなんにもしねえよ——」

ミスズをここまで連れ込んだ少年達、明るい処で見た彼女の姿態に圧倒されて眩しいように眼をそらした。何分まだ十分、大人になり

切れない少年達のことと、相手の女が自分達と同じ年頃の少女か又は少々、年上の女でも

なよなよとして小柄であれば、その見方も変わったかも知れない。相手が女一人であつても

自分達を圧するボリュームの持主であれば、彼等の心にどこか手出しをしかねる何物かが

生じたのであろう。人間共通の心理である。日本人が外国人に一種の劣等感を抱くのもこのためであらう。ミスズもこの空気を読取る

と、前より一層の落着きを取戻した。毎日の勤先でも同じである。「私をいくら引張つて

来ても、お店の客と変りはない」そう思ったミスズは自分の姿態を特別に誇張する様に、

黒髪をさつと後にはね上げ少々蓮葉な口調で云った。

「あんた達不良でしょう。あたしをこんな所に連れ込んで、何しようて云うのさ。変な事

しなけりや少し位い付合つたていいワよ。」

「お前、随分話せるじゃねえかよ。どこかで

見た面だな。「C」じゃねえか？」

銀座の有名なキャバレー「C」の名を出して男の一人がミスズに云った。彼等もやっとミスズが氷商売の女であることが判ったらしかった。

「そんなところじゃないわよ。どこでもいいでしょ。あんた達に来られたら大変だワよ」

「違えねエー——」

映画の中のセリフの様にその男が気取って云ったあと、残っていたウイスキーを飲みはじめた。

「ねえちゃん！お前も飲めよ。」

ミスズは差出された褐色の液体を一気に飲んだ。こうなった以上、女としての弱味を見せてはならない。多少、威圧的に出た方が身を守るためには良い方法だということは、これまでの体験からミスズは知っていた。自分と同じかそれより年下の少年が大部分じゃないか。注がれるままに一杯、二杯とおおった。「ねえちゃん、すぐイケルじゃねえか。酔っぱらっても知らねえぞ」

「こんなもので酔ばらうと思ったら、あんた達損しちゃうわよ。酔わして変なことしようたって駄目だからね。」

気が張っているせい、ぐいぐいとウイスキーを飲んでも、そう酔わないようだった。ただ、さすがに顔や身体が紅色に染ってゆくのが自分でも分った。

「ねえちゃん、あの彼氏とどんな関係なんだよおー。えらくしんねりしてたじゃねえか」
「ああ、あれ？ お店のお客よ。よく知らない人よ。でもあんた達ひどいことするのね。殴ったりして。あの人お坊ちゃんよ」

「お坊ちゃんーか。おれ達だってお坊ちやまだぜ。なあー」

男達も可成り飲んでいた。吐く息も荒くなり、眼がぎらぎらと異様に光ってきた。ウイスキーからビールに、それからブランデーにと瓶は空になっていった。さすがのミスズも急に酔が廻り、身体がだるくなってきた。それでも気だけは確かにもっている積りであった。

「おい！ 誰か酒を調達して来い！ それからツマミもな。」

この怒鳴った声を聞いてミスズはその方を見た。一番奥にいる一人の背の高い身体の高丈そうな男であった。先程から余り口もきかず、黙々として飲んでいたせいもあってミスズも大して気に止めていなかったが、よく見るとその男が一番年上のようにみられた。この様なところには似合わない立派な風ぼうをしており、一見インテリ風であったが、眼つきが鋭かった。いや鋭いというのではなく、何か蛇の絡みつくようなねっとりとした光を漂わせていると云った方がよいであろう。さすがのミスズもその眼を見て何故かぞっとし

た。あとの五人の男は馴し易く思われるけれど、その蛇の眼だけは抗し難い気がした。口数の少いのも不気味であった。ミスズは、つとめてこれを無視しようとした。酔ばらうと眼がすわることもある。あれだ。ただの酔客にすぎない。負けてたまるもんか。ミスズは酔の廻った自分に強く云い聞かせた。

小半時経った頃、先程、酒を調達しに外へ出た二人が帰って来た。

「ただいまー」

と、しおらしい声に続いて、
「さあ入ったらどうです。僕等の仲間の者だから遠慮することありませんよ。」

という猫なで声がした。誰かを連れて来たらしい。やがてウイスキーの瓶をかかえた男に、押込まれる様に二人の女が現れた。いや女というにはまだ大人になり切らない少女達であった。ショートパンツにアロハの裾を前に結んだ流行のスタイルだけれども、顔かたちも伸びた手足もまだ子供のそれだった。中学生かそれとも高校に入ったばかりの年頃の少女であろう。一人の方は多少、不良少女の臭がしたが、もう一人は温しそうな品の良い顔立をしていた。

散乱した部屋の中を見て、二人の娘は一瞬たじろいだ様にみられた。後から入って来た温しそうな少女が、ミスズの方をちらりと見た。同性がいたということが、彼女等に幾分

でも氣易さを与えたのかも知れない。それより増して男達の招じ入れ方は巧みであった。二人の身体を取巻く様に中に入れると「さあどうぞ、どうぞ」と部屋奥まで連れ込んでしまっていた。自分の様に暴力で連れて来られた風には見えないし多分、海岸にでも居たところを言葉巧みに誘い入れたのであろうと思ひながら、ミスズは二人の娘を見た。酒のツマミと云ったのはこのことだったのか。二人の娘は冒険を楽しんでいるのか、ほてりに顔を紅くしていた。一人の多少不良じみた娘の方は特にそうだったし、可笑しくなる程大人の様に振舞っていた。男達はそれもお定りのように娘達にアルコールを注いだ。

波の音が遠く近く流れる。六人の男と三人の女の体臭の混濁した空氣が部屋中に満ちていた。少年達は近づき難いようなミスズを幾分散遠氣味に新しいツマミの方を取巻いていた。ただあの蛇の眼だけが、時々絡みつく様々な視線をミスズに送っていた。いつ爆發するか分らない不氣味な緊張が流れていた。部屋の空氣はある頂点を目ざして急速に熱していった。意識しない様に無理に話題を見つけて、歪んだ顔にだらしない笑を造っていても部屋中を圧する力が各自の上に重くのしかかっていた。飲みなれない強烈なアルコールに少女達はもう完全に酔ってしまった。蓮葉な娘の方は男達と流行歌を唄っていた。先

程までは全く見知らぬ彼等であったのに、今は全く同じ軌道に乗った衛星の様に踊っていた。最初は余り飲まなかったもう一人の少女も友達にすすめられてこれもだるそうに壁にもたれかかっていた。突然、踊っていた少女の足がもつれ、拘合ったまま倒れ伏した。小麦色の脚が少年達の眼の前にどざりと投出され、それがびくびくと痙攣した。一瞬の沈黙が流れ、どろりと混った十二の眼が異様な光をもつて三人の女を見た。ミスズは、はっきり危険を感じた。

夜風が松林を撫でて過ぎていった。それは単調な波の音の間を縫って、巧まざるハーモニーを造っていた。怖しい程空虚な間隙であった。酔に打ち伏しながらも、本能的に身の危険を感じたらしく、二人の少女は身を起した。その一瞬、男達が素速く腕を擱んだ。「少し余興をやってもらおうじゃねえか、なあー皆んな」

一人の娘に二人づつの少年が絡んで衣服に手を掛けた。少年達は激しく身を藻掻せた。アルコールで痺れた手足を辛うじて突張り振りほどこうと焦った。今迄の享樂状態は瞬時にして恐怖に變じた。濁った少女の眼にも必死の光が宿っていた。ミスズはその時、ふと妹の美智子のことを想った。もう随分会っていない。不良の姉を持ってさぞ泣いているであろう。いけない姉と知りながら慕ってくれた妹。ミスズは美智子が愛しかった。今眼前で狂った青春の犠牲になろうとしている少女を見て、ミスズが美智子の上に想を馳せたことはミスズの行動を決定的にした。温和しそうな方がどこか美智子に似ていることもこの決定を早めた。

ミスズのこの様な心の動きを他所に、激しい息遣いと共に鈍い音を立てて体と体がぶつかつては離れた。たとえ少女とは云え必死の力で争うので簡単には野獸の前に屈しなかった。その時である。激しくもみ合っている少年達の前にどざりと音をたてて麻縄の束が投げられ、続いてドスのきいた声がミスズの背後から聞えて来た。

「なんだ、だらしがねえじゃねえか。面倒だからこれで早いとおとなしくしてやんな！」

ミスズは反射的に背後を見た。そこにはいつのまにか、背の高いあの年上の男が立っていた。例のねばりつくような眼が薄笑をたたえて異様に光っていた。この男だけがこの狂乱の中でただ一人冷やかに見えた。眼前のこの狂ったシーンを楽しんでいるかのようだった。

ミスズは猛然と立上っていた。可成りの酔に足もとがふらついたが、蛇の眼に対する激しい敵愾心は自分の危険など念頭になかった。

「あんた達！ やめて！ 変なことはやめておくれ！ その女の子に手を触れたらあたしが承知しないよ！」

左右の腕と手首を背後に捻上げ、交叉させて押え付けもう一人が不器用な手つきでそれを縛る。二人の少女の胸にはもう一条二条と麻縄が巻かれはじめていた。

「縛るなんてやめなさい！ 可愛想じゃないか！」

黒髪を波打たせてミスズは少年達の手を払いのけた。このミスズの剣幕は男達をたじろかせるに十分だった。一瞬、縄をたぐる動作をやめて彼女の顔を見守った。半ば自由を失った一人の少女の縄尻を、少年の手からもぎ取るようにしてその結び目をさがした。少女が身体を藻掻かせるのと、酔のために手元があぶないのとで仲々解けない。おおかみ達にぐりりと取囲まれてミスズは焦った。やっと解き終ろうとした時ミスズの肩がぐっと握まれた。それはあたかもミスズが少女の縛めを解き終えるのを待っていたかのようなだった。

「ねえちゃん！ 仲々の度胸じゃねえか。威勢がよくて気に入ったぜ。どこのあねごか知らねえが、俺達のホンの一寸した遊びなんだから大目

にみてやってくれよ。」

低い冷い声だった。その声の主はものの振返って見る必要もなかった。それは何かミスズの剣幕を楽しんでいる様に思われた。

「なに云ってんのさ！ あん達とグルになるなんて真平さ！ この娘達はまだ子供なんだからね。早く帰してやったらどおー」

「ねえさんまで俺達のお相手になって呉れると云うんですかい。今迄少し遠慮していたらつけ上りやがって！ 痛い目をみても知らないぜ！」

語調をがらりと変え、男は握んだ肩を強く引いた。よろ／＼とよろめいた足並を辛うじて踏止どまりミスズは勢一杯男を睨みつけた。



「なにすんのよ！ あたしに触らないで！
痛い目ってなんのことよ。変なことすると大
声をあげるからね。」

ミスズの勢に初めはたじろいでいた少年達
も、年長の男のドスのきいた声を耳にしてか
らは、ミスズの、少女達では及びもつかない
見事な姿態に新しい興味を燃したように、ミ
スズを取巻く格好になった。

「おい！ 皆、このおねえさんから先におと
なしくさせな！」

彼女は渾身の力をこめて暴れた。何度も自
分に向って突進してくる男達の横面を掌で、
或は拳で殴り、はては皮膚に爪を立てて暴れた。

「なにすんのよ！ コンチクしよう！」

と女にあるまじき言葉を出し、はては

「誰か来て——」

と大声もあげた。しかしいくらミスズがボ
リユームのある身体をしていても、所詮は女
であり相手は若い三、四人の男である。

一人の男が不意に背後からミスズの脇の下
に手を廻し羽がい締にすると別の男が足を払
った。ミスズの身体は宙に舞ってどたりと床
に落ちた。起上ろうとするところを俯伏に捻
じ伏せられた。

「この女、すぐく引掻きやがって！ プロレ
スの選手じゃねえのか！」

顔まで床に押えつけられたミスズは、更に
藻掻いてみたがどうしようもなかった。自分

の意志を無視した様に、両手首は背中に組合
され麻縄が絡みついた。

「何すんのさ！ チクシヨウ！」

ミスズの気丈に叫ぶ声も男達にとっては快
い刺激でしかなかった。手首の血管が止って
しまうかと思われる程の厳しさで後手に縛ら
れるとそこに引き起された。手首だけを縛っ
た縄はまだ多少余っていたが胸や首にそれを
絡めることをせずに、長く引ずった縄尻を年
長の男が握んでいた。

「とうとう威勢のいいあね、もこうなっちゃ
——じたばたしてもはじまらねえ。観念しち
やうんだな」

ミスズは口惜しそうに唇を咬んだ。暴れた
ので着ていた純白のアロハのシャツも肩まで
ぬげ落ち豊満な肉づきを見せていた。

「あたしを縛ってどうするってんのさ！ も
う少し男らしくしたらどう！ 早くこの縄を
お解き！」

無駄だと知りながら、後手首を突張っても
う一度暴れてみたが、糊ではりつけた様に自
由にならなかった。

「ねえさんがもう一寸女らしくして呉れりや
——こんなことにならなかったんだが——も
っとも俺達にとっちゃあこの方が面白えから
な。もっと威勢よく暴れてみな」

蛇の眼の男が、絡みつくような眼差でミス
ズの自由を失った姿態をなめ廻し、さも楽し

くてたまらないといった風に縄尻を手元に引
いた。ずるずると後に引ずられながらやっと
力を入れて踏みとどまると

「こりやー面白え、綱引きとゆこうか」

と言いながら、男はわざとばつと縄尻を放
し反対側によろめくミスズの姿を見て笑っ
た。逃げようとずるずる縄を引ずると、素速
くそれを握んで又手元に引く。すらりと伸び
きった腰から下の線がその度にぶるぶると震
え、惜気もなく見事なヒップの厚みが男達の
眼前に突出される。肩まで垂れた黒髪が大き
く波打っていた。もう完全になぶり者だっ
た。誰かベロにビール瓶をあて、ピーピー
ーヒヤラ」と笛を吹く真似をすると、別の男
が缶詰の空かんを「テンテンテツク」と叩
きはじめた。ミスズは猿廻しの猿にされ休む
ひまなくもて遊ばれた。口惜し涙を流しなが
らも空しい反抗を続けていたミスズも、力尽
きて男達の真中にぐったりと座り込んでしま
うと、思い出した様に年長の男が云った。

「そっちのお嬢さん達はどうした？ やけに
おとなしいじゃねえか」

ミスズの哀れなショーを笑って見ていた男
達も一せいにその方を見た。

ミスズの見事な姿態に忘れられた様に、二
人の少女はベッドの脇の床に転がされてい
た。怖ろしさに声も出せないのか、二人とも
放心した様な眼でこちらを見ていた。ミスズ

(レポート)

乗馬は女性にも

向くスポーツ

東 一郎

先日古新聞を整理していたら、標題の様に興味ある記事があったので、書抜いて見た。乗馬党の女性が本誌上でもしばしば大いに発言しているし、何故女性が馬に興味を抱くのか、私にはいささか疑問に思っていたが、誌上で活躍されていた乗馬党の女性の意見で一応うなづけたのであるが、何か満されない気持が強かった。所でこの記事を久し振りに書抜いて見て、どうやら私なりの結論を得た様な気がする。ここで私の結論をのべるよりその書抜いた記事の方がずっと面白いから興味ある方は御一読願いたい。

が折角一度は解いてやった麻縄も、再び少女達の身体を締めつけていた。二人とも後手高手小手に括り上げられ胸高に縄が喰い込んでいた。気の強そうな少女の方は、逃げ出そうとしたのかベッドの足に縛りつけられ、その縄にもたれ掛るように前に落ちていた。

か。その前にこのあねごに気のきいた着物を着て貰おうぜ。えーとそこにもう縄はねえか？ 無かったら裏に行つてヨットについているロープを持てこい！」

一旦後手の麻縄が解かれ着ていたシャツが剥ぎとられた時、ミズズの反抗の最後の時期だった。それも両肩を押えられ、髪毛を掴ま

れているミズズには、一瞬の自由でしかあり得なかった。乳当とパンティだけにされたミズズは縛り直された後手を首に高々と吊られた。ブラジャーの吊紐が腕の方にすり落ちていた。そこに中細の頑丈そうなロープが持込まれた。蛇の眼の男がそれを手に持って立った。

(未完)

——緑につつまれた皇居内バレス乗馬クラブには、暑さをもとしない熱心な会員がウマを走らせている。服部時計店の令嬢香代子さんもその熱心な仲間の一人。

「どうせ暑いなら、家でゴロゴロしているより、運動をしたほうがいいと思うんです」

一汗出してしまふのが、一番健康的な消化法だといかにもスポーツウーマンらしいあっさりした答。

「女の人がウマに乗ると、ずいぶんお転婆のような事をいう人がいますが……。むかしから乗馬は紳士淑女のスポーツとされていた品

のよい運動なんですから、もっと女性が乗ってほしいですね。落馬したらケガするだろうなんて心配する人もいますが、乗馬はスポーツのうちで一番ケガが少ないんですよ。落ちたと思った時にはもう下に転っているくらい瞬間的ですから、コワイなんて思うひまもないですよ。それにこのクラブのウマはおとなしいから、女性にはもってこい……。日曜日など一家そろって乗りにきている光景など、見ていても楽しくなってきましたわ」

香代子さんの話をもっぱら女性の乗馬奨励。ウマが好きでたまらないという香代子さんにとっては、自分のことより一人でも多くの女性が、また、一軒でも多くの家族がウマに親しんでくれることがなにより心の涼風なのかもしれない。

(昭和31年8月14日附 読売新聞)

映画及びテレビ

に於ける

緊縛場面の鑑賞



織 田 登

近頃、テレビに於ける緊縛場面の鑑賞がマニヤ諸氏の関心の的になっているようです。その実際について、私の知っていることを申し上げてみたいと思います。マニヤ諸氏の多くの方を、恐らく失望させることになるかも知れませんが、テレビの緊縛場面は大概の場合、本当に緊縛しておりません。大抵、先ず十中九まで、胸に一巻きか二巻き縄をかけておいて、背面はただ縄を手で支え持っているだけです。理由は、テレビの場合は、映画と違って芝居が継続しているの、前の芝居から縛りのシーンにゆくとき、或は縛りの場面から

次の芝居に移るとき、いちいち本当に縛っている間がないからです。又、若し仮に、そういう時間があつたとしても、本縛りにすることとはめつたになく、それ程の厳しい演出は、私の知る限りでは、まだされていないようです。

なんといっても、テレビは画面が小さいから、映画と比べて、その点はごまかしがきくということがあります。だから、本誌上に於て拝見したファンからの投書は、先ず見せかけだけのもので、ごまかされているといつて過言ではないと思います。勿論、前で縛る場合とか、縛られる芝居しかない時は、この限りではありません。それも、そのときの演出次第ですが、昨年、実際に本縛りをやったことが一回あり、たまたま私はそれを見ることができました。いつだったか、日ははつきり記憶にありませんが、NTVの丹下左膳の時です。そんなシーンがあるとも知らず見えます。そんな、新東宝の江畑純子扮する武家娘が、たまたま縛られており、しかも、それがなんとなく本当らしいので、まさかと思ひながらスタジオにかけこみますと、やはり縛ってあります。誰が縛ってやったのか、もし事前に知っておれば、この俺がやってやったのと思ひながら傍へ寄り、周囲を見廻すと、他の者は、それぞれ別な仕事に専念していて誰も

こちらを注意しないのを利用？　して、後手に縛られて身動きの出来ない彼女の肩を抱き寄せて、

「こんな恰好をしていると、こういう風にしなくなるね」

と囁やきながら、ネックにキスする真似をする、驚いて彼女は身をもがき、本番中なので大声を立てるわけにもゆかず、小声で「まア、いやらしい」と私をにらみながら、口許では、いたずらされたものの、仕様がなといった笑いを浮かべていました。

私は、そのまま、さっさと引き上げて来て別な仕事に向ってしまったのですが、普段あまり色気を感じていなかった江畑純子が、この時は、ぐっと色っぽく見えたのですから、やっぱり女を縛るといことは、いいものだと思います。

まあ、こんな風に本当に縛るといことはめったにないことで、何時ぞや、宝塚二三夫氏が、テレビの縛りについてお書きになり、ちやうどその頃、津村悠子がNTVの「忍術真田城」で盛んに縛られ役をやっていたのでそのことをのべていましたが、彼女の場合も本当に縛ったことは一度もありません。そういう機会があったら、いつか私自身で縛つてやろうと思っているのですが、彼女はこの頃時代劇に出演せず、まず、そうした機会は来

ないだろうと思います。

何といっても、私には映画の方が興味が持てます。映画にしても、大分インテキはありましようが、画面が大きく、ごまかしがテレビほどきかないし、万事本格に持つてゆくことが多いから、見せかけだけのものと本縛りとの違いは、いかに演技でカバーしても出るもので、殊にテレビの場合、縛られながら動きの烈しい芝居をする、どうかすると縄がずれて落ちそうになって、それを気にして肝心の芝居がお留守になったり、背面がともすれば見えそうになったりする。実際を知っている私には、こういうことは幻滅なので、普段テレビの緊縛には、あまり関心がないのです。映画の場合ですと、それ程、実際を知らないから、時々ごまかされているのではないかと思うのですが、テレビよりはましだと考えるからです。

そこで、私の印象に残っている緊縛映画のシーンについて書いてみます。一つは少し古いので既に誰かによって紹介されているかも知れませんが、米パラマウント作品「地獄への近道です」。

主演はロバート・アイヴァース、これが殺し屋に扮して、発端殺人を犯し、金を貰うが仲間に密告されて危うく捕りそうになるところを逃亡し、途中追手をくらますために、無

理に道連れにする相手の娘が、ジョー・ガレ・ジョンソン、大して美しい女優ではないが、演技はまずくない。無事に逃亡してアイヴァースは娘と別れるが、それを知った一味は、アイヴァースを捕えるために、その居所を娘に白状させようとして、ジョンソンを誘寄せる。ジョンソンは既にアイヴァースに同情していて、彼のために一味の正体を探ろうとして単身、招待された邸宅へ乗りこむ。が、女一人、ギヤングのために苦もなく押えられ、猿ぐつわをかまされ、後手にしばられてしまう。ギヤングは太っちよの、好色で卑怯残忍な男です。手に入った女を横抱きにして別室へ入る、その時ロングにて縛られた女の後手が見えます。男は抱いて来た女を長椅子の上に投げ出すと、そこには下男によそはった別のギヤングがいて、さて、これから、この男が女を拷問するといった暗黙の了解がなり立ちます。

太っちよは、「あまり手ひどくするな、俺はこういうのを見るのは好きじゃない」と言っただけで出かけてしまふ。下男に扮した方は「なに手間はかからないよ、いい方法があるんだ。二分とかからない中に音をあげさせてみせるさ」と言いながら、彼女の前に腰をかける。誰もいなくなると、「さて、どういう風にやってもいいのかな」と言いながら

満足気な、なぶりかける眼で女を見下す。フ
レヤスカートのパツとしたカクテルワンピースを着たジョンソンは恐怖にふるえた眼で縛
られた身をもがくという所でカット。

おさまりの救いの手がやってくるのですが
彼女の緊縛はもう一度見られる。次のカット
では救いにやってきたアイヴアースが、この
ギヤングと格闘してなぐり殺し、邸内へと躍
り込んで彼女を探しまわる。遂に部屋の隅の
バーのスタンドのかげに押し込まれているジ
ョンソンを見つけ出し、その縄をとくところ
で二人は、ミドル・ショット及びバスト・シ
ョットになり、ジョンソンの縛られた姿の比
較的近い角度からの模様がえられる。比較的
長時間の場面でした。このスリリングな映画
の中では、この緊縛模様には、何か女のうす
汚れた襟首をしめるような生々しさがあり、
実感があつた。当節珍しい程の迫力だったと
思います。

次には最近で東宝の「隠し砦の三悪人」
に於ける上原美佐。私は大体、黒沢明の映画
は大嫌いなのですが、この作品は面白くすな
おについて行けた。姫を擁して百姓に扮した
一行が敵中突破一步前というところで捕えら
れる。敵陣の小屋の中に、三船俊郎と上原美
佐ともう一人、あまり美しくない女（元姫の
侍女だった）が並んで縛られて坐っている。

そこへ藤田進が首実検にあらわれるシーンと
翌朝、処刑の場所へ連れられてゆくシーン。
特に後者がよい。いきなり馬上で縛られた姫
の横からのショット。太い縄で胸を一巻き、
粗末な布でかくされた乳房が、わずかに押し
あげられている。更に次には、姫を真後ろか
らアップで映す。ここで後手の背面が物の見
事に捕えられる。これも時間にしては長い方
だ。黒沢明なら、恐らくごまかしの演出は行
うまい、広大な山々を背景にして大空にくっ
きりと浮かび上った姫の捕えられても毅然と
した表情。きれいに縛られたその姿。「地獄
への近道」に於けるような、いやらしい悪党
はここでは登場しないし、上原美佐は上品な
美人ではあっても色っぽさはない、従って、
これは責めとしての効果はあまりないが、何
か澄みきった美しさがある。文字通り縛られ
た女の美しさがある。

黒沢明はリアルな絵を作り出すのに一生懸
命だが、作り出されたものには、いつも、そ
うした写真を通り越しての様式を感じてしま
う。写真にこればこる程、様式がかってしま
う。この緊縛場面にも、だから、「地獄への
近道」のような生々しさは、とんとなく、歌
舞伎の舞台に見るような作られた画面を感じ
てしまう。彼は恐らくサディストの要素は持
たぬだろう。が、それにしても、この緊縛場

面は成功しており、恐らく最近の映画の緊縛
シーンとしては傑作の一つだろうと思われま
す。

右の二つは緊縛とはいっても、縛り上げら
れてからのものだが、縛りあげられる過程を
写した珍しいものに、今じゃ、これも少し古
いが、仏映画の「OSSと呼ばれる男」があ
る。この映画で縛られるのは、私の大好きな
マガリ・ノエル、おしまいの所で敵方のスパ
イの一味の男におそわれ、ピストルで一度牽
制するが、すぐ武器をはねとばされ、腕をね
じ上げられ、ソファに押し倒されて猿ぐつわ
はされないが、すぐ後手に縛られてしまう。
ここまで短い時間ではあるが、ちよいとした
よい場面。これはメロドラマ活劇だ。マガリ・
ノエルのあの性的なむんむんする臭いは言う
まい。ぴったりと身体にひつついた胸あきの
大きいスリーブレスのワンピース姿は魅惑的
であり、そのワンピースに包まれた豊満な肉
体が男によって、もみくだかれるその魅力。
再び言うが、女を縛れば、その魅力は倍加す
る。女を縛るのはよいものだ。

以上、テレビ、映画の緊縛場面について、
一言しましたが、これからも印象に残ったも
のが見つかったら、皆さんと一緒に鑑賞して
ゆきたいと思ひます。

◆◆本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品◆◆

惡徳教師考

幹 本 完 治

(一)

教師の世界ほど固苦しい所はない。職場では冗談一つとばせるでなし、校門の外にあってさえ父兄や一般の人々から特殊な注目を浴びせられて、思うような行動がとれない。特に地方でははなはだし。四六時中多勢の人間に監視されているようなものだ。気の弱い教師は映画館へ入る事にも気おくれするのである。パチンコやダンスホールなどもっての外だ。若い教師が街で女性と立ち話してさえどこからか咎められる。新婚の教師が妻と寄りそって歩きでもしようものなら、うるさ型の父兄が大変だ。この窮屈さは、田舎の学校に勤務してみた者でなければわからない。

僕のいる町には書店と呼べるものは一軒しかない。そこで通俗雑誌でも求めようものなら、忽ち父兄から苦情が出る。どうやら書店

の女主人がうるさいらしいのだが、それがまあ田舎の実情である。しかし教師も人間である。いや、普通人以上に人間である場合が多いのである。だから日常抑圧されているものが、機会があれば一度に奔騰してしまうのだ。職員旅行や、内輪だけの宴席などがそうである。そういう時の会話の淫靡さは、他の社会にない独特のものかもしれない。だが、そうして一度思い切り情熱を発散させてしまうと又翌日から黙々として神聖な職務に従って行くのだ。

教師というものを人間的な面から分析すると、自己偽瞞で満ち満ちている。又、そうしなければ、まともにやって行けないのだ。自分の内密の欲求をすべて教育という格式の中にとじこめて、そしてぬ顔をしていなければ苦しくて勤まらないのだ。生徒の前に立って道を説き、父兄の前に出て教育に対するひたむきな熱情を吐露しないでは、自分を支えてゆけないのだ。私生活もごく限られた手段で

しか享樂する事ができず、檻詰めにされたような毎日の中で、自己を偽わらずにはどうして生きて行けるだろうか。教師を支えるものは理性でなくてむしろ忍耐なのである。

だが時には自己を偽わり切れぬ情熱的な教師がある。その教師が思わず忍耐の壁を破った時、問題が起る。社会はそれを過失と見做し、人間的な目をもって寛容する事はしないのである。彼は悪徳教師のレッテルを貼られ軽くて転任、重ければ退職の憂き目を負わされる。

もともと教師の情熱がノーマルなものであったら、多少の脱線もそう問題視される事はない。だが、読者諸賢が知るように僅かでもアブの血を持っている者が、日頃の抑圧によって昂じた情熱を爆発させた時にはどうなるだろう。そして案外、教師にはそういう性向の者が多いのである。

教師の世界にアブノーマルな性癖が多いなどという独断だときめつけられるかもしれない。だが僕の周囲の教師達に関する限りははっきりそういえるように思う。そしてその原因は、教師を特別な人間であるとして社会が課す不当な忍従にあるといえる。教師はまともな恋愛でさえ、しばしば束縛されるのである。その内攻する情熱が、歪んだものとして肉体の内部に蓄積されていく事は、否めない事実であると思う。こうして、他の社会に比較して、アブな人間が多く出来上るのだ。

教師が多くは自己偽瞞の揚句、神聖な熱情を注ぎこむ生徒達、これを逆な見方をしたらどうだろう。教師に絶体の信頼と敬愛を持つ素直な女兒達。アブな血にはそれこそ絶好の餌食となるべくそこにあるのではないか。そこで、時々悪徳教師はそのいたいたけな女兒を歯牙にかけてしまうのだ。それは教育という大きな目的の上からは、やはり絶対に許されるべき事ではない。だが、その行為を冒してしまった教師を、僕は一概には責められない気がするのだ。これ

は一つの感傷であるかもしれないが、その悪徳教師の人間性を見捨ててしまう事ができないのだ。彼は圧迫された生活環境の中で、おそらく幾度か真の自己と戦い、完全な偽装を遂げようと苦しみ、そして遂に自己を欺き難くその拳に出してしまったのだ。行われてしまった結果に対しては彼は充分な責を引かねばならない。それはもはや彼が教育という職場の規則を破ったのだから。しかし彼の人間性はそれによって抹殺されてはいけないのだ。彼は自分が氣楽に安住できる別の社会に旅立つべきなのだ。

実は僕自身が今、一つの戦いに苦しんでいるのである。本稿の目的はそれを告白する事にある。だが、その前に少しばかり教師の世界でなされた悪徳の事件といわれるものを拾ってみなながら、感想をのべてみたいと思う。

(二)

以下は新聞に公表された事件を、切りぬきのあるものはその記事を、そうでないものは記憶に従って記したものである。

(1) N中で裸の懲罰(昭和二十六年)

N県の山村のN中学二年生の担任教師が授業時間中、男女児童を裸にして二列に向かい合せて坐らせ、懲罰を加えた事件。原因は、日頃いう事をきかぬクラスで、もう他に手段がなくなったと判断した為であった。(S地方紙?)

この事件はごく簡単に報道されただけだったと思う。古い事であるし、僕自身がまだ高校生だった頃で、その結末がどうなったのかは知らない。この担任教師は或いは生徒を思う一心からこういう方法をとったのかもしれないが、おそらくは自分の嗜虐性を充分満たす為の行為であっただろうと思う。又、この記事を見た他の教師達は口ぎたなく非難しながら、内心では羨望した事だろう。

(2) 教師、帰途の女児童を襲う (三十年)

M町M中学の若い教師が、夕暮れに帰る教え子の女児を河原で待ち伏せして、草むらに連れ込み、言葉巧みに誘いかけて思いを遂げようとしたが、肯じないので暴力を振るった。が騒がれて遂げず、家まで送って帰った。この事件はその児童の父兄から明るみに出たもの。(紙名忘却)

この記事通りに解釈するとひどく悪らつなやり方のようにだが、待ち伏せをしたのではなく、偶然そこで帰途の教え子と会い、つい草むらに連れこんでしまったのだらうと思う。日頃抑圧されている気持が、こんな偶然の機会にふと現われてくるのだ。この教師がもう百米も先で会ったのなら、何の事件も起さずに「さよなら」といって別れたに違いないと思う。

(3) 又も教師の暴行 (三十年)

運動の練習(だったと思う)で遅くなった女の子(小学校六年)を家へ送ってゆく途中、空小屋につれ込んで暴行した事件。これは、被害者がひたかくしに隠していたのだが、風呂場で異状を認めた母親が無理矢理に調べて、傷のある事から追求し、露見した。この教師はふだんは教育に熱心で校長の受けもよかったという。刑事犯として逮捕された。(S地方紙)

この事件では犯人の教師が、ふだんから勤務態度もよく、たしか人格も温厚なよい教師であったと出ていたと思うが、そこに僕が考える教師の内的矛盾と偶然的に触発される宿命的な因子が感じられる様に思う。この教師はきつと長い間ある面で抑圧を受けていたのだ。別に変態性はなかったもので、他に対象が得られなかったのだと思う。が、許されてよい事ではない。当然刑務所に服役すべきであるが、案外このような犯行の動機は多くの教師が秘め持っているのではないかという気がする。

(4) 桃色教師逮捕 (三十一年)

N市(人口十五万)の中学三年生の担任教師某(当時三十五才)妻帯は、自分のクラスの女生徒を次々と医務室や自宅につれこみ、桃色遊戯にふけていた。女生徒の仲間割れから明るみに出たものだが、はつきりわかった被害者だけで十人を越している。犯行の動機はA子を医務室で応急手当した事から、昂じたもの。(S地方紙)

この記事には大変興味のある一文が掲載されていた。それは被害者B子の母親の談として、「保健婦がいるのに男の先生が流腸など考えられない事です」というのであった。それから察するに、この某は急に腹痛を訴えたA子(十五才にはなっていた筈である)を医務室につれて行って、保健婦がいなかった為に自分が流腸を施してやったのであろう。それが病みつきで、A子を口説いては流腸プレイを楽しんだという事が考えられる。又、幾度でも流腸を許したという事は、A子自身がその教師に或る程度の愛情を示し、自ら積極的に出ていった事もあるのではないかと想像されるのである。(とこののは僕自身の体験から推して、女生徒が案外教師を挑撥する事が多いのだ)B子以下十余人の女生徒は、A子を仲介として某に接近し、同じように流腸されたのであろう。現場の教師として、それ程大量の女生徒を自分のものにする事はちよつと考えられない事であるが、現実に行われたのであるから驚異である。もっとも相当生徒に人気のある教師であつたろう。でなければ、生徒がそれ程従う訳がない。この教師は引責辞職をしただけで大した問題にならなかったが、それは桃色遊戯なるものが多分流腸プレイかそれに擬した程度のものであつて、女生徒の肉体を傷つけてはいなかった為だろうと推察されるのである。正直いえば、僕には羨ましい事件である。

(5) 行き過ぎた指導、PTA真相糾明に乗り出す (三十二年)

S 郡 Y 町小学校 P T A では、最近校内の児童の指導に問題があるとして、実状を調べる事になった。

同校では五年生担任の某教諭（二十八才）ら一部の教師が児童に暴力を加え、廊下に長時間立たすなど、行きすぎた指導をしている事が児童の訴えからわかった。P T A では個々の児童から事情を聞くと共に、学校側に真相をただしているが、学校側では強硬に否定している。P T A の調べでは教室内で尻を叩かれた女児童など数人の名がわかっており、それらについて学校側の釈明を求める事になっている。――以下略――（M 紙地方版）

この事件の結末はどうなったのか知らないが、それきり報道されなかったように思う。たぶん報道されるほどには酷くはなかったのだろう。だが女児の尻をぶったという事は興味がある。おそらく平手で叩いたにちがいないが、もしこの女児が五年生であったとすれば、児童によってはそろそろ女らしさの徴候を示す年である。悪く解釈すれば懲罰に名を借りて劣欲を満たしたとも思われる。その叩く時に女児にとらせた姿態までを考えるのは過ぎた想像だろうか。

(6) 次々と児童に暴行、小学校教諭逮捕（三十二年）

M 署は二十一日 M 市 J 小学校教諭 N（四年四組担任 四十一才）を強制わいせつ、暴行の疑いで逮捕した。調べによると N は変質者で受持ちの児童を自宅や公園につれ出し、暴行を働いていたもの。被害者は今の所五名が判明した。N は犯行を認めており、余罪を追求中だが他にも被害者があるもよう。

N は複雑な家庭環境にあり、妻と別居中であった。勤務状態も悪く、以前から P T A や職場から注意人物とみなされていた。N の下宿していた U 町 X 番地 M さんの話では、この春以来素行が乱れ、しばしば児童をつれこんであやしい行為にふけていたという。N の犯行は相当長い間つづけられたとみられ、――以下略――

（S 地方紙）

この地方では相当なセンセーションをまきおこした事件である。妻と別居中とあるが、変質的な性格がその原因かもしれない。これは教師の職にある者がいったん職分を忘れて乱行しようと思えば、いかに易々と教え子を対象にしうるか、という事の例である。このような暴行をいたいけな女児に加えるという事は人道上からも許せないが、教え子を劣情の対象として考えてみたくなるのは、多くの教師が持っている共通の感情かもしれないと思うのである。

(7) 教師、女生徒にいたずら（三十三年）

N 署は N 市 J 中学校（T 校長）教諭 S（二十九才）を強制わいせつ罪の疑いで任意出頭を求め取調べをつづけていたが、このほど確証をつかみ、十九日逮捕した。S は教職の立場を利用して、同校二年生 R 子（十四才）ら数名の女生徒を自宅につれこみあやしげな行為を働いていた。更に放課後の教室や学校便所などでいたずらしていた疑いもあり、被害者は相当数にのぼると見られる。S は N 署の取調べに対し一さいの犯行を否認しているが、被害者の申し立てから悪質な行為として、即日送検した。

J 中事件、父兄に強迫状（翌日）

女生徒にいたずらした疑いで逮捕された N 市 J 中学校 S 教諭は、生徒の父兄の申し立てをおそれて、被害者の家庭に強迫状を送っていることがわかった。

S の被害者の一人 K 子（十五才）の父 T さんは、昨日 N 署に出頭して S から差し出された手紙を提出した。

手紙は便せん二枚にわたって事件を伏せることを強要したもので、N 署では悪質な強迫状と見て犯行の有力な証拠にする為に保管した。――略――（S 地方紙）

ごく最近の事件である。僕の勤務地の近くで起った事件なので詳

しい情報が流れて来たが、Sという若い教師は受持ちの女生徒を片っぱしから毒牙にかけていたらしい。これも犯したのではなく、生徒の身体を手で弄んだだけであつたらしいが、一種の変質者の仕業といえるだろうか。

以上いくつかの実例を上げてみたのだが、こうして公にされない事件は無数にあるのではないかと思われる。生徒の前に立つ時、教師は多かれ少なかれ偽装した自己をさらしている訳だが、その明朗ではない仮面の人格の裡には、いつか吐露さるべくして吐露されぬ重苦しいものが蓄積されて、歪んだ欲望と化していつてしまうのではないかと思う。しかも目の前には組みやすい女生徒がある。教師と生徒の間にある独特の雰囲気、独特のつながりは何とでも利用できるのである。そして、生徒とはいえ、教師の目から見ればもはや含羞の女だ。機会があればそれを契機に過つてしまうことも充分ありうるのだ。多くの教師は、奥深くそのような欲望があつても、表面に出さずに自制してしまふ。義務、教育或いは自己を守るためそれらの言葉にかくれて気配を表わさない。だが偶々その性向が激しく、強い教師は内心の欲望を、行為で果たしてしまうのだ。

ここでいいたいのは、彼らの悪徳が何かの形で許されるという事ではなくて、むしろそういう犯行の動機は案外多くの教師に普遍に持たれているという事である。

(三)

話を僕自身に戻す。

僕の勤務している高校は全校生徒合わせてやと三百人、法令上の整



坪太郎

備基準にやと達するお粗末なものである。町というのは名のみに、最近近在の町村が相ついで新市の名乗りを上げた時にも、合併の話さえも出なかった山峡の辺地だ。人情風俗、旧態依然とした農村である。校舎も古い木造の本館が一棟に小さな体育館、公仕室と宿直室が一棟。終戦まで町立の女学校であつたのを二十三年に県立に移管したのだそうで、今日でも八〇％は女生徒である。

活火山の峯にも雪が降って冬ごもりの支度もできた農家から、毎朝「下げ靴」の女生徒が頬をまっかに染めて集まつて来る。十二月だというのにオーバーを着ている者は半分ほどで、昔ながらのモンペや尻のピカピカ光ったズボンをはいて、えり巻に顔を包んでやつて来る。

ここに赴任した時は、さすがにくさつた。東京での自由な学生生活を送った後だけに、この肥え臭いような田舎はただ幻滅の悲哀だった。しかも土地の人々は「先生、先生」とあがめてはくれても、なかなか私生活にもきびしい批判をする。女性から手紙が来たといつても騒がれるありさまである。

それでも約二年たった今は、慣れたせいとか何とかおもしろい毎日を送れるようになっていく。生徒達の中には結構美人と思われるのも五、六人いるし、人知れぬ楽しみもある。教師仲間も愉快だし、何よりも生徒に絶対的の人気を獲得してしまつた事は楽しい。勤務成績もどうやら上々の部で、県の研究助成金ももらったし、教組の委員にも選ばれるし、校長の受けもいい

らしい。授業は愉快だと生徒の評判もよいし、クラブ活動も僕のもっている水泳班と演劇班は大活躍である。その為か、今年は三年A組の担任に抜擢された。

僕は告白すれば大のヒップマニアである。学生時代からそうだったのだが、さすがに教職一年目は緊張していてそのような気持は表面から消えていた。しかし二年目に入ると共に、又もやその傾向が再発して、これだけは仕方がないと諦めている。殊にクラスを担当してからは、よい刺戟されるのだ。僕の楽しみとはその辺にあるものであり、表面は相変わらず人気教師であっても、内心はいささか悪徳教師になりつつある事を否めない。

田舎娘ではあるが、三年生ともなれば、そろそろ女らしく成熟する時期である。身体つきはもう大人と変わらない。しかも薄地のモンペやズボンにびっちり包まれた肢体は、どうしても僕の食欲をそそる。豊かなヒップをくりくり動かしながら、目の前を闊歩する彼女らは、まさに僕の愉悦の宝庫なのである。しかも夏ともなれば、ズロースとズボン以外はつけていない生徒が多いらしい。

僕のクラスは五十一人で、そのうち四十五人が女生徒である。担任しての一番の楽しみは、何といっても放課後の掃除を監査することだ。豊かな臀を突っ立てて雑布をかけて行く女生徒の後に立って、妄想をほしいままにできるのは、すばらしい事である。尤もこ



の楽しみは僕だけのものでないらしく、酒席などでは冗談めかしてよくそのような話が出る。担任してまもなく、四月に年中行事の一つである全校検便があった。これは僕のまず最初の役得(?)であった。

教室で、保健所の指示通り便のとり方を説明した。曰く「はじめに出て来るのと、おしまいの方と違うそうだが、その真ん中のをごく少量とって使う。そしてそのまま竹ベラをこのガラス管に入れ、紙にくるんで持参するのだ」

容器を渡すと、女生徒はさすがに恥ずかしがって、その風情は何ともいえぬものである。しかし僕の楽しみはその容器を集める時にあった。

教卓の上にもう高く積み重ねた容器を職員室に運び、そこでこっそり名前を見て、T子とK子の二本をそっとポケットにしのばせた。T子とK子は共にクラス中の花形であって、もとより僕の関心を惹く存在である。T子は丸顔、うるんだような目と、なめらかな唇はすばらしい。口数の少ない控え目な生徒だが頭はいい方である。K子は大柄で明朗、顔立ちが美人という程でもないが、目がぱっちりしていて愛らしい。いい声である。この二人の分をポケットにかくした僕は便所にかくれて、そっと紙をとく。そして竹ベラをぬきとって、とっくりと妄想を働かしたのであった。多少そのような行為

に責を感じたが、愉快の前には教師の自覚など問題ではなかった。僕はこの観賞物に大いに満悦したのである。

梅雨あけから小学校のプールで、水泳部の練習が始まる。女生徒の水着姿は又僕にいつその関心を抱かせた。布地一枚を通して目の前にその形を露呈しているヒップ。マニアにとってはこれほどありがたい余得はない。平泳ぎをして行く選手、ヒップから腿への動きは、じっと眺めているうちに、妙なる芸術作品をさえ思わせる。僕は我ながら不思議なのだが、短気な方でつい分怒る方だ。それなのに僕がどんなに怒っても、生徒は反撥しないのである。水泳班の指導などは相当きびしくやるのだが、誰もがなついて来る。いい気になって、怒りながら水着の臀を叩いてやる事もあったが、誰も変にとらないのだ。飛びこみ(スタートの)の姿勢が悪いと、後からピシヤンと叩いて、水中に落してやる事もあった。しかしそれで気嫌を損じたり、いやがったりする生徒がいないのは、かえって変な具合であった。もっとも、いくらそうでも凶にのって行きすぎるような事はしなかった。小胆であるのか、臀を叩くにしてもなるべく横の方を軽く打つ事しかできなかった。生徒は別に悪くともないし、それで僕もまあ満足であったし、楽しい教師生活の一コマである。

(四)

七月、各学年ごとに集団キャンプを行なうのも毎年の慣例だ。去年は僕のクラスの連中は海へ行ったが三日間とも雨に降られてさん

ざんな目にあつた。その為か、今年は三年生全部で四十名ほどしか参加者がなかった。T山登山という事に決めて、引率は僕と、もう一人の三年担任S氏だけ。S氏はもう五十四才で停年を控えているというのに、なかなか精力旺盛であるらしい。ともあれ、僕とはよくウマが合うので、一つ面白くやりましょうというような密約(?)を交わして出発したのであった。

夕方山腹にテントをはり、炊飯が終ってから、僕とS氏は全員点呼したあと、翌日の注意をした。参加者は女生徒だけであつたので、却って何事も話しかろうという訳で、S氏は大音声よろしく「それからだな、見る通りここには何の施設もない。身体に変調を来たしたものは、取り返しがつかぬようになる前に申し出る事。あすは三千米の高山に登るのだから、よくよく慎重を期して欲しい。どうだ、誰も異常はないか?」

勿論、環境の変化による異常生理を意味していた訳だが、一人も申し出る者はなかった。

「それなら、最後に注意しておくが、明朝は四時出発である。それまでに各自、糞をまっておく事。よく脱糞しておかぬと高山病にかかりやすいからな。ここには便所はないが、そのかわり広大な野天便所がある。場所はどこでもよいから、他の登山者の迷惑にならぬよう」(S氏の言葉のまま)

生徒は予期に反して笑わなかった。その辺の微妙な思春期の心理を僕はどう解釈すべきか、しばし考えこんでしまったことである。

日が落ちて就眠しようとする際、僕とS氏はウイスキーをきこしめして、その勢いで、一つ暖かく寝ようじやないですか、と相談した。つまり、女生徒の中へ割りこんでぬくぬくと寝てしまおうというのである。僕はS氏と別れて、T子とK子のグループのテントにもぐりこんだ。S氏はどんな待遇を受けたか知らぬが、日頃生徒に親しまれていた僕は、予想外の歓迎で、テントのど真中、しかもT

子とY子の間に割りこむ事ができた。(S氏はその後、生徒から聞いた所によると相当の騒動を受けて、自分の毛布に一人くるまって隅っこに寝たという)

僕の入ったテントは、急に活気づいて、いったん皆の上に拡げた毛布をはいで、アカリをつけ、菓子などを引っぱり出す始末となった。こいつはいかんと思ったが、つい生徒に引きずられて、お得意の小話なんぞで笑わしているうちに、

「ああ先生、お酒臭い」

とばれてしまい、それからますますいけない、僕の制止など聞きもせず、僕の背をこすいたり髪を引いたり、大騒ぎになってしまった。

「俺は先に寝るよ。毛布かけてくれ」

とひっくり返ってしまつて漸く、生徒も菓子袋を片づけて静かになった。

「あたし困る。あしたの朝の事考えると」

と誰かがいい出して、

「そうだね、あたしも」

などと二、三人が訳の分らぬ心配を始めたので

「何だ、便所の事か」

と水を向けると、S氏の注意が気がかりであつたと見え、そうだと素直にいった。

「じゃあ、今からやっておけ、その方が安心だぞ」
すると、

「そうだなあ、Aちゃん、一緒に行かないか？」

「やだ、おっかなくって」

「Mちゃんはや？」

「あたしもこわい」

僕がそれらの会話を、彼女らの裏の生活を見る思いで、興味深く

開いていたのはいうまでもない。僕も小用に立つふりをして、
「じゃあ、希望者は一緒に来い」

という、これも意外に従順に三人ほどついて来た。酔いを借りて、彼女らの現場にまでついていきたと思ったが(又、そうしようと思えば案外簡単にできたのかもしれないが)、さすがにはばかつて先に引き上げた。だが興味のある場面だった。

夜中にふと目ざめると、右に身体を密着させているT子が背を向けて膝を折り、両足を僕の足の上にのせている。そして僕の手は彼女のヒップにびったり吸いついていたのだ。それと気付いた途端、僕は心臓を早鐘のように打ち鳴らし、遂に悪徳教師に転落した。左右からスヤスヤという眠りの音が聞え、風もない山腹は沈まり返つて不気味なほどであつた。しかしT子が眠っていない事は、敏感に察しられた。僕は寝呆けたふりをして、T子の足をつかみゆすぶつた。すなやかに伸びた弾力のある足、僕が目にとめていた生徒であるだけに、小気味よく発育した乙女の足であつた。僕は時間的に教室内でのT子を思い浮かべた。無口な、誠実そうな、控え目な、それでいて熱情を内に秘めたような、整った彼女の顔。僕は安心した。大丈夫だろうと判断した。口がかわいて、生唾がたまつて、それを飲み込む音をさとられまいとして、僕は苦心した。足をとられてもT子は反応を示さなかつた。僅かに筋肉を痙攣させただけであつた。僕は勇を鼓して、あこがれのヒップに触れた。それにも反応はなかつた。僕は次第につよくヒップを押した。ピッチリしたズボン、膝を折っている為に突き出し気味のヒップ、何ともチャームングな感じ。それらは僕の最後の良心を根こそぎ奪い去るに充分であつた。僕は自らに疲れた。が、遂にT子は微動だにせずに耐えた。僕は又眠りにおちた。

次に目ざめた時、すでにT子の足はなく、いつのまにか僕の手は彼女のセーターと下着をめくり上げ、ズボンと下穿きとの間に入っ

ていたのだ。しかも下穿を通して熱い程の体温を受けていた時の驚き。僕の意識が手甲の感覚を甦らせた時、あのすばらしいヒップの真ん中にぴたりくいついているのだという事を知ったのだ。T子がやはり目ざめているのである事は、その乱れがちな、嘆息をつくような呼吸から知れた。僕は又もや教師ではなくなった。

奇異な事だった。僕はたしかに眠っていたのだ。しかも彼女のズボンは翌日たしかめた所、バンドできつく止められていたのだ。僕に、後向きの彼女の腹部のバンドをはずす事ができたものだろうか。おそらく、T子が自分からズボンをおろし、そして多分僕の手をとってすべりこませたのだ。ふだんのT子がかくれ咲く白百合のような印象であっただけに、そう考えるのは、いかにも不自然で納得しがたく思われた。

だが、これはT子の挑撥であつた事は間違いがない。そう考えると、さすが後めたく感じながらも、どこかでほっとした。そして、このまま何事もなかったように知らぬ顔をしていてみようと思つた。罪は半々ではないか——という気がした。

目標の登山を無事終つて第二夜、僕とS氏は「高山病の薬」(ウイスキーの事)をやつて、それぞれ別のテントにもぐりこんだ。さすがの疲労で僕はすぐ眠ってしまったが、眠る前にT子がそれとなく僕の身近に寄つて、物思わせぶりの素振りを見せたのは、一体何を意味していたのであろうか。

(五)

二学期が始まって、僕とT子の間には以前の単なる師弟の関係以外には何もものもなく過ぎた。しかし僕の心中には潜在的にT子の存在が印象されていた。それは夜の寂しい気分の時など、妙ななつかしみの形で僕を襲うのであつた。時がたつにつれて、たまたま思ひ出すたびに、あの夏山の一夜は鮮明に浮かび上がつて来た。だがそ

れはいわゆる恋心とは異質のもので、単なる悪徳への憧憬であつたかもしれない。僕は彼女を欲しはしても、愛を持ちたいとは考えなかった。いわば悪習の際の対象でしかなかった。僕の悪徳の中にT子が現われる時は、いつもこんな形をとつた。僕は自分から手を出しはせぬ。横にいるT子が僕の手をとり、いざなう。僕は彼女の需めに抗う。しかし無言の裡にT子は強く哀願する。僕はT子に遂に負ける。そして奉仕する。そして終れば共に一言も交わさず何事もなかつた師弟に帰る。お互いに良心をわずらわさず、「人間的なもの」として了承しあう。

卑怯なようだが、教師としての良心を、そのような形で保持する訳である。勿論一線を越さぬ事がその前提となっている。

僕とT子との間には、しかし再び現実としてある密事が行われた。それは、わずか一カ月前、十一月初旬の学校文化祭の時である。文化祭には一つの大きなプログラムとして学芸会が開かれる。演劇班が中心となつて、劇や映画を上演するのである。僕は一カ月前から連日、三本の劇の演出を受けもつて奮闘していた。その中の一本、「湖の娘」は演劇班の人員だけではキャストが足らず、僕はT子を起用して、あやまった人妻の役を与えた。無口なT子だが勘の良さと、自然ににじみ出る彼女の零細氣を買つたのだ。そしてそこへプラス・アルファの何ものかをも加えてである。

農村は忙しい季節であつた。十一月三日が近づくにつれて、練習不足は如実に現われ出した。焦つた僕は、夜間の練習を強行した。その為に僕は一週間連続宿直をやり、七時から十時まで指導をする、遠い所の女生徒を送つて行くという苦勞をしなければならなかつた。練習は、班員でない素人の混つた「湖の娘」に集中した。夜練習するのはそのグループだけだった。

二日前から、本格的に扮装する事にして、メイキャップも僕が担当した。驚くべき事にこの片田舎の女生徒は、口紅を塗つた事さえ

ないのである。白粉をつけさせると、マユズミ、ドーラン、アイシヤドウ、口紅と僕一人で顔を作ってやらねばならなかった。ひからびた唇に、紅筆で口紅をつけてやる時、僕はただ面倒で何の雰囲気も感じはしなかった。T子にしてもそうだった。T子の唇は意外に薄っぺらで、僕にある種の幻滅を与えた。が、それとは別に僕はT子の化粧にひそかな満足を感じた。

マユを描き、眼をなおす時、僕は演技者を畳の上に坐らせ、後にまわって頭の上から覗きこむ恰好でないと、手がうまく動かない。最初の夜は、故意か偶然か、そうして後からマユを描いている僕のつま先にT子の足指が重なった。僕は敏感にそれを意識したが、むしろ邪慳にペンシルを動かしながら気付かぬふりをして過ぎた。二日目総仕上げの意味で、一人二十分以上の時間をかけて、メーキャップしてやった時、正坐に疲れたT子は、横坐りに居ずまいを直し、多分偶然に、僕のつま先の上にヒップを落した。それは急速に僕を刺戟した。彼女のアツイ程の体温がズボンを通して僕に伝わり、以前の出来を記憶に甦らせた。

しかしそこで刺戟を感じたのは僕だけであり、そして内部の問題にすぎない。僕はその気持をいかなる形ででも外に表わし、T子に伝える事はしなかった。T子は顔作りの間、動くまいとしていたのだろうし、僕は手先に注意を奪われて足の方の状態には気付かなか



坪太郎 画

ったのだ。もし他の生徒が横へ来てそれを見たとしても、その言い訳だけは立つ筈だった。別に不徳な場面ではない筈だった。それはT子自身に対してもなり立つ言い訳の筈だった。だから僕は平然を装おい、教師のおのれを恥じはしなかった。名分だけが成り立てば教師の良心も護持されるのだ。

所が三日目、つまり本番の日は、その名分を、少なくともT子に

対しては持ち出せぬ状況になってしまった。もっともT子自身が僕に對して何も言えぬ立ち場にあった。その日は、T子のヒップは堂々と(?)僕の足首の辺りまで進出したのである。僕はT子に、のしかかられた形だったのである。勿論T子は意識してやったのであろうし、僕も意識して逃げなかったのだ。つまり完全な共犯なのである。共犯者は共に、即座に許し合った。僕は足首を動かした。ほんのちよっと。

「湖の娘」は心理的な劇で難しかったが、予想外の成功を収めた。珍しくT子までが大はしやぎで喜んでいた。僕も一応の任務を終って、満ち足りた解放感に浸りながら、その夜が来るまで下宿に戻って引っくりかえていた。夕食をすませて、もう一度学校に戻って後始末をしていると、生徒会幹部の生徒と一緒に残っていたT子が、僕に明るい笑顔で会釈して帰りかけた。僕も始めて見るT子の好意的な挨拶にひきつけられて、

「ちよっと待て、僕も一緒に帰ろう。その辺で待っていたまえ」

と言ってしまった。言ってしまったから、これはまずいかなと思つたが、T子は嬉しそうにうなずくと玄関に出ていった。僕は内心今の言葉を後悔しながら、他の生徒に見つからぬうちにと急いで仕事を片づけた。T子は待っているだろう。そして二人で校内を出て町を通って帰る事になる。町の人が若い独身教師と女生徒のアベックを見たら、どうせろくな事は言わぬに決まっている。僕はいやな「レッテル」を貼られる事になるかも知れない。だが、その反面何か期待できるような気がして、玄関に出てT子の姿を見た時には、安心さえ感じたのである。

僕はT子と並んで、まっくらな校庭に出、校門を出た。忽ち明るい町通り。僕は急に躊躇して、

「どうだ、田圃道を行こうじゃないか。お互いに誤解されたってつまらんからな」

と提案した。T子は素直にうなずくと、先に立って横道に外れた。僕は黙々としてまっくらな小道に向かつて行った。町といつても小さな群落到すぎない、その裏道は、二、三十米も行けば家々の灯さえ足元に届かなかった。僕らはきょうの劇の成果について二言三言語りあった。その外には話すべき共通の話題もなくなって、黙って歩いた。だがお互いにかすかに粗通し合うものが胸のうちにあり、それがつかえつかえ、或る種の欲求をもたげさせ始めている。暗さと、曲りくねった小道の危険性を理由として、僕らは手を取りあった。そしてそれを契機に又異常なものが二人をおそった。僕らは胸をかかえ合った。ここまでの動作はごく自然に、何の罪悪感もなしに行われた。何しろ細い道だから。

だがオーバーも着ていない彼女の胸は僕を刺戟した。僕は彼女の腰をかかえ、相手が拒まぬままに、ヒップに手をやった。彼女は急に立ち止まり、荒い息づかいを僕の方にむけた。

「先生」

とかすかな声が洩れた。

「少し休んでいこうか」

それはあくまで提案のつもりであった。がT子は僕の手をとって道わきの土手をくだった。道の下にはわずかな灌木と、広い畦があった。僕らは足を投げ出して坐り、僕は煙草をとり出して火をつけた。一服して気が落ちつくと、自分の立ち場がはっきり認識されて心が痛んだ。だがそれは快い痛みだった。

僕はつとめて快活をふるまおうとした。T子もそれに和した。しかしその結果は妙な具合になってしまった。僕はいつぞや彼女の便を見た。告白をする破目に陥ってしまった。むろん便所にかくれて見た事までは悟らせなかったが、それによってT子を驚かせ、恥じ入らせ、行動的にさせてしまったのだ。

僕も悪かった。話の結末として、

「しかし君のをいやだとは感じなかったよ」

といったのは、T子に対する愛の告白と取られても仕方がない。

T子の身体は恐ろしい勢いで僕にぶつかって来た。僕はそれを胸に受けとめ、いよいよ窮地に陥った事を感じた。と共に僕は教師の仮面を完全になぐり捨て、以前山で抑制した強い衝動をむき出しにしてしまった。僕はT子の胸を抱いた。その固いお腕のようなふくらみ。そして僕はT子のズボンの上から身体中をさぐった。そこまで行くと、僕はもう日頃の念願を果たさずにはいられなかった。甘い息が激しく僕の鼻腔にそそがれた。ヒップに触れることがT子というかわいい女生徒のすべてを知る事のような気がした。その辺が偏執的な僕を表わしているのかもしれないが——。闇は人間をどこまでも大胆にする。T子は僕を求め、僕はT子の願いと別な願いをもやし、骨折って彼女をうつ伏せにした。だが彼女は両足首で被い、遂に願いは果さずに終わってしまった。しかしそれでよかった。もしその時成功していたら、その後T子の顔をどうやって見る事ができたろう。

それだけだった。僕はついに彼女を傷つけなかった。それが、せめてもの僕の良心であったのだ。それさえなければ、二人だけの秘密の記憶におそれや責任を持つ事はない訳である。

泣き泣き帰るT子を送り届けてから、僕は自分を納得させる名分を考えた。だがもはやいかなる理由をくつつけても、僕が一度教育者の地位を転落した事実はおおい難かった。せめても挑撥者がT子自身である事を理由としてわずかに胸を安んじたに過ぎない。

翌日からT子と教室で顔を合わす時、僕は悔恨と不安に悩まされた。だがT子は僕以上に賢明に芝居をやり通した。僕にさえあの夜の出来事を悟らせまいとするかのようにであった。それに力づけられで、僕も再び教師の仮面をかぶることに成功した。

以上が僕の悪徳のすべてである。もし僕がきびしい自己批判を加

えるような人間であつたら、今、こんな風に安閑としてはいられないだろう。だが、幸いにして、そういうタイプの人間ではなかったし、それにもう一つ僕をふてぶてしくさせるものがあつた。それは、もし僕がこの事実を同僚に語ったとしたら、その時同僚の大部分が羨望するだろうという考案であつた。要するに大多数の教師の本当の姿はそんなものなのだ。誰でもが悪徳の因子を内蔵しているのだ。ただ行動力と機会に恵まれた者だけが、実行し、そのうち不運な者が社会問題にされるにすぎないのだ。

T子と僕の間がどうなつて行か、或いはこのまま、あと一学期を余して何事もなく終つてしまふか、それは今からはわからない。

(終)

『サディズム特集号』 第二集 予告

緊縛写真並に絵画を豊富に収載した。『サディズム特集号』第二集は、すでに資料の蒐集も終り目下編集集中であります。持に書下しの秘作を四馬孝、辻村隆、緑猛比古の諸氏に依頼し、尚、覆面氏白頭巾による「緊縛フォトと緊縛モデル」という一文を期待しておりますため二月中旬の発刊予定が若干遅れることになりました。然し第一集にも増した、その華麗な姿を諸氏の前に現すのも間近いことと思ひます。

臨時増刊 「責小説特集号」 殆ど売切れ！

好評裡に残部僅少となつておりましたが、今度、あと数冊を残すのみとなりました。御支持を厚く感謝いたします。

『サディズム特集号』 売切れ、残部ありません。

33年7月20日発行の「サディズム特集号」は昨年十一月末を以て売切れとなりました。今尚御注文を頂いておりますが、残部がありませんので悪しからず御諒承願います。

本誌百号突破記念 懸賞原稿募集 について

昨年七月号誌上に懸賞入選作品を発表して以来、すでに十篇に余る佳品を以て誌上を飾って参りました。この本誌百号突破記念懸賞原稿募集も今月号の募集を以て打ち切りとし、次号からは更に新しい募集要項にて懸賞募集する予定でありますので、本月号では例月に

比して入選作品を数多く掲載してみました。即ち「文学にあらわれた女の腹裂き」(多山皓)「告白、忘れ得ぬ人々」(須藤律夫)、「モラエス邸の夜会」(民にかかった牝鹿)、「(江口康彦)」「悪徳教師考」(幹本完治)の四篇であります。尚、連載中の「乳房に火を

つけるな」(藤木仙治)並に、目下銚衝中の候補作品は今後引き続き掲載して参りますし、又、現在懸賞募集中でありますから、お寄せ下さいました力作は、今後の誌上に於て発表してゆきたいと思ひます。

只今構想中の作品がございましたら、何卒この際奮って御応募下さるようお待ちいたします。

編集部 懸賞原稿係

▽浮世風呂 (松竹作品) 山鳩くるみ

昨夏に封切られた作品ですが、遅ればせに再映館で見た。「柳湯」の湯女の一人が殺害され、折悪しく恋人と駈落ちしかけていた湯女のおしんが捕われる。柳湯の広間に旅人、お客を全員揃えて取調べの席へ、おしんが縄付きのまま連れられて来るが、細引で胸を二巻後手にされた、おしんの正面の姿が最前列あたりに現われるだけで、たいしたシーンではない。

▽妻恋道中 (松竹作品)

富士真奈美

吹雪の弥太郎の妹お里が、悪親分達に弥太郎をおびき出すための囹にと拐かされる。細紐で胸を二巻、後手に縛られて白布で猿ぐつわをかまされる。首をいやいやす

映画通信

た

優 達

るが駄目。そこへ弥太郎が救いに来て、縛られたまま彼の背後について逃げ廻る数カッ。田舎娘、町娘のよく似合う可愛い聡明そうなマスク、特にクリクリとした眼に魅力がある。松竹縛られ女優の売れっ子だ。

▽妻恋道中 (松竹作品) 鳳八千代

吹雪の弥太郎の許婚者お藤が、横恋慕する悪代官一味に拐かされる。手とり足とり身もだえるうちに、しぼり模様の手ぬぐい

で猿ぐつわ。次のシーンは駕籠で運ばれて行くが、その時は白布にかわっていた。おそらく縛られているはずなのに帯から上のアップで縄目はみることが出来なかった。

▽俠艶小判鮫 (新東宝作品) 宇治みさ子

彼女の縛りをみるのも久々。怪盗小判鮫の美代太郎の妹で昇竜軒遊里が、父の復讐に柳沢出羽守の屋敷から連判状を盗んだため捕われる。細紐で二巻の後手で、手首の縄目もチラチラみえるがたいしたことはない。牢へ入れられる。その場は兄美代太郎に救われるが、今度は二人共捕えられ、水責の拷問をうける。穴倉の中へ杭をたて、それを後抱きに縛られる。縄も太くなり胸はやはり二巻き、帯のやや上あたりから水かさが段々と増して、

首のあたりまでせまり悶えるシーンあり。水中で足の縄目と後手首の縛り方も確かなにはわからなかったが、案外みられる場面だ。

なおこの映画の中で縛られはしないが、お千代という娘の役で、松浦浪路が柳沢の側女になれと腕をねじあげられ、肩の関節責をされるシーンがあるのは珍らしい。

▽金獅子絞ゆくところ、黄金

蜘蛛 (東映作品)

円山学子、高島淳子

京月獅子之助を恋慕う萩乃 (高

島) お町 (円山) の二人が、黄金蜘蛛

の隠れ家をつけたばかりに捕われ、後手に縛りあげられる。中縄で胸をグルグルと四巻、かなり強く縛られている。同じように捕わった獅子之助と牢に入れられるが、お町が帯の結び目にかくしている短刀で縄をきって逃がれる。獅子之助の後手がお町の短刀をとり出す時にお町の後手首の縛りがチラチラみえるが本当に縛っている。指を痛そうにピクピク動かすのも印象に残った。

▽赤銅鈴之助・黒雲谷の雷人

(大映作品) 岸正子、浅野寿々子

黒雲谷へ物太夫と岳林坊の二人を追って迷い込んだしのぶ (浅野) が雷人に見つか

今月の

縛られ

女

大河原珠樹

り、隠れ家の柱に座ったまま中縄で縛りつけられる。肩より少し下と胸をそれぞれ二巻き、姿は後手だが胸の縄を解くと手も自由になった。どうもこの種のごまかし縛りが多いようだ。

次に城主の姫 (岸) が雷人に拐かされて来てしのぶの縛られていた柱へ同じ姿で縛られる。しのぶは姫を助けるために、城から慈光石を持参するよう縄を解かれ使いに行く。使いのしのぶが持参した慈光石は城の奥方さえも本物と信じていた偽物であったため、姫もしのぶも再度もとのように同じ柱に縛りつけられる。岳林坊をだまし二人は逃げ出すが、すぐに雷人に発見される。

本物の慈光石を鈴之助が見つ

出す。雷人がせまる。雷人は姫としのぶに刃をあて鈴之助に石をわたせとせまる。同じグルグル巻の後手姿でも今度は手首も縛っている。クルリと、救い主の鈴之助の背後に寄り添う時にチラリとわかった。岸正子もこれで出演三本共縛られ通しなら、少女の浅野寿々子も「血文字船」と引続き出演二作とも可愛がられている。大映にとって貴重な存在の二人である。

今月は比較的にない映画も少くせいせい「抜き足し、差し足、忍び足」(大映)と「浅間の荒れん坊」の二本きりだった。

なお念のため縛りのない映画を紹介しておきます。

▽濡れ髪剣法 (大映作品) ▽浅間の荒れん坊 (東映作品) ▽伊賀の水月 (大映作品) ▽天狗四天王の逆襲 (新東宝作品) ▽銭形平次捕物控・江戸八百八丁 (新東宝作品) ▽右門捕物帖・謎の血文字 (新東宝作品) ▽紋三郎の秀 (新東宝作品) ▽黄金奉行 (新東宝作品) ▽命を賭ける男 (大映作品) ただしこのうち三作品は再映もの、二作品も昨年内封切だが見遅れていたものから悪しからず。

魔

教

圈

No. 8

(その十三)

土 路 草 一

(一) 津田の旅程

バクダットの町を出はざると、もう其処は茫漠たる砂漠であつた。

見渡す限り延々と砂のうねりが続き、地平線から展がっている空に雲一つなかった。

灼熱の太陽が、ぎらぎらとフロント硝子を通して座席^{シート}へ照りつける。燃え熾かる炉のよ

うに、車内は炒り上げられていた。中古のフォードが、人影とて無い砂丘の間を全速で走り抜ける。

津田慶介は支局員の阿部に運転を任せながら助手席で、イラクで会ったクルード族の女

を思い浮べた。

——人類発生地、バクダットは二つの地区に分れている。チグリス河を挟んで、西欧化された地区と現地人住宅の多い裏町と……

旅行者は、ラシッド路にあるホテルに泊るのが通例とされているらしく、津田も南ラシッド路のチグリス・パレス・ホテルに案内されて宿をとった。

ラシッド路は東京の銀座、大阪の心齋橋筋に匹敵する繁華街である。併し、アラビアン・ナイトの面影は、すっかり失せて、アメリカ製の最新車が二十世紀の警笛を鳴らしながら往来していたけれど……。

津田は支局長と打合せて、地理や風俗に明るい阿部に同行して貰うことにした。

車を手配したところが、折悪しくキルクークからシリアを通り、レバノンのトリポリに至る送油管^{パイプライン}が暴徒によって破壊され、外国旅行者の北辺地区への通行は政府通達で当分禁止されて了つたのである。

津田は新聞特派員の肩書をたてに許可を申請したが、アラブ国家特有の時間観念の欠如から、さっぱり埒^{うち}があかなかった。

アラブ人の氣質を呑みこみ、巷の風説を聴く為には良い機会かも知れないと、津田は所在ない日々をバクダットや、その周辺を歩き

廻って過した。

バンク路の北にある市場^{バザール}へ行き、昔さながらの泥の屋根、光りの射さぬ薄暗い市場の中を、鼻の腐るような異臭に辟易しながら歩いたり、バビロニア宮殿（古代オリエントの都、紀元前六〇四―五六一年のネブカドネザル二世が建造したものと云われる）の荒れ果てた泥土の遺跡を見物がてら、途中の農家へ立寄ってみたり、ゴールデン・モスク（回教寺院）で額ずいたりして、日々を送った。バクダット市の南に、ネオンの輝く盛り場がある。

阿部は、ある夜、人の渦に揉まれながら、はずれにあの小さなキヤバレーに津田を案内してくれた。つれづれの憂^{ウレ}を一杯の酒で慰めようと……。

寶石を鑲^{チリバ}めたような鮮かな夜空が仰げる庭があつて、粗末なテーブルが十二、三並んでいた。

ビールを注文して待つ程もなく、四人の楽士が哀愁のある旋律を奏で始めた。

石のステージに半裸の踊子が、躍り込むように出て来て、妖しく熱情的なダンスを踊った。

めまぐるしく腰が揺れ、脚が攪^{カク}み、爬虫類のように背が、くねくねと舞台を泳いだ。

凄^{シラ}く官能を唆^{ソク}するエキゾチックな舞踊だった。

「ちよつと日本人に似た女だね」

上眼づかいに媚を籠めて、まばらな客に愛嬌を振り撒いている踊子の顔に、津田は同胞と同じ形を見出して何気なく云った。

「あれはクルード族の女ですよ。いい魅してるでしょう」

阿部は当を得たように後の語気を強めた。

津田は、ぎよつと口に含んだビールに噎^カる。が、さりげなく

「昔は屢々、村落を荒らしたと云うイラク北方の種族？」

と、確かめてみる。

日イ油田開発会社の探鉱を妨害しているらしい種族の女と聴いて、流石に胸底を騒ぎ過ぎるものがあつた。

「そうですよ。今は割合にアラブとも交流するようになって、この町にも大分流れこんでいます」

「君は知らないか？ 日イ油田の技師達が行方不明になったり、探鉱区域の部落民が協力していないことを……」

「知ってますよ。クルード族らしいと云う噂もありますね。併し、バクダットにいるクルード人は温和で、寧ろ我々に協力してくれま

す。日本が石油を発掘してくれば、彼等も潤うことを納得してますから……」

証拠もない噂に過ぎないので……。影で誰かが操っているとも考えられますし、何者かが妨害行為を隠蔽する為に責任を転嫁し、クルードの仕業と云い触らしているのかもしれない。何分にも神秘に包まれた未開族のことですから確認は難しいですが……」

阿部は落着いて答えた。

津田は口に出なかった反問の言葉を無理に藏^カつて、コップを干した。

已れの使命をまだ阿部に云う時期ではないし、それに日本語で話しているとは云つても、公開の場所では壁の耳を警戒しなければならなかった。

誰かが？ 有力な国家的背景を有する誰かが、金や権力で部落住民を操^アつる？

石油利権を日本へ渡すことを拒む何者かが手先を使って妨害を企らむ？

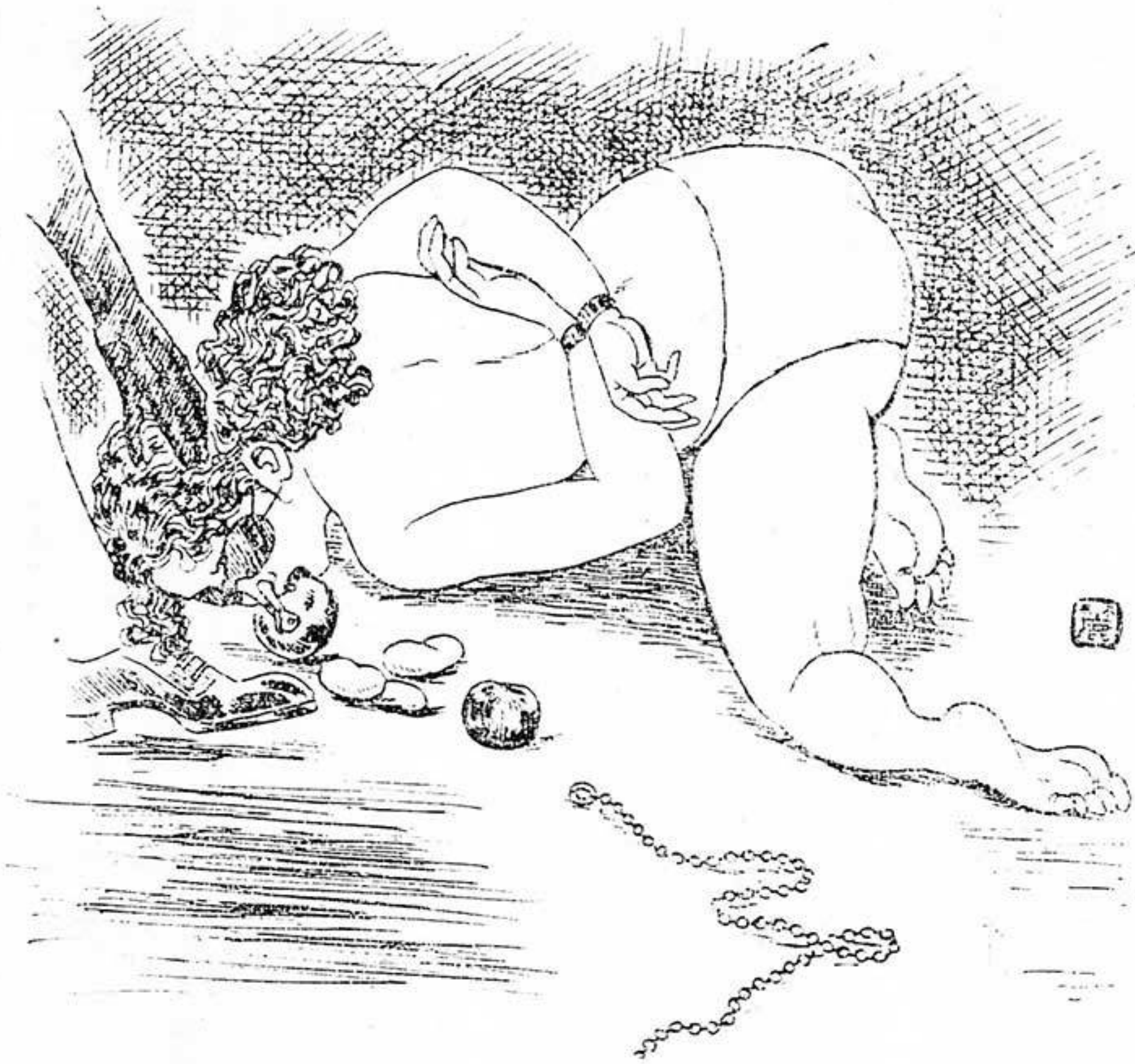
反面、バクダットではその同族が我々日本人に好意を示すと云う。

イラク国に属しながら、アラブに同化しなかった固陋^{コロウ}の民が、個々勝手な行動で利益を追うだろうか？ 団結心の強い偏狭な種族が、一方では日本の利益の為に尽し、他方では妨害し、賢^{サカ}しく立廻ろうと手段を弄するだろうか？ 疑念が津田の頭の中で、さまざまに跳ね返った。

特派員は、うねうねと、くねっている褐色のダンサーを凝視めながら

「君は、あの踊子を知ってるのかい？」
と訊いてみた。
「ええ、顔馴染です」

「話してみたいな。英語が解るかしら？」
「たどたどしいですが、意味は通じます。呼びましょう」



煽情の踊りが済むと、ボーイに耳打ちされて、女は酒客達に微笑を投げながら寄って来た。

金色の髪飾り、金色のイヤリング、金色のネックレス、そして金色の彫刻をした腕輪。申訳ばかりの黒のブラジャーの内側で、はちきれそうな乳房が覗いていた。

激しい踊りの後なのに、褐色の肌は汗一つかいていない。続々と光る凝脂が妖しい野性を発散して、息づいていた。
「アベサン。イツモアリガト」

女は椅子に坐ると、阿部の出したデナール貨幣を掌で押し戴き、艶っぽい瞳で感謝した。

まだ二十才ぐらいだ。近くで見ると顔立は娘らしく整っており、故意に描いた眉や唇を拭えば、あどけない面貌が表われるに違いない。

女は濃いアイシャドウで、媚を含んで津田を見る。

「こちらは僕の本社の方で、津田さんとおっしゃる」

と阿部は顔を返して、

「バクダットの美人アーチストのアリア・エグバル嬢です」と紹介する。

「クルードの女の人が、こんな綺麗だとは知らなかった」

津田は奥深く煌めく瞳を酔眼に代えて、ビールを勧めた。

「フフフ……」

女は蠱惑の笑を、ルージュの端に湛える。

「オ酒ノ故カシラ、場末ノ踊子ヲ美人ダナドト、ミスター・津田」

「日本には泥の中に咲く蓮の花と云う形容がある。泥沼の暮しの中でも汚れに染まず、一際、輝きを放っている乙女を云う言葉だ」

「マア、ステキナ言葉！ 女ハ美シイト云ワレルコトガ、ドンナ場合デモ嬉シイ。有難ウ、

津田」

「アリアは男の腕にしなだれて、きらきらした凝視を注いだ。」

「君はスペイン女に勝る情熱と、フランス女に負けない魅惑を合せ持っている。クルードと云う国土が、それを与えたのだろう。君の故国に興味を感じるね」

「私ノ国ハ貴方達カラ見たラ未開ノ国。牧羊ト僅カナ畑デ生活シテイル貧シイ者バカリデス。電灯モ、自動車モ、私ハコノ町ニ来テ知リマシタ」

「だが、人情は文明に侵されずに素朴さを保っているに違いない。強盗もなければ、殺人もない平和郷を……」

「イイエ、ソノ代リニ、厳シイ戒律ガアリマス。刑罰ト名ヲ変エタ殺人ヤ、財産剝奪ガ公然ト行ワレマス。文明社会デハ金デ済ム罪ガ私ノ国デハ廻リ殺シニナルコトモ屢々デス」

アリアの瞳が傷口に触れたように瞬いて、外れた。津田は視線を強くして、女の悲しげな嘆息の横顔を覗きこむ。

彼女の語が果して真か？ それとも演技か？……と。

「戒律と云ったね。戒律とは昔から受け継がれた掟か、何かなのかい？」

阿部が興味を湧いたらしく、問いかける。

「黒天使様ノ掟デス。私達ノ護リ本尊デアル黒天使様ノ戒メハ、国ノ法ト定メラレテイマ

ス」

「黒天使？」

津田は思わず呟く。

「私ノ国ハ教祖様が統ベテオラレマス。黒天使様ノ御使イデアル教祖様ノ言葉ハ、絶対ノ法律トシテ下サレマス」

「人々は畏んで遵奉する。そして馬車馬のようにな身を粉にして働く」と云う訳か」

阿部は言葉尻を引きとって、未開族の自嘲か？ と混ぜつかえすような口調で喋った。

アリアはきつと眼を刺く。だが、直ぐ笑で崩して

「ソノ通りデスワ。何ノ楽シミモナク……」

「特に君みたいな者には楽しみを奪われることは辛いことだろうな」

阿部は酔の発した顔で、話を酒席の課題に返した。

「マア、アベサン！」

女は名前を片言の日本語で云って、怨ずるように上眼で軽い拳を振った。

津田は黒天使と云う語を頭脳で、ぐるぐると廻していた。その内に、はっと脳壁で黒霊教と合致する。もしや？

慌てて彼は、女に確めて云った、現在、君は黒天使を信仰しているのか？

黒天使の教儀とは何か？ 黒天使の刑罰とは？

——津田はワイシャツの胸をはだけ、座席

にふんぞり返って、熱気を発散させながら、女の返答を想起し、一つ一つ整理していた。

フォードは、やがて小さな村落に入る。

泥をこねて造った灰色の汚い農家が、ポツン、ポツンと建っている。

ラクダや羊が、のんびりと道端に佇んでいた。

「おやっ！ あいつは何だい？」

阿部は口籠って、ブレーキを踏んだ。

行手に、イザニー（チャドルと同じく、アラブの女が顔や体を、すっぽり覆う黒衣のこと）を纏った女が、手を振って停車を合図していたからだ。

(二) 味覚テスト

ポケ、即ち美女、比奈地路子は、哀れにも清眸を蓋されて、不安で畜具の鳴る身を、フーガ調教師の足許に蹲まらせていた。

黒い眼帯は、額と頬の膚を白く鮮かに浮き出し、輝く背肌をたわめた無垢な乙女は、やや前屈みに円い肩を倒している。

その心根は計る術とてないが、半ば人間生活を送らめ、家畜の境遇に順応して来たことは、その淋しい姿勢から見て確かなようだ。

「ポケ！」

家畜YA二十八号は、ぴくっと軀を緊め、黒奴尊師の脛の前で畏まった。

美牝は、その声が流れるだけで、全身が畏

怖で固まる。電撃されたように膚が粟立って、心が竦むのだ。

黒い調教師は、柔かい絹肌を蹴って、後へ向きを変えさせる。

眼隠しされている家畜の視線は闇であつたが、膝前には紅いリングと皮つきのジャガ芋とサツマ芋が置いてあつた。

「先ず、味覚テストだ。お前の前に三種類の果物が置いてある。食べてみて、その名を当てるのだ」

イレ助教士が、俯向いている美貌を引起して、ぱちんと洗濯挟みのようなもので、路子の氣高く、可愛らしい鼻を撮^ツまんで了う。しおらしく結ばれていた唇が割れ、呼吸が齒の間を通り抜けた。

「ほら！」

たおやかな首筋が、鋌打ちした皮靴に踏みつけられて、美しい唇が勢よく生の甘藷にぶち当たった。

ためらいがちに、がりつと皓齒が鳴る。

甘い汁が干割れた田に浸むように口腔を流れた。不自由に押えつけられた舌の感覚が、久し振りの食物のエキスに、生々と機能を甦えらせる。

美味^{オイ}しい！ ごくりと咽喉が鳴り、揃った皓齒が慌ただしく咀嚼を繰返した。

「次を食え！」

靴先で甘藷がどけられ、リングを当てがわ

れる。

綺麗な齒痕が果皮を削る。堀られた白い果肉から芳わしい果汁が浸み出す。だが、路子は嗅ぎとる鼻を撮^ツままれて、分泌する唾液も和えず夢中で噛み込む。

味も香りも、どうでもいいような氣持であつた。食物と絶縁されていた舌は、何を食べても美味しく、甘く、天外の味を脳髓へ送る。そして、この一時の幸^{トキ}せを逃すまいと大きく口を開いて、せわしく果肉を彫り、呑みこんだ。

且つては、皮を剥き、幾つかに裁^タたれた小さな果肉を、フオークで慎ましく口へ運んでいたものが、今は取り上げられる懸念で心もそぞろ、寸時の内に出来るだけ多く食らおうと、餓狼のように口を開け、貪^カり食らう。条件を形成され、そして習性づけられて来た悲しい畜生の性^{サガ}である。

「おしまい、これだ！」

馬鈴薯に、がぶりつと前齒が噛みつく。口一杯、頬張った令嬢は、ライオンの眼を掠^{カス}めて残り肉を食うと云うハイエナのそのように、見えぬ眼におろおろと調教師の氣配を写しながら、ろくに齒も合わせず一気に舌み下す。不自由な舌と呼吸の為、唇の端からだらだらと涎が顎を流れ、滴する。

胃から這い上ってくる充足感が、口中で融

ろけるような甘味となって歓喜を生んだ。

併し、肝心な食物の鑑別は、眼を覆われ、鼻を撮^ツままれてみると、齒に感ずる果肉の固さには、ほぼ察しがつくが、舌に展がる味は一樣で、さっぱり見当がつかないのだ。

知覚には案外、盲点があるもので、特に味覚となると嗅覚と視覚に大分、影響されているらしいのである。

まして、路子は空腹の絶頂で、何を食べても最上味となる状態に置かれていたのだ。

眼隠しが外され、鼻撮^ツみが取去られて、眼前に三枚の紙片が並べられる。

ナシ・リング・カキと書いてある。

轡の嵌った家畜は、判断を口で云えないから、紙をひろって答える訳である。

「最初に噛ったのは？」

調教師の間に暫し躊躇^{チウシュ}していたが、路子はカキの札を啞える。

「次は？」

リングをひろう。最後はナシである。

食べた芋の名称が記されていないから、どっちにしても二つは間違った答えとなる。

だから、この場合、路子の味覚は正しかったと云わなければならない。

(読者兄弟も、やって御覧になると解る。特に馬鈴薯と林檎の区別は仲々に難しものである)

併し、黒奴は激しく叱責する。

「諸と果物を間違えやがる。とんま！ それでも家畜の舌かい？ 馬だって人参は、ちゃんと選り分けて食うぜ。お前は御馳走をやっても無駄な畜生だな、今後、デザートの御許しが出た時には、せいぜい生諸を食わせてやるうぜ」

フーガは侮蔑しきった口調で、おろおろと伏せている白い肌云った。

併し美畜の胸裡は反撥もなく竦まっていた。そして、伏眼に、嚙りかけた諸と林檎を映して、煽られるように食慾を燃やしていたのである。

(三) 嗅覚テスト

「よく眼を開けて見ろ！」

ポケは反射的に顔を起して、視線を前方に注ぐ。

数メートル先にナイロン靴下が幾足か、間隔をおいて並べてある。

「あの靴下の中からお前の拝崇する御主人様の品を、その鼻で選り出すのだ。諸とは違う。大恩ある御主人様の高貴なお躰の匂いを嗅ぎ分けられなかったら、飼って戴いている身にとって大変な無礼となる。いいな！」

数々の汚辱を押しつけられて来た路子の表情は、さして動かなかった。

併し、その顔の奥に流れている清雅な血が、秘かに脈打っていたことは事実である。

だが反面、生諸に随喜した味覚、不正確な判断しか下せなかった味覚に、寂莫とした悲しみに苛まれていたことも事実であった。

味覚テストそのものが魔教徒が作り出した家畜誘導の穴であることを考える前に、路子は己れの餓鬼のような意志で阻止出来ぬ食慾に憐れみを覚えていた。食物であれば生諸は愚か、生きた獣の肉を切り取って食うやもしれぬ。その如何んすることも出来ぬ本能的な欲求に激しく身悶えて、人間としての志操を失ったことを悔悟していたのである。

心は悔悟している。併し、体は悔悟してい



ない。今も尚、欲求は波打つように荒々しく募る。路子は、その相剋の中で次第に敗退してゆくのである。

「御主人様が、お前の調教の為、特別に貸して下さった高価なお靴下だ。おみ足を一際、惹き立たせておられる大切なお品だ。大事に啞えて此処へ持って来い！」

たかが、靴下一足である。

路子が履いていた靴下だって、これに勝るとも劣らぬ品質であり、類なき脚線美を表現していたであらうに……

だが、違うのである。

同じナイロン糸で編まれ、同じデニール番手を使ってあっても、一度、イーベラ・マツクコインの脚に嵌り、その皮膚の匂いが沁みこめば、もうそれは宝石より尊い御品となつて了うのである。ポケ達、家畜にとって、万汗を投しても償い得ない貴重品となつて了うのである。

もっとも、路子にしても、靴下を身に装うものと決めていたのは過去のことだ。畜体となつたこれからは、布と名付くものは一切、縁のないものとなるのである。己れの肌に着ける品であることを、すっかり諦らめ、魔教団女性が瀟洒に纏つていても、種別の違ふ高貴な方々の着用されるものなのだと、殊更、羨望の眼を注がなくなるのであるが……

ベスト・ドレッサーだった美貌の令嬢、比

奈地路子の頭脳も、そうなる日が間近いのである。

だが今はまだ、友人の靴下を犬のように嗅ぎ当て、啞えて運ぶことに、ぐつぐつと内胸は屈辱で煮えていた。と云つて、度重なる加虐に、反抗心は罌粟粒ほどの塊すら作つてはいなかったのだが……

只、人間としての心炎が消えていないだけだ。やがて、それも消える。

暗闇の人生航路を、否、畜生の旅路を、比奈地路子はまさぐる。YA二十八号として、ポケとしての生き方を捜しあぐねる。

そして前途に、めらめらとした此の世ならぬ妖炎を認め、異常な喜びを、奇妙な快楽を発見するであらう。

畏怖のときめき、苦悶の期待、愛されることの震える喜びと感激。

それが、家畜として遇されたものの唯一の憩いであり、生甲斐であり、耽溺であるからだ。

ポケは嗅覚を許されて又、眼隠しをされる。

美しい睫毛が少し濡れていたようだった。筋の通った鼻の下で、蕾のような愛らしい朱唇が、僅かに白い歯を覗かせている。

理智の額がやや傾しいで、盲いた者が、聴覚に頼る所作を、美貌の女も又、必然的にした。

「そら！」

鞭が風を呼び、飼育畜として当然の肉鳴りを美肌は発する。跳ねるように膝を伸ばし、目測しておいた距離をポケは一散に駆けた。思念を追いやった頭脳は、只管、神経を鼻に集中する。

ねばっこく、ぎとぎとと垢黒いナイロン繊維に、貴やかな鼻を擦りつけて、くんくんと鳴らした。

良家の品位を表徴し、清楚な美を高めていた形よい鼻を、脂ぎった汚れ物に埋め、ゴミ箱を漁る野良犬やドラ猫のように嗅ぎ廻る。

あかあかと燐の燃える自宅の居間で、ソファに凭りながらモード雑誌を読んでいた当時の令嬢だったら到底、耐えられぬ屈辱であつたらう。

姫と呼んでも誇張のない路子が悪魔に魅入られてからの一日々は、出生二十一年間、当面した、どの驚愕にも勝る驚愕であつたし、過去に流した量を幾倍かオーバする量の涙を流した連日であつた。それだけに、心やさしい娘の心は、四方八方から不条理の鋭鋒に突き刺され、抗い、悶え、争った。

連続して襲ってくる邪惡の論理は、正道を追い払い、倒錯の道義を強制する。やがて四六時中、煌めく鋒尖に幻惑する。否、不条理の傷痛が鈍磨すると云つたほうがいいかもしれない。

戦い疲れ、磨滅した脳髓は、黒天使教の教えを徐々に受入れてくるのだ。

恐怖、諦感、順応、精励。智の乙女、比奈地路子の頭脳も、魔教徒が計算したコースを順調に辿っていたのである。

彼女は全神経を嗅覚に動員した。主人の匂いを認めなかったのか、次の靴下に移る。

鼻先と唇で編布をひっくり返して、体臭をくんと探ぐる。

もう、すっかり飼物としての姿だ。忠実に命ぜられた動作をする家畜の型を床上に現出する。

フカフカしたソファに寝そべて、ケーキを撮まみながら、テレビを楽しんでいた令嬢の面影は、その姿態の何処から見出せなかった。

イレ助教士は、鋭い眼で見下していた。

イーベラの靴下には、ちゃんと例の蛇の紋章がついているので、助教士には一目して解かる。

“こいつは感が良さそうだけどな”

真白な背と、ふっさり垂れている黒髪。屈んで息づいている細い脇腹と豊かな臀部。

女性として、何人にも秀いでた肌色と均齊であり、天賦の美と讀えられた体である。

モード雑誌やテレビを見ていた瞳は眼帯が覆っている。併し、黒布を脱して貰っても、その瞳孔は灰色の床と魔教徒達の脚しか映し

出すことが出来ないのだ。

楽しい音楽を聴いていた耳は、主人や調教師の命令や怒声に怯えねばならないのだ。

そして、天賦の肢体は惨めに素肌を曝してコンクリート床を這い廻り、幸福感で膨らんでいた胸に、煖炉に弱っていた腕に、至極無造作に鞭が振り落ちるのだ。

イレの眼は冷たく、畜体と呼ばれる白肌の行為を追う。

彼にしたなら美を觀賞する気持はなかった。いくら路子が美しくあっても、テストが不良だったら、家畜性能としてはマイナスだ。

助教士としては矯正に苦勞せねばならず、その結果、如何に依っては、折角、捷ち得た専任助教の地位も放擲させられる懸念を含むからである。

賤しい生れの少年黒奴には、立身出世の又とない機会でもあったのだ。

“こいつが優れた畜性能を持っていて呉れますように……”

心の底では祈りに似た希念が動いていた。だが、その限りでは、イレは安心してよいのだ。

YA二十八号なる調教物は、調教師より育ちも教養も優れ、美しく耀く体ばかりでなく、溢れる才智と素晴らしい感を有しているのである。

人間としてもトップを行く彼女は、洗脳を

余儀なくされた家畜としても、優秀な五感や發揮することであろう。

美鼻が蛇の紋章の繊維に埋まる。赧らんだ頬が、垢ばかりした友人のストッキングの中を潜った。

イレ助教士の眼がぎら、と期待で光った。ポケは小首を傾しげ、暫らく、その脂臭を吸っていたが、ふっと思いきるように顔を挙げ、次の靴下に移った。

“ちえっ！”

思わず出そうになる舌打を噛みこんで、少年は落胆する。併し、がっかりするのは早かったのだ。

ポケは並べてある靴下を全部、丹念に嗅ぎ廻ってから、紋章のあるフルファッションに戻り、躊躇なく啞えて調教師の足許へ運んだのである。

(四) 黒い師の垢臭

“でかしたぞ！”

助教士は胸裡で叫んだ。そして、この家畜に、こよない愛着を覚えた。

薬葺家で、裸足で育った少年が、年長であり、教養も深く、聡明な美女、比奈地路子を『利口な牡だわい』と飼犬や飼猫同様な愛着を感じたのである。

「よし、よし！」

イレは跣って、ポケの眼隠しを取ってやり

ながら、馬を愛するように柔かい腮から頬を軽く叩きながら撫でた。

路子の胸にも、ざわめきが走る。

叱られ、責められてばかりいた日常で、初めて褒められたのである。

乱暴に、畜生らしく愛されていることもそれほど気にならず、己れの嗅覚の確かさを誇りたいような気持ちでさえあった。

その絶大な権力に、すっかり惴伏させられていた路子には、フーガやイレの年令や教育程度を、自分のそれに対比する気持は失せていた。

絶対に抗ってはならない権力者。御気嫌を損じてはならない無上の強者。……

と、この、やさしい純真な乙女は、哀れにも楔のように、その胸に打ちこんでいたのである。

彼等に知識が無くとも、征服者や成功者の如く、それだけの経綸や人望があるなら別だ。フーガやイレに

は、そんなものは爪の先程も無いのである。

イーベラの前へ出れば飛蝗バグタのように平伏し、点数を稼ごうと小心、翼翼たる根性の持

主である。その少年に畜能力を賞されて、英知の美女が喜びを心に充たす。

異常なる反応を示し始めたと云えるだろう。

「今度は俺達の匂いを嗅ぎ当てるのだ」

フーガは、にやっと笑って室隅にある洗濯物を入れてある大きな袋を指示した。

「此処へ運べ！」
ポケは脚線折って素飛び、袋の口を咥えて、ずるずると引摺ってくる。

「この中から、俺とイレ助教士の汚れ物を選べ。後で、お前に洗って貰う」

フーガは命じながら、比奈地家で路子の雨靴を洗ってやつたり、草履を拭いてやったことを思い出す。

レインコートの魅力的なシルエット、訪問着の楚々とした後姿。何を着てもよく似合った女だった。こうやって畜具を揃

え、そんなものは爪の先程も無いのである。イーベラの前へ出れば飛蝗バグタのように平伏し、点数を稼ごうと小心、翼翼たる根性の持主である。その少年に畜能力を賞されて、英知の美女が喜びを心に充たす。異常なる反応を示し始めた。と云えるだろう。「今度は俺達の匂いを嗅ぎ当てるのだ」フーガは、にやっと笑って室隅にある洗濯物を入れてある大きな袋を指示した。「此処へ運べ！」ポケは脚線折って素飛び、袋の口を咥えて、ずるずると引摺ってくる。「この中から、俺とイレ助教士の汚れ物を選べ。後で、お前に洗って貰う」フーガは命じながら、比奈地家で路子の雨靴を洗ってやつたり、草履を拭いてやったことを思い出す。レインコートの魅力的なシルエット、訪問着の楚々とした後姿。何を着てもよく似合った女だった。こうやって畜具を揃



めても、こいつは又、違った美しさを見せやがる。あの雨靴を履いていた足を枷すれば、余計に悶える美が出るじやねえか。

せいせい泣かせて、家畜美を出させてみよう。

フーガは、この家畜の靴を洗ってやったと云う見下げられた口惜しさと、畜生の癖に消えない路子の気品美に、憎悪ともつかず、憤懣ともつかぬ心の沸りが血脈を駆けた。

「始める！」

びしっ！と殊更に力の籠った鞭が、体のシルエットに振り落ちる。

路子は急いで伸び上り、糸切り歯を使って袋の口紐を解いた。

袋には、シャツ類が詰まっている。今度は眼の開いている路子には、すえた匂いと共に、汚れが視覚に入って、たまらない嫌悪感を催させる。先刻は見えなかったからまだ良かったのだ。今度は真黒に汚れに汚れた垢の色が眼を通る。それでも美畜は表情も変えず、一枚々々啞えて引出し、選別して床に揃えて行った。

洗濯は自分の物だけ。それも二度に一度は女中が洗ってくれた令嬢育ちの路子である。

汗になるとは云え、肌着や靴下を、こんなに汚したことの無い路子にとって、他人のそれを口で啞えることには、乙女の潔癖感を激しく揺すりあげる。

ああ、哀れな私……。乙女の胸は悲しみの小雨で茫と煙った。

併し、傍で監視している眼を意識すると、美女は己れを哀れむことすら表面に出せなかった。

嫌悪を押さえ、昂ぶりを殺して、令嬢は一枚一枚床に揃えた。

「あらっ？」

乙女の眉が皺み、顔を外向けて、一度啞えた布を口から落した。

「何故、離すのだ！」

すかさず監視していたイレ助教士が、鋭く詰問した。

「でも、これはあんまりだわ……」

清浄な乙女は白磁の肌に、悪感に似た辱しみを流して動作を停める。

それは悪脂にまみれ、ぷうんと鼻もちならない悪臭を放っている。

「おい！ ポケ！ 伊達や酔狂で、こんなことをさせているのじゃないぜ。俺達はな、他にする仕事がある程溜っているのに、わざわざお前一匹の為に時間を費やしているんだぜ。

今後、家畜暮らしをしてゆくのに、俺達の匂いを知らなければ困ると、親切に教えてやっているんだ。人の苦勞も知らねえで、このぼんくらめ！ お前は俺達を何だと思ってるやがるんだ。お前を本来の畜生に返してやる為に、骨折っている調教師だぜ。云いたかねえが、お

前は海山の恩を俺達から受けているんだ。

それなのに、その恩師の匂いを嗅ぐのが嫌だって云うのかい。お前みたいな恩知らずは、普通の扱いでは解からないとみえる。よしっ、じっくり知らせてやるとしよう。膝立て！」

罵しりが、火のように進んだ。

不用意な所作が猛烈な怒気となって跳ね返って来たのに、ポケは胸震いして胸心を潰す。そして、嫌悪も不浄も悲愁の胸壁に埋没し、狼狽の極で滓垢にまみれた布を啞える。

優雅な物腰で、気高い知性を放っていた美貌の乙女が、異性の、それも奴隷なる無智蒙昧な下層階級の男の、汚臭漂う布を芳唇で啞える。

そして只、怒気に動揺して、おろおろと洗濯物の選別に専念した。

併し調教師の期待は牡の詫であったのだ。叱られたら許しを請う。例え、それが黒い師に諾されないにしても、一応謝まりの動作を採らない限り、加刑は峻烈を極めることを路子は、まだしっかり覚えていなかったのである。

「膝立つんだ！」

叱声が再び促がすと共に、黒鞭がひゅーと唸り哀声が、けたたましく壁間に響いた。

びしっ！ びしっ！

「あっ！ あわっ！」

充ち張って息づいている乳白色のお嬢さん肌は、厳しく家畜処理を受けて悲しく鳴った。

柔肌とは云え、それは既に畜皮と称される飼育物の皮膚である。鞭は頓着なく揮われ、ためらいのない勢いは、当然の音を発する。麗わしい二十一才の娘家畜は、鼻鎖を牽かれ、強引に追われて腰を立て、おどおどと心気を散らして床を蹙った。

(五) 家畜矯正及懲罰室

廊下に出て右へ曲ると、炎を浮彫した二間巾の大きな扉があった。

「此処は、今後度々、お前が厄介にならなければならぬ部屋だ。覚えておけ！」

云われて、ポケは丸い把手のついた鉄扉を見上げる。

「家畜矯正及び懲罰室」

黒い木札に黄色のペンキで書いた標札が下っている。

華やかには家畜は息を呑み、青春の弾む血を、みるみる退潮させた。

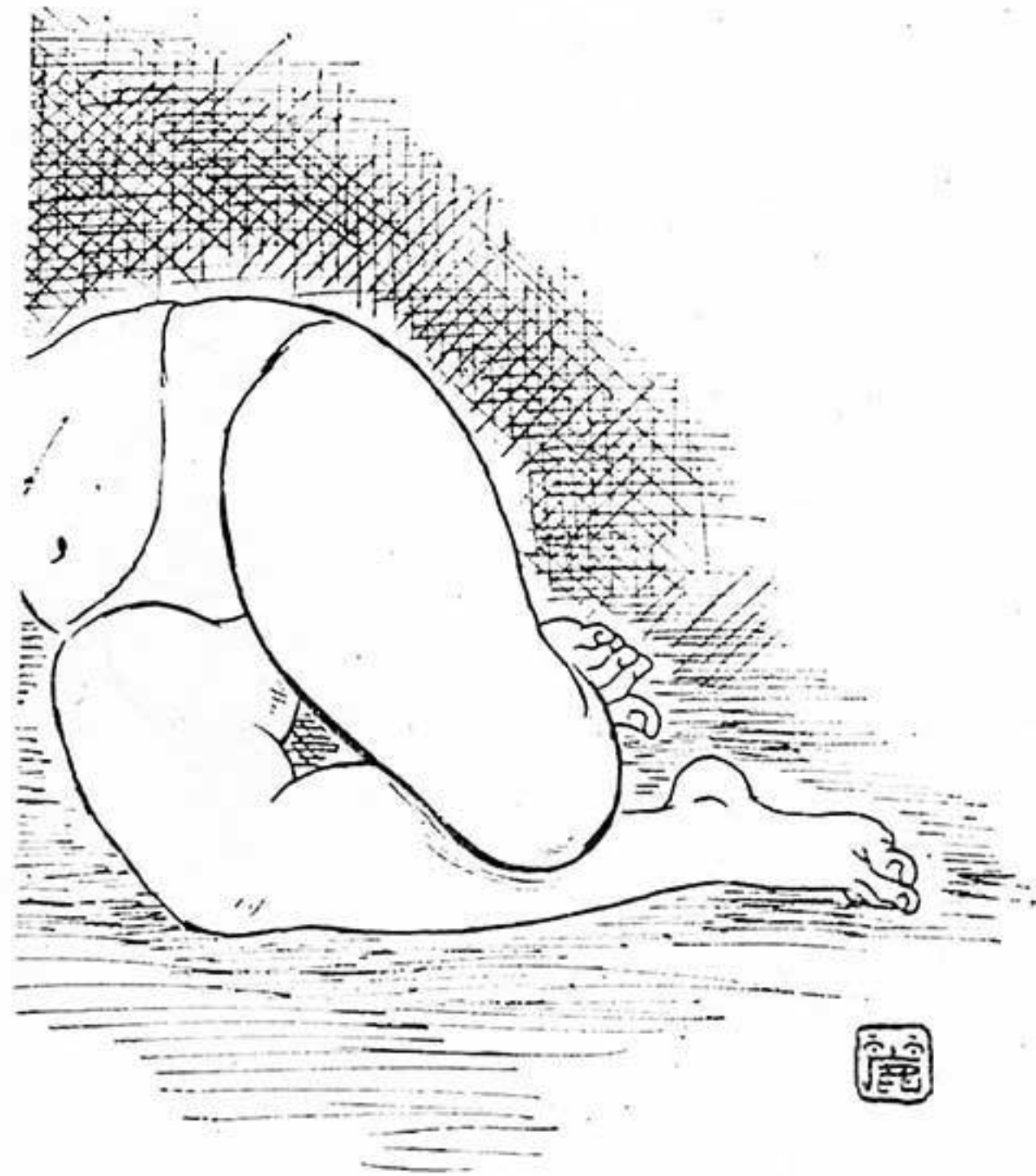
健やかに、明るく育って来た私の体を責めに責め抜いた。今迄の彼等の扱いそのものが、懲罰と名付けられるものではなかったのか？ 改めて、懲罰の名を冠する部屋があるとするれば、この扉の内で行われている加虐は、さぞかし言語に絶するものに違いない。

この上に、更に激しい責があるとは……。路子の頭脳は、狂い立たんばかりの不安と恐怖に包まれた。

私の五体は、もっと強烈な苦しみに跪かねばならないのだ。泣き、呻き、喚かねばならないのだ。云われる通り、誇り高い人間を捨てた私を、この上、更に処刑しようとするのか？

女主人イーベラに、この言葉が聴えたとして、彼女は冷然と答えたろう。

そうよ。家畜は気儘に処罰していい動物な



のさ。お前の罪は作れば良い。それに依って私達の愛が霽れ、気持が直れば、畜体の苦悶や呻吟は気分直しの一杯の酒に等しいのさ……と。

まして路子は人間の境涯を捨てたと思っではいるが、真の家畜心を会得してはいない。真に畜生となった者は、加刑に対し妖しいざわめきを感じ、苦悶に対し錯綜した喜悦を覚えるものなのだ。

路子の張り詰めていた気力は、鉈で割られた象牙の手箱のように、ばらばらに分裂した。

恥や外聞どころではない。疾風のような恐気が全身の毛穴から噴いて、べったり床に崩れる。そして半狂乱に髪を振り乱し、爪垢の溜っている黒奴の足指に、可愛い紅唇を押付け、幾度も幾度も舐め吸った。

「許して下さい。調教師様！」

決して、決して尊いお牝の匂いを気嫌い致しません。ポケは至らぬ家畜で御座いました！ お許し下さい。フーガ調教師様！ イレ助教士様！」

轡の口は言葉を作ってくれなかった。

乙女特有の痾高い声帯が鳴

り、ふくよかな頬が細く瘡癩を刻んで、少年の脛から足甲を擦っただけである。

これを受けられれば、どんな願いでも叶え、どんなことをしてやっても悔はないと、世の青年達が夢見た頬摺りと唇づけを、美の令嬢路子は、世間に疎まれてゐる階層の、薄汚い男の足先に与えて、一心に許しを請う。

透き通るように白く柔かな玉の背肌が、びくびくと戦きで慄え、いたましく腰の上で使役を停められた麗手が、もどかしげに白指を動かして歪んだ。

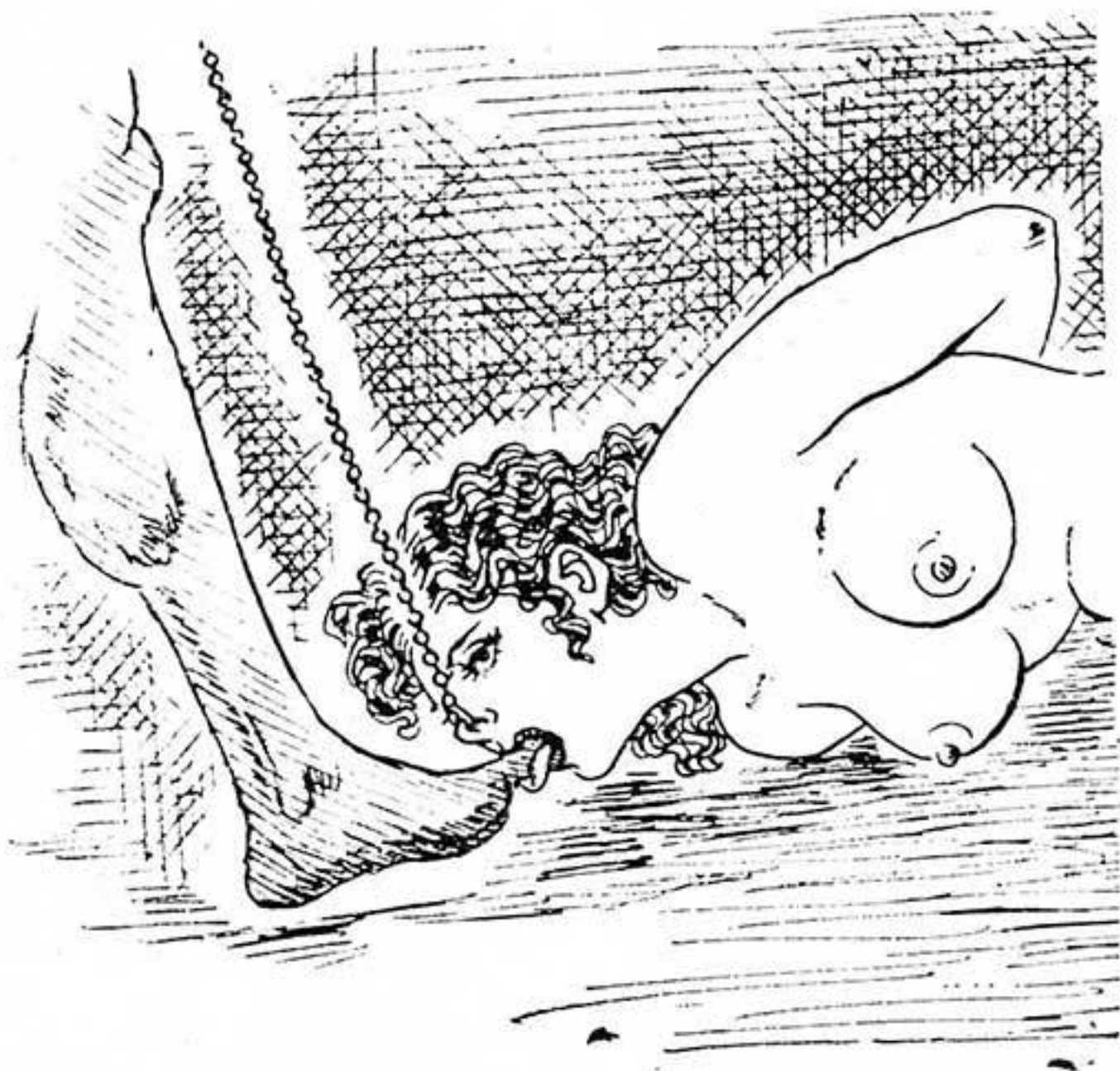
併し、この美しい娘に何の罪があるのだろうか？

清楚で穏やかで、正しい理性を持つ乙女。世の規範となりこそすれ、罰されるような行為は生れて以来、爪の先程も行わなかった真摯な女性である。

それが、蛮人の汚れ物を啜えなかったとする、徳性ある人間のすべき行為でない行為を行わなかったが為に、悶苦の絶頂へ追われねばならないとは……

そして、苦を避けんが為に、この正しい女性が、下劣な男を一途に崇め、己が行為を間違ったものとして是認し、許しを願う……。それも拘束された不自由な身を床に這わし、禽獣の態様で懇願する。

何と哀れな畜道への彷徨であつたろうか？
何と惨めな人心の敗残であつたろうか？



この教唆こそ、この心身共に純美な乙女を人間性のない飼獣に仕上げる重要な調教の一つなのだ。

艶やかに光沢を放っている黒髪が床に散り敷いて、もぞもぞと少年の足の回りを動いた。駄畜の訴願をしている芳紀二十一才の美女を快よげに見下しながら、調教師は、いたづりを楽しむように憎々しく云った。

「今更、詫びても遅い。どんな些細な罪であっても罪は罪だ。俺は見逃してやるような甘

い調教師じゃねえ。早く畜生に戻るように厳しくすることこそ、お前に対する俺の思いやりなんだ。まあ、俺の方針を、その牀へとっくり納得させてやるぜ！」

完膚なき迄に道心を奪うことが目的のフーガは、涙を浮べて哀願しているポケの横面を蹴上げる。

鼻輪を曳かれて、美畜はずるずると蹠り這い、重苦しく激む冷室の空気を吸った。

(六) 受刑の乙女達

部屋の床はコンクリートを吹きつけただけで、やたらに細い突起があつた。

管理員達は履物をつけているので痛痒は感じないが、膝の歩行をする麗畜は、入室早々柔身を攻撃される針の山の仕組になっているのである。

路子は月の眉根を皺めて痛みを吐く、ずるずると懲罰係員のボロ靴の許へ引据えらるる。

怯々と戦慄している乙女の耳に、籠った呻きや肺腑を絞る苦叫、滑車の軋りや鎖の触れ合う音が、此の世ならぬ獄相を描いて響き通

る。氣遠くなりそうな胸に、出来るだけ息を吸いこんで、美女は総身の律動を憶えた。

「大分賑やかだな」

「新畜が多いから鳴き方が大仰なんだ。そうそう、先刻マイラさんが君を捜していたようだったぜ」

マイラとはイーベラの女秘書、ポケの屈伸テストに立会った褐色の女の名である。

「何の用だろうな？ 行ってみよう、その間こいつを適当に痛めといてくれ」

調教師は云い置いて、そそくさと立去った。

「ふん、赤畜か？ 曲乗りでもやらせてみるか？ イレ！」

助教士に同意を求めるでもなく云って処罰員は、感興のない眼で竦まっている花肌を面倒臭そうに眺め、至極無造作な鞭を振った。

ぴしっ！

予告なく打ち下された所^{セイ}為ばかりではない烈痛が、路子の神経を灼いた。

「あうっ！」

脇腹から腹部へ、皮が捲くように、手馴れた鞭が電流を伴って襲ったからだ。

「此処は始めての牝だな」

と助教士に確かめてから処刑吏は

「此処はお前が罪を償う処だ。二度と再び、罪を犯さないように……。飼ひ養って下さる御主人様を崇め、仕込んで下さる調教師様に感謝し、早く柔順な、忠実な飼育物となるよ

う矯正する場所だ！」

と一応厳かに云い渡してから、口調をがらっと変え

「いいか！ 俺は刑の執行吏だ。調教師と違ってまだるこく調教を考える気の長い男じゃねえ。俺の言葉はこの鞭が云うことになってる。先ず、仲間の泣顔と姿を後々^{アトアト}の為によく見ておけ！」

後々の為に、再び咎められた時のいろいろな刑の峻烈さを大脳に刻みつけておけと云うのだ。

鞭柄が顎をしやくり上げる。

富裕なそして嗜み深いたたずまいを映していた瞳に、仏画の地獄相にも勝る烈しい苦界の種々相をまざまざと見せつけられて、令嬢は胸震いを耐えられず、がたがたと恐怖の唸りを知らずに口に乘せていた。

広い部屋だった。五十坪くらいはあるだろう。天井も床も壁も、コンクリートの荒塗りで、壁に添って十数台のさまざまな機械が並んでいた。

或る機械では仰向いて留められた十七、八才の娘の臉に赤い水と黄色い水が交互に間断して降り注いでいる。臉は器具に依ってしっかり開いて瞑ることが出来ないのだ。赤い水は何やら強烈な刺激薬らしい。細い水柱となつて注がれている間は、被刑畜は四転八倒（と云つても動かせる筋肉は僅かしかないの

だが）の苦しみに跪く。そして間を措いて黄色い水が降ると痛みを洗い流すらしく少しは呼吸の起伏が鎮まるのだが……

叫びは臓腑が振じきればかりの絶叫となつて遑しり、全身に脂汗がぎらぎらと噴き出ている。彼等は牝を盲にしない。併し女は、なり兼ねない不安と特異な痛みを煽り立てられ、必死の形相で悶えるのだ。

又一方の機械では乳房を吊られ爪先立った女が揺れ動く床に重心が支えられず脚を縛し、時々ぐいと双房を伸張させ、悲鳴のトランペットを奏でていた。併し、責はそれだけではなかった。乳首を吊られ、どうしても反つて了う端麗な顔の口は、支え棒によって開けた儘だ。その拡がった唇めがけて、天井から時間をおいて汚物の塊が落下する。牝は己が身を立て直すのに心を奪われている。いつ落ちてくるかしのれない汚物を避けるのは、三度に一度は失敗して了うのだ。大きな汚物はすっぱり朱唇に嵌り、咽喉を塞ぐ、ハイティーンの若牝は瞬間咳こんで、吐き出そうとする。が、ゴムのように伸びる乳の痛さに肺臓は空気を求める。

汚物の半分は舌にねとつき齒茎に搦まって吐き出るが、半分は体勢を整えよう、苦悶を逃れようと息張む呼吸と共に、食道を嚥下して了うのだ。

若さに充ちた華麗な肌は、額、鼻、咽喉、

肩と汚物にまみれ、汚辱と痛みに脛の筋をびくびくと攣って悶えている。

ああ、これ等のうら若い乙女の罪は何なのであろうか？ 魔教人の姿を壁に写したために、澄んだ清らかな瞳を責められるのか？

飼育人の捨てた汚物を忌み嫌ったが為の汚物責なのか？

ともあれ、彼女達は人も羨やむティーン・エージャーである。希望に膨らむ青春の最中である。

その青春謳歌を家畜謳歌に変改されて、悲しくも涙と呻きの畜歌を謳いあげる。

人を羨やませた若き素肌をのたうたせ、膨らんだ希望で潑刺と躍動していた肢体を、牽と拘束されて……。

天井からは幾本かの鎖が垂れ、片隅ではモーターがベルトのはためきを発して唸っていた。又、一隅にはペンチや釘抜きのような工具が掛かっており、鉛玉がついているのやら、尖が幾本かに割れているのやら、針の植っているさまざまな鞭が下っていた。

機械器具の殆んどが使用中であった。

美貌を蒼黒く脂の汗で粘ばらせた白肌の家畜が喘ぎと呻きで機械の作動を受けている。その間を二人の官吏が冗談を云い合って廻りながら、気紛れな鞭を手当り次第、佳牀に打ち当てていた。

「お前の泣顔も大して見映えはしねえだろう

が、皆に見せてやれ！」

背をこづかれて前のめりになる。

びしっ！ 腰が叩かれて、刑される理由とでない乙女は、二、三步処刑場へ歩み入った。

お綺麗で御聰明なお嬢様、素性正しい社長御令嬢、と讃辞を以って呼ばれていた路子もこの官吏の眼から見れば、足跡をするに相応しい下等動物であり、一匹の愚図な罪畜に過ぎない。お綺麗な肌は鞭音を響かせるべき肌であり、素性正しい肢体は悶転するのが当然の肢体である。

びし！ びしっ！ びしっ！

官吏は、仕事が残えてやりきれないと云った面持で、牛を追うようにやたらに鞭を揮った。

素性の正しいお嬢さんは奥から数えて三番目の機械の前へ坐らされる。

電痛と膝の擦傷で、清美な肩を喘がせている令嬢畜の鼻輪を係員が吊り鎖に接続する。

鎖が張って、ポケは、ず、ず、ずとゴムの大きな球体を登る。半球体と云ったほうがよいかもしれない。球体の下半分は床の中に隠れ、外見は上半分しか露出していない。

球の頂上で直立した美畜の前面に手許を一つにして分枝した三本の細い棒が迫った。処罰人は二本を胸の双房に嵌めこんで締め、一本を小さな腹部に当てた。尖端に粘着剤がついているらしく、鉄塔のように前方で窄まっ

ている立体三角形の頂点は機械から突出したシャフトに連結している。

「お前に球乗りをして貰う。球の回りの床には電流を流す。落ちれば電気は勿論痛みを与えながら、床からお前の牀を通り、鼻鎖や三本の棒へ走る。支え身の訓練にもなるぜ、まあ、曲乗りの妙味を堪能してみろ！」

路子はその言葉をよく聴いていなかった。と云うのは彼女の網膜が一匹の苦悶している家畜の姿を映しとったからだ。

その牝はもう精気が無く、可細く声帯が鳴っているだけだった。絶え絶えな息の下で、口泡を出し、顎や、肩が激しい痙攣を伝えていた。

「あっ！ あれは？」

路子は眼を瞠り思わず声を発した。哀れな変り果てた従妹の姿を認めたのだ。

「親子！ 親子じゃないの！」

誘拐される前に通告されてはいたけれど、現実とその従妹と対面して、それも家畜獄舎で恐怖と憔悴の極で会合して、路子の心は震盪を通り越して、茫と虚脱した。

幼時から仲よく遊び呆け、兄妹同様話合ってきた親子の何と零落した姿！ 見たことのない凄まじい絶苦の形相！

身近かであるだけに、路子の脳髓は火薬を点火されたように乱気の炸裂を頻発した。

「可哀相な親子！ 苦しそうな親子！」

錯乱の心臓は己が身と引き較べながら、ひりひりと傷痛を拡める。

そして悲しくも己が転落を由なしとして了う。

「もう、どうなってもいいわ、鞭打って下さい！ 吊し上げて下さい！ 責められればこの軀は家畜の務めに励みます。親子！ 貴女と血肉を分けた家畜が此処にいるわ。貴女は畜生界をたった一人で生きて来た！ 私も、私も貴女のように生きてみる！」 頑張って！ 生き抜いていた従妹の強さに、己れを揮い立たそうとする悲痛な心根を、知ってか、知らずか、球はくるくると廻転を始めた。

(七) 曲 乗 り 責

この球は通常サーカスの曲乗りのように、自分の意志に依って動かしたり、停めたりしながら中心をとってゆける代物^{シモノ}ではなかった。

球は機械の作動に依って、極めて不規則な前後左右の廻転を行うのだ。

前から後へ廻っていたかと思うと、不意に左傾して転がったり、波のうねりのようなジグザグ廻りをする。廻転速度にしても、突如速まったかと思うと横廻りして停ったり、実にめまぐるしい変化を繰返すのだ。

いくら運動神経が発達しているとは云え、この不安定に適合させて、身を支えることは

どだい無理なことであった。

もっとも、これは懲罰機である。被刑畜が追隨してゆけるものだったら意味をなさない。

路子は最初からつるつとこる。がくつと仰向いて電痛が踵から心臓を砕かんばかりに轟と突き抜ける。

「あわあっ！」

脈膊は沸騰して、ただ闇雲に踏み上ろうとする。だが廻転をしている球は容易に罰畜の足を受けつけない。

踏み掛けている脚は兎も角、床に着いている足先から絶えず電流が肉を割り裂かん絶痛を伴って流れ上る。

「あうっ あわっ！」

見事な肌の畜生は、けたたましく血を吐くような悲叫を上げながら登攀に専念する。

鼻を吊られ爪先立った姿勢なのだ。

廻転方向を見定めることも出来ず、美牝は懸命に電撃からの逃避を計った。

「わあっ！ あわっ！」

ポケは涙と鼻液で美貌をくしゃくしゃに濡らす。そして才智の脳壁をよぎった捨身の登攀を試みる。

痛みを承知で鼻輪へ或程度重心を托し、脚へ力を掛けて、跳び上る。

一度、二度、三度、五度、六度、七度転り落ち、獣の喚きを豪叫する。

哀れな家畜への黒天使のお恵みか？ 頭脳と運動神経の勝利か？ 必死の試みはやっと成功をみて、受刑畜は頂上へ立つことが出来る。

が、息を抜く間もなく均齊美の素敵な脚は、曲技の披露を続行する。

併し、その時、ポケのふるいつきたいような美貌に、奇妙な笑いとも、悶えともつかぬ表情が表われたのだ。頬に笑窪を刻んで、苦しげに唇で笑いを噛んでいる。辛苦の最中の笑い？ 路子は嬉しいのか？

だが原因は三本の棒なのだ。

シャフトの動きに発して胸部からすんなりした腹部へ微妙な震動を送っている棒に原因があるのだ。中心をとって揺れている美畜の肉体は、その震動を己れから高めて棒から受取るのである。

人間の一番敏感な部分。

それらは巧妙に刺激されて、路子は疼く^{ツク}思いを全身に充して顔に刷く。

清らかな乙女であり、行い澄んだ令嬢であろうとも、その肢体は女である。

女体の感処を擦られれば、意志とは関係なく自ずから神経は騒ぎ、昂^{タカ}ぶりは充滿する。動物の持つ本性である。

その本性だけを亢進させられて理性の美女は禽獸並に妖しく蠢めいた。

「うっ！ う、う！」

昂ぶりとこそばゆさは一緒になって女体を駆け歩く。擾乱された神経は、血に、肉に、膚に笑気の分泌を促進する。

「う、う、うう！」

球心を判断していればよかったポケの脳髓は弛緩し笑魔が乱れ襲ってたじたと退却する。

交感神経が轟しく燃え、末梢神経は空血となった。

ずるっ、佳麗な畜生は豊かな臀部を球面にぶちつけて亡った。

咄嗟に電痛が攻撃する。

「うわお！ うわあ！」

淋漓と美質の肌に汗を流し、ポケは幾度かバネ人形のように弾き上った。

魔教徒の男女が姿を現わす。調教師と女秘書だ。

「ポケ！ 楽しそうじゃねえか、令嬢暮らしいいだろう」

苦しんでいる乙女に、フーガは冷い皮肉を浴せて、マイラを振り返り

「こいつは令嬢なんて奉られて、笑う時も手を口に当てていた取り澄まして奴だったのですよ。それがどうです。牝を刺激されて直ぐ、本能を露骨に出す」

「畜類だからよ、家畜には牝から受ける笑いの方が楽しいらしいわ」

自分達が作った罠に無理矢理に嵌めこんで、反応したからと云って、侮蔑の言葉を弄する。

立居の慎ましい乙女と云っても、生物としての血を湛え、性能を有しているのだ。

その性能を殊更に騒がし、蔑すみを吐く。だが令嬢は理性喪失を歎き、やっぱり私は家畜の質なのかと己が弱さを悲しまざるを得ないのである。

マイラは権高い顔貌で、苦悶している麗畜に問うた。

「お前は津田と云う新聞記者を知っているか？」

路子ははっと眼を輝かす。が、質問の裏に潜むものを感じとって、慌てて首を横に振った。

マイラは牝とは関連のある筈はないとは思っていたのだが、何となく訊いてみたのである。

併し、多数の牝を扱って来たフーガの眼は心を動かした新畜の否定の仮面を簡単に見破っていた。

「おい！ 知っている癖に何故首を振る！」

調教師を胡麻かそうなんて、ふとい牡め！」

「あわっ！」

痛みに脚が折れ、ずでんと無様に球から転

がって、佳麗な畜生は床の電気を狂声して、畜体へ通した。

津田がバクダットを出はずれた部落で逢い、車に乗せて探鉱地区近く迄送ってやったイザニー姿の女とは、女秘書マイラだったのだ。

フーガは憤りが押えきれぬらしく、急激のように鞭を揮う。

そしてやがて、ぴくっぴくっとな収斂しながら伸びて了った美しい令嬢を、機械から脱して足許に引据え、轡を緩めた。詰問の矢を飛ばそうと云うのだ。

その頃、部屋の外の廊下を、一人の連絡員が入電文を持って歩いていった。

その入電文は、美加子達家畜を積載した貨物船が到着したことを知らせるものであった。

(未完)

代理部便り

○分譲中の左記のものは申込者殆どなきため今後の分譲を中止いたします。「マゾヒズム画廊」(略号ろう) 新版マゾフォト第一組凌辱篇(略号ま1) 第二組屈伏篇(略号ま2) 女体輝美の緊縛(略号こん1) 女体輝美フォト(略号こん2) ○マゾ関係の絵画写真の資料は相当集まりましたが申込者がありませんので今後の分譲は打切ります。

新稿

ある夢想家の手帖から



イデー ターゲット エロチック
理念と行為とは性の分野に
おいては等質である。

—キント—

沼 正 三

第三章 愛の馬東西談

「拍車のエツテ」などいつた源氏名の娼婦が良くあるが、これは *equis eroticus* として知られた変態遊戯を暗示する。

—— シュスター「苦痛と性衝動」

女性の乗馬に女性支配を象徴させる考え方は、やがて「愛の馬」
(equis eroticus) —— ラテン語 —— 観念に到達する。即ち男を

馬にしている女の姿に、女天下をシンボライズさせるので、漫画など、よく見掛けるとおりだ。尻に敷くという成句のない西洋でも事情は同じである。これは前章で論じた乗馬女性愛好グループの固定観念を離れて、別箇の由来をもっと広いマゾ的観念なのだ。本章ではその由来を説くことにしよう。

先ず「ヘクトルの馬」という観念が古典的古代世界に存したことから話を始める。

第一章で述べた美の審判者パリスの兄はトロイ第一の勇士ヘクト

ルである。彼がホメーロスの詩篇「イーリアス」の大立物であることは有名だが、その名がマゾ的主題と関係あることを知る人は、古典学者中にも案外少い様だ。

ヘクトルの妻はアンドロマキである。夫の最後の出陣に際し、彼女が彼の死と落城と捕虜になる自分の運命とを予見して泣き、彼がこれを慰めつつ愛児を托する条りは、イーリアス詩篇中のさわりで、古来の好画題の一である。

この妻に優しいヘクトルは、今でいえば恐妻家で、夫婦生活においても、妻の馬にされていたといわれる。男女の遊戯としての「愛の馬」が「ヘクトルの馬」とも呼ばれたのは、その俗説から来た。ヒルシュフェルトの文を引用しよう。

畜化倒錯者 (*zoomimische Metatropie*) は、女主人から獣として扱われ使用されることを望む。例えば、馬になって、女主人に跨られ、鞍や轡や手綱を着けられ、拍車を加えられ、乗馬鞭でピシピシやられ、ハイシハイドウの号令を掛けられる様なことを

望むのである。古代のこういう習俗は、マルチアリスの短詩から窺い知ることができよう。即ち次の如し。

扉の蔭ではフリギヤ奴隷が随喜していた、
女主人がヘクトルの馬に乗る度に。

(Epigram. XI. CIV. 13~4)

ヘクトルの馬とは、当時、女が騎手になって男に跨り、男が乗用馬の真似をする一種の恣態を意味したのである。……(性病理学二卷)

尤も原詩に当って見ると、内容(全二十二行)は冷感症的な妻に夫が与えた体裁をとり、「妻よ、この家から出てゆくか、それとも俺のやり方に従うか」という初行以下、彼女の生活態度に対する不満を並べ立て、前掲の二行の後に「イタカの島中がいびきを立てているというのに、貞潔なペネロペはいつもそこで起きていた。」という二行が続く。そして前の二行中、ヒルシユフェルトが女主人と訳している所は原文では *uxor* (妻) とある。だから後の一行は「アンドロマキが騎手になる度に」という意味にも解せるので、現に、ヴァン・デ・ヴェルデは「完全な婚姻」中にこの一行を引用している。然し、ヒルシユフェルトほどの碩学が長い研究の末の主著でいっていることだから、私は彼の解釈に従いたい。マルチアリスより一時代前のローマ詩人オヴィディウスの「恋愛術」に、その態度を論じて「彼女(アンドロマキ)は背が高かったから決してヘクトルに馬乗りにならなかった」とあるのなど普通、暗示的に解釈されている様だが、背が高いというだけでは理由にはならない(同じ詩篇中に「アンドロマキは人皆が大女といったが、ヘクトルだけは丁度良いといった」という詩句もある)筈だ。これは当時の通念だった「ヘクトルの馬」に対して、詩人が異を立てたものと解すれば、背が高いからという理由が生きて来るだろう(背の高い、つまり脚が長いと跨った時、足が床に着いてしまうからまずいわけである)。

考証はこの位にして、さて、この愛の馬^{エクス・エロチクス}ということだが、これが西洋において女性支配の象徴となったのは、古代世界からの「ヘクトルの馬」の観念だけが、その種子となったのではない。それを下地としたことは間違いないだろうが、直接には「アリストテレスとフィリス」という有名な説話が中世以来、西欧世界に親しまれて来たのである。

然し、それを紹介する前に、先ず古代印度の説話集パンチャタトラにある「ネンダ王とその妃」の話の引いておきたい。

クラフト・エビングの摘要によれば――

ネンダ王妃は(何か色慾沙汰の採めごとから)王に対して大層立腹し、後悔した王が何と頼んでも、和解に応じようとしなかった。そこで彼は彼女にいった。「愛して下さい。貴女なしには私はもう一刻も生きていられない。私は貴女の足許に身を投げ出して、私を赦して下さいとお願ひします」と。彼女答えて曰く、「あなたが這って手綱を啣え、わたしがその背中に跨って乗り廻す。あなたが鞭たれて駆けながら、馬見たいに嘶いたら、そうしたら赦してあげてもいいわ」と。王はいわれた通りにした。

(Nanda を Nanda と綴った本もある。)

これはパンチャタトラ第四篇中「女の気紛れ」と題して二つの話がある中の一つ(もう一つはネンダ王の宰相ウアルッチが妻のいうとおりに頭を剃って丸坊主になる話で、この方は東西に類話が多い。)で、ベンフィの研究によれば、仏教説話中にもある由であるが、書かれたのが紀元前二世紀以上というから、話の成立はもっと古く、ヘクトルの馬に匹敵しよう。(但し私の見た英訳本にはこの話はなく、以上は独逸書からの孫引であることを断っておく。)印度はすべての寓話の故郷といわれる。ネンダ王の話は、東は中国へも伝えられたし(附記第一)、西はペルシャ、アラビア等を経た(この過程も考証されているが、省略する)、中世末期の欧州に

達し、次の様な話になった。

マケドニア王フィリップは、後の大王たる王子アレキサンデルの師伝として、碩学アリストテレスを選んだ。所がある時王子は宮女フィリスを見染め、彼女もこれに応えて恋仲となったので、学業は以来はかどらない。これを知ったアリストテレス先生は、情慾の賤しむべきを説いて、二人の仲を割こうとした。「わしが教えて進めた哲学から、心理学から、倫理学からそれにまた解剖学からも、お分りの筈じや、色欲を慎しみなされ。娘っ子など忘れなされ。女は茨^{いばら}じや！」だが二人の思いは募るばかり。五日目には大広間で逢引した。事情を知ったフィリスは憎い離間者への復讐を思い立ち、計画を練る。「学者先生は毎朝この大広間で散策するの。妾、明日ここで待伏せてやる。そして目に物見せてくれるわ。良くて、あなたは、外に隠れていて、妾が奴をピシヤピシヤ叩いている音が聞えたら、そうーっと入って来るのよ。胸の空く様な思いをさせたげるわ」

翌朝、沈思して大広間を散歩するアリストテレスの前に、輕羅を纏った裸足の美女が現れる。そして此処の滑らかな床板を踏むと、幼時、従兄とお馬ごっこして遊んだことを思い出す、と話し、彼に馬になって呉れとせがむ。彼は初めは威厳を損じることをおそれて拒絶するが、女は色仕掛でたぶらかし始める。「誰も見てやしないわ。背中が暖くなり過ぎる様なら、すぐ下りるわ。ね？ お馬になって下さるわね？」ながし目で優しく睨むと、もう彼は半ば馬になった様。「沢山勉強なさった後なら、ちっとは気散じをなさいな。運動をするのが身体に良いのよ、学問する方には。ささ、一刻千金、誰も知らないうちにね」手練手管に学者は落城。「よし、遠慮せずお乗り、だが、誰にも喋るでないぞ」——冗談の様にして身を前に屈ませ、広い背中にクッションを載せて鞍にする。「さあ、両手両膝をついて前に進むのよ！それか

らこの手綱を啣えて！一寸お待ち、妾がひらりと飛び乗るから——さ、よし。ハイシハイシ、うまいぞ！ハイシハイシ、その調子！」彼女はほんとの馬に対する様に、彼の顎や頬を軽く叩いたり、チョッチョツと舌を鳴らしたりして賞めてやった後、今度は急に励ましかかる。足で脇腹に拍車を入れ、手でピシヤピシヤと打ち叩いて、叫ぶ。「全速力で駆足！ハイシ、よたよたさん、ハイシ！」

「ハイシハイシ！」突然アレキサンデルが現れて笑いながら叫んだ。恋人に接吻の雨を降らせた後、彼は嘲る。「先生、何ということです。分りましたよ。哲学も倫理学も心理学も解剖学も役に立たなかった。色欲を誡めた癖に女に乘られてる。娘っ子を忘れてろといいながらその娘の手綱を啣えている。女は茨じやと教えて女の拍車を受けている。それなのに、この十七歳の私が青春をあきらめねばならないのですかね？」——「違うわ！あなた、ここへいらっしゃいな。（跨ったまま王子を抱擁して）妾の胸に、妾の口に、寄り添って何時間でも！この右手で髪に触らせて、この左手で腕を握らせて！ゆっくり楽しみ、うんと遊び、大いに祝いましょう！妾が（この馬を）支配するための時間は、たとえ残ってるわ。さあ、学者先生、進むのよ！」

これは、キントが蒐集した色々の異話別伝の原文中、比較的近代の成立に係る押韻散文から要処を訳したものである。この文では女は平手で叩くだけだが、他の資料では鞭を本式に使ったのが多い。例えば本誌二八年五月マゾ特集号扉に紹介されたH・B・グリーンの一五—一三年筆のこの場面の絵を見よ。場所は庭園、鞭と轡が用いられている。女が成熟しているから、これは、王子と宮女の代りに王と王妃とを登場させる異話に拠ったものである。この絵ではその王が屋上から覗いている。この様に、単に悪意ある見物人となるに止まり、「愛の馬」に跨ったままの女と抱擁する（附記第二）と

ころまでゆかぬ話もあるが、いずれにせよ、口に禁欲を説く修身の先生が、女の色香に迷って馬になって這い廻り、宮中の笑いのものとされる、という筋書は変らない。中世神学上、神を除けば最大の權威とされた「第一の師」アリストテレスをその嘲笑の対象に持つて来たところに、人間性謳歌のルネサンスの胎動が、教会的權威の重圧への抵抗として芽生えたことが看取できよう。吟遊詩人（十一、二世紀）に歌われ、説話集ゲスタ・ロマノルム（十三、四世紀）に採録され、謝肉祭劇（十五世紀）に演ぜられ、夥しい絵画の題材とされて、この話は次第に西洋世界の民衆の間に流布して行った。中世におけるアリストテレスの權威を念頭におくと、彼が馬にされる場面の痛快さは、例えば、同じく「道徳（哲学）」に対する人間愛の勝利を描いた谷崎の「無明と愛染」などから私達が感じる印象とは、質量共に類比を許さぬほどのものだったと思われる。

古代世界からの「ヘクトルの馬」の觀念が下地としてあるところへ、この話が浸透したことによって、「鞭と手綱と拍車とを装うて女が男に騎乗する」ということが、必ずしも女の異常性のしるしではなく、女天下一般の象徴とされるに至った」（オットー・ゴールトマン「サディズム論」、シドロブイツ編「悪習の風俗史」所収）のである。

附記第一 本文中にあげたこの説話の研究者キントが、ネンダ王の話のあとで「古代支那に類似の文献あり」と書いているし、ゴールトマンもそういつているから、何かあるのだと思うが、私は寡聞にしてその原典らしいものに遭遇していない。読者諸君の御教示を期待する。

附記第二 愛人に抱かれ目を瞑じて接吻し合っている妻を四這になった背中に載せ支えているコキユ（寝取られた夫）を描いた絵に「愛の橋」と名付けたボシオの機智を採用すれば、フィリスから再度の前進を命ぜられる迄の停止中は、学者先生は、馬では

なく橋だったわけである。劣位の男を、優位の男女が椅子に使うという、三者関係の強い形式だ。「江川蘭子」（乱歩）にもある場面だが、本誌では「二百字讃歌」（真砂氏）に見られた（「人間馬の上で二人しっかり抱き合いました。そして熱烈なキスを交すのです。長い間でした。私は一生懸命に手を突張って背中の上の二人のキスのすむのを待ちました。」——アリストテレスもこんな氣持を味ったのだろう）。

第四章 ナオミ騎乗図

「痴人の愛」は痴人の哲学の確立である。氏の「此の人を見よ」である。

——小林秀雄「谷崎潤一郎論」
私達が連想させられるのは、谷崎潤一郎の「痴人の愛」であろう。

この文豪は、端的に一個のマゾヒストであって、彼の文学の首尾を貫くものが「ドミナ崇拜」「美女への拝跪」であることは、全集を読めば明らかである。その作品系列は正統マゾヒズム（附記第二）のあらゆる様相を展示しており、マゾヒストの愛読に堪える。事実彼の作品ほどわが国におけるマゾヒストの春の目覚の機縁となったものはあるまい。独逸文学におけるマゾッホとは比較にならぬ高い文壇的地位を占めるこの作家を同時代人に持つことは、現代日本のマゾヒストの幸福である。

「痴人の愛」はその諸作中で最も喧伝流布されたものの一つで、戦後映画化もされた（附記第三）から、改めて梗概を語るにも及ぶまい。

equus eroticus 場面は楽曲の主題旋律の様に繰り返される。初めは（第三節）まだ引き取られて間もない小娘ナオミとの遊びの一つである。……やがて十九歳に成長したナオミは讓治の理想通りの肉

体の持主になるが、既に三人の情夫を隠れて操縦している。譲治は例の雑魚寝の夜の後にもまだ真相を悟らず、昔の彼女を取り返そうとする。そこで（第十四節）又馬ごっこ——

「さ、馬になったよ」

と、そういつて、私が四つん這いになると、ナオミはどしんと背中の上へ、その十四貫二百の重みでのしかかって、手拭いの手綱を私の口に咬えさせ

「まあ、何ていう小さなよたよた馬だろう！ もっとしっかり！ ハイハイ、ドウドウ！」

と叫びながら、面白そうに脚で私の腹を締めつけ、手綱をグイグイとしごきます。私は彼女に潰されまいと一生懸命に力み返って、汗を掻き部屋を廻ります。……

然し、まもなく鎌倉での破廉恥な場面が目撃され、遂に破局が来て彼は彼女を追いつく。……と、その途端にもう未練がましく（第二十節）、馬になったことを思い出して、残して行った古着を背中に、彼女の足袋を両手に穿いて四つん這いになって見る譲治である。「己は絶対無条件で彼女の前に降伏する。彼女のいうところ、欲するところ、凡べてに己は服従する。……」と、その心に誓う。ナオミはじらす様に彼の所へやって来るが身体に触らせようとして（第二十七節）。……彼が彼女の足下に身を投げて跪いて頼んでも、気遣いなんか相手にしてやらぬといい放つ。そこで有名な場面となる——

「ぢやあ己を馬にしてくれ、いつかの様に己の背中へ乗っかって呉れ、どうしても否ならそれだけでもいい！」

私はそういつて、そこへ四つん這いになりました。……彼女は猛然として、図太い、大胆な表情を満え、どしんと私の背中へ跨りながら、

「さ、此れでいいか」

と男の様な口調でいいました。

「うん、それでいい」

「此れから何でもいうことを聴くか」

「うん、聴く」

……

「あたしのことを……『ナオミさん』と呼ぶか」

「うん、呼ぶ」

……

恐らく大抵の読者が御存じの場面であろう（私など殆ど全文を暗誦して位読み返したものである。）が、単にこの条り丈でなく、前から繰り返されて来た主題がここで最高調に達しているのだ、ということを言いたかったので、敢て引用を試みたのである。

女の魅力に引きずられてゆく痴人は、古来の文学に数多く描かれている。然し、この様に男の「愛の馬」コンプレックスが破滅への根本衝動として描かれた例は、他に見当たらない様である（例えば、「ナナ」にも、「愛の馬」場面はあるが、単なる遊戯に止まっていた、「痴人の愛」における様な象徴的意義を持っていない）。この小説の風俗小説としての価値は夙に説かれているが、痴人小説としても、文学史上独自の位置を占め得ることを、私達マゾヒストは、忘れるべきでない（附記第四）。

ただ、こういう見地からすれば、この最後の「愛の馬」場面が、案外あっさり終ってしまうのは、物足りない気がする。譲治に跨って右の問答をした後、ナオミは

「よし、じゃあ馬でなく、人間扱いにしてあげる。可哀そうだから。——」

といつて、二人は和解し、その後で彼女は財産の分割、洋館の購入などを持ち出して承知させる。そして、新生活では夫婦は相互に拘束されぬ独立の暮し方をすることになる。

これをネンダ王の場合——アリストテレス説話は三者関係だから別として（附記第五）——と比較して見よ。王妃は、男に跨っただけですが「可哀そう」がりはしない。気まぐれな思い附の儘庭中を乗り廻した後でなければ和解——赦免——しない。どうしても否なら、馬にしてくれるだけでもいいと頼む譲治は畜化倒錯に陥っているが、王は本来正常で、唯王妃の愛を回復しようとして、凌辱を甘受している。一方では支配しているのは「馬になる」男の意志であり、他方では、それは男を「馬にする」女の意志である。前者ではマゾヒストが、後者ではサディストが主役である。そして私達は後者にこそ、より強いマゾヒズムを感じるのだ。つまり「痴人の愛」では、ナオミがサディストになっていないのが、物足らないのである。

勿論、この小説では、もともと彼女は嗜虐的には描かれていない。奔放な娼婦たるに止まる。だから、最後の場面に、ナオミの方から「馬になれ」といわせるのでは、おかしいかも知れない。然しナオミが、この譲治の申出に、そのマゾヒズムを見抜き、これに便乗したとしても不自然ではあるまい。「よし、じゃあ望み通り馬にしてやる。さ、ハイハイドウドウ」と、以前の遊戯の時の様に男が潰れる迄乗り潰したとしても良かったろう。そして、新生活が洋館で始まってからも、一旦擱んだ男の弱点を利用し、馬にしてあげるということを代償に色々な仕事をさせ、譲治も、屈辱を感じつつも、乗廻して貰いたさに、唯々諸々、次第に彼女の召使になってゆく。そのことでナオミは段々嗜虐的素質を目覚めさせてゆく。方便ではなく、馬にするのが面白くなってくる。……この様な女の性格の発展を考えた方が、「愛の馬」主題の展開という点からは、遙かに徹底もし、また自然だったのではあるまいか。

文豪の名作に注文をつける様だが、マゾヒストの読み方（マゾ的鑑賞）の一例として、記してみた次第である。

附記第一 ネンダ王説話は実際「痴人の愛」の成立に影響しているかも知れない。「饒太郎」によると谷崎はエビングを愛読しているし、「玄奘三蔵」や「ハッサンカンの妖術」から窺われる様に、本格的に古代印度関係の文献を読んでいるから、この話も原典に遡って読んでいたとも考えられぬことはない。ネンダ王妃は——「麒麟」の南子（なんし）などと同じく——彼を惹きつけたに違いないのだ。この人が生きている中に、誰か勉強家が直接訳ねて呉れると良いのだが……

附記第二 初期の谷崎が「精神上の苦痛よりも寧ろ肉体上の苦痛を与えて貰いたい」（饒太郎）といっているのは、正統マゾヒズムの立場に遠いが、彼自身この頃は真の自覚に達していないと見るべきもので、全作品を通観すれば、正統派なること疑いを容れない。——この種の考察では中村光夫の評論も中河与一の伝記小説も甚だ不充分である。

附記第三 映画の「痴人の愛」は、物足らなかった。公開前伝え聞いたシナリオでは、第一場がナオミ入浴図で、そこへ譲治が割烹着姿でスープの味を見て貰いにくるという光景から始まり鎌倉海岸でも譲治がナオミに奴隷のようにかしずく所があり、ただ原作のようにナオミが譲治に跨って永遠の屈従を誓わせるのでなく、その場面のあと又悶着があつて追い出されたナオミは結局落ちぶれてしまう（モームの「人間の絆」が「痴人の愛」と題する映画になったことからヒントを得たものか）ことにして一般の倫理観と妥協するという計画になっていたようで、スチールもこれに応じたものが見られた。所が、映画倫理規定ではこれでも駄目ということで、途中で譲治が馬になる所がおざなりに残された丈で肝心の場面は殆んど削られ、結末もナオミが落ちぶれてもどって来て詫びを入れ、今度はナオミが馬になって、譲治がこれに乗るという、原作を知る者にとっては幻滅とも噴飯とも、いやは

や呆れ返った作品になってしまった。女性の勝利、西洋の勝利、悪徳の勝利、そのシンボルとしてのナオミの讃歌が原作の「痴人の愛」であったとすれば、映画のそれは反対に「常人の愛」に堕していた。ただ京マチ子の伸び／＼した四肢に初めてスクリーンで接したこと、ともかくも京マチ子が宇野重吉を四這にさせて跨ったこと（尤も一寸腰を下した丈で乗り廻した感じはない）——金丸壯吉氏「女の足の魅力」（本誌二八年一月号）によると、帝キネ映画「大熊小熊」その他古い日本映画にも女の男への馬乗り場面はあった様だが、私は知らなかったの——印象に残っただけである。

附記第四 乱歩の「猟奇の果」には、女が男を調教する奇妙な曲馬を覗き見る場面があり（更に近く「影男」にも類似の場面がある。速報一六参照）、胡堂の「笑う悪魔」（『新奇談クラブ』所収）には、裸に剥いた幫間の馬に美妓を跨らせ、馬子唄道中とて乗り廻させる大尽が描かれる。然し、これらでは人間馬という趣向は、遊戯（前者では両者合意の、後者では大尽個人の）に過ぎず、「痴人の愛」における様な意義を与えられていない。

附記第五 ネンダ王の所伝においても、「色恋沙汰の揉めごとの後」とあるから、王妃が愛人を持ったのが王との不和の原因だったと思われる。この場合、王妃が王を馬にしたのは、愛人にその騎乗の有様を覗かせる為だったとする余地は充分にある。つまり、痴人の愛——ネンダ王——アリストテレス説話は、マゾヒズム効果の点では一の発展系列を成しているともいえるのである。

第五章 侯爵令嬢の愛馬

「お前に騎るわ」 彼女はまるであたりまえのこの様に、無邪気にいった。「跪け！（跳び乗って頸に跨ると）進め！ お前が嬉しがっていること位分つてのよ……」

—— シューバルト「吸血魔女」
前二章で「愛の馬」について述べたが、人間馬には他にも色々ある。鞍馬形式は別として、乗馬形式にも、女が跨らずに男の背に立って御する四這型の変種（旧第七五項写真参照。男が二人の場合もある）、本章や次章で述べる両脚型あり、第七章で説く補助車型あり、様々だ。そのそれぞれのマゾ的意義の相異については次章以下で論ずるとして、本章では、両脚型人間馬の登場するフランスの文豪エミール・ゾラの短篇「一夜の情を求めて」（Pour une nuit d'amour, 1882）（愛の一夜の為に）を紹介するとして置く。

P——町を貫いて大河が流れている。この町にジュリアンという郵便局員がいた。頑丈な体格と醜惡な容貌の持主だが、内気で人嫌い、一人河畔で笛を吹くのが趣味だ。コロンベルという書記がいるが、彼とは犬猿の間柄であった。

さて、ある日、ジュリアンは街でド・マルザンヌ侯爵夫妻を見る。友達から聞けば、夫妻の一人娘テレーズは今年十八、やがてZ修道院から帰るだろうが、コロンベルは彼女の乳兄弟だという話だ。彼の下宿は侯爵邸に面しているが、彼の住む部屋の丁度向いが、帰宅した侯爵令嬢の部屋になったらしい。ある夜、彼の笛の音に向いの窓が開いて「まるでナイチンゲールの様ね」と乳母に話し掛ける若い女の声が出た。こちらの部屋は暗いので窓から覗いた彼女の姿が良く見える。『彼は彼女のことを陽気な小娘とばかり思っていたのだが、今見る彼女の様子は、きつい顔立ち、輝かぬ闇黒の瞳、まるで残酷な女王の様に見えた。……』彼はすっかり惚れてしまいが、直接愛を訴える勇氣はなく卑屈な愛情を片思いに笛に托するばかりだ。夜な夜なの笛の音に興味を持った彼女は、ある朝明るい所で彼を見る。いつも八時でなければ起きない彼女を六時というのに窓の所に発見してジュリアンは慌てるが、もう遅い。駄馬見たいな

彼の容貌はすっかり観察されてしまう。

『人から買えと勧められた犬を検分するかの様に、彼女は、冷淡な無関心な態度で、平然と彼を眺めていた。やがて見極めてしまうと、軽蔑的な表情で視線を外らせ窓を閉めた。』以後笛の音は彼女に何の影響も与え得ない。『実際、テレーズにとっては、彼はもはや存在していなかった。……ある日彼女はうるさそうに叫んだ。『いつまでも笛の音ばかり聞かされてたまりやしない、下手くそなくせに!』』ジュリアンは笛も止めてしまう。窓から見かけた時、二度ほど彼女に投げキッスをして見た。別に気を悪くした様ではなかったが、勿論何の反響もなかった。

テレーズが帰ってから、一年以上経ったある夜のことだ。初めて反響があった。彼女は彼の投げキッスに自分も答えた。そして「こちらへおいで」という。ジュリアンは夢心地で邸へ向う。彼女は扉を開いて案内し、彼女の隣室である乳母の部屋を通り抜けて、いつも彼が自分の部屋の窓から見ていたパラダイス、彼女の部屋に導いた。

彼女は彼に「あんたはわたしを恋してるの?」と訊き、「わたしが愛を与えるのだったら、どんなことでもするか」という。ジュリアンは誓言する。彼女は寢室のカーテンを開く。滅茶苦茶に引かき廻されている中央に靴下も附けずに男が横たわっている。

『「ええ、恋人だったの——」彼女は声をひそめていった。「一撃を加えたら、引っくり返ってしまつて——どこをどうしたのか、死んでるのよ。何とか始末しなくちやならないわ。分ったわね? あんたがこれを片付けるの、よくって?……まあ、一部始終を話しましょう、すっかりね!』」

二

『テレーズ・ド・マルザンヌは幼い頃から冷酷な性質で、よく他の子供を虐めた。そして彼女の弱い者いじめの的にいつもされたの

は、乳兄弟のコロンベルだった。侯爵は、娘の乳母の息子を邸内に引き取っていたのでコロンベルは、半ばは小さな令嬢の遊び相手として、半ばはその召使として、生長して行った。

テレーズは怖ろしい子供だった。乱暴な悪戯っ子というのではない、反対に、ませて、落ち着いていたから、彼女からチャンとお辞儀されたお客様達は「なんておとなな、お行儀の良いお子様でしよう」といった——然し、誰もいないところでは、彼女はよく得体の知れぬ怒りの発作に捉えられ、足を踏み鳴らしたり、憑かれた様に叫んだり、庭の地面に仰向けになって、どうおどかされても意地になつて立ち上ろうとはしなかったり、することがあった。

彼女が何を考えているか、誰にも分らなかった。彼女は、心の奥底まで見る人に示してしまうほど明るい、あの淡色の子供らしい瞳を持つていなかった。彼女の墨色の瞳は、ヴェールをつけた様に輝きがなく、その奥を読み取らせなかった。

彼女が遊び相手のコロンベルを虐める新遊戯を考え出したのは、まだやっと六歳の頃だった。彼を庭の隅の栗の木立の茂みで暗くなくっている場所へ連れてゆき、彼の背中に跳び乗って——彼の方が幼くもあり弱くもあったのだが——彼を乗り廻した。花壇の周りを何時間も追い立てる間、肩車のまま両脚で彼の首を締め踵で脇腹を蹴り続けた。一息入れることも許さなかった。「わたしは貴婦人よ、おまえは馬よ。馬は乗手のいうとおりしなくちやならないのよ」それが彼女のことばだった。

目が廻って彼が倒れそうになると、彼女は彼の耳たぶを血が出るまで噛み、彼の身体にしがみついて爪を肉に立てた。そこで彼はもう一度気を取り戻させられ、かくて騎乗は再び駆足で進められ、残酷な小女王の髪が風になびき、彼女の息がつまるまで続けられるのだった。

もう一つの彼女の楽しみは、父母の面前で、あらかじめ身動きす

ることさえ禁じておいたコロンベルを、ひそかにつねったり、針で刺したりすることだった。彼は声を出すことができなかった。何故なら、彼女から、もしこの彼女の楽しみを少しでも人に知らせる様なことをしたら、邸から逐い出して街に捨てさせてしまふ、とおどかされていたからである。彼女は彼を生きた玩具としか見ていなかった。そして、よく、「お腹の中に」何があるか見るために、壊して見たい様な気持になるのだった。彼女にはそうする権利が充分あるのではなかったか？ 彼女は人皆が恭順を誓う侯爵令嬢ではなかったか？ 然らば、人形の代りに遊ぶ様にと与えられたこの男の子を彼女が好き勝手に扱ったとて、何で悪い道理があるろう？ 然し、一人きりの時に彼を虐めてもちっとも面白くなかった。彼女を喜ばせたのは、他の人の前で、腕に針を刺したり、足蹴にしたりしながら、同時ににらみつけて全然声を出さない様に見すくめてしまふことだった。

コロンベルは憤怒を内に籠らせつつ、この拷問に耐えた。……」侯爵夫妻は、娘を修道院に入れてしまふ。十八歳になって帰って来たテレーズはしとやかで娘らしくおとなしい。乳母はコロンベルを彼女の許へやる。彼は繁々と出入りする様になる。彼は半ば召使、半ば遠縁の親類といった風に見られているので、一緒に長い間庭を散歩したりしても怪しまれない。

『この様に彼女が彼と並んで歩く時には、昔同様、彼女は女王であり、彼は奴隷であった。勿論、もう咬んだり、引っかけたり、刺したりすることはなかった。然し彼女はひどく横柄で尊大なので、彼は彼女の傍にいる自分を小さくつまらぬものと感じないわけに行かないのだった。……』

『ある日、彼等が例の栗の木立の下を逍遙していた時、テレーズは急にまじめな声でいった。「ねえ、コロンベル、わたしくたびれたわ。乗せてくれないかな——昔の様に——おぼえてるでしょ？」彼

は、ちよっと笑って見せてから、まじめな面持ちでいった。「いいですとも、テレーズ、喜んで」

彼女は、然し、平然と歩み続けながら答えた。「結構よ、ちよっと知りたかっただけ——また今度お願いするわ」……やがて、茂みの中の径にさしかかった。狭くて二人並んでは通れない。コロンベルは彼女を先立てるため立ち止ったが、彼女に強く押されて止むを得ず先になった。二人とも黙っていた。

彼女はわざと少し遅れ、助走をつけてから、山猫の様な身軽さで、昔の様に彼の肩車に跳び乗った。「進め！」そういう声はガラリと変って、圧し殺した様、昔の情熱が震え出していた。

彼女は彼の手にしていたステッキを奪い取って、彼の脚を叩いた。逞しい力強い彼女の両脚が彼の肩と首を圧迫し締め付けて、老木の蔭の下、彼を狂った様な駆足へと次々に駆り立てるのだった。彼は一言も口をきかなかった。喘いで漸く身を支えていた。とても大きくなったこの少女の体重が殆んど彼を押し潰しそうだった。

彼女が最後に「もうよし」と叫んだ時、彼は停止せずに、滅茶駆けを続けた。柔らかな草を踏んで響きこそしないが、止ることもできない位の速さだった。彼女が跳び下りてしまわない様に、両手で彼女の踝くるぶしを抑えていた。丁度馬が騎手の命をきかずに逸走している様だった。彼女は引かいたり、叩いたりしたが、彼は庭の外れの農具納屋に行きつくまで走り止めなかった。そこで彼は彼女をわら束の上に投げ下した。……』

『この日以来、テレーズの顔は益々蒼白く、その眼は益々黒く、唇は益々赤くなった。彼女は敬虔な生活が続け、コロンベルに対して、人前では謙遜で、親切だった。彼の方も常に微笑し、敬意ある態度を示した。だが、彼等が二人きりになるや否や、例の遊戯が初めから演ぜられる。彼女は彼を調教せんとして、肩車の馬に乗って鞭ち、そして彼が最後には納屋のわら束の上へ彼女を投げ下すのだ

った。

そのうち、テレーズは、コロンベルを自分の私室に迎え入れる様になった。……』

ここで二人はよく相撲を取った。『大抵はコロンベルが負けて、喘ぎつつ四肢を緩ませて床に横わり、彼女はその胸に跨って、彼を嘲笑するのだった。』ところが、今日は彼女は足を滑らせた為、彼に組み敷かれた。彼は彼女を嘲った。彼女は真蒼になって又掴みかかった。その瞳の色に彼は怖じた。彼女は本気になって彼を憎んでいた。彼は打ち負かされて横わった。

『彼が横になったままだいまでも動かないので、彼女は歩み寄って、足で蹴って見た。……コロンベルは死んでいた。……』

三

ジュリアンは誓言もあるし、テレーズの命令とあつては否やはない。彼女の計画は、今夜舞踏会があるから、その終わった後、皆寝静まってから、彼に屍体をついで町の外に出て、河の中へ捨てて来させる。そして帰って来たら愛を与えてやろうというのである。ジュリアンは承知して、深夜までその室に潜むことになった。舞踏会の時間が迫ると、彼女は着更えを始め、彼を屍体のある押入に追い込む。そして屍体の上には脱ぎ捨てた衣裳をかぶせてしまう。乳母（屍体になっているコロンベルの母）が着更えを手伝い、花冠を取りに押入に入ろうとするのでジュリアンは震え上がるが、テレーズは平気な声で、それを止める。彼女は天使の様に美しく、あどけなくよそおって出て行った。……下では舞踏会がはじまる。八時が打つ。まだ四時間待たねばならぬ。……途中でテレーズが来て腹ごしらえする様にと食物を呉れた。……とうとう会は終わった。テレーズが帰って来た。乳母は寝込んだ。「今だわ！」とテレーズはいう。コロンベルの屍体を彼に背負わせて、彼女は戸口まで見送る。彼の帰りを待っていてくれる筈だ。

ジュリアンは、途中何度も見つかりそうになってハラハラしながら、やっと町の外に出、橋の上からコロンベルを落す。ところがコロンベルは一人では行きたがらないのだ！ 屍体硬直で腕がジュリアンの首にしっかりからまっているせいである。どうやら切り抜けて屍体を投げ落すが、彼の精神的困憊はこの時その極に達する。眠くてたまらないのだ。テレーズがカンテラを持って戸口で見送った姿や押入で待っていた間彼女のホルセットに顔を押しあてた時のにおいなどが思い出されて戻ろうとするが、足がいうことをきかない。彼は唯もう安らぎを求めなくなる。コロンベルが水の上から呼んでいる様だ。彼は遂に永遠の眠りへと水の中へ跳び込む。

やがて二人が発見された時、仲の悪かった二人は喧嘩したのさうと解釈されて事件は終ってしまう。

『三ヶ月後、テレーズとベチュール伯爵との婚儀が執り行われた。真白な花嫁衣裳に包まれた彼女は、高貴なる優雅と無垢との化身の様に見えた。』

×

×

×

手帖の一章として紹介する関係上、うんと縮めて、人間馬の出る第二段を主とし、他は筋書に止めた。『内だけが略々原文に即した訳文である。』

人間馬の場面は前後二期に分れる。幼少期の描写は、恐るべき子供アン・アン・テリブルのサディズムを扱っているが、どこか谷崎の「少年」を思わせる様な、慾望から昇華された清純さが感じられる。髪をなびかせながら花壇の周囲に愛馬コロンベルを駆る小公女テレーズの姿の何と美しいことであろう。

だが、成熟したテレーズがコロンベルを再び馬にする場面になると、明らかに異常性の匂いがある。それも男ではなく、女が主体だ。ナオミ型ではなくネンダ王妃型だ。男が女の馬になるのではなく、女が男を馬にするのだ。男が自分の欲望に負けたのではなく、女

が自分の加虐欲発散の手段として男を利用したのだ。玩具にしたのだ。その後に何事が続いても、この優劣の秩序には何の影響もない（附記第一）。彼女は、常に優位でなければならぬ。だから、偶々彼が相撲に勝って彼女を組み敷いた時、彼女の傷けられた自尊心は全く前後を忘れさせる程彼女を逆上させたのだ。彼女はその怒りの余り、無意識に彼を殺してしまうのである（同じ様な逆上による女の愛人殺害を描いたものとして、クライスト「ペンテジレアー」のアヒルレス殺しをあげておく）。

コロンベルは彼女の馬になる為に生れて来た様な男だが、こうしてさんざん玩具にされた揚句死んでしまう。さて、ジュリアンの番だ。

コロンベルが馬とすれば、彼は犬である。事実作者も、この卑屈な愛情の持主を犬に譬えてテレーズに検分させている。その時には彼は彼女の氣に入らず、飼犬にして貰えなかった。だが、馬の屍体を前にして彼女はこの忠実な犬のことを思い出す。口笛で犬を呼ぶ様に、彼女は彼を呼び寄せる。仕事をいい付ける。男なら、ここで先ず彼女の愛を要求したろう。困っている彼女は拒めなかった筈だ。だが彼は男ではない、彼女に対しては犬なのだ。押入の中で彼女から食物を貰うジュリアンを、テレーズは犬小屋の犬位にしか考へてはいないのだ。彼は屍体を捨て終って戻って来るまで、テレーズが待っていてくれると信じて出掛けたのだが、事實は恐らく、彼を見送ったあと彼女は戸口に鍵を掛けて安心して寝たのであろう。帰って来たところでジュリアンに何がきよう。彼女が否認する限り、彼にはその夜のこゝろ——彼女との約束はもとより——を全然証明だてることができない。彼女は彼のひたむきの愛情を利用し、使ひ捨てるつもりだったのである。

計画は思ったより以上に満足すべき結果をもたらし、彼女は何の心配もなくなくなる。かくて三月の後、彼女は天使の様に無垢な乙女として伯爵夫人の地位を迎え得た。彼女の嗜虐の犠牲となった二人の

男も、天国——いや畜生道の地獄で、それを祝福していたであろう（附記第二）。

ゾラには、「ナナ」とか「テレーズ・ラカン」とか「獣人」とか既に本邦に紹介された作品にも愛情異常場面を扱ったものが多いが、他にも色々あるらしい（旧第三八項「ゾラの小説？」参照）。本章の短篇は、まだ邦訳はない様だが、かなり有名なものである。研究者によれば想をカサノヴァ回想録に借りたものだというが、私にざっと調べたところでは、該当の箇所が見当らなかった。読者の高教を仰ぐ。

附記第一 「女天下」に抄出されているシュバルト作「吸血魔女」には、「男は皆犬よ」と叫ぶ嗜虐女性サデスチンが描かれる。彼女は伯爵夫人だが、夫はその奴隷同然。客人の青年も彼女の魔力に掛かる（ツルゲーネフ「春の水」と類想）。夜青年を起し、両脚型人間馬にして（題辭参照）、これに乗って森へ鳥撃ちに出かける。そして鳥を撃ち落すと、今度は彼を獵犬扱いにして「取って来い」と命じ、動作が遅いとて、顔を蹴つ。……此処までは良いのだが、この後恋愛関係が生じると、急に女らしくなってしまう。本章の作品とはこの点で違っている。女性心理としては、どちらが真実であろうか？

附記第二 この作品は、嗜虐女性による殺人を描いた犯罪小説としても読める。女が男を玩んで殺し、その犯行隠蔽の為にもう一人の男を利用するというテーマでは、浜尾四郎「マダム殺人」がある。二人の美少年をマゾヒストに仕込んだサドの有閑マダムが、一人を罵り殺した上で、もう一人に、嫉妬からの兇行だと自首させるという筋。テレーズの殺人の様な心理的必然性に欠けて不自然な上、公判を傍聴して身代りの男に死刑の判決が下るのを楽しんでたマダムが突然別の男に殺されてしまうので興を削がれる。テレーズが見事に結婚にゴールインする結末の様なマゾ効果は、この自然主義の巨匠の勸善懲惡理念を脱却した作品でこそ不自然な感じなしに味えるものなのかも知れない。

手帖雑報欄 沼 正 三

二五〇 武田泰淳「貴族の階段」(中央公論三四年一月号より連載中) 西園寺公の孫で近衛公の娘という設定の才色兼備の十七才の女子学習院生徒がヒロイン。馬でも弓でも鉄砲でも男勝りのお姫様。貴婦人崇拜者の護衛巡査も出て来る。女子同性愛もある。貴族の自意識を扱っている点で、貴婦人に関心ある向きには必読。

二五一 遊佐幸平「世界の女流馬術家」(『馬狂放談』所収) この人が「馬術の上達は男より女の方が早い」といっていることは、手帖旧第七二項で引用したし、その後馬場氏も言及された(女性乗馬考)。今回の文は「第二次大戦後はどういうわけか、女が馬にのることが世界的に流行して来た」という書き出しで、著名な海外乗馬女性を挙げている。オリンピックで銀メダルを二度取ったデ・マークのリス・ハルテル夫人は、小児麻痺で歩行は不自由なのだから、イギリス乗馬女性の第一人者パット・スマイス嬢(二十台の由)の名馬プリンス・ハールは彼女が自分で調教したものであるとか色々新知識を得る。井上喜久子夫人は腕は一流だが馬が悪いから駄目だそうだ。

二五二 日高路子『あめりかひとりぼっち』 日高孝次氏の一人娘の令嬢の留学日記。本文はつまらぬが、巻頭の著者自影が乗馬姿である。(もっとも、ちゃんとした乗馬服装ではない)。手帖新第二章の参考に。

二五三 「サジスト島崎雪子」(週刊実話新年号) 実姉との刃傷沙汰を扱ったもの。姉を傘の先で突ついたとか、実弟を縛り上げて庭に放り出したとか……。

二五四 狩久「砂の上」(『妖しい花粉』所収) 男を海岸の砂

の中に埋めておいて海水を注いで溺らせ、溺死を装わせる妖婦。この程度のものなら他にも沢山あるともいえるが。

二五五 「クラブハウスの悲劇」(週刊新潮一月五日号) 日本女性が外国の男からどう見られているか。「捨て去るが故に愛しい日本の女」との結婚を持ち出されて、あるギリシヤ人の船員がいった「世界の終りが来たって、ギリシヤ人は黄色いエテ公の日本人とほんきでつき合ったりはせんぞ!」これは手帖新稿で近く扱う白人の有色人種への優越感の問題の参考に。

二五六 週刊「女性自身」の表紙 これはアメリカのセブンティーン誌との特約なので、白人ハイティーン女性が毎号表紙を飾る。白人崇拜者にはそれだけでも眼の保養であるが、その図柄がまた時々素晴らしいのである。ここには、二つ例をあげる。(一月十六日号、一月三十日号参照) 多くの人は、「男の首に捲いた綱の端を握る女」の方に惹かれるであろう。ソフィステイケートされているので、迫力はないが、明らかに「女性による男性飼育」の図である。面白い。然し、私は「白熊の毛皮の上に坐る女」の方に、ヨリ多く魅力を感じる。大口を開いてしかめ面をした熊の顔をよく見給え。その丁度頭の上にあぐらの様に脚を投げ出して乗っている金髪の令嬢……「ああ、この熊が羨ましい」と——私と一緒に——思う人はいないか? そんな人こそ、私は「ヤープ」の真正の読者として期待しているのだが……

二五七 漫画・小島功「女の夢・こんなすてきな平均台でした」(週刊サンケイスポーツ新春号、巻頭色刷漫画「女の夢」の中) 女子の体操選手が使用中(あとに二人待機)の平均台が逞ましい男性の肉体で作られている……生体道具!

二五八 広池秋子「男性不用論」(週刊漫画誌連載中) 三回分読んだ所では大した内容ではないが、雑報二四四であげた「変な男」の作者として、マゾにも理解ある人であるので、一応注目しておく。



(柳幸子の告白)

飼

育

久留木 栄

(一)

「まあ！幸^{サク}ちゃん」

「久美子！」

全く思いも、かけないことです。二度と会

えないと思っていた高校（新制）時代の親友
上原久美子に所もあろうに東京の真ん中で会
えたのです。私たちは、ちょうど二年前、九
州の都会のある高校を卒業、その日かぎりに
別れたままだったのです。なぜなら、久美子

は東京の姉を頼ってすぐ上京したのにかかわ
らず、私は九州の実家で花嫁修業をしなけれ
ばならなかったからです。それが、全く偶然
というより仕方ありません。凡そ人間の生活
というものは、ほんの偶然のきっかけから大

大きく変るといふのですけど、まだその時、私には、とてもそんなことがわかってる筈はありません。

私達は道路の真中で手をとりあいました。

二人ともしばらく無言で、じっと見合いました。久美子は小雨の日でも着られるような、淡いピンクのバーバリー七分丈のコートをきていました。大きなセーラ衿の前にだけ浅い刻みを入れ、そこに折返しをつけ、白いボタンをあしらったのが、小柄な体に調和して、水際立った美しさでした。それに比べれば、私は流行遅れのウール地のスーツで、比較する必要もないくらい惨めなものでした。それがわかるだけに、私はすぐ頭をさげました。「幸ちゃん。元気がないね。どうしたのよ、ねえ。お話ししない。その喫茶店によらないこと」

柔和な微笑を浮べて、久美子さんは云いました。私は黙って、それに従ったのです。

今でも、よく覚えています。シャロンという名の喫茶店で、お客もさして多くなく上等の喫茶店ではありませんでしたが、黄色いカーテンと赤煉瓦作りの古風な建築が印象的で私は久美子さんの後からおずおず入って行きました。私には上京して、初めて入った喫茶店です。どうぞ、そうお笑い下さいますな。その時はもう夢中で勘定ばかり心配でした。それを知ってか知らずに、久美子さんは平

気で

「フルーツ・ポンチ二つ」

とウエイトレスに命ずるのです。私は気がありません。しかし久美子さんは委細かまわず

「幸ちゃん。ちゃんと覚えているワ。ほら、駅前の食堂でフルーツ・ポンチをたべたこと」と、おっしゃるのです。

やがて品物が来しました。そのおいしかったこと、今たべれば、なあんだ、あんなまずいものと不平をいうかもしれません。でもその時は、兄夫婦の粗食になれさせられていたので、本当においしかったのです。私は恥しいことに、お金のことも忘れ、夢中でたべました。やがて久美子さんが柔しく聞きました。「どうしたのよ、幸ちゃん。びっくりしたわ。本当に幽霊かと思ったのよ」

「ありがとう。本当に、もう元気になったわ」「そうお、そりや、よかったワ。でも奇蹟ねどうして東京に出て来た？」

「そうね。いろいろ訳があるの。人にいいたくないことばかりなのよ。でも、久美子さんだものね。いうわ、聞いてよ。そしたら胸がすうっとするかもしれないの」

そう前置して、私は九州にいた母が死んで東京にいる兄夫婦に引きとられたこと。兄夫婦は兄が養子で、農林省に勤めていること。ここ半年間、全く女中みたいに暮してきたこ

となどを包み隠さず話しました。久美子さんは合槌をうちながら聞いてくれ、話し終ると優しく慰めて下さいました。私は思わず不覚の涙を落しました。涙をみると、久美子さんは同情して

「そんなに辛かったの。幸子！ 可愛いそうね。本当に嘘みたいだわ。で、これからどうしようと思うの」

「どうしようって、私には右も左もわからないんですもの」

「勤めにでないの」

「そんな。どうしてそんなことが。私、町に出たの、これで五、六回しかないのよ」

「じゃあ、牛馬のように奥さんから追い使われて我慢するの」

「仕方ないわ」

「そんなことないわよ、幸子ったら学校の頃は、もっと勇氣あったじゃないの」

「でも」

「でもじゃないわ。うん。いいことがある、私の家に来ない？。家、今あいてるのよ」

「……」

「ゆっくりお話ししないとわからないかもしれないけど、ね、幸ちゃん。うちにこない」

「だって、……だって、返事のしようがないわよ。余り唐突ですものね」

「そうね。じゃ考えておいてくれる。うち、いまね、姉さんと一緒に生活しているのよ。」

姉さんって女流小説家なのよ。わかってるワその姉と私、それから女中がひとり居るのよ私、いまね、映画俳優の玉子ってところよ。

姉さんの紹介でテレビに出たり、映画に出たり、そんなわけで、うちは自由主義の家庭なのよ。どう、考えてみない。ううん、家賃なんていらぬ。お金なら捨てるくらいあるワ。だからってどうということもないんだけど、家は大きいしね。家に来て働きに出るなら出る。

いい人を探してお嫁にいくなら行く。自分で途を探したらいいわ」

「有難う、久美子。ゆっくり考えてから返事するワ」

私たちは、それからしばらく雑談して分れました。しかしなんという幸運が訪れたことでしょう。とにかく兄夫婦の家を出れるということは、何にもかえがたい魅力でした。それに久美子さんの「自分で途を探すのよ」という言葉にひかされて、ほんとうに勇氣百倍私はやがて久美子さん姉妹の好意に甘えることになったのです。

(二)

本当に運命のいたずら——私たちのこの出会いはそういえると思います。あれから一週間もたたない間に、私はたったポストンバグ一つという夜逃げ同然の姿で、久美子さんに手を引かれ、久美子さんの家に引越しまし

た。

久美子さんの家は昔、精神病院だった家を買いとって改造したという、本当にひろびろとした家でした。母屋の外、庭もあるし、小屋や離れもありました。離れは昔、重症患者を収容したという倉庫みたいな家で、窓に鉄棒をはめた厳めしいものでした。ここがあとから私の住家になろうなぞとは、どうして想像ができました。

とに角、玄関に入って、すぐ私は応接間で久美子さんの姉さんにあわされました。久美子さんが変りものとおっしゃっていただけあって、姉さんは久美子さんと打ってかわった意志の強そうな顔をしていました。角ばった顎、常に意欲的な妖しい光を湛えた黒い目、鼻柱は太く逞しく、女として決して美しいといつた人ではありませんが、洗練された化粧をし、眼鏡をかけていました。たしか服装はナイロンのシャツ・ブラウスだったと思います。

「ほら、姉さん。私のサッチンこと柳幸子さんよ！きれいな方でしょう」

久美子さんは、そういつて私を紹介しました。私は思わず、カッと血が顔にのぼって、何といったかわからなかったくらいです。お姉さんは、ゆっくりとした口調で、

「姉の美穂です。妹が、でしやばって、とうとう、お連れしたようですわね。どうぞ、気

の済むまで自由にいて下さい。私たちは氣狂いばかりですから。文学狂に、芝居狂。ホホホ、そうでしたね、久美子。だから、氣をつかったらきりがありませんのよ。好き勝手にし、好き勝手に飯をくい、好き勝手に風呂に入り、好き勝手に女中を使つて下さい。なにしろ、私たち仕事に熱中すると、一週間も二週間もお部屋に閉じこもることがあるのでから」

その時は、まさかと思い——私の氣持を引き立てるためにいつてくれたものと思っていたら、全く久美子さんたちの生活は、私の想像もつかないくらいでした。友達は連れてくる、のむ、くう、議論する、さわぐ、常に活動的で目をみはるばかり。奥まった一部屋を借り、ひっそりと暮している私と比較すると全く月とスッポン。三日も四日も顔をあわさない日などざらでした。やがて私は、久美子さんが大山千鶴子といつて、かなり有望な若手女優であること、その姉さんが小泉美子といつて、流行の女流作家であることを知りました。そして、たまに三人、顔をあわせる食事のときなど

「お姉さん、こんどの小説『風と月』のヒロイン都志子ね、姉さん、あれ殺したいんでしようけど、殺すのはよくないわ。だって、あれ大衆読物でしょ。殺したら復活できないんですものだから、行方不明みたいな結び方が

いいと思うワ」
とか。

「久美子、こんどの『秋月城秘聞』の監督は
中村さんかね。あの監督は、うるさいぞ。覚



悟しておかなきゃ、いかんよ。この前の大村
さんのように真似だけじゃなく、本当に高手
小手にされるわよ」
という話を、本当にうらやましいと聞いた

ものです。それと同時に、私と久美子さんた
ちの距離が天と地のように開き、とても、こ
の二人には及ばない。二人がお姫様なら、こ
ちらは腰元と思うようになり、二人を心から
尊敬するようになりました。こうして、習う
より慣れろで、時が経つうちに、私と二人の
美しい友達の間の垣も取れ、私は次第に軽口
をかわすようになりました。

そうです。たしか日曜の夕方、いや夜だっ
たと思います。珍らしく二人ともお暇で、私
たち三人は、お茶をのみながら雑談していま
した。話は、たまたま久美子の扮する女スリ
美代のことになり、あれこれ雑評を下したあ
とで、引回しのことになりました。

「久美子。お美代のひき回しは菱縄かね、十
文字かね」

「あら姉さん、知らなかったの？ 高手小手
で中村さんは、やつつけようといってたワ」

「すると、随分いんちきだね」

「ええ、本当は女五方というのだそうですよ」

「あら久美子。お前、それ知ってるの……」

「一度写真でね」——

こんな会話をきいても私は全然、何が何だ
かわかりませんでした。それで、ついつりこ
まれ、聞いてみました。

「なんですの、久美子さん。その十文字とか
高手小手とか……」

「あら、まあ、幸子さん。全然、知らないの」

「ええ、私、時代劇って全然みたこともないんです」

「そうお、じゃ論より証拠ね。やってみようかしら」

「あら、ここでできるの」

「簡単よ」

そういうながら久美子さんは、机の抽出しから細引をもつてくると、あっという間に私の両手を背中からねじまげ、括りあげたのです。

「痛ッ！ 何するのよ！」

私は思わず叫びました。すると久美子さんは姉さんと顔を見合わせて笑いながら、さもいじわるそうに、

「それが高手小手よ。ウッフ、わかった？」と、いいました。

「せっかくだから、菱縄をかけて見せてあげるワ」

と、いつつ、続けて縄をかけるのです。

二の腕から首、前に回して胸と、順序よく久美子さんは手早く縄をかけ、かけ終ると、ボンと肩をたたきました。

「どうお？、菱縄の感想は」

「どおって、恥しいワ。はじめてですもの。」

でも、チットも手が動かないワ」

「そりや、そうよ。縛られてるんですもの。チヨット、もがいてごらんなさい。ソラソラ、ハハハハ」

久美子さんは、いたずらっぽい顔で、くす

ぐるんですもの。私は、もうどうしようもありませんでした。俯向いて逃げようとしたはずみにおおむけに倒れ、その拍子で私のスリッパの端が床の釘に引っかかり破れたのを、少しも気付きませんでした。

「ばかね、もう、およしよ、久美子」

そういうながら、お姉さんの美穂子さんが抱き起し、縄をほどいて下さいました。ほどかれても私の胸はドキドキして、どうしても落着くことができません。きっと私の血の中に何かを感じるものがあつたのでしよう。

「幸ちゃんたら、いまにもベソかきそうなのよ。お姉さん、幸子さん綺麗でしょ。縛られた姿、純情可憐ね。中村さんなら、お泪ものよ」

「ほんとに、そうね。きれいに島田にゆって松の木か何かから」

「いちど、やってみましょうか。ほんとに、どう、幸ちゃん」

「いや！もう生涯」

なんということでしょう。あのとき私は心では、それを望んでいたのです。それなのに断ってしまうとは！それでも、あのときの久美子さんや美穂子姉さんの顔は決してわすれられません。いたずらっぽい、何か青い焰が燃えるような目でした。

これでこの話はそれなりケリになったのですが、私はその夜の出来事に、つい今一つ、

決して忘れることが出来ないことがありました。それは寝るころになって、何か白いものを山のように抱えて久美子さんが、私の部屋に入ってきたのです。それは綺麗な沢山の下着類でした。私は一体、何かと驚き、きつと修繕か何かだと、その時は勘ちがいしたものです。

「どうしたの、久美子さん。いまごろ、なに、これ」

「幸ちゃん、怒らないでね。うち、姉さんと相談して持ってきたのよ。これ、みなあげるワ。これうちたちのだったのよ。うちたちといつても、ほとんど、うちのなの。それも一度、着ただけなの。勿論洗ってあるワ。これ使ってくれない。ね、貴方を決して、侮辱したりするワケじゃないの。今日ね、さっき、いたずらしたでしょ。あのとき破れたの、うち知らなかったの。ところが、お姉さんみてたのね。お姉ちゃんから叱られちゃった。とってくれるでしょ、幸子。私はね、仕事の関係で、よくもらうのよ、新型の下着を。婦人雑誌などの広告、あれで。だから気にしないでいいのよ」

そんな話を聞いてみると、私の胸は、いつしか一杯になり、私は臍ごと久美子に抱きついて、おいおい泣き出しました。柔しい心使いが、じんと腹の底に沁みわたるようです。泣きながら、うち、うち、なにもお手伝い出来

ずに……と繰返えすだけでした。本当に、ここに来てから一カ月、食費も住宅費も出さず、世話になり放し、職探しにも出なかった私なのです。明日から職探しに出よう。きっと明日から。そう泣きながら私は、誓ったものでした。

(三)

しかし、この決意も翌朝になると、無残に潰えてしまいました。私は外に出るのが怖かったのです。前にもいったように、私は東京の地理も殆んど知りません。それに町に出れば、そういった田舎娘を喰物にする狼たちが沢山いるという話も聞かされていました。それで、久美子さんたちの放ったらかしているのを良いことに、私は一人静かに遊び暮していました。久美子たちの指導というより影響で、いつしか、贅沢な化粧道具を使い、見様見真似で上品な言葉を使い、メーキャップも一人前になってきました。

そういった或る日の午後のこと、女中のお清が下のお嬢さんと呼びですといいに来ました。かねて、お手伝いがあったら、といったので、さては何かだと思いましたが、そこはわからぬまま、久美子の部屋に急いだのです。私はそれまで、まだ一度も久美子の部屋に入ったことはありません。この家では、各自がみな居間をもっており、久美子は寝室、居間、書斎と三つ持っていました。その

居間の戸口に立って、扉をノックしました。「幸子です」

というと、中からギョッと戸があき、久美子が顔を出しました。

「待ってたわ。一緒に工夫してもらいたいのよ」

久美子は明らかに何かに熱中しているようで、セカセカした口調でした。誘われるまま中に入って私は、びっくりしました。本や雑誌、絵が久美子の坐っているところ辺り一面に放り出しており、その回りに大きな鏡台をはじめ、なまめかしい長繻絆や腰ひも、矢がすりの着物、半えりの類、それにロープ、細引、麻縄のたぐいが無造作に放り出してあったのです。

「びっくりしたでしょう、幸ちゃん。私今ね芸の工夫をしていたのよ。『秋月城秘文』で私ね、腰元の貴美と、スリの美代の一人二役をやるのよ。その腰元の貴美が間諜の疑いで拷問にあうところがあるのよ。最初、えび責にあい、あとで松の木から吊られることになっているのよ。えび責にあうところは、かげ絵だからフキかえがきくけど、松の木はアップがあるのよ。ダメなのよ。もちろん吊るときは、背中に鉄の棒のようなものをいれ、これを見えないように体に背負っていて、棒を吊り上げるから痛くはないのよ。ただし、これは遠景だけ。アップの時は本当に吊られるわ

けだけど、上半身しか写さないから、足は地についているのよ。これまで随分、いろんな役に出て、いじめられたけど、たいいてい、地のままの表情で済んじやった。というのは、そこが、たいして重要なスチールでなかったからよ。ところが、クライマックスでしょ。

こんどは中村監督がどうしてもOKといわないのよ。二、三日、研究してこいって、下駄あづけられたの、それでこうして研究していったところよ。なにしろ、私がいくらお転婆といってもね、幸ちゃん、本格的に縛られたこと一度もありやしないし、また、他人を一度も力一ぱい縛ったことないでしょ。勿論、拷問なんか、見たことも聞いたこともないんですよ。それで、ほら、仕方ないから、雑誌や絵を姉から借りてきて本、をよんだり、責め場の写真をみたり勉強中よ。それで、幸ちゃんにお願いがあるの、一度私を縛ってみてくれない？。どのくらい苦しいか、どんな気持ちか研究してみたいの。ほら、この前、教えた高小手、あれでいいわ。わからなかったら、そこに図解があるわよ。そしてね、よかったら、えび責にしてくれてもいいわ。私はその鏡の中の姿を見てるからね。ね、してくれる？」

私は、久美子の願いを聞いて、びっくりしました。いくらなんでも、尊敬してる久美子を縛れるわけがありません。

「いやあよ、ね、久美ちゃん、うち、そんなことわくて」

「あら、嘘おっしやい。遠慮してるのよ、幸ちゃん。さあ、早く」

そういつて手頃な一本の細引をとり、私に握らせると、くろりと向うをむくのです。久美子さんは、その時、白の毛糸のセーターに薄い藤色のひだの大きいブリーツをしていました。私は仕方なく、その細引きで久美子さんの手をしばりましたそして久美子さんにいわれるまま、首繩をかけたなり足をしばったり、えび責にしてみましたですけど、もともと余りやる意志がない上に非力な私の躰には過重なことであり、その上馴れないとあって、えび責も全然、中途半端「これじゃ苦しくないワ」と、久美子さんも叱るに叱かれず、大笑いになってしまいました。繩をほどくと久美子さんは頭に手をやって「これじゃだめね」とガツカリしてしまわれました。私は、心からあやまりました。

「ごめんなさい。久美子さん。私が悪かったのよ」

「いいのよ、幸ちゃん。私が我ままだったのだから、出来ないことは出来ないのよ。笑っていたけど、あれで結構、得るところはあったのよ」

「でも、そんな！」

「いいのよ」

「そんなにいわれたら私、困っちゃうワね、久美子さん。わたしを縛って下さらない」
「どうして」

「だって久美子さんなら力もあるし、きっと痛いワ。私、苦しむワね。ね、久美子さん。私だって、そのくらいの勇氣はあるワよ。私を縛って、私の苦しむ顔をみて、久美ちゃんは演技を覚えるのよ」

「おばかさんねえ、幸ちゃんは。そんなことまでして私……」

「いいえ、久美子さん。いいのよ。うち、縛って貰うぐらい、はりこまなくっちゃ、借りがかえせないもの。ね、お願い。うち、いじめてよ。ね、そうしたら、それで久美さんの演技がうまくいくのなら本望なの」

「ありがとう、幸ちゃん。うち、断然感激しちゃった。幸ちゃんが、こんな情熱家なんて……。有難く、いじめさせてもらうワ。でもね、うち、断わっとくけど幸ちゃんと違ってあいまいに途中で止めるの嫌いよ。だから、もし間違ったら腕の関節ぐらいはずれるかもしれないワよ。それでいい」

「いいわ、どんなにされても」

「そう、じゃ姉か清に手伝ってもらおうかしら。今日は清しくないわネ。それでいい」
「いいわ。久美子のためなら無条件なの」

「有難う」

久美子は、熱っぽい目で私を見ました。縛

られることで、責められることで役に立つなら——私は、その時は責の苦しみがどんなであるか全然知りません。それで甘ずっぱい恋愛のような氣持で苦しみを待ったのです。

「じゃ、幸ちゃん。着物着替えて、その洋服じゃ気分でないわ、やっぱり腰元は長繻絆ね」
「ええ、そりやそうだワ」

私は合槌をうちながらブラウスを脱ぎました。スリッパ一枚になり、長繻絆を着ようとなりました。すると久美子は

「ダメよ、幸ちゃん。江戸時代にスリッパはなかったのよ。それも脱いで、それから腰巻をするのよ。恥しかったら、そらその部屋の隅でしてらっしゃいな」

そういいながら、ピンクの金紗で出来た腰巻をとってくれました。私はそれを見ると、思わずカッと顔が赤くなったのです。約束をした手前、勇氣を出して部屋の隅に行き、スリッパをとると、腰巻を締めにかかりましたが、なにしろ、そういうものははじめてで、うまくいきません。たまりかねて久美子が近寄り、笑いながら締めてくれました。ピンクの色の上にうっすらと色のついた白い部分がついていて、それで乳房をみせないようにかくしてしまうということを、この時はじめて知りました。

「映画用の腰巻だから隠すのよ」

と久美子は笑いながら教えてくれます。

そんなことがうれしくて私はまるで花嫁のような気持で長繻絆をつけ、腰ひもで結ぶと、鏡の中の私は本当に良家のお嬢さんか、腰元のように見えました。これで用意万端とこのったわけですが、久美子は

「縛る前に、ちよっと」

といって、矢餅の着物を着せかけ、

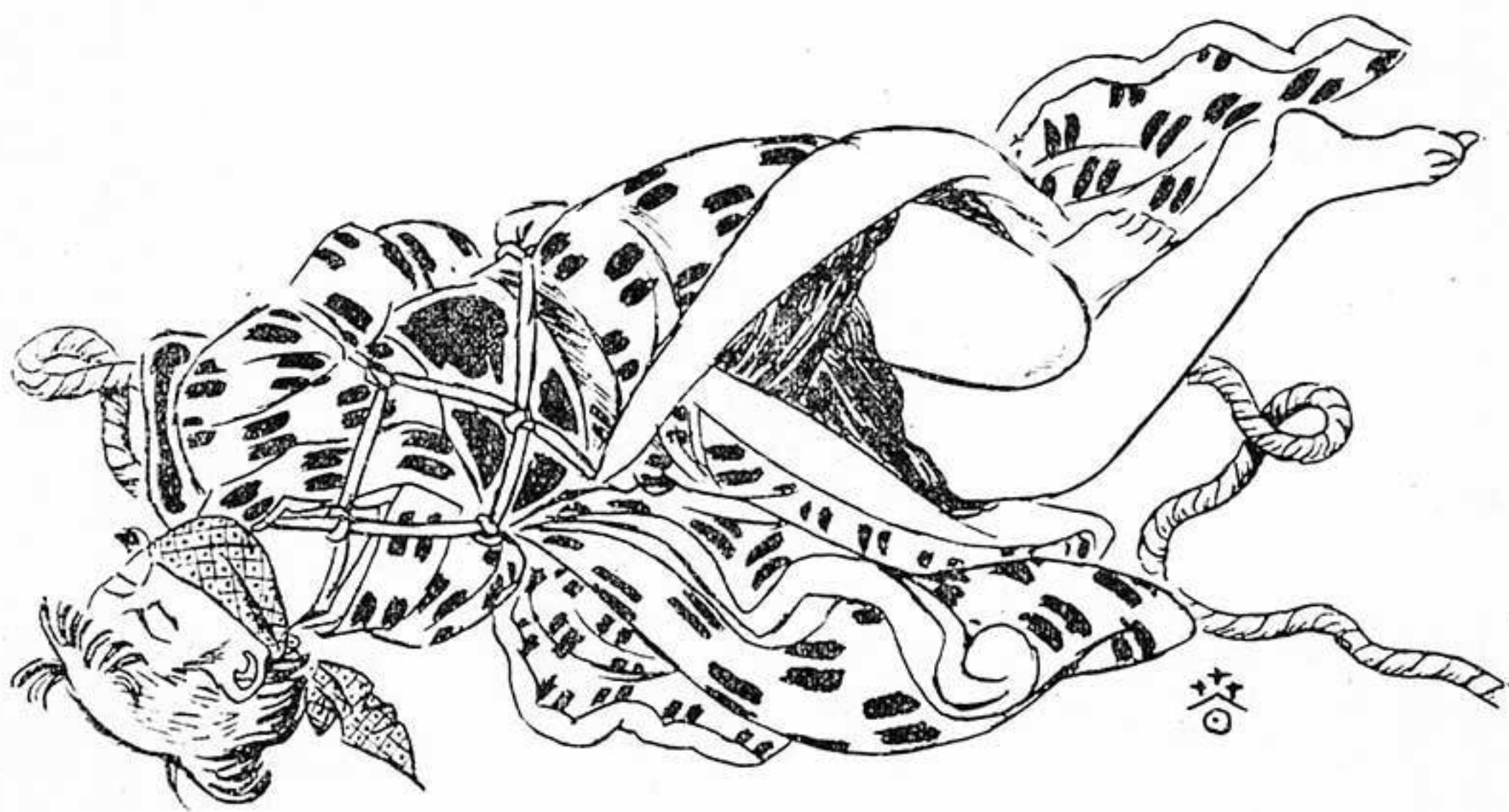
「笑ってえ、悲しそうな顔してみて」

といい、右から見たり、左からみたりして「似合うわね」と賞めるのです。私は本当に幸福そのものでした。

しかし、この幸福は、あっという間に消えました。紅いしごきで両腕を背後に縛られたからです。左手を上、右手を下にして両手首に、きっちり巻きつけ、強く結んで左右にわけ、両手首の中にしごきを割って入れて、たるみのないように、ぐっと力一杯、締め上げられました。紐がやわらかくて弾力のあること、絹紐であるため、ゆるみのないこと。こういう二つの理由で、いくら動かしても、ギョッとも紐がゆるまないのを私は知りました。

「こりや貴美。下におろう、無礼であるぞ。思い知ったか」

などと久美子さんは、ひとりごとのように冗談をとばし、「どおう、痛い？」と聞くのです。柔しい久美子さん！ 私はなんというお人良しでしょう。ちよっとしたなぐさめ



言葉聞いただけで、幸福に胸が震えるのです。それから久美子さんは、太目の麻縄をとって手首に引っかけ、ぐいと引き上げました。

「痛！ 痛！」

私が思わず、そうつぶやくと少しゆるめ、そのまま前に回し交叉します。ついで、二の腕の下から背中へ回し、背中の二本の縄を一回よじって、それに通すと、ぐっと引き締まりました。すると背中の縄が菱形に広がり、手が、ぎゅうっと上に吊りあげられます。首縄も締めまり、ズンと痛みが手首や二の腕に走りまわりましたが、私は我慢しました。少しでも痛いという、久美子さんが、ゆるめると思ったからです。余った縄尻で二の腕を一回まくようにして、首からきた縄にかけて通し、左右の縄をみぞおちの前で結ぶと、前も綺麗な菱形になります。それでも余った縄を後に回して唐結びにすると、縄尻が畳にぞろりと曳きずりました。

「どう、少しは締った？」

「清、もういいよ！それから夕食は二人前、ここにもってきてね」

と、いう久美子の声がしました。久美子は俯向いている私を仰向けにし、さも満足気な表情で見下しました。鏡をもってきて、私の体を写してみせてくれました。えび責とは全くなんという、おかしい恰好でしょう。ぐつと尻が天井に突きでて、たしかに、まるまったザルガニの姿です。でも、その時は必死でした。少しでも気がゆるむと、耐えきれないと思い、全身に力を入れて我慢してました。だが何ということでしょう。鏡をみている中、私は私のあられもない姿に気付いたのです。全く何ということでしょう。私は、あぐらをかいたため、真白な脚を露出しているのです。それにああ——、久美子は、そんな姿まで写真にとっているのです。何という情けない……これが私の限界でした。とうとう私は泣き出しましたが、泣き声も出ず、涙が止めどなく流れるわけです。久美子も涙をみつけたのでしょいか、立上ると、こちらにきました。それは縄をゆるめてくれるためではなかったのです。一冊の本を手にとるためで、それをあけると

「えび責は体の色が三度かわる。赤黒くなり青白くなる。それから死の転起をとる恐れがあるから注意すること」と声を立てて読みました。明らかに私に聞かせているのです。私

は、昔からバレーやバスケットの選手をつとめたし、踊りも習っている上、体自身が柔らかに出来ているのでしよう。別に練習しなくてもアクロバットまがいの事はできました。そのせいか、私は体の血が吹き出るような苦しみにさいなまれながらも、私の体は赤くもならず、平然と堪えているのです。

「あら、幸ちゃんたら、全然色が変わらないワまだ大丈夫なのね。空泣きよ。演技だったのね。うちに、これだけ出来たら素晴らしいんだけど、本当に嫉けるわね」

そういうながら、なんと鉛筆と絵筆をもってきて、足の裏をくすぐるのです。その苦しき、全く形容はございません。久美子さんは「まあ、きれい」とか「素晴しかった」とか「幸ちゃん、うれしい」とか云いながら、ぴしや、ぴしや叩くのです。その中、私は、ス——と意識が遠くなるのを知りました。

どのくらい時間が経ったのでしょいか。胸元の涼しい風に、ハッと気付くと、久美子が扇風機を回し、私の胸元を拡げ、しきりに体を揉んでくれているところでした。私が気がついたのを知ると

「いたかった？ごめんなさい。私ね、あなたが気を失ったの全然、知らなかったのよ。気がついたら、もう、うんともスンともいわないでしよう。本当に死んだと思ったのよ」と真顔で顔をのぞきみました。私は、その

顔がまともにみられぬ様な気がしました。

「いいのよ。うち満足だから」

「ほんと。それなら、うれしいワ。ね、幸ちゃん。うち、あんたを酔にしたした手拭で揉んでいる中、泣けて、泣けて」

「ばかねえ。そんなに、せんでいいものよ」

「だって、酔で揉むと疲れが直るって」

「ありがとう。もう、いいのよ。あれから、どのくらいたった？」

「フフフ、まだ二十分も経ってないのよ」

「二十分」ええ、そうよ。だから幸ちゃん、

うち、ほんと、まだ縛りたらんのよ。ごめんなさい」

「いいのよ、よかったら、又縛ったらどお、

ほら、わたし、こんなに元気じゃないの」

「じゃ、手だけね。」

「身体中、大丈夫よ。不死身だから」

「あら、あんなこと……でも、幸ちゃん。強情ね」

久美子は、そういうながら、やっぱり嚴重に私の手を再び紅のシゴキで縛りました。そして、その前を胸にかけて縛りました。その時になって私は、はじめて自分の胸も、腰巻も、しどけなくはだけているのを知りました。でも、もう私は……なんということでしょうそのことに、さきほどの大きな羞恥心はおきませんでした。

なぜなら、それで役に立つなら身も心もさ

さげるつもりでいたからです。

縛り終ると突然、久美子が私を抱きおこしギュッと抱きしめました。

「幸ちゃん、久美子、好き？」

突然、こんなことを聞くのです。その時の私の胸のときめき。こっくりうなずいていました。

「わかってる癖に卑怯よ。好きもせず、尊敬もしない人に私、縛られないワ！」

「まあ、素敵」

(四)

そういうと久美子は、飛びかかるようにして、そこに私を転がしました。私は本当に、これで死んでも良いと思ったことでした。それから私の生活がどうなったが、おわかりでしょう。縛られる、オダリスクになったようなものです。

とにかく、あの日から四、五日経って久美子の姉、美穂子が旅から帰ってきました。それを見ると久美子は、うれしくて堪らなかったでしょう。私を長縄絆姿にして縛りあげサルグツワをしたまま、夕食の席に据えたのです。

「お姉さん。久美子、断然、幸子に惚れちゃった。幸子は、うちと奴隷契約したのよ」

「どうして又、急に」

「ううん、縛って責められる演技を見るため

に、幸子に実地にやってもらったのよ。そして、余り素晴らしいんで、とうとう無理やりに承知させたの」

「じゃ、強制ね」

「だから、サルグツワ嵌めてるのよ」

「でも、いつも嵌めてるのは可哀そうでしょうに久美子だけの専有は、ずるいわ」

「そりや、わかってるワ。だから、これから姉さんと共有にしようと思って、こうして連れてきたのよ」

「そう。でも本当に承知したのかしら」

「そんなに疑うんなら、姉さんから聞いてごらん」

「ええ、聞くわ。幸子さん、ほんとうに奴隷生活でいいの？」

私は一瞬、ためらいました。あの日まではまだ演技の続きとして責められていたのですが、とても、そんな余裕はなかったのです。だが何ということでしょう。私は、うんと、うなずいてしまったのです。

「そうらね」

「ほんと。でも幸子さんも変っているワネ」

私は、なんといってよいかわかりませんでした。サルグツワされていなかったら、きつといったでしょう「私、久美子さんが好きだから」と。でも、それは不可能なことです。

「どう、久美子すご腕でしょ」

「全く、おそれいました」

私は、あの男まさりのような姉が頭を下げ

るのを微笑ましく見ていました。

「じゃ、幸ちゃんにも御飯をたべさせましよう」

久美子はそういうと、箸とサジで一つずつ私の口に食事を運んでくれました。

私が例の物置のような、かつての隔離病棟に収容されたのはそれから一週間後でした。

畳を入れかえ、家具をととのえ、きれいに住みよくなっていました。が、窓という窓は昔の名残りで二重になっていて防音装置がしてあり、鉄棒がはめてありますし、戸口にも鍵がかかり、一步も外に出られないようになっていました。私はそこで飼育されることになったのです。鍵は二人の外は清が持っており私は常に後手、それに特殊のサルグツワをされています。しかし、ほとんど生活に不自由を感じません。というのは、三人の誰か一人は私の傍にいて、あれこれ慰め、楽しませてくれるからです。私が母屋からこちらに移されたのは、三人以外の者の目につけたくないとの理由からです。

私は、今のこの生活に満足しており、出来れば死ぬまで続けられたらよいと願っているものです。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

この告白は、ひそかに私のところに送ってきたもので、文中、私というのは柳幸子という私の友人の妹に当たります。したがって久留木ではありません。柳幸子の住所は——それはいえません。悪しからず。



○ 本誌愛読者の一人です。私は中年（三十代）の良く肥った女性を責めるのを好みます。いつだったか題名は忘れましたが二、三年前に自分の尊敬する美しく肥った女教師を同窓会の席上、ヌードにして責める小説があり、非常な興味を持って読んで、覚えておりました。それ以後、本誌に良く肥った女性を責める小説も挿画もなく残念です。髪をアップに結び、ぽつてりと良く肥った色白のマダム・タイプ（三十代の女性）を縛り上げて責めてみたらいつも夢を描いて居ります。どなたか、そうした絵

物語を發表して頂けませんかしら。分譲写真にも、そうしたものは見当らず残念です。これは羽村京子さんの主唱される妊婦のヌードにも通ずるかと思うのですが……。私は私なりに肥ったマダムと若いマダムとを取組ませて女斗美やレスリングの絵を描いて楽しんでます。同好の方、ごさいませんでしようか。又、本誌で、こうした絵のアイデアは取り上げて頂けませんでしょうか。

（京都 A生）

○ 最近、誌上に浣腸の記事が僅少なのは本当に残念なことです。小生は浣腸マニアが自分でプレイを行うような記事は好みません。若い女性が羞恥と浣腸への嫌悪から絶体に拒否しているのを、医者にどうしてもやらなければいけないと説得され、看護婦になだめられ、又、母親に叱られながら儂いレジスタンスを示しつつ浣腸をうけると云うような世間一般によくあるリアルなものを好みます。又、着物より洋装の方がいいと思いません。浣腸を主題とした記事でなくとも、普通の小説の中に少し出て来るだけでも結構ですから、そう云う小説を、どしどし載せて下さ

い。緊縛や笞打ち等の悦虐の記事の中に、浣腸の記事をつけ加えたら、多くの浣腸ファンが、どんなに喜ぶことでしょうか。（H・生）

○ 前略 休刊以前から愛読している者ですが、愛読者の立場から苦言を呈します。最近の貴誌の出来栄は、余りかんばしくない。小説にしてもイキのいいのが少くない。復刊前の貴誌の内容は、もつとよかったと思う。一例として「魔教圏」をあげよう。これは今の処いちばん長く続いている連載ものであり一応、貴誌の読物の中で代表格と見てよいと思うからだ。この題材が現実離れしているの面白くないと云う非難はとらな。い。現実性に乏しい題材になり勝ちのことは貴誌の性質上、止むを得ないことだろう。しかし、これが全体としてオートメーションの作業をみるように味もそっけもないのは、どうしたことだろうか。書きはじめの頃は今ほどは、ひどくはなかったと思うが、余り長すぎて収拾がつかず息が切れてきたのか。又、挿画がお粗末だ。それから巻頭の写真について……モデルの水準が一般に低すぎる。一部のモデルは容貌、肢体とも、かな

り優秀だが、後のモデル群は相当ひどい。もっとモデルの選定に気をくばってほしい。読者はメクラではない。内容が悪いと古くからの読者は脱落して行く。新春を迎えて、もっとハリキラなければ駄目だ。妄言多謝。

（東京 Aワン生）

○ はじめてお便り致します。毎月かかさず愛読しておりますが、号を追って益々面白く本誌の発行日が待ち遠しくて仕事も、ろくろく手につかない仕末でございます。二月号の「妖婦の生贄」が一ばん面白く、「魔教圏」も円熟した文章に思わず興奮してしまします。その他「バー（ナナ）の人々」「家畜人ヤプー」「沼正三だより」「愛好者の記録」等……とても書ききれません。ただ敬服の念ばかりでございます。さて編集者の皆様に申し上げたいのでございすが、K誌の内容は充実し大変よいのですが、どうも薄すぎるような感じがするのでございします。これは私だけの考えかも知れませんが、もしかしたら私以外にも、このように感じた方も少くはないんじゃないかと思ひます。もっと多くの作品を載せて頂きたいと存じます。

(東京都 猪爪生)

○
久しぶりにお便り致します。貴誌の益々の御発展を喜んで居ります。私は昨年、拙文「私の女装遍歴」を発表させて頂きました通り女装並びに女装していじめられると云う事に多大のあこがれを持っていた者です。同好の体験写真等を、どしどし御発表なされたく念願して止みません。皆様の図解又は写真入りの「女装教室」と云ったような発表は如何でしょう。先輩諸兄の貴重な体験にもとづく肌

襦袢、腰巻に始まり、着物の着方のコツ、化粧の仕方、歩き方、各種の髪の説明及び被り方、要すれば髪の製作方法、女装時の感想等を、ぜひ御伺いしたいと思ひます。私は昨年初、当地の劇団(座長が女形で女装が得意、女装を売物にしている)の座長に頼み、久しぶりによい気持ちに浸りました。化粧して貰い髪をつける段になると、私の頭が大きくて、どうしても被れません。そこで仕方なく町の美容院を呼んで来て、日本髪の髪を時代物風に直して間に合わせ

ました。写真を写して後日、見ますと、私が顔が長顔のためと、あわてたために少し似合っていないのが残念でした。髪を少し長くすれば、よかったですと気がつきました。着付と姿は、やかなりと云った処でした。本誌の発展を祈り併せて御多幸を祈ります。同好マニアの方々のお便りを御待ちします。
(宮崎 矢島生)

の女」という映画をふとした機会にドイツ人に連れられて見に行つたのですが、この中にキャバレーの余興に「キャッチ」と称するシヨ―場面が出てきますが、これが正に女斗美そのものです。主演女優がパンプ型の代表格であるドイツのヒルデガルト・クネフですから一寸たまりません。「キャッチ」はキャバレーのフロアにプロレスの如きリンクを作り、この中には泥を一杯入れてあり、ブラジャ―にパンティ一つで頭には水泳で使う帽子をかぶった裸体の女性二人が格闘するのです。その格闘ぶりも、中々すざましいものでしたが、遂にその実物に接することが出来

◎ 絹川文代嬢 緊縛姿態 新作写真! (新作)

全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

輝くばかり純白の美女の柔肌にきびしくも、痛ましく、喰い込んだ縄目の鮮やかさ。

股間縛り三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

健やかに伸びた手と足、全裸の肢体に掛った麻縄、苦痛に耐えた愁顔の美しさ。

全裸高手小手 略号(きた)

三枚一組 二五〇円

ひしひしと二の腕から豊かな胸に、黒ずんだロープがからみついてゆくむごたらしさ。

緊縛全裸立姿 略号(きり)

三枚一組 二五〇円

後手にきりきりと縛しめられた全裸の立姿は麗しくも神々しく我々の目に輝く。

○
ドイツ便り(二) 皆様お元氣ですか? 日本をはなれて早や四月、その間吾等の奇クも益々発展を遂げておられることと思ひます。女斗美フアンの皆様も、お元氣のことと存じます。こちらはドイツへ来て以来、最近の奇クに御目にかかつていないので一寸淋しい思いをしています。しかし、ドイツで日本では一寸見ることの出来なかつた、或は御誌上でのみしか知ることの出来なかつた本格的な女斗美に接することの出来ましたのは非常に嬉しく、而もハンブルヒへ来る事が出来て幸を十分味うことが出来ました。今回はこのドイツで接することが出来た女斗美について報告させていたいただきます。昨年末第一信を送って直後フランス映画ですが「ハンブルヒ

の女」という映画をふとした機会にドイツ人に連れられて見に行つたのですが、この中にキャバレーの余興に「キャッチ」と称するシヨ―場面が出てきますが、これが正に女斗美そのものです。主演女優がパンプ型の代表格であるドイツのヒルデガルト・クネフですから一寸たまりません。「キャッチ」はキャバレーのフロアにプロレスの如きリンクを作り、この中には泥を一杯入れてあり、ブラジャ―にパンティ一つで頭には水泳で使う帽子をかぶった裸体の女性二人が格闘するのです。その格闘ぶりも、中々すざましいものでしたが、遂にその実物に接することが出来

一杯入れられてありました。時間が来ますと客は映画で見たのと同じようにドロ除け用のタオルを渡され、これを体にまとうてリンクのそばなり或は自分のところと思ふところに陣どつて見物するのです。私も友人と並んで、このドロ除けのタオルに身を包んで、このシヨ一の初まるのを今やおそしと待ちかまえました。司会者がシヨ一の出演者を紹介しますと二人の女性が台の上にあがり客の拍手に応えました。二人の女性の中一人は、美しい金髪ですき通るような肌の北欧系の美人で、胸にはその豊大な乳房をブラジャーで掩い、水玉模様の派手なパンティをつけていました。もう一人は黒い髪でラテン系の女性で情熱的に輝く眸、豊満な乳房をブラジャーで掩い、花模様のパンティという扮装でパンティはいずれも二人の膨満な臀部を露出する程深く切り込まれ、一寸日本のモッコ輝に似ており、この二人のブラジャーをはずし六尺ふんどしに変えると、そのままだ日本のメトマーズです。金髪の女性にはシャルロット、ラテン系のはポーリンという名で、はからずも「家畜人ヤプー」の女主人公の名と同じでした。二人はいづれも六

尺近い見事な、しかも均整のとれた立派な体格をしています。やがてバンドが奏せられると、いよいよシヨ一、いや二人の女性の格闘が始まるのでした。最初、二人はリンクの隅に立って相手をにらみつけていましたが、やがて泥をつかんで投げ合い始めました。二人の白い肌に点々と泥がこびりつき初めました。やがて二人は奇声をあげてドロの中へとつ組み合い、ここから本当の女斗美が展開されるわけです。「シャルロット、やっちなえ」「ポーリン、がんばれ」等々、客の間から応援が飛び出します。男ばかりでなく女の客も叫んでいのですから一寸驚きました。はじめ私は女子プロレスラーかと思いましたが、聞いてみるとそうではなく全くレスリングの心得のない者でした。そして全く女の生地むき出しの格闘がドロにまみれながら展開されてゆきます。互になぐりあう、或はドロの中へ組み伏せる、足でける、等、もう二人の体はドロまみれです。このドロがそのまま血の色で二人の格闘する女が片はずしの鬚、六尺ふんどしをして、手に匕首を持っていれば、そのまま私の「大奥裸女血斗図」になります。私はそのよ

うに想像しながら、この凄絶な金髪碧眼女性のドロまみれの女斗美を凝視つづけました。客もエキサイトするにつれ、私にもわからない歓声をあげ、それがホール一ぱいにこだまします。最初、シャルロットが優勢でポーリンをしばしどきのしかし素人くさい技で苦しめていました。その中ポーリンは全くグロッキーの態で泥の上にへたばってしまいます。それをシャルロットは体の上に仁王立になつて踏みつけます。やがて、ポーリンが立ち直り今度は逆にシャルロットを胴絞めで攻め立て黄色い奇声を発しながら二人は泥の中をころがりまわります。泥はどういう風になつていのか、体についてもすぐにはなれ、二人の裸体美はその割にそこなわれないのです。寝業の応しうが終つて二人は離れて互いに自分のコーナーからにらみ合つていましたが、ポーリンがシャルロットにとびかかり、彼女のブラジャーをむしり取つてしまいました。シャルロットも負けていず、すぐポーリンのもはずしてしまひ、二人は大きな見事な乳房をぶりぶりさせての格闘で、客はもう大騒ぎです。二人共、これから

愈々相手の乳房を狙つて、ここを先途と攻め合うのです。土俵四股平氏の記事にしばしば出てくる乳房攻めを目のあたりに見る事が出来ました。二人の乳房にドロの手形がつき、遂にポーリンが相手に組みつき、その乳房をギリギリと掴みしめました。シャルロットは凄まじい悲鳴をあげてもだえます。それでも負けずにポーリンの乳房を掴み返えし、それから互に相手の乳房を攻めあいドロの中

花坂道子嬢

緊縛フオト分譲

大中判印画紙焼付(13×18 糎)

○全裸緊縛集

略号 (はな 1)

8枚1組 八〇〇円

○股間縛り集

略号 (はな 2)

8枚1組 八〇〇円

○ヌード縛り

略号 (はな 3)

2枚1組 三〇〇円

○股間縛り

略号 (はな 4)

2枚1組 三〇〇円

をのたうち廻ります。遂に金髪のシャルロットが勝ちました。ポリーンは沼の中で両手で乳房を押えながら、うめいています。ドロにまみれた乳房、美しい体の線は「大奥裸女血斗」の中のサロメ様女性を思い出させますが、このパンティが緋の六尺ふんどしであり、髪の毛も黒かったらと残念に思いつつも、女斗美に実際に接するところが出来た嬉しさはかくすことは出来ませんでした。客の中には8ミリやその他のカメラで、この凄絶な女斗美を撮影しているのが大勢いました。私は運悪くカメラを持って行きませんでしたので、次の機会にしました。友達には他にもこのようなショーがあれば案内してくるよう頼んでおきました。聞くところによるとハンブルヒには、世界の船員達の遊興するところだけあって、この他にも数々の奇クファンの方々の興味をひくようなショーや見世物の類があるとのこと、折があれば又皆様にお便りいたします。

(在ドイツ 京洛生)

○ 毎月興味深く拝見しておりますが、特に三月号は面白く読みました。第一に「豪士の娘の火焙り」

ですが、この絵は非常に実感がもっているように思われます。それというのも浜敷という人の絵法のすみずみまで神経をつかった細かい絵によつてそう思われるのでしよう。普通の絵ではこまかい部分は適当にごまかされているのが常ですが、この人の絵は非常に良心的で立流だと思えます。指の先から木のふしまで、こまかくしかも上手に書いてあるのは珍しいのではないでしようか。ただ女性の顔の書きかたと髪の毛の書きかたが、もうちよつとよければ四馬孝氏の画とともにまたとない立派な画家なのですが将来が期待されます。第二に「お茶室」は滝れい子氏のいつもの画法ですが、右の絵に比べると少々表面的な感じがします。しかし、その雰囲気は十分に表しているようです。これが天然色だったら、さぞすばらしいでしょうね。第三に「特写真真」ですが、復刊前の貴誌の写真のようにもっと一枚一枚の大きさを小さくして一ページにもっと色々の姿態をのせて下さい。又、緊縛美という点でも、復刊前は裸体が多かったのに、最近は着衣のものが多いう事です。やはり公刊誌という事で色々とうるさいでしょうが、モ

新作『血紅使用切腹フオト』分譲

モデル 絹川文代嬢 (大中判印画紙焼付)

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

絹川文代嬢が双肩ぬぎとなり雪よりも白く、豊かに息づく下腹の左脇へ、氷の刃をぐさり突き立て、鮮血が、みるみる傷口から、にじみ出てくるという光景から初まり、きりきりと臍下を切り開き、忽ち血汐が溢れ出る壮烈きわまりない女性切腹の姿態を血紅を使用して連続撮影した中の、クライマックス・シーンばかりを選んだ六枚のシリーズであります。

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

深く、あらゆる衣服下着をかなぐり捨てて、今は生れたときと同じ姿になった文代嬢が、右手に握った短刀を、我と我が下腹へ突き立てて、激痛に悶え苦しむ姿態を、血紅によつて、その傷口から迸り出る血汐をあらわし、女体切腹の得難い零囲気をあらゆる角度から狙った中から最も真に迫った傑作ばかり六枚を選んで、ここにマニア諸氏の高見に資する次第であります。

デルはなるべく裸体で縄は黒いもの(白黒写真で見ても)を用いて、光線は少し強い位に当てて女性特有の白い肌に反射するぐらいのものが見たところきれいです。又写真には、モデル嬢の全身を捉らえてあるものでなくては写真の価値がないと思います。復刊前の写真は殆ど全身が出ていました。それから最近では外国写真が全然見られま

せんが、日本の写真には脚を縛つたものがあるませんが、外国のは、そのすばらしい脚線を縛つたものが多く緊縛感もぐつとあるもので、ぜひお願いいたします。また道具を用いたもの等もみたくものです(椅子、梯子等)。私には、どうも南村俊平氏の画はいただけません。この部分にもっと多くの緊縛写真がのることを望みます。四馬

孝氏の画は申し分ありません。第四に本文に入りますが、三月号は今までになく素晴らしいものばかり「奈緒美」「悶える女」「旅情」「スリルの報酬」「乳房に火をつけるな」等々、傑作ぞろいでした。また挿画も復刊前に劣らぬ力作ばかりでした。特に三十二頁、八十二頁、八十五頁、八十七頁、百二十二頁、百四十六頁、百四十八頁、百四十九頁、の挿画は、これだけでも十分に鑑賞価値があります。特に百二十二頁、百四十六頁のはよかったです。また初めての試みと思いますが、「乳房に火をつけるな」に出ているように本文中にも、やはり緊縛写真が入れられると、ぐっとよくなります。この写真のモデルはどなたか存じませんが、なんとなく感じのよい人のようです。身体も白く光ってきれいに見えます。このような写真が私の理想。以上、色々と書きましたが、これが私の三月号の読後感です。(東京 T・M生)

「悦特」拝見、先ずなんといつてもグラビヤ写真が素晴らしい。前回の「サド特集号」のグラビヤ写真も野外ヌードという無駄を除けばどれもよかったです。本号のそれはどれもが、前回以上の素晴らしいでした。特に、妖精、羅致、プレイ、木洩れ陽、首縄、間諜成敗、観など最も素晴らしい。唯欲を云えば、妖精、木洩れ陽、競花、三つ葉のプロファイル、その他に何故猿ぐつわをしなかったか、ということとである。猿ぐつわをしてはおかしい場面もあるが、これらの場面にはむしろ猿ぐつわがつき物と思ふし、特に競花、三つ葉のプロファイルなどは猿ぐつわがあれば、もっと素晴らしいを増した事と一寸惜しく思いました。又、間諜成敗にはもっとと衣服を剥ぎとった場面が欲しかった。これに猿ぐつわをしたのは、そんな事もあり得る点よかったです。これやプレイ、誘拐、羅致などストーリーの一部を連想させる組写真など豊富に取り入れた事は我々にとって極めてうれ

写真

硯

(ハリツケ)

三態

略号(はり)

大中判印画紙焼付

三枚一組

四〇〇円

モデル

大塚

啓子嬢

れしいと思います。そこで提唱したいことは、此の種特集号のグラビヤ写真に、既載小説でよいからその責場面を組写真で再現して頂きたいことです。つまりあるストーリーを持った組写真がほしいわけです。例えば「淫火」とか、題は忘れましたが、母親の眼前で二人の娘が責められるのがありましたが、それらなど、その場面を写真にしたら素晴らしいものが出来上ると思います。是非やってみて頂きたいものです。そしてその写真に簡単な説明、又はストーリーの一部(その場面の説明の抜萃)を後の本文にでも挿入したら、こんな嬉しいことはないと思います。小生ばかりでなく読者全体の希望だと思えますが如何でしょうか。次に口絵ですが、前回の二十一枚に対して八枚とは少な過ぎた感じが致します。勿論、その代りに本文の挿絵を多くしたのでしようが、それにしても数がけた違いに少なかつたと思います。内容は前回同様素晴らしいとは思いますが……特に白魚の悶え、苦悶の前奏、アクロバットなどよい場面です。画家は前回の三人に対し、今回は四馬孝氏一人でした。四馬氏の絵は腕や脚が極端に細長く描かれて

いて大変気になっていましたが、今回は正常に描かれて何かしらホッとした感が致します。氏の絵は腕や胸に喰い入る縄目にしても頬に喰い込む猿ぐつわにしても真実感横溢せる、そしてそれを見る我々の神経をゆさぶるような絵で他の二氏(滝、杉原)と共に小生の好きな画家です。最後にモデルについて一言。先ず大塚、愛川の二嬢は肉体美であり、緊縛されたもののポーズも素晴らしい。この二嬢は今後共ヌード緊縛してほしい。次に田中嬢は表情は極めてよい。前回の十四態、今回のシュミーズなど真実感溢れる表情である。顔半分は猿ぐつわでかくされているが目がその表情を物語ってくれていると思う。花坂嬢は最も可憐な感じのモデルである。どうしても裸にならないのか。だが猿ぐつわは一番よく似合う小生の好きなモデルの一人である。絹川嬢、大変きれいであるが、もっと苦悶の表情など見せてほしい。特に競花など、笑ったり澄ましたりでなく、絶望の表情だったと残念に思う。笑っているといえ、前回の大塚嬢の囚衣、懸崖などに見られる笑いは艶消しである。表情というと三処締めの大塚嬢、間諜成敗の村井

嬢の一部(猿ぐつわをされた)など悲愴感が見えよかったと思う。唯、村井嬢について、日本髪のかつらをつけた時の顔のつくり(化粧)をもっと美しくして欲しい。もっとつくりを変えたら表情もよくなり真実感が出てくるのではないかと思う。それから高手小手(背に両手が高々と交叉されて縛れる)になれるのは花坂嬢と愛川嬢だけでしょか。これまで見たところでは、この二人の場面しか見て居りませんが。どちらかといえれば高手小手の方が拘束感が強く見られて好きです。勝手気ままな事を書き並べましたが、以上が小生の感想です。「フォト・アラベスク」「サド特集第二集」など、次々と素晴らしい写真集が刊行されることを期待して、この辺でペンをおきたいと思います。

(北海道 K・S生)

始めてお便り致します。私、昭和二十八年頃より本誌を購読しておりますが、復刊以来欠かさず発行されているのは編集者の並々ならぬ御苦心の賜と深く感謝しております。此の頃はサディズム過剰とでも申しますか、口絵から最後の読者欄に至る迄サド物ばかり、

旧号が沼氏、馬族保、真砂十四郎、鬼山絢策、吉野、表谷川、乗杉等々の諸氏に依って絢爛たる筆勢を敷いていられたのに比べ最近の殆んどは作品が小品揃いで、私達マゾヒストをうならすような大作の少いのを残念に思っております。その中で沼氏の「家畜人ヤプー」とその手帖、これは別格でその偉大な想像力と豊富な学力に満腔の敬意を表します。私は之があるがため、他の殆んど読まない夾雑物をガマンして本誌を購読していたわけです。二月号から再連載された事実は私をして再び本誌を愛読させる契機となりました。此の機会にお願いしたいのは、馬族保、真砂氏、鬼山、それからサチスチンの諸氏「美しい暴君」「二百字の讃歌」「ラブスレイブ」「ヴィナスの重石」「牛乳風呂の饗宴」等のような傑作をどしどし寄稿してほしいものです。それから編集者に御尋ねするのですが、手帖や昭和二十七年頃の名作集のようなものを秋風の吹く頃には臨時増刊するとの事でしたが、既に秋風どころか春風のなびく頃ですが、どうなったのですか。サディズム方面は予告通りうんざりするほど出てますが、少しはこちらの方

方にも気をつかってほしいですね、どうかお願いします。

(兵庫 M・O生)

読者通信に対して小生初めての投書です。KKはもう東京へ来て五年来愛読しておりましたが一時MS半半ぐらいの二十才になる女性とつき合っていたため中絶しておりました。最近、十一月号、十二月号、一月号、二月号と又々読みはじめました。KK復刊のお喜びをかねて、その雑感を一筆してみました。以前の様に女学生の責めや同性愛的なものが殆ど影をひそめたことは残念に思っています。次に少女や若く美しい女性の鼻の記事がこれも少くなったことです。次に浣腸などのマニヤも少なくなつたのではないかと思つたりしています。こう申しますと、なんです、四、五年前に初めて読んで頃の要求と今とまるで殆ど変わります。例えば対象や主人公が女学生や少女、そして鼻責めや浣腸、くすぐり責、木馬責、等々で昨年十一月号の辻村隆さんの「ろるるい」や本年二月号の「妖婦の生贄」等にはやはり興味がござい

ます。自分であらしたら、こうしたら、といういろいろ想像したり文章にしてみたりしています。今迄の口絵の写真では、本年二月号の「黒いスカート」の田中芳代さんの風ぼうがとてよるこぼしてくれました。頭髮や顔の形、体つき、そして黒いスカート、布のひも、スラックスのすばらしいもの、四枚の中、特にのけぞった二枚は、いづれもいいポーズでした。可愛いくて、とても魅力がございました。仰向けに寝ころびひざを立てスカートを始めくり上げ首をのけぞらして少し微笑んでいる姿はまるで少女のような感じでした。只一つ残念なのは、彼女の仰向けの写真がなかったことです。仰向けのところを正面からとったものがなく、従つて田中さんの可愛い鼻の魅力が見られませんでした。次回にでも是非田中さんの可愛い鼻孔がくつきりとうつされたものをお願いいたします。勿論、あんまりしませんが、今回程度で髪形もこれでセーラー服でも傍に置いたりしたら、もっと効果的でしょう。やはり、のけぞっているところや、仰向けにたおれているポーズを上から撮るとか、鼻孔にローソクを二本立てるとか、別の女性にくすぐらせて、出来たら鼻の孔を拡げていじめているところなど

……ぜひお願いします。勝手なお願いばかりですがよろしく。

(東京 S・R生)

○ 私は二月号の『馬化白書』に関する馬場氏の「鞭打ちを好まず女性に馬乗りされる事がマゾの第一条件だ。」との御説に心から共鳴する者です。終戦後間もなくラジオドラマで「高野聖」が放送された時、一夜の宿を借りた旅人が妖女にいろいろな動物、殊に馬に変えられて(さんざん乗りまわされた揚句)百姓に売られてゆく、という件りではかつてない程、胸を疼かせた憶い出があります。「ヤプー」の作者の構想力には全く驚嘆する外はありませんが、「ヤプー」が余りに変形させられているので作者の心理についてゆけない読者自身には、肉感的な共鳴や暗示が得られにくい点が起ります。私はなるべく男性が頭脳や身体は生のままで貴婦人の魅力「殊に脚線美」によって自然に、徹底的に馬化されてゆく過程をえがいた小説の発表をのぞんで居ます。私の

理想とする「馬」は鞭を受けなくともよい日光浴用、庭園散歩用、の人間馬です。ビキニスタイルやガウン姿でどつしり尻を下した貴婦人の左右の足の親指の輪に、「馬」の鼻輪から分れたクサリが連結されてあり、一寸した足指の動きだけで右に左にはいまわる姿こそマゾ男の真骨頂だと思つて居ます。勿論日光浴や、散歩が終つたアトは「犬」として御奉仕する事になるでしょうが、——復刊後とかく片隅に追いやられて居るマゾ同好者の人々「そのこと自体マゾ的と言えましようが」に義憤を感じて居りました矢先『馬化白書』が発表されましたので——。鞭で打ったり、縛ったり、変形したり血を流したりしなければ(例えそれが架空の事にせよ)サドやマゾを昇華させ得ない人々は「奇ク」をかえつて危地に追いこむ事にならないでしょうか? (マゾ生)

○ 先日、テレビで紹介されたお正月の遊びの一つに面白いのがありました。人数は四人で、二人ずつ

代理部分護品総目録

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

新人モデル多数
新しく参加

コンビになります。道具はビーチボール二個。ゴム製でもビニール製でもよく、この場合には、八時くらい、あるいは、もう少し小さい六時くらいのが適当なようです。むろん、じゅぶんにくらましておきます。二人ずつのコンビは、それぞれびったり背中を合わせて立ちます。司会者は両組のそれぞれに近づいてヒップとヒップのあいだをすこし開かせ、その間にボールを押し入れます。合図があるまで両組とも、二人のお尻でボールを支えて待ちます。始めの合図と共に、各組はからだを動かして、すこしずつボールを上方、つまり背中の中へ押しあげて行きます。二人がすこしでもからだを離れたらボールは下へ落っこちます。こうして、早く肩のところまでボールを持ちあげた組が勝ちです。大体、こんなゲームですがテレビでは一組は女同志、一組は男女でやっていました。二人がびったり背中をくっつけておつて、からだ、特にヒップを微妙に動かして、ボールをずりあげていく様子、なかなか官能的でした。お座敷ゲームですが、水着姿でやったらもっと刺激的でしょう。

(ボール・マニア生)

○ 増刊号「悦虐小説と緊縛写真」特集号拝見、グラビヤ多数にて大歓迎、但し猿ぐつわにて歯にかませたものが一つもなかったのは残念至極。今後、左記のようなものを頼みます。女学生、看護婦、神に仕える巫女、イヴニング姿の女性等の緊縛姿態。三月号口絵の猿ぐつわのポーズは全く立派。こういった写真を見せられると、貴誌の独壇場の感深し。鼻をはずした豆しぼり、鼻まで掩った豆しぼり。共に猿ぐつわとしても視覚的にも成功している。前言のように歯の間にかましたものを加えたら完璧。

(日南生)

○ 写真部の人々が膝の魅力に無感覚なのに、しびれを切らして投書する。立つた足はC、Cの様なのが理想的で絵画以上であるが、キチンと座った丸い膝は日本人の余り恰好のよくない足でも頂けるものである。以前の「日、カ」の増刊に三、四枚出ているが、実に美しい。外人でもキチンと座ったのはバカに神妙である。曲げて座るところは圧迫であり圧迫は緊縛に通ずる。横座りもよい。丸い肢を手前に足先を向うに願いたい。御社の

写真足首を手前に向けているか又はおやま座りだ。(座って走っている様なのはやめてほしい)膝頭をひろげて足先がまだ開いている。不自然というより感じが悪い。立膝もよいが向うになる膝を立てて貰いたい。いずれも外人のモデルの様な細いパンティ(黒は絶対不可)を使用すればよいのだ。(簡単に作れる)両膝で立っているのも大好きだ。着衣の場合、着物の裾の乱し方は余程画心のある人がやらないといやしくなるだけだから、びったりと身につけて身体の線を悩ましく出す方がよい。それには糊のきいた浴衣の様な生地に着物は絶対に避けるべきである。(割烹着の様な白衣も)約七年前の奇クが今のA判になった第一号の「処女と蛇」の様な写真を撮りなおして掲載してほしい。(H・M生)

○ 奇ク編集部の方々はじめ読者の皆さまには、益々御清栄の御ことと推察致します。奇クも昨年末よりサド特集号。臨時増刊号N O1、臨時増刊号青い魔院につぐ永山久美雄氏作長篇小説与那国奇談で、サドマニヤの心底をゆすぶり、三十四年一月号に続いて、臨

時増刊号悦虐小説と緊縛写真特集号でまたまたマニヤの血を躍らせて下さいました。燐光の内より白魚の悶え、(四馬孝画)色狼のアクロバット(四馬孝画)は、マニヤの私に眼を瞠させました。今後共よろしく特集号(既刊)を上回る豪華版をお願いします。尙本日の貼雑記帖に収録しておりますた貞操帯の歴史と余話をお送りします。何分雑記帖に記載してあります。たしか昭和二十四年六月号の週刊オール獵奇だったと思います。発表出来るものでしたら、読者の皆様の御参考に供したいと思ひます(山川哲夫)

○ 御誌の発展を心よりお祈りしている愛読者の一人であります。私達孤独なる者の心の渇きをいやしてくる唯一の御誌は、何物にもかえ難きものとして常に座右に置いてあります。山口幸一さん、内田武男さんの愛読者といえ、もう私がどんな者かお判りと思ひます。連日孤独をかこっており、すが、ボーイスカートのリーダーでもありますので、この夏は少年達との水浴にキャンプに大いにその輝美をたのしみました。「奇妙な

代理部案内

最新作女体緊縛写真

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆
連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)
3枚1組 二五〇円

悦虐雨ざらし

愛川悦子 略号(あめ)
3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)
3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)
5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)
5枚1組 四〇〇円

寝室の苦悶

益田房子 略号(くもん)
3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)
5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)
3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)
3枚1組 二五〇円

いたぶり

春日ルミ、愛川悦子
3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)
5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)
3枚1組 二五〇円

「輝」を書かれた森太一さんへ。少年画報の一月号に少年力士が竹の輝をしめる場面があります。私も非常に熱中して読みましたので御知らせいたします。「あつというまに、その青竹を輝のかわりに、くるくると腰から股へまきつけて力一杯しめあげた……」という文章があり、そのさし絵に、この少年が父親に武者振りについて父親が少年の輝の結び目に手をかけて、つるしあげている図がのつております。又、「のれん」という映画のタイトル・バックに森繁の少年時代を演ずる少年が、雪の降る庭に六尺一本の裸にされ、水をぶっかけられるシーンがあり、思わずハッと息をのんだことがありません。又お便りします。お元気で。

(静岡 K・H生)

○ 復刊後始めてお便り申上げます。末席を汚させて頂けましたら甚だ幸いと思います。何時も読者通信欄を読んで思うのですが、本誌の編集方針に対しSの方々は男性Mは不潔であるから一掃すべきであるという様な極論を時々見かけますが、我々M党は現在でさえSの記事に比しMの記事は甚だ少ないのでありますが、何時も謙虚に

幾らかでも増して頂けないでしようかと甚だ控え目に述べております。この事はSとMの気質をよく現しているものと思います。私もM党の一人として、このささやかな願いを聞き届けて下さいませ。御願います次第であります。本誌のスペースがないならばMの増刊号を出して頂けたらと思います。前置きはこれに致しまして、私も東京のJS様と同感であります。むくつけきこの顔であります。この顔をサイクリング車のサドルか、馬の鞍にして、若い女性の方に思う存分乗って頂く事が私の夢であります。特に女高生の体操部員等が着用する体操パンツは豊満なヒップを黒又は紺の布でびっちり包み、太股の付根をきゅつとゴムで締めた姿は憧の的であります。この様なお姿で男奴隷を思いきり其の偉大なるヒップの下に敷いて頂く事こそ、永年の念願であります。非常に従順で女王様の御意のままに椅子にでも座蒲団にでもサドルにでも又鞍にでもなるこの私を試して下さい方はないでしょうか。便器勤務も決して厭いは致しません。こんな悲願を持ち続ける私をどなたか哀れと思召されば、お便りなど賜れば甚だ本

腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

振袖哀歓

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

賭 機 (カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

◎印画紙の大きさは、大手札型(9×13㎝)です。

お申込は 天星社代理部へ

望に存じます。尚、編集者の方に御願いがございます。曾てのKKには立場こそ違いますが現在の「魔教圈」にも劣らぬ鬼山絢策先生の長篇マゾ小説が連載されておりました。我々マゾ党のためにあの様な企画をして頂けたらどんなに嬉しいだろうと思っております。

(富山 西村生)

○ 私は女性の緊縛と浣腸に興味を持つ者です。それで貴誌を私の好きなもので満たしてくれと言いた

いのは山々ですが、そこは「最大多数の最大幸福」で自分の主張のみを通すことはできない相談です。さて近刊中で最も注目したのは三月号の「乳房に火をつけるな」の挿絵です。このような挿絵も内容にマッチしているとは好感が持てます。編集部にかがいますが、この挿絵中の写真の女性は誰でしょう。又この写真は分譲品に含まれていませんか、お教え下さい。

(福岡 杉本生)

懸賞原稿募集

☆規定☆ ☆賞金☆

告白と手記と体験記

優作	一篇に付	一万円	若干篇
秀作	一篇に付	五千元	若干篇
佳作	一篇に付	二千元	若干篇

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。
- 一、原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りいたします。

奇ク毎号楽しく拝見させて頂いて居ります。近頃は臨時増刊も次々と出るなどいよいよ発展のようでありまして、最近和装に関する記事が少いのは不思議でなりません。特に写真ではモデルを使った特写が少く、わずかに村井嬢の腰元シリーズでお目にかかれる程度で、映画からのものを除くとさびしい限りです。たまにあつても帯を締めていないものが殆どなのはどういうわけでしょう。キモノにオビはつきものですからオビを締めたのも撮って下さい。特に花嫁姿や時代物の娘姿、お姫様な

どは巾の広い帯を使うので、いかにも締めつけられた女体という感じがして魅力的です。オイラン衣裳などは洋服育ちのロカビリ嬢に絶好の責め道具ではありませんか？ある新婚夫人に聞いた話ですが、おムコさんの注文で可愛く豪華に見せるために帯を広く締めさせられたので、腰からお乳の上までギューギュー締め上げられてしまい、カツラは重いし部屋は暑いしで、親戚にお辞儀をする時など息がつまってしまうで拷問でした。ただ着ているということでした。ただ着ているだけでも苦しいのですから、その

上縛られたり折檻されたらどんなでしょう。暑いセットで振袖を着て責め場面をやらされる女優さんたちは、ほんとにご苦労だと思ひます。牧高志氏の和装記事は楽しみなものひとつでしたが、絵ばかりでなく氏のアイデアを写真で見たりしたと思ひます。せっかく腰元シリーズなどあるのですから町娘、姫君などの縛り写真をのせて下さい。洋装の下着姿や半裸女性の縛りも好きですが、余りにも数が多いようです。御誌の力で出来ないうけはないと思ひます。洋装写真にも、実際に黒皮のホルセツを着せられたモデルが現われてよい頃だと思ひますがいかがでしょう。外国のものには本当にホルセツを着たモデルを使つた写真があります。そんなわけで、下手な絵ですが、和装フアンのためにアイデアをお送りします。このままでは使ひものになりませんから、このアイデアで特写口絵を撮って下さい。どうしてもだめならどなたかの墨筆で描き直して頂いても結構ですが実感描写の点では写真にかなひませんので、モデルさんには少し無理をして頂いて出来るだけ写真で見せて頂きたいのです。どうか和装フアンの方ご

声援下さい。

(東京OBI)

三月号の体験記、逃亡徴用工は僕の趣味に合う恰好の読物で、本誌ならではと、堪能致しました。特にT少年が両手を固く括られて爪先立ちに梁に吊され、責められる度に身もだえる様が、細く描写されておき、T少年のめじめな姿が眼に見えるようです。又、画の方も苦悶する少年の顔、姿態など、なかなかよく出来ていますが、欲をいえば猿又の紐が解けて、猿又が半ば脱げ落ちるといった姿であれば、更に精神的な凌辱感も加わり、より魅力的でなかつたかと思ひます。いずれにしても今後、この様な作品や画、写真などを、どしどし掲載して下さい。二月にします。四日市のS生様。二月号で嬉しいお便りを頂き有難う存じました。貴方の膝下に跪く日の一日も早からんことを願ひしてやみません。大阪のTO生様。中年の男性に御趣味をお持ちのことですが、僕は、既に通信で申し上げました様なマゾ男性です。丁度、逃亡徴用工のように、責められることを憧れている者です。世の中のマゾ男に對し、精神的、肉体的な凌辱を味わし給え。(奈良TH生)